授業科目	英語コミュニケーションⅠ	担当者	近藤　未奈		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

この授業では、語彙、リスニング、会話の各技能の演習をバランス良く行い、医療実務に役立つ総合的な英語力の養成をはかります。医療関連の語彙を増やし、またロールプレイ方式での会話練習を行うことにより、実際の現場で英語を使うことのできる能力のアップを目指します。

■ 目　　標

医療専門分野に関係した基礎的な英語表現に慣れ、現場で英語が必要とされた際にも対応できる英語運用能力を養成することを目標とします。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション（受講にあたっての諸注意）
　　Meeting Patients（患者登録と生活習慣アンケートをする）①
第２回　Meeting Patients ②
第３回　Taking a Medical History（病歴および健康状態を把握する）
第４回　Asssessing Patients' Symptoms（病状や症状をアセスメントする）
第５回　Taking Vital Signs（バイタル・サインを確認する）
第６回　Takign Specimen（検体を採取する）
第７回　Taking Medical Examinations（検査の注意や指示をする）
第８回　Assessing the Pain（疾病・負傷による痛みをアセスメントする）
第９回　Advising about Medication（処方された投薬についてアドバイスする
第10回　Improving Patients' Mobility（体の機能回復を介助・援助する）
第11回　Maintaining a Good Diet（栄養と食餌についてアドバイスする）
第12回　Caring for Inpatients（入院病棟で患者ケアをする）
第13回　Coping with Emergencies（緊急自体に対処する）
第14回　Reading（英文講読）①
第15回　Reading ②

■ 評価方法

受講態度（予習･授業への取り組みなど:40%)、小テスト（20%)、筆記試験（40%）を総合的に評価します。

■ 教　科　書

書　名：Caring for People（医療分野で働くためのコミュニケーションコース）
著者名：Takao Okada, Michiko Mayuzumi 他
出版社：センゲージラーニング

書　名：カタカナでわかる医療英単語
著者名：飯田恭子
出版社：医学書院

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業中に英和辞典（電子辞書可／高校英語以上に対応できるレベルのもの）が必要となるので、毎回必ず持参すること。
成績評価基準の詳細やその他諸注意については初回授業で伝えるので、必ず初回から出席してください。

授業科目	英語コミュニケーションⅡ
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	近藤　未奈		
学年	1年	総単位数	2単位
開講時期	後期	選択･必修	選択

■ 内　　容

この授業では、医療分野に限らず、英語で表現されるあらゆる日常的な状況を、聞き取って理解し、会話に応用できる能力の養成をはかります。授業中のアクティビティー（演習）に積極的に参加し、予習や復習に取り組むことにより、将来、実際の場面で英語が必要になった際にも対応できる力が身につきます。

■ 目　　標

日本語を母語とする英語学習者が特に苦手とする、リスニングと会話に関して重点的に学びます。英語の音声にたえず触れ、実際に正しい発音で話す練習をすることで、英語を正確に聞き取る能力と話す能力を同時に高めることを目標とします。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション（受講にあたっての諸注意）
　　数字の表現（大きい数・小さい数）
第２回　情報伝達のためのスピーチ
第３回　数字の表現（年月日）／ニュースと天気予報
第４回　数字の表現（お金）／説得のためのスピーチ
第５回　数字の表現（年齢）／祝いの場のスピーチ
第６回　数字の表現（時間）／機内アナウンス
第７回　数字の慣用表現／電話での音声案内
第８回　音のつながり（連結・脱落）
第９回　音のつながり（同化）
第10回　音のつながり（まとめ）
第11回　上昇イントネーション／初対面の人と話す
第12回　下降イントネーション／クレームを伝える
第13回　イントネーション（感嘆文）／予想外の出来事について話す
第14回　イントネーション（列挙・選択）／楽しいプランを立てる
第15回　イントネーション（話者の意図）／住環境の好みの違いを話す

■ 評価方法

受講態度（予習･授業への取り組みなど:40%)、小テスト（30%)、実技テスト（30%）を総合的に評価します。

■ 教　科　書

書　名：English Sound Box（楽しく学べる英語リスニング）
著者名：大塚朝美 , 上田洋子 , Kathy Maruyama, 今井由美子
出版社：金星堂

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業中に英和辞典（電子辞書可／高校英語以上に対応できるレベルのもの）が必要となるので、毎回必ず持参すること。
成績評価基準の詳細やその他諸注意については初回授業で伝えるので、必ず初回から出席してください。

授業科目	英語コミュニケーションⅢ
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	近藤　未奈		
学年	1年	総単位数	2単位
開講時期	後期	選択･必修	選択

■ 内　　容

この授業では、医療の現場で使われている英語表現や基本的用語、専門用語の成り立ちを学びます。また、英語文献・論文の内容を正確に読むために必要な文法項目を復習します。英語論文の抄録を読む演習も適宜行います。

■ 目　　標

医学英語に特有の英語表現に慣れ、国際的な学術雑誌やデータベースに掲載されている英語文献の内容を正確に理解できる力を身に付けることを目標とします。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション（受講にあたっての諸注意）
　　医学英語の基本構造
第２回　接尾辞と接頭辞
第３回　英文法の重要項目（１）
第４回　身体部位の用語
第５回　骨の用語
第６回　英文法の重要項目（２）
第７回　筋肉の用語
第８回　神経の用語
第９回　英文法の重要項目（３）
第10回　英文読解（１）　症例を読む
第11回　英語論文の基礎知識（１）
第12回　英文読解（２）　論文の抄録を読む
第13回　英語論文の基礎知識（２）
第14回　カルテに関する用語
第15回　英文読解（３）

■ 評価方法

受講態度（予習や授業中の発表など：30％）、小テストおよびレポート課題（30%）、筆記試験（40%）の結果を総合的に評価します。

■ 教　科　書

書　名：カタカナでわかる医療英単語
　　【注：前期「英語コミュニケーションⅠ」より継続使用】
著者名：飯田恭子
出版社：医学書院

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業中に英和辞典（電子辞書可／高校英語以上に対応できるレベルのもの）が必要となるので、毎回必ず持参すること。
成績評価基準の詳細やその他諸注意については初回授業で伝えるので、必ず初回から出席してください。

授業科目	国語表現学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	岡崎　昌宏		
学年	1年	総単位数	2単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

レポートの作成など、大学では、自身の考えを練り、それを正確に、過不足なく表現する能力が一層求められる。そしてそれは、社会の様々な場面でも必要となる能力である。この授業では、正確な表現のために必要な知識や技術を習得するとともに、レポートの作成方法を実践的に学ぶ。また、優れた文章を読み、表現技術への意識を高める。

■ 目　　標

自身の考えを整理し、それをレポートなどの形で正確に表現できるようになる。

■ 授業計画

第１回　概説―正確な表現の重要性
第２回　文章を書くための知識（１）―表記など
第３回　文章を書くための知識（２）―原稿用紙の使い方、段落など
第４回　正確な文章のために（１）―説明不足の文をなくす
第５回　正確な文章のために（２）―過度な説明、重複説明をなくす
第６回　正確な文章のために（３）―長くなってしまった文を、短くする
第７回　正確な文章のために（４）―句読点への意識を高める、語彙力を高める
第８回　論文・レポートの文章を読み、その表現の特徴を学ぶ
第９回　レポートを書く（１）―様々な事実を集める
第10回　レポートを書く（２）―意見の方向を定める
第11回　レポートを書く（３）―自説の明確な根拠を考える
第12回　レポートを書く（４）―基本的な展開方法を知る
第13回　レポートを書く（５）―レポートを書き、推敲する
第14回　様々な文章に接し、表現への意識を高める
第15回　まとめ

■ 評価方法

平常点（授業中の課題への取り組みも含む）100％

■ 教　科　書

授業中に配布するプリントを用いる。

■ 参　考　書

必要に応じて授業中に紹介する。

■ 留意事項

授業科目	論理学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	辻　虎志		
学　　年	1年	総単位数	2単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

大学の講義やゼミでは、レポート・意見の発表・ディベート・卒業論文などが課されます。この講義では、こうしたこと全体に必要不可欠な「考える」技術、および「読む・書く」技術の習得を目指します。特に、この「論理学」では、①問題解決に必要な資料や文献を分析し、それらを活用して発信する技術（コミュニケーション･リテラシー）と、②文章作成に関わるより実践的な技術や知識、つまり「論証のテクニック」といった論理的で説得力のある文章を書くためのスキル（ロジカル・コミュニケーション）を身につけることが目標となります。

■ 目　　標

現代社会において、どのような仕事もコミュニケーションなくしては成り立ちません。将来社会人になった際、友人・知人・上司・部下・同僚と、実に様々な相手とのコミュニケーションが必要になってきます。こうした多様な相手にたいして、自分の考えを分かりやすく伝え納得してもらい、実行を意思決定してもらうことが今まで以上に求められるようになります。この講義で紹介する技術は、大学生活を有効に使うために役立つのはもちろんのこと、将来社会人となってからも、自分自身の問題解決のためや、社会に貢献するために役立つでしょう。

■ 授業計画

第１回　はじめに
第２回　「メッセージ」とは何か
第３回　「メッセージ」を見抜く（１）　―　内田樹を読む
第４回　「メッセージ」を見抜く（２）　―　村上龍を読む
第５回　「メッセージ」を作る
第６回　「要約」とは何か
第７回　論理的な文章を書こう　―　論文・レポートの「形」
第８回　わかりやすい文章を書くために（１）　―　接続詞
第９回　わかりやすい文章を書くために（２）　―　パラグラフ・ライティング
第10回　思考の整理術　―　MECE と So What? / Why So?
第11回　説得力を上げるために（１）　―　論証とは何か
第12回　説得力を上げるために（２）　―　妥当な論証形式（演繹）
第13回　説得力を上げるために（３）　―　ちょっと弱い論証形式（帰納など）
第14回　注の付け方、引用・参考文献の挙げ方
第15回　論文・レポートを書いてみよう

■ 評価方法

平常点：30%（出席点・課題を含む）、筆記テスト：70%

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：『論文の教室　レポートから卒論まで』
著者名：戸田山和久
出版社：NHK ブックス、2002

書　名：『レポートの組み立て方』
著者名：木下是雄
出版社：ちくま学芸文庫、1996

■ 留意事項

特に無し

授業科目	人間関係学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	有賀　喜代子		
学年	1年	総単位数	2単位
開講時期	前期	選択･必修	選択

■ 内容と目標

人間関係の形成は、保健医療分野に携わるものとして基盤となる。そのために必要な人間関係の基礎知識を修得する。また対人コミュニケーション技術として「アサーション」を中心に体験学習を通じて学ぶ。

■ 授業計画

第１回　自分自身について考える；自己開示とは
第２回　伝え合いの仕組み
第３回　心の発達と人間関係
第４回　アサーションとは①；アサーションチェックリスト
第５回　アサーションとは②；アサーションの３つの型
第６回　アサーションとは③；アサーティブになることを難しくしているもの
第７回　アサーションとは④；非合理的思い込みについて
第８回　バーバルコミュニケーションとノンバーバルコミュニケーション
第９回　感情を上手に表現する
第10回　心の健康とストレス
第11回　交流分析について
第12回　面接における望ましい人間関係；話の聴き方
第13回　問い方・質問の仕方；面接実習
第14回　対象者・その家族との関係
第15回　まとめ

■ 評価方法

定期テスト60％、提出物40％で評価する。体験学習時に欠席した場合は、後日課題を実施して提出する。

■ 教科書

書　名：自分の気持ちをきちんと伝える技術
著者名：平木典子
出版社：PHP 研究所

■ 参考書

書　名：アサーション入門
著者名：平木典子
出版社：講談社現代新書

書　名：コミュニケーションスキルの磨き方
著者名：澤俊二　鈴木孝治編
出版社：医歯薬出版

書　名：人間関係論入門
著者名：岡堂哲雄
出版社：金子書房

■ 留意事項

授業科目	コミュニケーション・リハビリテーション学Ⅰ
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	山口　忍		
学　　年	２年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

リハビリテーションにおけるコミュニケーション技術について学ぶ。

■ 目　　標

リハビリテーションの臨床場面において、臨床的なコミュニケーション態度がとれ、患者および家族と対話ができるようになることを目標とする。

■ 授業計画

第１回　リハビリテーションにおける「聴く」とは、どういうことか
第２回　リハビリテーションにおける「声をかける」とはどういうことか
第３回　リハビリテーションにおける「話す」とはどういうことか
第４回　クリアスピーチの演習
第５回　障害児を持つ母の手記から、嬉しかったことば、悲しかったことばの抽出
第６回　障害児を持つ母の手記から、嬉しかったことばのまとめ（脳の本能）
第７回　相手の顔を見ることと、応答性について（発達から考える）
第８回　まとめ

■ 評価方法

出席点　50%、最終試験　50%で評価する。

■ 教　科　書

なし

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	コミュニケーション・リハビリテーション学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	山口　忍		
学　　年	２年	総単位数	２単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

リハビリテーションにおけるコミュニケーション技術について学ぶ。

■ 目　　標

リハビリテーションの臨床場面において、臨床的なコミュニケーション態度がとれ、患者および家族と対話ができるようになることを目標とする。

■ 授業計画

第１回　リハビリテーションにおける「聴く」とは、どういうことか
第２回　リハビリテーションにおける「声をかける」とはどういうことか
第３回　リハビリテーションにおける「話す」とはどういうことか
第４回　クリアスピーチの演習
第５回　障害児を持つ母の手記から、嬉しかったことば、悲しかったことばの抽出
第６回　障害児を持つ母の手記から、嬉しかったことばのまとめ（脳の本能）
第７回　相手の顔を見ることと、応答性について（発達から考える）
第８回　まとめ

■ 評価方法

出席点　50%、最終試験　50%で評価する。

■ 教　科　書

なし

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	心理学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	鈴木　暁子		
学年	1年	総単位数	2単位
開講時期	前期	選択･必修	選択

■ 内　　容

心理学は人間の心や行動を客観的に理解するための学問である。人間の心というブラックボックスを科学的に解き明かしていく心理学の研究方法は、私たちの身の回りの事象を客観的に理解する事にも役立つ。この広く深い学問の魅力をできる限り伝えたい。

■ 目　　標

人を援助する職業に必要な人間理解の糸口となる心理学の基礎知識を学習するとともに、国家試験科目である臨床心理学の基礎となる知識も身につける事を目標とする。

■ 授業計画

第１回　心理学の考え方①
第２回　心理学の考え方②
第３回　トラウマについて
第４回　コーチング入門
第５回　人の性格①
第６回　人の性格②
第７回　知能と記憶
第８回　学習①
第９回　学習②
第10回　動機づけと情動①
第11回　動機づけと情動②
第12回　グループワーク
第13回　社会心理学入門①
第14回　社会心理学入門②
第15回　人と音楽

■ 評価方法

期末試験80%　提出課題10%、出席・授業態度10%

■ 教科書

書　名：改訂版　はじめて出会う心理学
著者名：長谷川寿一　他
出版社：有斐閣アルマ

■ 参考書

書　名：心理学概論
著者名：山内弘継・橋本宰監修
出版社：ナカニシヤ出版

■ 留意事項

授業科目	言語学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	松井　理直		
学年	２年	総単位数	２単位
開講時期	前期	選択･必修	選択

■ 内　　容

医療現場で起こり得る医療ミスについて、論理的な観点から考察すると共に、
なるべく誤りの少ない思考を行うための論理学的手法について習得する。

■ 目　　標

なぜ考え違いが起こるか、またコミュニケーションにおける誤解がなぜ起こるのかを
客観的に考え、対象者の方とのよりよいコミュニケーションとは何かを理解することが目標である。

■ 授業計画

第１回　言語学入門 ―「ことば」とはどのようなものか。
第２回　記号というシステムの特徴。
第３回　音声学入門 ― 調音器官について
第４回　子音の分類
第５回　母音の分類
第６回　日本語音声の特徴
第７回　モーラと音節
第８回　音韻論（１）― 音素について
第９回　音韻論（２）― 韻律構造について
第10回　言語理論の考え方
第11回　音声と文字
第12回　日本語の語彙層の特性
第13回　日本語の形態音韻論
第14回　テンスとアスペクト
第15回　ヴォイスとムード、モダリティ

■ 評価方法

授業中のミニテストおよび最終テスト

■ 教　科　書

プリントを配布

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	情報処理学	担当者	永井　文子		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

Microsoft Windows© および Microsoft Office© アプリケーションを使用し、ファイル・フォルダの管理、文書作成、レポート作成、表計算、グラフ作成、発表資料作成等、学習に必要なコンピュータスキルを学習する。さらに、セキュリティと情報モラルの基礎を学習する。

■ 目　　標

・講義支援システム「Moodle」へのアクセス方法とファイル提出方法を理解し利用できる。
・PC 上のメールシステムを使用し、学校発行のメールアドレスでの送受信ができる。
・文書作成ソフトを使用し、見やすく体裁の整った文書やレポートを作成できる。
・表計算ソフトを使用し、数式や書式設定を応用した表やグラフを作成・操作できる。
・プレゼンテーション資料作成ソフトを使用し、簡単な発表用スライドを作成できる。
・レポートの特徴と作成の流れ、ルールとマナーの存在を理解してレポートを作成できる。
・セキュリティと情報モラルの一般的な事例における、適切な対応／対策を理解し各自の ID、メールアドレスおよびそれぞれのパスワードの管理ができる。

■ 授業計画

第１回　授業概要。ブラウザの利用。学校メールアドレス／パスワード設定。e メール送受信。フォルダ及びファイル作成。メールへのファイル添付。タイピング練習方法。
第２回　情報倫理、講義支援システム Moodle の ID ／パスワード設定、ログイン／ログアウト。ファイル取得と提出操作。
第３回　文書作成①　Word2013概要、日本語入力（変換操作）、文書作成における書式設定①
第４回　文書作成②　文書作成と書式設定②、表の作成と編集、印刷機能紹介
第５回　文書作成③　各種オブジェクトの利用と文書構成支援機能
第６回　文書作成課題（Word 課題）　作成・提出
第７回　表計算①　Excel2013概要、入力、集計表作成、シート操作
第８回　表計算②　集計表における数式（四則計算、関数）
第９回　表計算③　グラフ作成、文書ファイルとの連携利用、データベース機能紹介
第10回　表計算課題（Excel 課題）　作成・提出
第11回　プレゼンテーション①　PowerPoint2013概要、入力、保存、各種オブジェクトの利用
第12回　プレゼンテーション②　発表資料作成と特殊効果の設定
第13回　プレゼンテーション課題（PowerPoint 課題）　作成・発表（提出）
第14回　総合演習準備　文書及び集計表の作成と連携利用、ファイル管理操作
第15回　総合演習課題　作成・提出

■ 評価方法

提出課題50%、総合演習課題50%（但し、受講態度に著しく問題がある場合は減点対象とします）

■ 教　科　書

書　名：30時間アカデミック　情報リテラシー Office2013 （ISBN978-4-407-33253-7）
著者名：杉本くみ子／大澤栄子
出版社：実教出版株式会社

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	医療情報学
学科名	理学療法学専攻

担当者	星　雅丈		
学　　年	1年	総単位数	2単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

現代の保健･医療･福祉の分野においてICTの活用は必須となっており､将来､医療･福祉現場で働く者として､最低限習得が必要とされる基礎知識がある。本講義では医療情報システムが現場で如何に利用されているかについて解説し、さらに今後の調査研究活動に必要なデータ解析の基礎知識についても講義する。

■ 目　　標

・ICTの活用に必要な基礎知識を修得する。
・医療情報システムが実際にどのように利用されているかを理解する。
・調査研究におけるデータ解析の基礎知識について学ぶ。

■ 授業計画

第１回　情報学（Ⅰ）　情報と社会の関わりについて
第２回　情報学（Ⅱ）　情報の表現と処理について
第３回　情報学（Ⅲ）　情報処理技術について
第４回　情報学（Ⅳ）　ネットワーク技術について
第５回　医療情報システム（Ⅰ）　オーダーエントリーシステムについて
第６回　医療情報システム（Ⅱ）　電子カルテシステムについて
第７回　医療情報システム（Ⅲ）　医用画像システムとリハビリテーションについて
第８回　医療情報システム（Ⅳ）　リハビリテーション関連情報システムについて
第９回　医療情報の倫理　情報倫理・関係法規について／小テスト
第10回　小テストの解説、教室講義のまとめ
第11回　演習：医療統計（Ⅰ）　医療評価指標について
第12回　演習：医療統計（Ⅱ）　尺度と度数分布・基本統計量について
第13回　演習：医療統計（Ⅲ）　仮説検定について
第14回　演習：調査研究（Ⅰ）　精度と真度／コホート研究とケースコントロール研究について
第15回　演習：調査研究（Ⅳ）　因果関係について

■ 評価方法

出席　20%／小テスト　20%／課題提出　20%／期末レポート　40%

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：医療情報　医療情報システム編（第２版）
著者名：日本医療情報学会編集
出版社：篠原出版新社

書　名：医療情報　情報処理技術編（第２版）
著者名：日本医療情報学会編集
出版社：篠原出版新社

書　名：第２版　医療情報サブノート
著者名：日本医療情報学会医療情報技師育成部会　編集
出版社：篠原出版新社

■ 留意事項

授業の進捗状況により授業計画を適宜変更することがある。
なお、情報処理演習室における演習講義（第11～15回）では各回の課題提出を電子メールにて行うため、前期科目の「情報処理」において取得するGmailのアカウントを忘れないように。

授業科目	医療情報学
学科名	作業療法学専攻

担当者	周藤　俊治		
学年	1年	総単位数	2単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

現代の保健・医療・福祉の分野において欠かせない ICT の活用に必要な基礎知識として①デジタルデータがどのように発生しネットワーク上を流れているのか、②医療機関にどのようなシステムが導入・利用されているのか、③情報の収集や活用に関して講義を行なう。

■ 目　　標

医療に関する情報がどのように発生し記録・活用されているのか、ICT の発展により医療環境がどのように変わったのか理解する力と、これからの技術の進展や医療環境の変化に対応して最適な医療環境の構築に向けて発想する力を身につけることを目標とする。

■ 授業計画

第１回　情報学（Ⅰ） 情報とは
第２回　情報学（Ⅱ） 情報量の計算について
第３回　情報学（Ⅲ） ネットワーク技術について
第４回　情報学（Ⅳ） ネットワーク技術について
第５回　保健医療情報システム（Ⅰ）医用画像について
第６回　保健医療情報システム（Ⅱ）電子カルテについて
第７回　保健医療情報システム（Ⅲ） 施設内の情報システムについて
第８回　保健医療情報システム（Ⅳ） 施設間の情報システムについて
第９回　統計基礎（Ⅰ）尺度・度数分布について
第10回　統計基礎（Ⅱ）代表値について
第11回　統計基礎（Ⅲ）散布度について
第12回　医療統計（Ⅰ）病院の統計資料
第13回　医療統計（Ⅱ）診断群分類について
第14回　評価・検査・測定　精度・妥当性・効果判定について
第15回　医療情報の倫理　医の倫理・情報の倫理・関連法規について

■ 評価方法

筆記試験　100％

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

適宜資料を配布します
http://www.medbb.net に講義情報を掲載しています

授業科目	統計学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	周藤　俊治		
学　　年	２年	総単位数	２単位
開講時期	前期	選択･必修	選択

■ 内　　容

取得したデータを集計し有効に活用するには、統計の基礎を理解するとともに取り扱う能力を身につけることが必要である。そこで、本講義ではエクセルを授業内で利用しながらデータを実際にとり扱っていく。具体的には見やすい表の作り方やグラフの作り方から、ｔ検定やカイ二乗検定などの手法について講義していく。

■ 目　　標

代表値や散布度を算出できる
推定や検定がどのようなことをしているのか理解する
エクセルを用いてわかりやすい表・グラフの作成ができる
エクセルの統計関係の関数を使うことができる

■ 授業計画

第１回　度数（１）－度数の算出
第２回　度数（２）－度数分布図の作成
第３回　代表値と散布度（１）－平均値・中央値・最頻値・範囲・四分位偏差
第４回　代表値と散布度（２）－標準偏差・偏差値
第５回　不偏分散
第６回　中心極限定理
第７回　Ｚ検定（１）－標準正規分布
第８回　Ｚ検定（２）－検定の手順
第９回　ｔ検定（１）－ｔ分布
第10回　ｔ検定（２）－一標本
第11回　ｔ検定（３）－二標本
第12回　カイ二乗検定（１）－カイ二乗分布
第13回　カイ二乗検定（２）－独立性の検定
第14回　Fisher の直接確率計算法
第15回　まとめ

■ 評価方法

筆記試験　　80％　提出課題　20％

■ 教　科　書

書　名：初歩からしっかり学ぶ　実習　統計学入門　～ Excel 演習でぐんぐん力がつく
著者名：涌井良幸、涌井貞美　著
出版社：技術評論社

■ 参　考　書

書　名：診療情報管理士のためのやさしい医療統計学
著者名：日本病院会／監　日本診療情報管理学会／編
　　阿南　誠、三木　幸一郎、入江　真行、中村　洋一／執筆
出版社：じほう

■ 留意事項

授業科目	統計学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	周藤　俊治		
学年	3年	総単位数	2単位
開講時期	前期	選択･必修	選択

■ 内　　容

取得したデータを集計し有効に活用するには、統計の基礎を理解するとともに取り扱う能力を身につけることが必要である。そこで、本講義ではエクセルを授業内で利用しながらデータを実際にとり扱っていく。具体的には見やすい表の作り方やグラフの作り方から、ｔ検定やカイ二乗検定などの手法について講義していく。

■ 目　　標

代表値や散布度を算出できる
推定や検定がどのようなことをしているのか理解する
エクセルを用いてわかりやすい表・グラフの作成ができる
エクセルの統計関係の関数を使うことができる

■ 授業計画

第１回　度数（１）－度数の算出
第２回　度数（２）－度数分布図の作成
第３回　代表値と散布度（１）－平均値・中央値・最頻値・範囲・四分位偏差
第４回　代表値と散布度（２）－標準偏差・偏差値
第５回　不偏分散
第６回　中心極限定理
第７回　Ｚ検定（１）－標準正規分布
第８回　Ｚ検定（２）－検定の手順
第９回　ｔ検定（１）－ｔ分布
第10回　ｔ検定（２）－一標本
第11回　ｔ検定（３）－二標本
第12回　カイ二乗検定（１）－カイ二乗分布
第13回　カイ二乗検定（２）－独立性の検定
第14回　Fisher の直接確率計算法
第15回　まとめ

■ 評価方法

筆記試験　　80％　提出課題　20％

■ 教　科　書

書　名：初歩からしっかり学ぶ　実習　統計学入門　～ Excel 演習でぐんぐん力がつく
著者名：涌井良幸、涌井貞美　著
出版社：技術評論社

■ 参　考　書

書　名：診療情報管理士のためのやさしい医療統計学
著者名：日本病院会／監　日本診療情報管理学会／編
　　阿南　誠、三木　幸一郎、入江　真行、中村　洋一／執筆
出版社：じほう

■ 留意事項

授業科目	文学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	伊東　和幸		
学　　年	２年	総単位数	２単位
開講時期	後期	選択･必修	選択

■ 内　　容

日本の近現代の文学史を振り返りながら、明治期、大正期、昭和期（戦前、戦後）の代表的作家の作品を紹介しながら、その一部を鑑賞する。

■ 目　　標

日本の近現代の文学史の大枠を把握することにより、今後の学生生活、社会生活の中で、「日本の文学史上に残る代表的作家」､あるいは「知る人ぞ知る作家」の作品を読書するきっかけづくりとなることを望む。

■ 授業計画

第１回　授業ガイダンス（15コマの計画と大まかな授業の流れ）
第２回　明治期の自然主義小説と反自然主義小説
第３回　大正期の耽美派文学、白樺派文学、新現実主義文学
第４回　昭和期（戦前）のモダニズム文学について
第５回　昭和期（戦後）文学全般について
第６回　夏目漱石文学について
第７回　夏目漱石「夢十夜」 CD 鑑賞
第８回　芥川龍之介文学について
第９回　芥川龍之介「蜘蛛の糸」､「トロッコ」､「尼堤」CD 鑑賞
第10回　川端康成文学について
第11回　川端康成「伊豆の踊子」CD 鑑賞
第12回　梶井基次郎文学について
第13回　梶井基次郎「檸檬」､「桜の木の下には」､「K の昇天」CD 鑑賞
第14回　三島由紀夫文学について
第15回　寺山修司短詩形文学について

■ 評価方法

半期の授業を通して、１～２回課題を与え、その提出されたレポートの内容と出席率により評価する。（レポート50%、出席率50%）

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：日本文学史―近代から現代へ
著者名：奥野健男
出版社：中央公論新書（212）

■ 留意事項

授業科目	文学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	伊東　和幸		
学　　年	３年	総単位数	２単位
開講時期	後期	選択･必修	選択

■ 内　　容

日本の近現代の文学史を振り返りながら、明治期、大正期、昭和期（戦前、戦後）の代表的作家の作品を紹介しながら、その一部を鑑賞する。

■ 目　　標

日本の近現代の文学史の大枠を把握することにより、今後の学生生活、社会生活の中で、「日本の文学史上に残る代表的作家」､あるいは「知る人ぞ知る作家」の作品を読書するきっかけづくりとなることを望む。

■ 授業計画

第１回　授業ガイダンス（15コマの計画と大まかな授業の流れ）
第２回　明治期の自然主義小説と反自然主義小説
第３回　大正期の耽美派文学、白樺派文学、新現実主義文学
第４回　昭和期（戦前）のモダニズム文学について
第５回　昭和期（戦後）文学全般について
第６回　夏目漱石文学について
第７回　夏目漱石「夢十夜」 CD 鑑賞
第８回　芥川龍之介文学について
第９回　芥川龍之介「蜘蛛の糸」､「トロッコ」､「尼堤」CD 鑑賞
第10回　川端康成文学について
第11回　川端康成「伊豆の踊子」CD 鑑賞
第12回　梶井基次郎文学について
第13回　梶井基次郎「檸檬」､「桜の木の下には」､「K の昇天」CD 鑑賞
第14回　三島由紀夫文学について
第15回　寺山修司短詩形文学について

■ 評価方法

半期の授業を通して、１～２回課題を与え、その提出されたレポートの内容と出席率により評価する。（レポート50%、出席率50%）

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：日本文学史―近代から現代へ
著者名：奥野健男
出版社：中央公論新書（212）

■ 留意事項

授業科目	教育学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	加藤　啓一郎		
学年	３年	総単位数	２単位
開講時期	前期	選択･必修	選択

■ 内　　容

本人の主体性の尊重、関係性の重視という視点に立って、発達、成長の過程を捉えなおし、教育的な働きかけについて実践研究を通して検討する

■ 目　　標

教育についての問題を、社会とのかかわりの中で捉えなおすことを通して、医療関係者に必要とされる教育学的思考や手法を身につけることを目的とする

■ 授業計画

第１回　イントロダクション
第２回　主体性、関係性の重視と教育
第３回　生涯発達の視点と障害について１
第４回　生涯発達の視点と障害について２
第５回　生涯発達の視点と障害について３
第６回　生涯発達の視点と障害について４
第７回　生涯発達の視点と障害について５
第８回　エピソード記述の方法
第９回　教育における主体性の問題を捉えなおす
第10回　家族、地域の問題について
第11回　実践的検討１
第12回　実践的検討２
第13回　実践的検討３
第14回　実践的検討４
第15回　エピソードの発表と討議

■ 評価方法

レポート　100%

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	法学概論
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	家　正治		
学　　年	２年	総単位数	２単位
開講時期	後期	選択･必修	選択

■ 内　　容

「社会あるところに法あり」と言われている。社会規範には、道徳規範、宗教規範、習俗規範、法規範があるが、それらの中で法規範はどのような特徴を有するかを把握し、また今日の国内法と国際法が直面する主要問題と課題を考案する。なお、できるだけ生起している事例を取り上げる。

■ 目　　標

本講義を通じて、国内社会における「人の支配」に対する「法の支配」について、また、国際社会における「力の支配」に対する「法の支配」について理解するようにしたいと考える。そして、その中でリーガル・マインド「法的ものの考え方」とはどのようなものかについて接近したいと思っている。

■ 授業計画

第１回　法（学）を学ぶにあたって
第２回　法とは何か（法と道徳）
第３回　法の発展と法の憲法
第４回　近代国家と憲法
第５回　日本国憲法と国民主権主義
第６回　日本国憲法と基本的人権尊重主義
第７回　日本国憲法と平和主義
第８回　権力分立（三権分立）
第９回　法と裁判
第10回　国内法と国際法
第11回　戦争の違法化と安全保障
第12回　国際人権保障（人権の国際的保障）
第13回　人民（民族）自決権
第14回　地球環境の保護と保全
第15回　国内社会と国際社会における「法の支配」（rule of law）

■ 評価方法

筆記試験　70％
出席を含む平常点　30％

■ 教　科　書

書　名：法学入門〔第６版〕
著者名：末川博　編
出版社：有斐閣

■ 参 考 書

書　名：現代法学入門〔第４版〕
著者名：伊藤正巳・加藤一郎　編
出版社：有斐閣

書　名：法における常識
著者名：P.G. ヴィノグラドフ著　/　末延三次・伊藤正己　訳
出版社：岩波書店

書　名：「居住の権利」とくらし－東日本大震災復興をみすえて
著者名：家正治　編集代表
出版社：藤原書店

■ 留 意 事 項

問題意識を持つとともに日常的な勉学への努力を望みます。

授業科目	法学概論
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	家　正治		
学　　年	３年	総単位数	２単位
開講時期	後期	選択･必修	選択

■ 内　　容

「社会あるところに法あり」と言われている。社会規範には、道徳規範、宗教規範、習俗規範、法規範があるが、それらの中で法規範はどのような特徴を有するかを把握し、また今日の国内法と国際法が直面する主要問題と課題を考案する。なお、できるだけ生起している事例を取り上げる。

■ 目　　標

本講義を通じて、国内社会における「人の支配」に対する「法の支配」について、また、国際社会における「力の支配」に対する「法の支配」について理解するようにしたいと考える。そして、その中でリーガル・マインド「法的ものの考え方」とはどのようなものかについて接近したいと思っている。

■ 授業計画

第１回　法（学）を学ぶにあたって
第２回　法とは何か（法と道徳）
第３回　法の発展と法の憲法
第４回　近代国家と憲法
第５回　日本国憲法と国民主権主義
第６回　日本国憲法と基本的人権尊重主義
第７回　日本国憲法と平和主義
第８回　権力分立（三権分立）
第９回　法と裁判
第10回　国内法と国際法
第11回　戦争の違法化と安全保障
第12回　国際人権保障（人権の国際的保障）
第13回　人民（民族）自決権
第14回　地球環境の保護と保全
第15回　国内社会と国際社会における「法の支配」（rule of law）

■ 評価方法

筆記試験　70％
出席を含む平常点　30％

■ 教　科　書

書　名：法学入門〔第６版〕
著者名：末川博　編
出版社：有斐閣

■ 参 考 書

書　名：現代法学入門〔第４版〕
著者名：伊藤正巳・加藤一郎　編
出版社：有斐閣

書　名：法における常識
著者名：P.G. ヴィノグラドフ著　/　末延三次・伊藤正己　訳
出版社：岩波書店

書　名：「居住の権利」とくらし－東日本大震災復興をみすえて
著者名：家正治　編集代表
出版社：藤原書店

■ 留 意 事 項

問題意識を持つとともに日常的な勉学への努力を望みます。

授業科目	国際社会と日本
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	家　正治		
学　　年	２年	総単位数	２単位
開講時期	前期	選択･必修	選択

■ 内　　容

国際社会の構造と現状を理解し、現代国際社会が当面する「戦争と平和の問題」「途上国問題」「人権問題」「地球環境問題」等の全人類的課題をとり上げながら､その中で日本の位置と役割について考察する。なお、できるだけ生起している事例を取り上げることとする。

■ 目　　標

国際社会の構造や実態を把握し、国際社会を規律している原則や規範について理解・認識するとともに、現代国際社会において日本の占める立場と係わりについて理解できるようにする。また、冷戦終結後の国際社会の特徴と国際社会における非国家主体の活動についても把握できるようにしたい。

■ 授業計画

第１回　国際社会の成立と近代国際社会における日本の位置
第２回　国際社会の発展と現代国際社会における日本の位置
第３回　国際社会を動かす主要なアフターと日本
第４回　戦争の違法化と国際紛争の平和的解決および日本
第５回　集団安全保障体制と日本の位置
第６回　平和維持活動（PKO）の役割と日本
第７回　軍縮の現状と阻害要因および日本
第８回　日米安全保障体制の展開と現状
第９回　先進国と途上国をめぐる経済問題と日本①
第10回　先進国と途上国をめぐる経済問題と日本②
第11回　人権の国際的保障の発展と日本①
第12回　人権の国際的保障の発展と日本②
第13回　難民の庇護（保護）と日本
第14回　地球環境の保護と国際協力（とくに日本の役割について）
第15回　今後の国際社会と日本の役割

■ 評価方法

筆記試験　70％
出席を含む平常点　30％

■ 教　科　書

書　名：新版国際関係
著者名：家正治　編
出版社：世界思想社

■ 参 考 書

書　名：国際機構〔第四版〕
著者名：家正治、小畑郁、桐山孝信　編
出版社：世界思想社

書　名：国際紛争と国際法
著者名：家正治、末吉洋文、桐山孝信、岩本誠吾、戸田五郎　共著
出版社：嵯峨野書院

書　名：ポスト冷戦時代の国連
著者名：カレン・A・ミングスト、マーガレット・P・カーンズ / 家正治、桐山孝信　監訳
出版社：世界思想社

■ 留 意 事 項

問題意識を持つとともに日常的な勉学への努力を望みます。

授業科目	国際社会と日本
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	家　正治		
学　　年	３年	総単位数	２単位
開講時期	前期	選択･必修	選択

■ 内　　容

国際社会の構造と現状を理解し、現代国際社会が当面する「戦争と平和の問題」「途上国問題」「人権問題」「地球環境問題」等の全人類的課題をとり上げながら､その中で日本の位置と役割について考察する。なお、できるだけ生起している事例を取り上げることとする。

■ 目　　標

国際社会の構造や実態を把握し、国際社会を規律している原則や規範について理解・認識するとともに、現代国際社会において日本の占める立場と係わりについて理解できるようにする。また、冷戦終結後の国際社会の特徴と国際社会における非国家主体の活動についても把握できるようにしたい。

■ 授業計画

第１回　国際社会の成立と近代国際社会における日本の位置
第２回　国際社会の発展と現代国際社会における日本の位置
第３回　国際社会を動かす主要なアフターと日本
第４回　戦争の違法化と国際紛争の平和的解決および日本
第５回　集団安全保障体制と日本の位置
第６回　平和維持活動（PKO）の役割と日本
第７回　軍縮の現状と阻害要因および日本
第８回　日米安全保障体制の展開と現状
第９回　先進国と途上国をめぐる経済問題と日本①
第10回　先進国と途上国をめぐる経済問題と日本②
第11回　人権の国際的保障の発展と日本①
第12回　人権の国際的保障の発展と日本②
第13回　難民の庇護（保護）と日本
第14回　地球環境の保護と国際協力（とくに日本の役割について）
第15回　今後の国際社会と日本の役割

■ 評価方法

筆記試験　70％
出席を含む平常点　30％

■ 教　科　書

書　名：新版国際関係
著者名：家正治　編
出版社：世界思想社

■ 参 考 書

書　名：国際機構〔第四版〕
著者名：家正治、小畑郁、桐山孝信　編
出版社：世界思想社

書　名：国際紛争と国際法
著者名：家正治、末吉洋文、桐山孝信、岩本誠吾、戸田五郎　共著
出版社：嵯峨野書院

書　名：ポスト冷戦時代の国連
著者名：カレン・A・ミングスト、マーガレット・P・カーンズ / 家正治、桐山孝信　監訳
出版社：世界思想社

■ 留 意 事 項

問題意識を持つとともに日常的な勉学への努力を望みます。

授業科目	物理学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	非常勤		
学年	1年	総単位数	2単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

医療に携わる者に求められる「正確な状況を把握する能力と分析力」･「厳密な論理的思考力・課題解決力」を育成する。そのために、リハビリテーションの基礎となる力学分野と医療機器と関連が深い電磁気分野の演習を行う。

■ 目　　標

革新的リハビリテーション技術の開発が出来る人材を育成するために、物理学における研究開発のスキーマを伝え、課題解決のスキーマを習得させる。合わせて、専門科目への移行をスムーズにさせる。

■ 授業計画

第１回　物理学の発想と方法（P.1～ 14）
　　講義ノート（１）
第２回　ベクトルによる力の表記（P.15～ 18）
　　講義ノート（２）
第３回　運動の解析（Ⅰ）（P.19～ 22）
　　講義ノート（２、２’）
第４回　運動の解析（Ⅱ）、運動の法則（Ⅰ）（P.22～ 25）
　　講義ノート（２’）
第５回　運動の法則（Ⅱ）、演習（P.26～ 30）
　　講義ノート（３）
第６回　運動の法則（Ⅲ）、運動量、エネルギー（P.29～ 41）
　　講義ノート（４）
第７回　モーメントと応力（P.42～ 47）
　　講義ノート（５）
第８回　回転運動（Ⅰ）（P.48～ 52）、前半部分についてのテスト
　　講義ノート（６）
第９回　回転運動（Ⅱ）（P.53～ 55)
　　講義ノート（６）
第10回　流体（P.189～ 200）、テスト解説・結果連絡
　　講義ノート（７）
第11回　電気力と電場（P.59～ 71）
　　講義ノート（８）
第12回　電場のエネルギー（P.71～ 80）、コンデンサー（P.81～ 94）
　　講義ノート（９）
第13回　電流回路（P.95～ 110）
　　講義ノート（10）
第14回　電流と磁気（P.111～ 136）
　　講義ノート（11）
第15回　放射線（P.201～ 218）、医療機器

■ 評価方法

試験（小テストを含む） 70%　　平常点　30%

■ 教　科　書

書　名：生命科学のための基礎シリーズ　物理
著者名：監修：大島泰郎　著者：川久保達之　他３名
出版社：実教出版

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	生物学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	林　研		
学年	1年	総単位数	2単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　容

生物を理解する枠組みとしての細胞と遺伝子について、また「生きている」ことの本質でもある
代謝と自己維持の仕組みについて学ぶ。

■ 目　標

生物の体のはたらきを、生命の基本的なシステムとの関連で理解できるようになること。

■ 授業計画

第1回　ガイダンス、生物とは何か
第2回　細胞（1）　細胞の種類と構造
第3回　細胞（2）　細胞の分裂と分化
第4回　細胞（3）　幹細胞
第5回　細胞（4）　神経、筋、骨
第6回　遺伝子（1）　遺伝の法則
第7回　遺伝子（2）　DNA と遺伝子
第8回　遺伝子（3）　タンパク質の合成
第9回　代謝（1）　酵素と物質代謝
第10回　代謝（2）　エネルギー代謝
第11回　代謝（3）　生物と環境
第12回　生体の維持（1）　内分泌系と自律神経系
第13回　生体の維持（2）　免疫
第14回　バイオテクノロジー
第15回　まとめと復習

■ 評価方法

期末試験　80%　　小テスト2回　20%

■ 教科書

書　名：ZERO からの生命科学
著者名：木下勉、小林秀明、浅賀宏昭
出版社：南山堂

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	生活科学（福祉住環境論）
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	山田　隆人		
学年	２年	総単位数	２単位
開講時期	前期	選択･必修	選択

■ 内　　容

OT・PT の職能の一つとして、日常生活活動の支援がある。環境因子である居住環境を改善することで、対象者の生活機能の維持・向上を計ります。本講義では、居住環境の改善に関連する制度や施策、関連する職能との連携および居住環境改善を行う為の基礎知識を学びます。

■ 目　　標

居住環境改善に関する法制度や社会状況を理解する
高齢者や障害者の暮らしの状況を理解する
障害の特性を理解し、環境支援の方法を理解する

■ 授業計画

第１回　高齢者を取り巻く社会状況と住環境
第２回　介護保険制度の概要
第３回　高齢者向けの住宅施策の変遷と概要
第４回　障害者を取り巻く社会状況と住環境
第５回　障害者福祉施策の概要、障害者向けの住宅施策の変遷と概要
第６回　高齢者に多い疾患別に見た福祉住環境整備１
　　脳血管障害１
第７回　高齢者に多い疾患別に見た福祉住環境整備２
　　脳血管障害２
第８回　高齢者に多い疾患別に見た福祉住環境整備３
　　脊髄損傷１
第９回　高齢者に多い疾患別に見た福祉住環境整備２
　　脊髄損傷２
第10回　住環境整備とケアマネジメント
第11回　福祉住環境整備の進め方
第12回　福祉住環境整備の共通基本技術１
第13回　福祉住環境整備の共通基本技術１
第14回　住居改善の実際
第15回　まとめ

■ 評価方法

■ 教　科　書

書　名：改訂版　福祉住環境コーディネーター検定試験　２級公式テキスト
著者名：東京商工会議所　編
出版社：東京商工会議所

■ 参　考　書

■ 留意事項

他の学生の迷惑になる行為は慎むようにして下さい。15回の講義では、教科書すべての内容を網羅することはできません。検定試験を受ける予定の方への対応は、別途で行う予定です。

授業科目	自然科学概論
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	林　　研		
学　　年	２年	総単位数	２単位
開講時期	後期	選択･必修	選択

■ 内　　容

自然科学の歴史、方法、および様々な分野の成果・現状について紹介する。

■ 目　　標

科学の方法を理解した上で幅広い知識を身につけ、現代の諸問題を考える力をつけることを目標とする。

■ 授業計画

第１回　ガイダンス、自然科学とは何か
第２回　科学の歴史
第３回　科学の方法
第４回　宇宙と物質
第５回　相対論と量子論
第６回　素粒子の世界
第７回　原子力と放射線
第８回　エネルギーと環境
第９回　地球科学
第10回　生命の起源と進化
第11回　ゲノムサイエンス
第12回　脳科学
第13回　認知科学
第14回　複雑系の科学
第15回　まとめ

■ 評価方法

期末試験　90%　　出席　10%

■ 教　科　書

使用しません。適宜資料を配布します。

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	栄養学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	仲村　祐江		
学年	1年	総単位数	2単位
開講時期	前期	選択･必修	選択

■ 内　　容

科学的知識を基礎に、実際の食生活に結びつけ行動できるよう栄養学の正しい知識を学びます。
授業では、各要点ごとに視聴覚教材を用い、講義を行い解説していきます。
（各自の１日の必要エネルギー量、栄養素の算出を実習します。）

■ 目　　標

各栄養素の機能、消化吸収のメカニズム、代謝の基礎を理解し、健康の保持、増進、さらには疾病予防のために果たす栄養学の役割を理解する。

■ 授業計画

第１回　栄養と食生活①
第２回　栄養と食生活②
第３回　栄養素とその機能
第４回　糖質の栄養①
第５回　糖質の栄養②
第６回　脂質の栄養①
第７回　脂質の栄養②
第８回　たんぱく質の栄養①
第９回　たんぱく質の栄養②
第10回　ビタミンの栄養
第11回　無機質の栄養
第12回　食物繊維と難消化性多糖類
第13回　エネルギー代謝 / 水分・電解質の代謝
第14回　食物の消化と吸収
第15回　年齢と栄養 / 食事摂取基準

■ 評価方法

・筆記試験　70%　　・提出課題　20%
・出席 / 授業態度　10%

■ 教　科　書

書　名：栄養科学シリーズ　NEXT
著者名：木戸康博・中坊幸弘 / 編
出版社：講談社サイエンティフィク

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	基礎ゼミナール	担当者	複数専任教員		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	通年	選択･必修	必修

■ 内　　容

自分自身の療法士として将来像を具体化し，求められる学習態度･学習方法，療法士としてのコミュニケーション技能，対象者の理解，リスク管理の概要，プレゼンテーション方法，レポートの書き方などについて，講義とグループ活動を通して学ぶ．さらに，自己の生活を見直すセッションも設ける．

■ 目　　標

1．自分の将来像をイメージし，早期に大学生としての学習方法や学習に対する構えをつくる
2．療法士として求められる態度・知識・技能を知り，一歩でも近づくための方向付けを行う
3．他者の意見を理解する能力，自分の考えを整理して表現する能力，情報を収集し整理する力，問題解決能力，コミュニケーション能力，プレゼンテーション能力を高める

■ 授業計画

第1回　学習への取り組み方（在校生の話：高校と大学の違い、ノートの取り方など)）
第2回　ハラスメントについて学ぼう
第3回　コミュニケーション技能　講義・演習①
第4回　コミュニケーション技能　講義・演習②
第5回　コミュニケーション技能　講義・演習③（ラーニングスタイル）
第6回　自分自身のマナーについて学ぼう（マナーアップ研修）
第7回　違法薬物について学ぼう（薬物乱用防止講演会）
第8回　先輩セラピスト（卒業生）の話から将来像を具体化しよう
第9回　障がいのある当事者の話をお聞きしよう
第10回　障がいのある当事者の話を聞いて考えたことをディスカッションし，まとめてみよう
第11回　障がいのある当事者の話をお聞きしよう
第12回　障がいのある当事者の話を聞いて考えたことをディスカッションし，まとめてみよう
第13回　医療職を目指す学生としての基本的資質
　　自分の生活（生活リズム，学習時間や方法，社会的な態度など）を振り返ってみよう①
第14回　G別 目指すセラピスト像 ディスカッション、発表準備（PT11グループ /OT 4グループ別）
第15回　G別 目指すセラピスト像 発表
第16回　国家試験の問題を解いてみよう①　　勉強の方法を学ぼう
第17回　国家試験の問題を解いてみよう②　　勉強の方法を学ぼう
第18回　療法士としてのリスク管理について学ぼう①
第19回　療法士としてのリスク管理について学ぼう②（一次救急救命法 AED の使用方法）
第20回　障がいのある当事者の話をお聞きしよう
第21回　障がいのある当事者の話を聞いて考えたことをディスカッションし，まとめてみよう
第22回　障がいのある当事者の話をお聞きしよう
第23回　障がいのある当事者の話を聞いて考えたことをディスカッションし，まとめてみよう
第24回　テーマを決めて，情報収集をしてみよう①　基礎ゼミを振り返って収集する情報のテーマを決めよう
第25回　テーマを決めて，情報収集をしてみよう②　講義「情報収集の方法とまとめ方」
第26回　テーマを決めて，情報収集をしてみよう③
第27回　調べた内容を発表するための準備をしよう①
第28回　調べた内容を発表するための準備をしよう②
第29回　調べた内容を発表してみよう　2会場
　　1グループ発表6分　質疑6分（12分）　1会場6～7班
第30回　医療職を目指す学生としての基本的資質
　　自分の生活（生活リズム，学習時間や方法，社会的な態度など）を振り返ってみよう②

■ 評価方法

授業への貢献度（講義・ディスカッション時）：60%，課題（レポート）：20%，発表点：20%

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：知へのステップ　　第３版
著者名：学習技術研究会
出版社：くろしお出版

書　名：アカデミック・スキルズ - 大学生のための知的技法入門
著者名：佐藤望　他
出版社：慶應義塾大学出版会

書　名：大学基礎講座　充実した大学生活をおくるために
著者名：藤田哲也
出版社：北大路書房

書　名：広げる知の世界　大学でのまなびのレッスン
著者名：北尾謙治　他
出版社：ひつじ書房

■ 留意事項

講師の都合により日程を変更する可能性があります
授業に欠席した場合は，該当回の出席・態度，課題，発表点は０点となります.

授業科目	医の倫理（医療倫理学・生命倫理学）
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	浅野　遼二		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

「医の倫理」の思想的系譜を明らかにし、「医の倫理」の主要な問題を講義する。

■ 目　　標

理学療法や作業療法などのリハビリテーション医療を学ぶ者に必要な「医の倫理」の知識を習得し、豊かな人間形成を目指すことにある。

■ 授業計画

第１回　「医の倫理」思想史
「ヒポクラテス誓い」から「ニュールンベルク綱領」や「ヘルシンキ宣言」を経て「患者の権利章典」に至る「医の倫理」の系譜と問題点を簡潔に講義する。

第２回　理学療法士と作業療法士の倫理規定
理学療法士と作業療法士の倫理規定の位置づけを示し、職業倫理として療法士が体得すべき倫理観を語る。

第３回　「医の倫理」の主要な問題～原理～
自律、恩恵、正義、無危害等の「医の原理」を講義する。

第４回　「医の倫理」の主要な問題～患者と医師の関係：パターナリズム～
伝統的・古典的な「患者と医師の関係」、温情的父権主義（パターナリズム）を講義する。

第５回　「医の倫理」の主要な問題～患者と医師の関係：インフォードム・コンセント～
新しい「患者と医師の関係」、情報を得た上での同意（インフォードム･コンセント）を講義する。

第６回　「医の倫理」の主要な問題～被験者はだれか～
新しいワクチンやiPS細胞の臨床試験の被験者はだれが最も適切なのかを、ヨナスの「人体実験論」より語る。

第７回　「医の倫理」の主要な問題～末期医療の原点～
エリザベス・キューブラー・ロスの末期患者の「死の五段階説」を語り、末期医療の倫理的原点を講義する。

第８回　ケア倫理は「医の倫理」の光明となるか
20世紀後半になって一躍注目を集めた「ケア倫理」を語り、「医の倫理」の将来を展望する。

■ 評価方法

筆記試験　70％
授業態度（出席点を含む）　30％

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	チーム医療論	担当者	井上　悟		
学科名	理学療法学専攻	学年	２年	総単位数	１単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

今改めて、チーム医療が求められる理由とチーム維持・発展のための条件を探る。
具体的なチーム医療の事例、現状について知る。

■ 目　　標

チーム医療の基本と具体的事例を知る。

■ 授業計画

第１回　チーム医療とは？
第２回　今更、なぜチーム医療が求められるのか？
第３回　チームモデルとメリット／デメリット
第４回　チーム医療の条件１
第５回　チーム医療の条件２
第６回　チーム医療の条件３
第７回　チーム医療の教育方法
第８回　チーム医療の評価方法
第９回　チーム医療の課題１
第10回　チーム医療の課題２
第11回　チームメンバーの専門性とスキル
第12回　チーム医療実践具体事例１
第13回　チーム医療実践具体事例２
第14回　チーム医療実践具体事例３
第15回　チーム医療実践具体事例４：リハビリテーション・チーム

■ 評価方法

筆記試験70%、出席・授業態度等30%（遅刻、欠席は減点する。）

■ 教科書

書　名：チーム医療を成功させる10か条
著者名：福原麻希
出版社：中山書店，2013年，3150円

■ 参考書

書　名：実践チーム医療論
著者名：水本清久・他（北里大学病院）
出版社：医歯薬出版：3150円

書　名：チーム医療推進協議会ホームページ
著者名：（公社）　日本理学療法士協会
出版社：http://www.team-med.jp/

書　名：多職種相互乗り入れ型のチーム医療
著者名：NPO 法人　地域の包括的な医療に関する研究会（昭和大学病院）
出版社：へるす出版新書

■ 留意事項

各回の講義テーマ、内容については関連する講義の進捗状況により変更することがあります。

授業科目	チーム医療論
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	今井　公一		
学年	4年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

患者の治療という共通の目的を達成するために 医療現場では様々な職種がそれぞれの専門を生かし協調して働くことが必要である。これがチーム医療である。皮相なチーム医療の解釈では、医師によるパターナリズムを排して、職種の上下なく協調して医療をすることとしているが、リーダーシップのないチーム医療は危険である。本講義では、各自が、実習中の経験をもとにチーム医療について実践例をレポートにまとめ報告し、そのレポートも踏まえて医師、理学療法士、看護師、などの資格を持つ教官が講義をおこなう。

■ 目　　標

チーム医療とは、チームリーダーの下に、自己の専門性を十分に理解をした応分の技量をもつ専門職種が各々の役割を認識し、問題点と療養目標を共有することの重要性を正しく認識し、各専門職種間の緻密な連携・協働を行うことである。こうした認識を踏まえた上で、本講義の目標は、各自の経験と講義から、の本質を理解し、医療チームとして機能するために必要なことは何かを学習し理解することである。

■ 授業計画

第１回　チーム医療の実際（１）今井
第２回　チーム医療の実際（２）今井
第３回　チーム医療の実際（３）今井
第４回　チーム医療の実際（４）今井
第５回　チーム医療論　概論（１）今井
第６回　チーム医療論　概論（２）今井
第７回　チーム医療の実際とセラピストに求められる能力（１）木村
第８回　チーム医療の実際とセラピストに求められる能力（２）木村
第９回　チーム医療の実際とセラピストに求められる能力（３）木村
第10回　チーム医療の実際とセラピストに求められる能力（４）木村
第11回　チーム医療実践のために必要な能力（１）藤岡
第12回　チーム医療実践のために必要な能力（２）藤岡
第13回　チーム医療実践のために必要な能力（３）藤岡
第14回　チーム医療実践のために必要な能力（４）藤岡
第15回　総括　今井

■ 評価方法

出席　30%　症例報告　30%　筆記試験　40%

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	スポーツ医学
学科名	理学療法学専攻

担当者	中村　憲正		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

スポーツ医学の急性および慢性の内科的･整形外科的疾患について学ぶ。スポーツ選手の健康管理、トレーニングによる生理的適応現象、トレーニングによる病的現象、外傷、スポーツによる内科的・整形外科的障害とその対策。生活習慣病、フィットネスについて知識を得る。

■ 目　　標

スポーツ活動の場において、医療スタッフ、教育者、指導者として必要なスポーツ医学の知織を体得する。

■ 授業計画

第１回　スポーツ医学概論　　スポーツと健康、エイジングについて学ぶ
第２回　運動の生理、病理学　力学刺激による生体反応を学ぶ
第３回　スポーツ障害総論１　内科的なスポーツ障害について学ぶ
第４回　スポーツ障害総論２　外科的なスポーツ障害について学ぶ
第５回　部位別スポーツ障害　頭頸部・体幹
第６回　部位別スポーツ障害　上肢
第７回　部位別スポーツ障害　下肢
第８回　アンチドーピング
第９回　スポーツにおけるメディカルサポートシステムの構築　その理論と実際
第10回　フィジカルトレーニングの理論と実践　その最先端を学ぶ
第11回　アスレティックトレーナーとは
第12回　スポーツ現場とスポーツ医学１　スポーツ現場で発生しやすいスポーツ医学的問題について学ぶ。
第13回　スポーツ現場とスポーツ医学２　スポーツ現場におけるコンディショニングについて学ぶ。
第14回　スポーツと栄養
第15回　予備日

■ 評価方法

レポート100％

■ 教　科　書

書　名：新板スポーツ外傷・障害の理学診断・理学療法ガイド
著者名：臨床スポーツ医学編集委員会
出版社：文光堂

書　名：アルレティックリハビリテーションガイド　競技復帰・再発予防のための実践的アプローチ
著者名：福林　徹
出版社：文光堂

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	リハビリテーション概論
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	井上　悟		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

リハビリという言葉は、一般社会でも非常によく使われるようになった。通常、疾病や外傷によって生じた障害に対する機能回復のための訓練治療として用いられてきている。しかし、この解釈は、リハビリテーションの中の極めて狭い領域を示しているに過ぎない。
リハビリテーション本来の理念を歴史的背景を含め紹介する。

■ 目　　標

リハビリテーション（rehabilitation）を正しく理解する。
正しい知識をもって、リハビリテーション医療の対象や現状、各専門職の役割について知る。

■ 授業計画

第１回　リハビリテーションとは？　その概念
第２回　リハビリテーションの理念・定義
第３回　健康・疾病・障害の概念と分類
第４回　障害へのアプローチ
第５回　廃用症候群とは
第６回　障害の心理と障害受容
第７回　リハビリテーションの過程、評価とは？
第８回　リハビリテーションの諸段階：医学的・職業的リハビリテーション
第９回　リハビリテーションの諸段階：社会的・教育的リハビリテーション
第10回　医療と各職種に関わる諸問題
第11回　リハビリテーション専門職とチーム・アプローチ
第12回　ADL, QOL の概念と評価法
第13回　地域におけるリハビリテーション
第14回　高齢者、健康対策と少子化対策
第15回　リハビリテーションを支える社会保障制度と法律

■ 評価方法

筆記試験70％、出席・授業態度等30％（遅刻、欠席は減点する。）

■ 教　科　書

書　名：リハビリテーション概論　（第２版）
著者名：上好秋孝・土肥信之
出版社：永井書店，2011年 ,2940円

■ 参　考　書

書　名：リハビリテーション総論（第２版）
著者名：椿原　彰夫
出版社：診断と治療社：2011年、3600円

書　名：リハビリテーション概論：リハ医学全書
著者名：砂原茂一
出版社：医歯薬出版

書　名：入門リハビリテーション概論　第７版
著者名：中村隆一
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

各回の講義テーマ、内容については関連する講義の進捗状況により変更することがあります。
指定の教科書は後期開講のリハビリテーション医学の教科書としても利用される予定。

授業科目	リハビリテーション医学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	須貝　文宣		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

リハビリテーション医学の目的は、病気や外傷により生じた障害を医学的に診断・治療し、機能回復と社会復帰を総合的に提供することです。その目的を、どのように達成したら良いのかを受講者とともに考えたいと思います。

■ 目　　標

講義を参考にして、リハビリテーションに対する自分の考えを持つことができ、リハビリテーション関連職種の専門家を目指すための明確な動機付けができることを期待しています。

■ 授業計画

第１回　リハビリテーションとは（リハビリテーションの定義、目的）
第２回　疾病と障害について
第３回　リハビリテーションにおける障害の評価（障害の捉え方）
第４回　心理学（神経心理学、臨床心理学、など）とリハビリテーション
第５回　発達とリハビリテーション
第６回　リハビリテーションの段階
第７回　リハビリテーションの実際
第８回　各論のための概説（評価法、検査法）
第９回　脳血管障害
第10回　脳外傷における高次脳機能障害
第11回　脊髄損傷
第12回　変性疾患
第13回　筋疾患
第14回　末梢神経障害
第15回　補遺、まとめ

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 教　科　書

書　名：リハビリテーション概論　医学生・コメディカルのための手引書　改訂第２版
著者名：上好　昭孝・土肥　伸之（編著）
出版社：永井書店

■ 参　考　書

書　名：神経の病気
著者名：図説カラダ大辞典編集委員会　編
出版社：金沢医科大学出版局

書　名：神経心理学入門
著者名：山鳥　重
出版社：医学書院

■ 留意事項

私語など、他の受講者および講師の迷惑になる行為は、言うまでもなく厳禁です。医療業界で働くための最低限の常識を身につけて講義に望んでください。

授業科目	作業療法概論
学科名	理学療法学専攻

担当者	辻郁　他		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

講義形式で，歴史や理論的背景，種々の展開例から，作業療法実践の枠組みと実際を学ぶ

■ 目　　標

1．作業療法の枠組みを概観できる
2．作業療法の実践例を知ることで，その専門性を理解できる
3．チームアプローチについて具体的な考えが持てる

■ 授業計画

第1回　作業療法の歴史　　作業療法の生い立ち
第2回　作業療法の歴史 -2　　我が国における作業療法の発展
第3回　作業療法の対象者理解
　　1．ライフステージからみる
　　2．病期からみる
第4回　発達過程における作業療法の実際
第5回　精神障害者に対する作業療法の実際
第6回　身体障害者に対する作業療法の実際
第7回　高次脳機能障害者に対する作業療法の実際
第8回　職業（就労）支援における作業療法の実際
第9回　老年（高齢）期における作業療法の実際
第10回　地域における作業療法の実際
第11回　社会保障外にある人たちへの作業療法の実際
第12回　作業療法の“作業”の意味
第13回　作業療法実践の枠組み　環境調整から
第14回　作業療法の理論的背景
第15回　まとめ　作業療法の全体像をまとめる

■ 評価方法

筆記試験（100%）
欠席は，5点減点，遅刻早退は，3点減点

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：　標準作業療法学　作業療法概論
著者名：　岩崎テル子　編集
出版社：　医学書院

書　名：　作業療法の世界
著者名：　鎌倉矩子
出版社：　三輪書店

■ 留意事項

実践例を知ることで，作業療法の専門性を理解し，よりよいチームアプローチが出来るような学習を進めてほしい.

授業科目	理学療法概論
学科名	作業療法学専攻

担当者	今井　公一		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

療法士からみた現代社会の問題について理解し、その上で、理学療法の歴史、概念、理学療法の周辺から実際について、リハビリテーションや生活機能といった広域かつ現代的視点から授業を展開します。

■ 目　　標

1．療法士の視点から現代社会の問題について述べることができる。
2．リハビリテーションと理学療法の歴史について説明できる。3．理学療法の概念について説明できる。
3．リハビリテーションチームの中での理学療法の役割について説明できる。

■ 授業計画

第1回　グループワーク（1）
第2回　グループワーク（2）
第3回　グループワーク（3）
第4回　グループワーク（4）
第5回　グループワーク（5）
第6回　我が国における理学療法の現状
第7回　リハビリテーションと理学療法
第8回　理学療法概念と技術
第9回　理学療法の実際
第10回　理学療法の実際
第11回　現代社会と理学療法
第12回　現代社会と理学療法
第13回　現代社会と理学療法
第14回　現代社会と理学療法
第15回　総括

■ 評価方法

出席　30%　提出物　30%　筆記試験　40%

■ 教　科　書

書　名：理学療法概論テキスト
著者名：中島喜代彦　他
出版社：南江堂

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	言語聴覚概論	担当者	山口　忍		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

言語聴覚士が担当する言語聴覚嚥下障害の概要について知る。臨床場面で遭遇する失語症・運動性構音障害の方とのフリートークについて、留意点を知るとともに、実際の患者様と「話そう会」を通じてコミュニケーションを図る。

■ 目　　標

言語聴覚障害について知り、特に嚥下障害のメカニズムと評価・訓練について説明ができるようになる。
言語障害の患者様と、障害に配慮したフリートークを実施できるようになる。

■ 授業計画

第１回　言語・聴覚・嚥下障害の概要
第２回　コミュニケーション・リハビリテーション学の復習　聞くことと話すこと
第３回　小児領域：発達遅滞
第４回　小児領域：発達障害
第５回　嚥下障害：嚥下の基本的メカニズムと嚥下障害の実態
第６回　嚥下障害：評価と訓練
第７回　聴覚障害：聴覚障害者の聞こえと補聴機器
第８回　失語症・運動性構音障害の症状
第９回　失語症・運動性構音障害の患者様とのコミュニケーションの注意点
第10回　失語症・運動性構音障害の会話場面の VTR 視聴と演習
第11回　話そう会の事前授業
第12回　話そう会の実施①
第13回　話そう会の実施②
第14回　話そう会の実施③
第15回　話そう会の振り返りとレポート作成

■ 評価方法

話そう会の出席を重視（80％）して評価する　残り20％はレポート評価

■ 教　科　書

書　名：絵でわかる言語障害－ことばのメカニズムから対応まで
著者名：毛束真知子
出版社：学研

■ 参　考　書

■ 留意事項

話そう会は、土曜日に実施する。日程は、開講後追って知らせる。

授業科目	看護学・介護学概論
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	上田　裕子・橋本　卓也		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

【介護学概論】近年、重要視されている「キュアからケアへ」という概念に内包されている「治療から全人間的ケアへ」「医学モデルから生活・社会モデル」への転換という視点を共有するとともに介護・介助実践における「ジレンマ」についても考察する。また、重い障害を持つ人たちから提起された「介助者手足論」という考え方を通して利用者の尊厳を支えるケアのあり方や自立（自律）支援を目指すケアについて理解を深める。さらに「認知症」800万人時代といわれている現代における認知症高齢者に対する「家族介護」「在宅介護」のあり方を考える。
【看護学】看護とは何か、看護の対象としての人間の健康のとらえ方について学ぶ。また、看護の活動領域に理解を深め、医療者との協働によるチーム医療及び医療安全と医療の質保障について学習する。

■ 目　　標

（介護学概論）
①日本が抱える介護問題の実態及び、その要因について理解することができる。
②利用者本位、当事者本位の視点にたった介護・介助のあり方について考察することができる。
（看護学）
①看護の本質、多職種との連携と協働、健康のとらえ方について理解できる。
②看護とチーム医療、医療安全における医療者の協働の必要性が理解できる。

■ 授業計画

第１回　「看護とはなにか」の３つの視点、看護の目的と健康水準、生涯を見据えた継続看護
第２回　看護が担う社会的役割 ― アドボカシー・患者の権利とインフォームドコンセント－
第３回　健康と障がいの概念と定義から、健康問題を抱えるために看護の対象となりうる人々の姿
第４回　看護サービスの提供の場の拡大とチーム医療とはなにか
第５回　看護サービスの管理と人的資源の管理
第６回　医療安全と医療の質保障
第７回　広がる看護の活動領域　看護の国際協力
第８回　災害時における看護活動
第９回　オリエンテーション
　　日本が抱える介護問題の背景（日本の近代化と少子・高齢化問題）
第10回　介護の原理性（介護の本質及び全人間的視点にたったケアのあり方について）
第11回　介護・介助実践を通じて生起する「ジレンマ」について
第12回　「介助者手足論」という理論から見えてくる利用者本位の視点にたったケアのあり方について
第13回　「アシュリー事件」を通して見えてくる重い障害をもつ人たちに対する介助のあり方・価値について
第14回　感情労働としてのケアワークについて
第15回　認知症高齢者に対する家族介護・在宅介護のあり方について

■ 評価方法

筆記試験　50%（看護学）　　レポート　50%（介護学）　その他、出席率を加味して総合的に評価する

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：系統看護学講座　専門分野１　看護学概論　基礎看護学①
著者名：藤崎　郁
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業への積極的参加を望む。他者に迷惑をかける等の授業中の態度については退出を求めるとともに原点の対象とする。提出物は期限を守って提出してください。

授業科目	疫学・公衆衛生学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	白井　文恵		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

地域で生活する人々の健康の維持・増進・向上のために必要な公衆衛生学について学ぶ。

■ 目　　標

①健康とは何かを理解する。
②健康に生活するとはどのようなことかを理解する。
③健康に生活することを保障する社会の仕組みを理解する。
④健康に関する研究手法である疫学について理解する。

■ 授業計画

第１回　公衆衛生の意義
第２回　疫学
第３回　人口統計
第４回　生活習慣病
第５回　母子保健
第６回　高齢者保健・介護保険
第７回　障害児・障害者対策
第８回　精神保健
第９回　感染症対策（法律）
第10回　感染症対策（性感染症）
第11回　感染症対策（結核・インフルエンザ）
第12回　食品安全
第13回　予防接種
第14回　社会保障制度①
第15回　社会保障制度②、まとめ

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 教科書

書　名：厚生の指標　増刊　国民衛生の動向　2014/2015
出版社：厚生労働統計協会

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	救急医学・救急措置法
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	藤岡　重和　他		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

本講義では、救急医学の概要と救急措置法について学ぶ。そして、蘇生法、止血法、体位保持法、固定法、運搬法を学習する。リハビリテーション医療の対象者は、脳血管障害、循環器疾患、呼吸器疾患等の基礎疾患を有しており、対象者の評価、リスク回避についても広く学習する。

■ 目　　標

救急傷病の各病態を理解し、救急措置を理解するための基盤とする。そして、蘇生法、止血法、体位保持法、固定法、運搬法等の救急措置法を修得する。また、リハビリテーション医療における対象者の評価、リスク回避について理解する。

■ 授業計画

第１回　救急医学総論（岡本）
第２回　循環器の救急病態と処置法（岡本）
第３回　呼吸器、代謝性疾患の救急病態と処置法（岡本）
第４回　意識障害の病態
　　吐下血と腹痛の病態（神納）
第５回　意識障害・吐下血・腹痛の観察と処置（堀江）
第６回　心肺停止の病態
　　ショックの病態（神納）
第７回　心肺停止・ショックの観察と処置（堀江）
第８回　外傷の病態
　　環境障害の病態（神納）
第９回　外傷・環境障害の傷病者の観察と処置（堀江）
第10回　救急医療・看護の基本技的知識（福山）
第11回　救急時の観察ポイント（福山）
第12回　救急医療・看護の基本技的技術（福山）
第13回　消化器、内分泌疾患の救急病態と処置法（藤岡）
第14回　感染症、アナフィラキシーの救急病態と処置法（藤岡）
第15回　急性中毒の救急病態と処置法、総復習（藤岡）

■ 評価方法

筆記試験　100%

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：救急診療指針　改訂第４版
著者名：日本救急医学会監修
出版社：へるす出版

■ 留意事項

授業科目	地域医療実践学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	辻　郁　他		
学　　年	4年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

講義により，地域の医療や保健福祉領域での実践例を知る
課題を通して，地域の社会資源を確認し，ニーズを充足するサービスや施策等を企画する
以上を通して，地域で理学療法・作業療法を実践するために必要な知識や方法を学ぶ

■ 目　　標

1．実践例を知る
2．実習で担当した事例が暮す地域の現状がわかる
3．実習で担当した事例が豊かに暮らすためのニーズが抽出できる
4．3．のニーズを充足できる実際的なサービスを企画できる

■ 授業計画

第1回　実践例1
第2回　実践例2
第3回　実践例3
第4回　実践例4
第5回　実践例5
第6回　地域の概況のみ方
第7回　臨床実習で担当した事例が暮す地域の概況を明らかにする
第8回　臨床実習で担当した事例が暮す地域の概況を明らかにする
第9回　担当事例のニーズを明らかにする
第10回　ニーズを充足するためのサービス企画1
第11回　ニーズを充足するためのサービス企画2
第12回　ニーズを充足するためのサービス企画案プレゼン準備
第13回　ニーズを充足するためのサービス企画案プレゼン準備
第14回　企画書プレゼン1
第15回　企画書プレゼン2

■ 評価方法

出席と取り組み態度：50%　課題レポート：30%　　報告時の相互評価点：20%

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	障害者福祉論
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	橋本　卓也		
学　　年	２年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

障害者福祉に関する理念・価値・法制度及び障害構造等を体系的に理解するとともに障害をもつ人たちの生活・教育・雇用・施設環境等の実態を通して彼（彼女）らを排除する社会構造への関心と支のあり方を考える。また､障害をもつ人たちがおかれている現状を把握し｢医学モデル｣｢リハビリテーションの対象者｣といった狭義の捉え方ではなく､｢生活・社会モデル｣の視点からこの問題を捉える。

■ 目　　標

①障害者福祉の理念・価値および障害をもつ人たちの生活実態を把握することができる。
②障害をもつ人たちの生活ニーズを解決するための制度・施策を把握し、支援のあり方を考察することができる。
③「医学モデル」と「生活・社会モデル」の差異を理解することができる。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション　　障害者福祉の理念及び価値について
第２回　障害の概念及び障害構造について（ICIDH モデルから ICF モデルへ）
第３回　障害者の法的定義と日本の障害者の実態について
第４回　障害の概念及び障害構造について（ICIDH モデルから ICF モデルへ）
第５回　日本の障害者福祉施策について
第６回　障害者の雇用・就労の現状と課題について
第７回　障害者の所得保障と経済的負担軽減について
第８回　障害者総合福祉法Ⅰ
第９回　障害者総合福祉法Ⅱ
第10回　障害児教育の変遷と課題について
第11回　障害者施設論（世界の情勢と課題及び地域移行について）
第12回　障害者の権利擁護（権利侵害の実態と要因）について
第13回　障害者のセルフヘルプ運動（理念と機能・役割）
第14回　障害者ケアマネジメントと障害者の意思決定支援について
第15回　ゲストスピーカー（障害当事者）による講義と交流

■ 評価方法

定期試験（85％）　出席率（15％）　その他、授業中の態度等を加味し総合的に評価する

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：よく分かる障害者福祉
著者名：小澤　温（編）
出版社：ミネルヴァ書房

■ 留意事項

授業への積極的な参加を望む

授業科目	健康科学概論
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	佐藤　秀紀		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

本授業では、健康と人間の生活にかかわる心身の諸問題を課題として、生涯にわたり積極的な健康を保持増進させていくという Positive Health の観点から多様化した現代社会に対応できる健康処方について説明する。

■ 目　　標

現代社会における人（ヒト）の適応とライフスタイルについて理解する。

■ 授業計画

第１回　健康科学とは何か　がんを科学する
第２回　健康に影響する因子　喫煙の科学
第３回　健康に影響する因子　アルコール依存症の科学
第４回　生活習慣病と健康　メタボリックシンドロームの科学
第５回　生活習慣病と健康　血圧の科学
第６回　精神の健康　うつ病の科学
第７回　精神の健康　不安障害の科学
第８回　栄養と健康　ダイエットの科学
第９回　運動の身体的効果　①筋力トレーニングの科学と中高年のための運動法
第10回　運動の身体的効果　②骨粗しょう症の科学
第11回　各種疾患に対する運動処方　①首の痛み・肩の痛み
第12回　各種疾患に対する運動処方　②股関節の痛み
第13回　各種疾患に対する運動処方　③膝の痛み
第14回　各種疾患に対する運動処方　④手のトラブル・踵の痛み
第15回　まとめ

■ 評価方法

小テスト50％、学期末試験50％

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：『生き方としての健康科学』
著者名：山崎喜比古 朝倉隆司編
出版社：有信堂

■ 留意事項

授業科目	健康科学・開発
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	佐藤　秀紀		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

本授業では、健康と人間の生活にかかわる心身の諸問題を課題として、生涯にわたり積極的な健康を保持増進させていくという Positive Health の観点から多様化した現代社会に対応できる健康処方について説明する。

■ 目　　標

現代社会における人（ヒト）の適応とライフスタイルについて理解する。

■ 授業計画

第１回　健康科学とは何か　がんを科学する
第２回　健康に影響する因子　喫煙の科学
第３回　健康に影響する因子　アルコール依存症の科学
第４回　生活習慣病と健康　メタボリックシンドロームの科学
第５回　生活習慣病と健康　血圧の科学
第６回　精神の健康　うつ病の科学
第７回　精神の健康　不安障害の科学
第８回　栄養と健康　ダイエットの科学
第９回　運動の身体的効果　①筋力トレーニングの科学と中高年のための運動法
第10回　運動の身体的効果　②骨粗しょう症の科学
第11回　各種疾患に対する運動処方　①首の痛み・肩の痛み
第12回　各種疾患に対する運動処方　②股関節の痛み
第13回　各種疾患に対する運動処方　③膝の痛み
第14回　各種疾患に対する運動処方　④手のトラブル・踵の痛み
第15回　まとめ

■ 評価方法

小テスト50％、学期末試験50％

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：『生き方としての健康科学』
著者名：山崎喜比古 朝倉隆司編
出版社：有信堂

■ 留意事項

授業科目	感染症学	担当者	藤岡　重和		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

感染症と人・微生物との関わり、感染防御機構、感染症の検査と診断、治療、そして感染予防策について学習する。理学療法、作業療法の領域においても、感染症については特に注意が必要であり、各種感染症について基本的理解ができるように解説する。

■ 目　　標

1．微生物と感染症、感染防御機構について基本的理解ができる
2．代表的な感染症について、病原微生物とその感染経路、臨床像、診断と治療法を理解する
3．院内感染および感染予防策について説明できる

■ 授業計画

第1回　感染症総論　（1）　微生物と感染症、 感染防御機構
第2回　感染症総論　（2）　感染症の検査と診断、 感染症の治療
第3回　感染症各論　（1）　呼吸器感染症、結核
第4回　感染症各論　（2）　消化器感染症、食中毒
第5回　感染症各論　（3）　肝炎
第6回　感染症各論　（4）　尿路感染症、 性感染症
第7回　感染症各論　（5）　皮膚、粘膜の感染症
第8回　感染症各論　（6）　人獣共通感染症、 寄生虫感染症
第9回　感染症各論　（7）　小児の感染症、 母子感染
第10回　感染症各論　（8）　高齢者の感染症、 日和見感染症
第11回　感染症各論　（9）　新興感染症、 感染症トピックス
第12回　感染制御学　（1）　院内感染、 標準予防策、 感染経路別予防策
第13回　感染制御学　（2）　術後感染症、 カテーテル関連感染症、 針刺しと感染症
第14回　感染制御学　（3）　薬剤耐性菌による感染症、その他
第15回　総復習

■ 評価方法

定期試験　80%　　小テスト　10%　　出席、態度　10%

■ 教　科　書

「臨床微生物、医動物（NURSING GRAPHICUS 疾患の成り立ち 3)」 MC メデイカ出版（2013年）

■ 参　考　書

「微生物学　第2版　(新クイックマスター)」 医学芸術社（2010年）
「病原体、感染、免疫　第2版」 南山堂（2012年）

■ 留意事項

授業科目	医療安全学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	藤岡　重和		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

頻発する医療事故を概観し、医療職を取りまく社会的環境と医療現場の現状を理解する。次に、事故発生のメカニズムと事故分析、事故対策について学習する。また、事故事例の分析を通して医療機関における安全対策のありかたについて考える。

■ 目　　標

1．医療事故の実際を知り、安全対策の必要性について理解する
2．事故の発生要因について説明できる
3．医療機関における安全対策を説明できる

■ 授業計画

第1回　医療事故の疫学、 医療事故事例の紹介
第2回　医療事故の定義、分類、 医療事故の報告制度
第3回　事故発生のメカニズム
第4回　事故分析、事故対策
第5回　医療機関における安全対策　（1）
第6回　医療機関における安全対策　（2）
第7回　医療事故後の対応、医療事故に関する法的責任
第8回　リハビリテーション業務における安全対策
第9回　事例検討　：　事故分析、事故対策　（講義）
第10回　事例検討　：　医療機関における安全対策　（講義）
第11回　事例検討　：　リハビリテーション業務における安全対策　（講義）
第12回　事例検討　：　事故分析、事故対策　（1）（発表）
第13回　事例検討　：　事故分析、事故対策　（2）（発表）
第14回　事例検討　：　医療機関における安全対策　（発表）
第15回　総復習

■ 評価方法

定期試験　60%、 提出課題　20%、 出席、態度　20%

■ 教　科　書

「医療安全（NURSING GRAPHICUS 看護の統合と実践 2)」 MC メデイカ出版（2013年）

■ 参　考　書

「リハビリテーション医療における安全管理・推進のためのガイドライン」
日本リハビリテーション医学会診療ガイドライン委員会編　医歯薬出版

■ 留意事項

授業科目	基礎解剖学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	柴田　雅朗		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

人体および人体を構成している細胞・組織・器官の形態・構造の基本を系統的に学ぶ.

■ 目　　標

人体の構造を理解するための基礎的知識を身につける。

■ 授業計画

第１回　解剖学総論
　１．細胞・組織・器官・系　２．肉眼解剖と組織学　３．系統解剖と局所解剖学　４．発生学
　５．体表解剖学　６．人体の正常・異常・個体差　７．解剖学的姿勢　８．基本的な解剖学用語
第２回　骨学総論　１．骨の肉眼的構造　２．髄腔と骨髄　３．体腔
第３回　関節靱帯学総論
　１．線維性連結　２．軟骨性連結　３．滑膜性連結　４．関節の一般構造（関節包、滑膜、滑液）
　５．関節の特殊構造（関節円板、関節半月、関節靱帯、関節唇）
第４回　筋学総論
　１．筋の分類（平滑筋と横紋筋）　２．随意筋と不随意筋　３．骨格筋の基本形態
　４．腱と腱膜　５．筋の付着（起始と停止）　６．筋の作用（屈曲・伸展、内転・外転、内旋・外旋）
　７．主動筋、拮抗筋、協力筋　８．骨格筋の補助装置（筋膜、支帯、筋間中隔、筋滑車、滑液包、腱鞘）
第５回　神経学総論１
　１．中枢神経系と末梢神経系　　２．求心性神経と遠心性神経　３．白質と灰白質
　４．神経細胞（神経細胞体、樹状突起、軸索、髄鞘）　５．神経線維と神経
第６回　神経学総論２
　１．脊髄の白質と灰白質　（前柱、後柱、前索、側索、後索）　２．脊髄の区分（頚髄～尾髄）
　３．脊髄髄節と脊髄神経（髄節、前根と後根、前枝と後枝）
第７回　組織および胚葉
　１．組織（上皮組織、支持組織）　２．胚葉（外胚葉、中胚葉、内胚葉）
　３.三層性胚盤と器官・組織形成
第８回　循環器系総論
　１．血管系の役割　２．血管（動脈・毛細血管・静脈の構造）　３．動脈・静脈と動脈血・静脈血
　４．吻合　５．終動脈
第９回　心臓
　１．心筋細胞　２．心臓の位置　３．心臓を包む膜　４．心臓の内腔（心房と心室）
　５．肺循環と体循環
第10回　心臓
　１．房室弁（腱索と乳頭筋、左房室弁・右房室弁）　２．動脈弁（肺動脈弁・大動脈弁）
　３．心臓の血管（冠状動脈、冠状静脈洞）
第11回　動脈系
　１．大動脈　２．大動脈弓（腕頭動脈、左総頚動脈、左鎖骨下動脈）　２．頭頚部に分布する動脈
　３．上肢帯と上肢に分布する動脈　４．胸部内臓・腹部内臓に分布する動脈
第12回　動脈系 (続き)
　１.脳の動脈
　静脈系
　１．右心房に注ぐ静脈　２．頭頚部からの静脈　３．上肢帯と上肢からの静脈
　３．奇静脈　４．門脈
第13回　胎児循環
　１．胎盤　２．臍静脈と臍動脈　３．静脈管（アランチウス管）　４．卵円孔　５．動脈管（ボタロー管）
　リンパ系　１．リンパ管とリンパ節　２．胸管　３．右リンパ本幹　４．脾臓
　練習問題配布
第14回　総復習１
　復習のための練習問題とその解説
第15回　総復習２
　復習のための練習問題とその解説

■ 評価方法

本試験　100%

■ 教　科　書

書　名：PT・OT・ST のための解剖学　第 1 版
著者名：渡辺正仁　監修
出版社：廣川書店

書　名：ネッター解剖学アトラス
著者名：相磯貞和　訳
出版社：南江堂

書　名：消っして忘れない解剖学　要点整理ノート
著者名：井上　馨・松村譲兒　編集
出版社：羊土社

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	解剖学基礎実習
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	柴田　雅朗		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

上肢の骨・関節・筋・体幹の骨・関節・筋について、骨実習や組織実習、体表解剖学などを通して学ぶ。

■ 目　　標

運動器系の解剖学を理解する上での基礎的知識を身につける。

■ 授業計画

第１回　全身骨格とその分類
　１．骨の標本を使って全身骨格を作る。　２．全身骨格を軸骨格と付属性骨格に分ける。
　３．付属性骨格をさらに分類する。４．海綿骨と緻密骨を区別する。
第２回　脊柱と体表解剖学
　１．椎骨の基本構造。　２．頚椎・胸椎・腰椎・仙骨・尾骨について観察する。
　３．自分自身の体で椎骨を触知する。
第３回　上肢帯骨と体表解剖学
　１．肩甲骨の各部を観察する。　２．鎖骨の各部を観察する。　３．肩甲骨と鎖骨を触知する。
　４．肩甲骨と鎖骨の動きを理解する。
第４回　胸郭と体表解剖学
　１．胸骨の各部　２．胸骨角　３．肋硬骨と肋軟骨　４．真肋と仮肋　５．肋骨の各部
　６．第一肋骨（前斜角筋結節と鎖骨下動脈溝）　７．頚肋と腰肋　８．胸骨と肋骨の触知
第５回　自由上肢と体表解剖学
　１．上腕骨の各部　２．橈骨の各部　３．尺骨の各部　４．手の骨　５．手根溝
　６．自由上肢骨の触知
第６回　脊柱と胸郭の連結
　１．椎骨間の連結　２．椎間板　３．環軸関節（正中環軸関節と外側環軸関節、環椎十字靱帯）
　４．胸郭の連結　５．肩鎖関節　６．胸鎖関節
第７回　上肢の関節と靱帯
　１．肩関節　２．腕尺関節　３．腕橈関節　４．上橈尺関節　５．下橈尺関節　６．手関節
　７．手根中手関節　８．中手指節関節　９．指節間関節
　復習のための練習問題配布
第８回　下肢帯骨と骨盤
　１．寛骨　２．腸骨　３．坐骨　４．恥骨　５．骨盤
第９回　自由下肢骨
　１．大腿骨　２．脛骨　３．腓骨　４．膝蓋骨　５．足の骨
第10回　股関節と仙腸関節
　１．股関節の構造と動き　２．仙腸関節の構造と動き
第11回　膝関節、脛腓関節と足関節
　１．膝関節の構造と動き　２．脛腓関節の構造と動き　３．足関節の構造と動き
第12回　頭蓋骨その１
　１．頭蓋を構成する骨　２．頭蓋骨の連結　３．泉門
第13回　頭蓋骨その２
　１．眼窩　２．鼻腔　３．副鼻腔　４．側頭下窩　５．翼口蓋窩　６．顎関節
　練習問題配布
第14回　総復習１
　復習のための練習問題とその解説
第15回　総復習２
　復習のための練習問題とその解説

■ 評価方法

中間試験　40%　本試験　60%

■ 教　科　書

書　名：PT・OT・ST のための解剖学　第 1 版
著者名：渡辺正仁　監修
出版社：廣川書店

書　名：ネッター解剖学アトラス
著者名：相磯貞和　訳
出版社：南江堂

書　名：消っして忘れない解剖学　要点整理ノート
著者名：井上　馨・松村譲兒　編集
出版社：羊土社

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	運動器系の解剖学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	柴田　雅朗		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

運動器系のうち骨・関節靱帯については、解剖学基礎実習で既に学んだ。本科目では運動器系を構成しているもののうち、筋について詳細に学ぶ。

■ 目　　標

身体の各部を構成している筋の名称、支配神経、主な作用を説明することが出来る。

■ 授業計画

第１回　体幹の筋
　　１．固有背筋
第２回　体幹の筋（続き）
　　１．胸部の筋
第３回　体幹の筋（続き）
　　１．腹部の筋　２．骨盤の筋
第４回　上肢の筋　（軸骨格から上肢帯への筋）
　　１．僧帽筋　２．肩甲挙筋　３．菱形筋　４．前鋸筋　５．鎖骨下筋　６.広背筋
　　７．大胸筋　８．小胸筋
第５回　上肢の筋　（上肢帯から上腕骨への筋）
　　１．肩甲下筋　２．棘上筋　３．棘下筋　４．小円筋　５．大円筋　６.烏口腕筋
　　７．三角筋
第６回　上肢の筋　（上肢帯から上腕骨への筋）（続き）
　　１．上腕前面の筋　２．上腕後面の筋
第７回　上肢の筋　（上肢帯から上腕骨への筋）（続き）
　　１．前腕前面の筋　　２．前腕後面の筋
第８回　手の筋
　　１．母指球筋　２．小指球筋　３．中手筋
第９回　下肢の筋
　　１．寛骨筋　２．大腿前面の筋　３．大腿内側の筋　４．大腿後面の筋
第10回　下肢の筋（続き）
　　１．下腿前面の筋　２．下腿外側の筋　３．下腿後面の筋
第11回　下肢の筋（続き）
　　１．足底の筋
　　頭部の筋
　　１．表情筋　２．咀嚼筋　３．舌筋
第12回　頚部の筋
　　１．広頚筋　２．胸鎖乳突筋　３．舌骨筋群
第13回　頚部の筋（続き）
　　１．椎前筋群　２．斜角筋群
　　練習問題配布
第14回　総復習１
　　復習のための練習問題とその解説
第15回　総復習２
　　復習のための練習問題とその解説

■ 評価方法

中間試験　40%　本試験　60%

■ 教　科　書

書　名：PT・OT・ST のための解剖学　第 1 版
著者名：渡辺正仁　監修
出版社：廣川書店

書　名：ネッター解剖学アトラス
著者名：相磯貞和　訳
出版社：南江堂

書　名：消っして忘れない解剖学　要点整理ノート
著者名：井上　馨・松村譲兒　編集
出版社：羊土社

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	神経系の解剖学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	石倉　隆		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

神経系の解剖学は、中枢神経系リハビリテーションのみならず、動作やADLの障害を神経メカニズムから考える上で非常に重要な科目である。そのため、単に神経系の肉眼的解剖に留まらず、リハビリテーションに活用できる神経機能解剖に重点を置いて講義する。具体的には、脊髄、延髄、橋、中脳、小脳、間脳、大脳皮質、大脳基底核の個別の解剖に加え、運動路、感覚路の機能解剖を通じて、運動、感覚、情動の神経メカニズムを講義する。

■ 目　　標

脳の各部位の解剖を理解するとともに、人間に表出する運動や感覚、情動を脳機能解剖から説明できる。
脳機能解剖を脳画像に投影して説明できる。

■ 授業計画

第１回　リハビリテーションにおける神経解剖学の必要性
第２回　神経組織学
第３回　神経系の発生、変性、再生
第４回　脳神経と自律神経系
第５回　脊髄と延髄
　　末梢神経とミオトーム、デルマトーム
第６回　橋と中脳
第７回　小脳
第８回　間脳；特に視床を中心に
第９回　大脳基底核と皮質基底核ループ
第10回　大脳皮質とBrodmann area
第11回　運動路
第12回　感覚路
第13回　髄膜と脳脊髄液、脳の血管、化学的神経解剖学、中枢神経系の肉眼的解剖学
第14回　脳機能解剖学の臨床への応用
第15回　国家試験に見る「神経系の解剖学」

■ 評価方法

単位認定試験受験資格者に対し、定期試験で100％評価する。

■ 教　科　書

書　名：神経解剖学講義ノート
著者名：寺島　俊雄
出版社：金芳堂

■ 参　考　書

書　名：脳の機能解剖と画像診断
著者名：真柳佳昭
出版社：医学書院

書　名：神経解剖集中講義　第２版
著者名：寺本　明・他　監訳
出版社：医学書院

書　名：CD-ROM でレッスン　脳画像の読み方
著者名：石原　健司
出版社：医歯薬出版

■ 留 意 事 項

症例や例示資料は、実際の患者さんに説明と同意を得て、講義で使用させていただくためだけに公開しています。みだりに他言しないよう、また、取り扱いには十分に注意してください。

授業科目	内臓系の解剖学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	赤松　香奈子		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

医学の基礎である解剖学のうち内臓系について、単なる形態構造のみの学習にとどまらず、関連する器官と合わせてその構造と機能を学ぶ。

■ 目　　標

医療専門職として必要な内臓系の構造と機能を、関連機関と合わせて理解する。
さらには適切な専門用語を用いて説明することができることを目標とする。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
　　呼吸器系；鼻腔、咽頭、喉頭
第２回　呼吸器系；気管、肺
第３回　消化器系；口腔、食道
第４回　消化器系；胃、小腸
第５回　消化器系；大腸、直腸、肛門
第６回　消化器系；唾液腺、肝臓、胆嚢、膵臓
第７回　泌尿器系；腎臓
第８回　泌尿器系；尿管、膀胱
第９回　生殖器系；男性生殖器
第10回　生殖器系；女性生殖器
第11回　内分泌器；膵臓、腎臓、副腎
第12回　内分泌器；精巣、卵巣、脳下垂体
第13回　感覚器；特殊感覚器（視覚器、聴覚器）
第14回　感覚器：特殊感覚器（嗅覚器、味覚器、皮膚感覚器）
第15回　まとめ

■ 評価方法

筆記試験　100％

■ 教　科　書

書　名：PT・OT・ST のための解剖学
著者名：渡辺　正仁
出版社：廣川書店

書　名：ネッター解剖学アトラス
著者名：相磯　貞和
出版社：南江堂

■ 参　考　書

書　名：イラスト解剖学
著者名：松村　譲児
出版社：中外医学者

■ 留意事項

授業科目	生理学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	清田　直恵・木村　晃大		
学年	1年	総単位数	2単位
開講時期	通年	選択･必修	必修

■ 内　　容

人体の各臓器がいかに正常の機能を維持し、１個体としての機能を発揮しているかを学習する。

■ 目　　標

各臓器における構造と機能を理解するだけでなく、生理学を通じて生命現象を理論的に考察する力も養うことを目標とする。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション・細胞と内部環境（１）（清田）
第２回　細胞と内部環境（２）（清田）
第３回　筋と骨（１）（清田）
第４回　筋と骨（２）（清田）
第５回　筋と骨（３）（清田）
第６回　神経系の基礎（１）（清田）
第７回　神経系の基礎（２）（清田）
第８回　感覚と神経系（１）（清田）
第９回　感覚と神経系（２）（清田）
第10回　運動と神経系（１）（清田）
第11回　運動と神経系（２）（清田）
第12回　その他の脳機能と自律神経系（１）（清田）
第13回　その他の脳機能と自律神経系（２）（清田）
第14回　代謝と体温（清田）
第15回　前期総括

後期
第16回　血液（１）（木村）
第17回　血液（２）（木村）
第18回　循環（１）（木村）
第19回　循環（２）（木村）
第20回　呼吸（木村）
第21回　腎臓と排泄（１）（木村）
第22回　腎臓と排泄（２）（木村）
第23回　消化器（１）（木村）
第24回　消化器（２）（木村）
第25回　内分泌（１）（木村）
第26回　内分泌（２）（木村）
第27回　内分泌（３）（木村）
第28回　内分泌（４）（木村）
第29回　性と生殖（木村）
第30回　後期総括

■ 評価方法

筆記試験（90%)、小テスト（10%）に出席状況を併せて評価する。

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　生理学　第４版
著者名：岡田　隆夫・長岡　正範
出版社：医学書院

■ 参　考　書

書　名：標準生理学　第７版
著者名：小澤　瀞司　他
出版社：医学書院

書　名：やさしい生理学（改訂第６版）
著者名：彼末 一之、能勢 博
出版社：南江堂

書　名：カラー図解 人体の正常構造と機能 全10巻縮刷版
著者名：坂井 建雄、河原 克雅
出版社：日本医事新報社

■ 留意事項

生理学は解剖学とならんで医療従事者にとって必須の科目であり、臨床医学を学ぶ上での土台となります。また国家試験でも、生理学について幅広く深い知識が問われます。そのことを意識して授業に臨んでください。また、授業時間のみでは理解は深まりませんで、自分に適した自己学習方法を見つけ、積極的に予習・復習を行う習慣を身につけましょう。

授業科目	生理学実習
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	清田　直恵		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

解剖学・生理学・運動学の講義を踏まえ、環境の変化や運動に対する生体の反応や恒常性維持について学習する。

■ 目　　標

実際の人の生理機能を自らの手で計測し、その結果を解析・考察することにより、人体機能のダイナミクスやホメオスタシスが維持されるメカニズムを理解する。また、この実習を通して、医療従事者として必要な姿勢や洞察力を養う。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
第２回　実習内容・データ分析についての講義（１）
第３回　実習内容・データ分析についての講義（２）
第４回　第１クール実習（１）
第５回　第１クール実習（２）
第６回　第１クール実習（３）
第７回　第２クール実習（１）
第８回　第２クール実習（２）
第９回　第２クール実習（３）
第10回　第３クール実習（１）
第11回　第３クール実習（２）
第12回　第３クール実習（３）
第13回　実習のまとめ（１）
第14回　実習のまとめ（２）
第15回　実習のまとめ（３）

■ 評価方法

レポート（50%）、筆記試験（40%）、実習態度（10%）に出席状況を併せて評価する。

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

出席や実習中の態度も成績評価に含みます。レポート提出は期限厳守のこと。期限を過ぎての提出は認めません。レポート未提出者は再履修とします。被検者の安全や守秘義務が守られなければならない授業ですので、事前学習をしっかりと行い、真剣に取り組むこと。また、国家試験に直結する内容も含まれますので、予習・復習を各自で取り組むこと。

授業科目	運動生理学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	清田　直恵		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

身体運動において、生体内の各種機構がどのように働いているかを講義する。

■ 目　　標

運動生理学の基礎的な知識および考え方を身につけることを目標とする。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
第２回　運動と筋骨格系（１）
第３回　運動と筋骨格系（２）
第４回　運動と神経系（１）
第５回　運動と神経系（２）
第６回　運動と神経系（３）
第７回　運動と呼吸・循環（１）
第８回　運動と呼吸・循環（２）
第９回　運動とエネルギー（１）
第10回　運動とエネルギー（２）
第11回　運動と健康
第12回　運動学習とトレーニング
第13回　運動と発育・発達
第14回　運動と加齢
第15回　総括

■ 評価方法

筆記試験（90%)、小テスト（10%）に出席状況を併せて評価する。

■ 教　科　書

書　名：運動生理学の基礎と発展
著者名：春日 規克・竹倉 宏明
出版社：フリースペース

■ 参 考 書

書　名：運動生理学20講　第２版
著者名：勝田　茂
出版社：朝倉書店

書　名：スポーツ・運動生理学概説
著者名：山地　啓司他
出版社：明和出版

書　名：改訂　身体活動と体力トレーニング
著者名：藤原勝夫・外山寛
出版社：日本出版サービス

書　名：身体機能の調節性
著者名：池上晴夫
出版社：朝倉書店

書　名：姿勢制御の神経生理機構
著者名：藤原勝夫
出版社：杏林書院

■ 留 意 事 項

運動・動作を治療手段とするPT・OTにとって、運動生理学は自らの治療が生体機能に及ぼす影響を理解する基礎となります。生理学、２年生の生理学実習とリンクする内容でもありますので、しっかりと学んでください。

授業科目	運動学総論
学科名	理学療法学専攻

担当者	境　隆弘		
学　　年	1年	総単位数	2単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法にとっての運動学（Kinesiology）は、「人間の運動の科学」であり、人間のからだの構造を学ぶ解剖学、人間のからだの機能を学ぶ生理学、そして、身体および身体各部を物体とみなした時の力学を基礎とした応用科学であることについて学ぶ。

■ 目　　標

運動学用語を理解し、使用できるようになる。
運動力学を理解する。
上肢の関節運動学を理解し、触診やデモンストレーションが出来るようになる。

■ 授業計画

第１回　コース・ガイダンス
　　講義の進め方、評定方法の他、理学療法士にとっての運動学の重要性を学ぶ
第２回　運動学（Kinesiology）総説
　　解剖学・生理学ならびに運動療法学との関連、Kinematics と Kinetics について学ぶ
第３回　身体運動①基本面　運動学を学ぶにあたって必要な身体における運動面と軸について学ぶ
第４回　身体運動②名称　　運動学を学ぶにあたって必要な身体各部の運動方向の名称について学ぶ
第５回　身体運動③演習　　①②で学んだ身体運動について、演習を行い理解を深める
第６回　運動を構成する要素と器官①　ヒトの運動を生む器官のうち、骨と関節について学ぶ
第７回　運動を構成する要素と器官②　ヒトの運動を生む器官のうち、筋について学ぶ
第８回　運動を構成する要素と器官③　①②で学んだ運動を構成する要素と器官について、演習を行い理解を深める
第９回　力学の基礎①　運動学を学ぶにあたって必要なニュートン力学について学ぶ
第10回　力学の基礎②　運動学を学ぶにあたって必要な身体とてこについて学ぶ
第11回　力学の基礎③　運動学を学ぶにあたって必要なモーメント（トルク）について学ぶ
第12回　力学の基礎④　運動学を学ぶにあたって必要な生体における力とモーメントについて学ぶ
第13回　構えと姿勢①　ヒトの運動にかかわる構えと姿勢の名称について学ぶ
第14回　構えと姿勢②　①で学んだ構えと姿勢について、演習を行い理解を深める
第15回　上肢の関節運動学①　　肩甲帯に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第16回　上肢の関節運動学演習①　肩甲帯の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第17回　上肢の関節運動学②　　肩関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第18回　上肢の関節運動学演習②　肩関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第19回　上肢の関節運動学③　　肘関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第20回　上肢の関節運動学演習③　肘関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第21回　上肢の関節運動学④　　前腕に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第22回　上肢の関節運動学演習④　前腕の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第23回　上肢の関節運動学⑤　　手関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第24回　上肢の関節運動学演習⑤　手関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第25回　上肢の関節運動学⑥　　手指に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第26回　上肢の関節運動学演習⑥　手指の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第27回　実技試験
　　学んだ関節運動学について実技試験を実施する
第28回　実技試験のフィードバック
　　実技試験の解説、講評を行う
第29回　総括①　本講義で学んだことについて、復習、再確認を行う
第30回　総括②　本講義で学んだことについて、復習、再確認を行う

■ 評価方法

定期試験　80%
小テスト・実技テストで20%（学則で認められない理由での遅刻・欠席は減点）

■ 教　科　書

書　名：基礎運動学
著者名：中村隆一、斎藤宏
出版社：医歯薬出版

■ 参　考　書

書　名：筋骨格系のキネシオロジー
著者名：嶋田智明ほか監訳
出版社：医歯薬出版

書　名：触診解剖アトラス（体幹・上肢・下肢）
著者名：奈良　勲監訳
出版社：医学書院

書　名：図解　四肢と脊柱の診かた
著者名：野島元雄監訳
出版社：医歯薬出版

書　名：カパンディ関節の生理学（体幹・上肢・下肢）
著者名：荻島秀男監訳
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

理学療法の基礎学問として重要な科目であり、２年生に進んで、運動学各論、運動学実習、
臨床運動学と引き続く勉強なのでしっかり学んでほしい。

授業科目	運動学総論
学科名	作業療法学専攻

担当者	長谷川　昌士		
学年	1年	総単位数	2単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

関節の基本構造と機能を学習する。運動器である上肢帯と上肢の運動、下肢帯と下肢の運動、脊柱・体幹の運動について理解を深める。また､生体力学の基礎を学習する。運動学的分析手法である床反力､体重心､関節モーメントについて理解を深める。その応用として立ち上がりや歩行における運動学的分析について理解を深める。

■ 目　　標

1．運動器の構造と機能を理解する。
2．上肢帯と上肢の運動，下肢帯と下肢の運動，脊柱・体幹の運動を理解する。
3．運動学的分析手法（床反力、体重心、関節モーメント）を理解する。
4．立ち上がりや歩行の運動学的分析を理解する。

■ 授業計画

第1回　コースオリエンテーション
第2回　運動のとらえ方について学習する。
第3回　運動の面と軸について学習する。
第4回　関節の基本的構造と機能について学習する。
第5回　肩複合体の関節構造について学習する。
第6回　肩複合体の筋と関節の相互作用について学習する。
第7回　肘関節の関節構造と機能について学習する。
第8回　前腕の関節構造と機能について学習する。
第9回　手根の関節構造と機能について学習する。
第10回　手のアーチ構造について学習する。
第11回　手指の関節構造と機能について学習する。
第12回　指の内在筋と外在筋の相互作用について学習する。
第13回　股関節の関節構造について学習する。
第14回　股関節の筋と関節の相互作用について学習する。
第15回　膝関節の関節構造について学習する。
第16回　膝関節の筋と関節の相互作用について学習する。
第17回　足関節の関節構造と機能について学習する。
第18回　足部のアーチ構造について学習する。
第19回　頭頸部における関節構造について学習する。
第20回　胸腰部における関節構造について学習する。
第21回　各関節における基本構造と機能について試験を実施する。
第22回　座位姿勢について学習する。
第23回　立位姿勢について学習する。
第24回　運動学的分析手法に必要な床反力、体重心について学習する。
第25回　運動学的分析手法に必要な関節モーメントについて学習する。
第26回　運動学的分析（立ち上がり動作）について学習する。
第27回　運動学的分析（歩き始め）について学習する。
第28回　運動学的分析（歩行）の歩行周期、ケイデンス、歩幅について学習する。
第29回　運動学的分析（歩行）の重心移動、床反力について学習する。
第30回　運動学的分析（歩行）の筋活動について学習する。

■ 評価方法

筆記試験　80%　小テスト　20%

■ 教　科　書

書　名：筋骨格系のキネシオロジー
著者名：嶋田智明ほか監訳
出版社：医歯薬出版

書　名：基礎バイオメカニクス
著者名：江原義弘、山本澄子、石井慎一郎
出版社：医歯薬出版

■ 参　考　書

書　名：基礎運動学
著者名：中村隆一、斎藤宏
出版社：医歯薬出版

書　名：触診解剖アトラス（体幹・上肢・下肢）
著者名：奈良勲監訳
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	運動学各論
学科名	理学療法学専攻

担当者	境　隆弘		
学　　年	２年	総単位数	２単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

下肢、体幹・頭頚部の機能解剖に立脚した運動の分析を関節運動学と運動力学の視点から部位別に学ぶ。
姿勢や歩行に関する運動学的、運動力学的分析と筋出力、運動学習について学ぶ。

■ 目　　標

下肢、体幹・頭頚部の関節運動学を理解し、触診やデモンストレーションが出来るようになる。
姿勢や歩行に関する運動学的、運動力学を理解し、観察や分析が出来るようになる。

■ 授業計画

第１回　コース・ガイダンス
　　講義の進め方、評定の他、前期に学んだ運動学総論、後期に学ぶ運動学実習との関連性を学ぶ
第２回　下肢の関節運動学①　　股関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第３回　下肢の関節運動学演習①　股関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第４回　下肢の関節運動学②　　膝関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第５回　下肢の関節運動学演習②　膝関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第６回　下肢の関節運動学③　　足関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第７回　下肢の関節運動学演習③　足関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第８回　体幹の関節運動学　　体幹に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第９回　体幹の関節運動学演習　　体幹の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第10回　頭頚部・顔面の関節運動学　　頭頚部・顔面に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第11回　頭頚部・顔面の関節運動学演習　頭頚部・顔面の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第12回　四肢と脊柱の運動連鎖　　開放性運動連鎖（OKC）と閉鎖性運動連鎖（CKC）について学ぶ
第13回　四肢と脊柱の運動連鎖演習　OKC と CKC に関する演習を行い、理解を深める
第14回　筋トルク　　様々な収縮形態により発揮される筋トルクについて学ぶ
第15回　筋トルク演習　実際に筋トルクを計測し、理解を深める
第16回　姿勢制御の神経機構　　ヒトの姿勢反応について学ぶ
第17回　姿勢制御の神経機構演習　ヒトの姿勢反応について、演習を行い理解を深める
第18回　運動戦略　　ヒトの運動戦略 (ストラテジー) について学ぶ
第19回　運動戦略演習　　ヒトの運動戦略 (ストラテジー) について、演習を行い理解を深める
第20回　歩行の運動学①　歩行の運動学について、概論を学ぶ
第21回　歩行の運動学②　歩行の運動学的分析について学ぶ
第22回　歩行の運動学③　歩行の運動力学的分析について学ぶ
第23回　運動学習　　ヒトの運動学習機能について学ぶ
第24回　運動学習演習　　ヒトの運動学習について、演習を行い理解を深める
第25回　実技試験（口頭試問含む）①　学んだ関節運動学、動作について実技試験を実施する
第26回　実技試験（口頭試問含む）②　学んだ関節運動学、動作について実技試験を実施する
第27回　実技試験（口頭試問含む）のフィードバック①　実技試験の解説、講評を行う
第28回　実技試験（口頭試問含む）のフィードバック②　実技試験の解説、講評を行う
第29回　総括①　本講義で学んだ事について、復習、再確認を行う
第30回　総括②　本講義で学んだ事について、復習、再確認を行う

■ 評価方法

定期試験　80%
小テスト・実技テストで20%（学則で認められない理由での遅刻・欠席は減点）

■ 教　科　書

書　名：基礎運動学
著者名：中村隆一、斎藤宏
出版社：医歯薬出版

■ 参　考　書

書　名：筋骨格系のキネシオロジー
著者名：嶋田智明ほか監訳
出版社：医歯薬出版

書　名：触診解剖アトラス（体幹・上肢・下肢）
著者名：奈良　勲監訳
出版社：医学書院

書　名：図解　四肢と脊柱の診かた
著者名：野島元雄監訳
出版社：医歯薬出版

書　名：カパンディ関節の生理学（体幹・上肢・下肢）
著者名：荻島秀男監訳
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

理学療法の基礎学問として運動学総論から続く重要な科目であり、さらに運動学実習、臨床運動学と引き続く勉強なのでしっかり学んでほしい。

授業科目	運動学各論
学科名	作業療法学専攻

担当者	長谷川　昌士		
学年	２年	総単位数	２単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

運動学総論で学んだ上肢帯と上肢の運動、下肢帯と下肢の運動、脊柱・体幹の運動について演習形式で理解を深める。運動学的分析について映像や運動学的データを用いてグループ学習をおこなう。運動学習における理論について学習し、グループにて課題に取り組む。呼吸や心臓における運動療法について学習し、その技術を演習形式にて理解を深める。筋力増強について学習し、その技術を演習形式にて理解を深める。

■ 目　　標

1．上肢帯と上肢の運動，下肢帯と下肢の運動，脊柱・体幹の運動について理解する。
2．立ち上がりや歩行における運動学的分析について理解する。
3．運動学習における理論について理解する。
4．呼吸や心臓における運動療法について理解する。
5．筋力増強における理論および方法について理解する。

■ 授業計画

第１回　コースオリエンテーション
第２回　関節の基本的構造と機能について復習する。
第３回　肩関節の運動について演習形式で学習する。
第４回　肘関節および前腕の運動について演習形式で学習する。
第５回　手関節および前腕の運動について演習形式で学習する。
第６回　手指関節および前腕の運動について演習形式で学習する。
第７回　股関節の運動について演習形式で学習する。
第８回　膝関節の運動について演習形式で学習する。
第９回　足関節の運動について演習形式で学習する。
第10回　頭頸部、体幹関節の運動について演習形式で学習する。
第11回　運動学的分析（リーチ動作）についてグループにて学習する。
第12回　運動学的分析（リーチ動作）についてグループにて発表する。
第13回　運動学的分析（トイレ動作）についてグループにて学習する。
第14回　運動学的分析（トイレ動作）についてグループにて発表する。
第15回　運動学的分析（正常歩行と片麻痺歩行）についてグループにて学習する。
第16回　運動学的分析（歩行と片麻痺歩行）についてグループにて発表する。
第17回　運動学習理論について学習する。
第18回　運動学習理論に基づいた練習と訓練について学習する。
第19回　運動学習における課題にグループで取り組む。
第20回　運動学習における課題にグループで取り組む。
第21回　呼吸における運動学について学習する。
第22回　換気中の筋活動について学習する。
第23回　呼吸リハビリテーション（呼吸法）について学習する。
第24回　呼吸リハビリテーション（ストレッチング）について学習する。
第25回　身体運動のエネルギー代謝について学習する。
第26回　運動処方について学習する。
第27回　心臓リハビリテーション（運動療法）について学習する。
第28回　心臓リハビリテーション（生活指導）について学習する。
第29回　筋力増強訓練の効果について学習する。
第30回　筋力増強訓練の訓練方法について学習する。

■ 評価方法

筆記試験　80%　小テスト　20%

■ 教　科　書

書　名：筋骨格系のキネシオロジー
著者名：嶋田智明ほか監訳
出版社：医歯薬出版

書　名：基礎バイオメカニクス
著者名：江原義弘、山本澄子、石井慎一郎
出版社：医歯薬出版

■ 参　考　書

書　名：基礎運動学
著者名：中村隆一、斎藤宏
出版社：医歯薬出版

書　名：触診解剖アトラス（体幹・上肢・下肢）
著者名：奈良勲監訳
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	運動学実習
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	島　雅人		
学　　年	２年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

運動学総論、運動学各論により修得した基礎知識・技術を踏まえ、実際に行われている動作を観察し分析するといった実習を行うことで、理学療法・作業療法の基礎となる人体の運動のしくみについて理解を深める。

■ 目　　標

基本動作・歩行を観察する視点を身につけること
観察した動作を運動学的用語で説明することができるようになること
観察した動作を運動学・運動力学的に分析することができるようになること

■ 授業計画

第１回　①コース・ガイダンス：講義の進め方、評定方法、その他
　　②これまでに学んできた運動学総論、運動学各論の知識の確認
　　③体位、構えの（姿勢）の表現、動作分析の手順と方法
第２回　姿勢の観察・分析①
第３回　姿勢の観察・分析②
第４回　姿勢の観察・分析②
第５回　基本動作の観察・分析①
第６回　基本動作の観察・分析②
第７回　基本動作の観察・分析③
第８回　基本動作の観察・分析④
第９回　基本動作の観察・分析⑤
第10回　基本動作の観察・分析⑥
第11回　応用的動作の観察・分析①
第12回　応用的動作の観察・分析②
第13回　応用的動作の観察・分析③
第14回　応用的動作の観察・分析④
第15回　応用的動作の観察・分析⑤

■ 評価方法

定期試験70％　発表・レポート30％

■ 教　科　書

書　名：基礎運動学
著者名：中村隆一、斎藤宏
出版社：医歯薬出版

書　名：観察による運動・動作分析演習ノート
著者名：藤澤 宏幸（著），長崎 浩（著）
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参　考　書

書　名：ブルンストローム臨床運動学　原著第６版
著者名：Peggy A.Houglum
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：日常生活活動の分析―身体運動学的アプローチ
著者名：藤澤 宏幸（編集）
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：ペリー歩行分析　正常歩行と異常歩行　第２版
著者名：Jacquelin Perry　著 / 武田　功ほか監修
出版社：医歯薬出版

書　名：カラー版　筋骨格系のキネシオロジー原著弟２版
著者名：Donald A.Neumann 著 / 嶋田智明ほか　監訳
出版社：医歯薬出版

■ 留 意 事 項

授業科目	人間発達学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	藪中　良彦		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法士・作業療法士として必要な子どもの発達の知識を、運動発達を中心に学習する。

■ 目　　標

子どもの機能獲得の仕組みを知ることで、子どもの治療だけでなく、成人の治療にも発達の知識を利用できるようになることが、この科目の目標である。

■ 授業計画

第１回　Ⅰ．人間発達とは？
　　Ⅱ．発達理論
　　Ⅲ．身体の発達
第２回　Ⅰ．胎児の発達
　　Ⅱ．1歳までの正常運動発達（その１）
第３回　Ⅰ．1歳までの正常運動発達（その２）
　　Ⅱ．姿勢反射の発達
第４回　Ⅰ．小児の反射・反応
第５回　Ⅰ．6歳までの発達
第６回　Ⅰ．6歳までの発達と姿勢反射との関連
第７回　Ⅰ．食事動作の発達
第８回　Ⅰ．目と手の協調の発達
第９回　Ⅰ．認知機能の発達
第10回　Ⅰ．言語の発達
第11回　Ⅰ．排泄行動の発達
第12回　Ⅰ．更衣動作の発達と援助
第13回　Ⅰ．遊びの発達
第14回　Ⅰ．発達検査
第15回　Ⅰ．老年期

■ 評価方法

出席（欠席－4点、遅刻／早退－2点）
小テスト（40点）
定期試験（60点）

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　人間発達学
著者名：岩崎清隆，花熊暁，吉松靖文
出版社：医学書院

書　名：乳児の発達　写真でみる０歳児
著者名：髙橋孝文
出版社：医歯薬出版株式会社

■参 考 書

書　名：コメディカルのための専門基礎分野テキスト　人間発達学
著者名：福田恵美子
出版社：中外医学社

書　名：機能的姿勢 - 運動スキルの発達
著者名：髙橋智宏
出版社：協同医書出版社

書　名：写真でみる乳児の運動発達
著者名：木本孝子、中村勇
出版社：協同医書出版社

書　名：乳幼児の運動発達検査　AIMS アルバータ乳幼児運動発達検査法
著者名：上杉雅之、嶋田智明、武政誠一
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：PEDI　リハビリテーションのための子どもの能力低下評価法
著者名：里宇明元、近藤和泉、問川博之
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：赤ちゃんの運動発達　絵でみる治療アプローチ
著者名：芝田利生、櫻庭修
出版社：協同医書出版社

書　名：遠城寺式・乳幼児分析的発達検査法―九州大学小児科改訂新装版
著者名：遠城寺宗徳
出版社：慶應義塾大学出版会

書　名：新版 K 式発達検査法2001年版―標準化資料と実施法
著者名：新版 K 式発達検査研究会
出版社：ナカニシヤ出版

書　名：KIDS 乳幼児発達スケール
著者名：三宅和夫
出版社：達科学研究教育センター

書　名：1987年全訂版田中ビネー知能検査法
著者名：田中教育研究所
出版社：田研出版

書　名：WISC-IV の臨床的利用と解釈
著者名：上野 一彦
出版社：日本文化科学社

書　名：日本版デンバー式発達スクリーニング検査―JDDST と JPDQ
著者名：上田 礼子
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：K・ABC アセスメントと指導―解釈の進め方と指導の実際
著者名：前川 久男
出版社：丸善メイツ

書　名：グッドイナフ人物画知能検査ハンドブック
著者名：小林重雄
出版社：三京房

書　名：日本版フロスティッグ視知覚発達検査
著者名：飯鉢和子、鈴木陽子、茂木茂八
出版社：日本文化科学社

■ 参 考 書

書　名：日本版ミラー乳児発達スクリーニング検査と JMAP 簡易版
著者名：土田玲子、岩永竜一郎
出版社：パシフィックサプライ株式会社

書　名：乳幼児精神発達診断法 ― 0才～3才まで
著者名：津守 真、稲毛 教子
出版社：大日本図書

書　名：乳幼児精神発達質問紙（1～3才まで）
著者名：津守真 , 稲毛教子
出版社：大日本図書

書　名：乳幼児精神発達診断法 ― 3才～7才まで
著者名：津守 真 , 磯部 景子
出版社：大日本図書

書　名：乳幼児精神発達質問紙 3～7才まで
著者名：津守 真 , 稲毛 教子
出版社：大日本図書

書　名：視覚機能の発達障害
著者名：紀伊克昌
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：手の発達機能障害
著者名：紀伊克昌
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留 意 事 項

授業科目	臨床心理学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	春海　淳子		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

臨床心理学は「こころの病」や「こころのメカニズム」について学ぶものです。私たちのこころは流動的で環境からの影響を受けながら形成され、揺らぎもします。そうした、こころのありようについて、身近な素材や具体的な話を用いて臨床心理学に関する理論や概念の基礎的素養を身につける機会にします。

■ 目　　標

学んだことを今後の専門職としての活動の中や普段の生活に行かせるよう習得することを目指します。

■ 授業計画

第１回　臨床心理学とは
第２回　臨床心理査定（１）：意義と方法（観察、面接、検査）
第３回　臨床心理査定（２）：発達検査・知能検査（体験、事例）
第４回　臨床心理査定（３）：人格検査（概要）
第５回　臨床心理査定（４）：人格検査（体験、事例）
第６回　こころの構造（１）：人格構造論の観点から
第７回　こころの構造（２）：発達論的観点から
第８回　精神病理（１）：統合失調症、気分障害
第９回　精神病理（２）：不安障害、身体表現性障害、人格障害
第10回　臨床心理面接（１）：目的、基本的技法（体験）
第11回　臨床心理面接（２）：来談者中心療法、精神分析
第12回　臨床心理面接（３）：学習理論と行動療法
第13回　社会病理：グループ病理の理解
第14回　各専門領域の連携について
第15回　総合的ふりかえり

■ 評価方法

講義への参加・貢献（レポート等）：30%　　筆記試験：70%

■ 教　科　書

特に指定しません

■ 参　考　書

適宜紹介します

■ 留意事項

授業科目	病理学概論	担当者	魏　民		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　容

ヒトが疾病に罹患する原因とその機序を総論的に学ぶ

■ 目　標

病態別（細胞の損傷と適応、循環障害、免疫、炎症・感染症、腫瘍、先天異常）
に整理された知識を得る

■ 授業計画

第１回　病理学の目的と概要（第１章）
　　病因論：内因、外因の概念、疾病の分類（第２章）
第２回　傷害に対する細胞の反応①：　退行性病変（第３章）
第３回　傷害に対する細胞の反応②：　進行性病変（第５章）
第４回　代謝異常：　代謝障害による疾患（第４章）
第５回　循環障害①：　循環系の構造と機能、全身循環障害（第６章）
第６回　循環障害②：　局所循環障害（第６章）
第７回　免疫①：　免疫系の仕組みと働き、アレルギ-（第７章）
第８回　免疫②：　膠原病、免疫不全症候群（第７章）
第９回　炎症・感染症：　炎症の定義と原因、組織学的変化と経時的変化（第８章）
第10回　炎症・感染症：　感染の成立、感染経路と病態（第８章）
第11回　腫瘍①：　腫瘍の定義と分類、腫瘍の進展形式（第９章）
第12回　腫瘍②：　腫瘍発生の原因、腫瘍の診断と治療（第９章）
第13回　放射線障害：　放射線による副作用のため出現する病変　（第10章）
第14回　老化：　老化の原因、老化に伴って増加する疾患（第11章）
第15回　先天異常・奇形：　先天異常の概念と分類、代表的な先天異常（第12章）

■ 評価方法

筆記試験　　80%、 レポート　20%

■ 教科書

書　名：標準理学療法学・作業療法学　　病理学
著者名：梶原博毅・横井豊治
出版社：医学書院

■ 参考書

書　名：カラー　ルービン病理学
著者名：鈴木利光　他監訳
出版社：西村書店

■ 留意事項

授業科目	内科学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	藤岡　重和		
学年	２年	総単位数	２単位
開講時期	通年	選択･必修	必修

■ 内　　容

循環器疾患、呼吸器疾患など生体内部の障害について、その病因、病態、特徴的に現れる症状、一般的に行われる検査と診断、治療法、予後などについて基礎的な学習をする。

■ 目　　標

１．代表的な内科疾患について、その病因、病態、臨床像、診断と治療法を理解する
２．内科疾患患者におけるリハビリテーションの留意事項を説明できる

■ 授業計画

第１回　内科学総論
第２回　循環器総論　(概要、病因、病態生理、症状、検査と診断)
第３回　循環器疾患　（１）　高血圧、虚血性心疾患
第４回　循環器疾患　（２）　弁膜症、先天性心疾患、心筋疾患
第５回　循環器疾患　（３）　心不全、不整脈、その他
第６回　循環器疾患　（４）　大動脈疾患、末梢動脈および静脈疾患
第７回　呼吸器総論　(概要、病因、病態生理、症状、検査と診断)
第８回　呼吸器疾患　（１）　感染性肺疾患、アレルギー性肺疾患
第９回　呼吸器疾患　（２）　慢性閉塞性肺疾患、間質性肺疾患
第10回　呼吸器疾患　（３）肺腫瘍、肺循環障害
第11回　呼吸器疾患　（４）　呼吸不全、呼吸調節の異常、胸膜疾患、その他
第12回　消化器総論　(概要、病因、病態生理、症状、検査と診断)
第13回　消化器疾患　（１）　食道疾患、胃の疾患
第14回　消化器疾患　（２）　小腸、大腸の疾患
第15回　消化器疾患　（３）　肝疾患
第16回　消化器疾患　（４）　胆道疾患、膵疾患、その他
第17回　代謝、内分泌総論　(概要、病因、病態生理、症状、検査と診断)
第18回　代謝、内分泌疾患　（１）　糖尿病、脂質代謝異常、その他
第19回　代謝、内分泌疾患　（２）　下垂体疾患、甲状腺疾患、副甲状腺疾患、副腎疾患
第20回　腎総論　(概要、病因、病態生理、症状、検査と診断)
第21回　腎疾患　（１）　糸球体疾患、全身性疾患と腎障害
第22回　腎疾患　（２）　腎不全、電解質異常、その他
第23回　免疫、アレルギー総論　(概要、病因、病態生理、症状、検査と診断)
第24回　免疫、アレルギー疾患　（１）　アレルギー疾患
第25回　免疫、アレルギー疾患　（２）　膠原病、免疫不全症
第26回　血液、造血器疾患　（１）　赤血球系疾患
第27回　血液、造血器疾患　（２）　白血球系疾患、出血性疾患
第28回　中毒および環境要因による疾患
第29回　リハビリテーションと内科臨床について
第30回　総復習

■ 評価方法

定期試験　80%　　小テスト　10%　　出席、態度　10%

■ 教　科　書

「ナースの内科学　第８版」 中外医学社（2010年）

■ 参　考　書

「標準理学療法学作業療法学　専門基礎分野　内科学　第3版」 医学書院（2013年）
「臨床病態学　1巻、２巻」 NOUVELLE HIROKAWA（2006年）
「看護のための臨床病態学」 南山堂（2012年）

■ 留意事項

内科学を学習するにあたって、解剖学、生理学、病理学をよく理解しておく必要があります。授業の前に、復習をしておいてください。感染症については、三年生前期の感染症学において詳しく学習します。

授業科目	整形外科学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	中村　憲正		
学年	２年	総単位数	２単位
開講時期	通年	選択･必修	必修

■ 内　　容

人体の運動器にかかわる疾患の診断と治療について学習する。

■ 目　　標

運動器疾患の基礎となる骨・関節，筋・神経の構造や病態について充分な知識を得る。特に、外傷学については、重点的に学習し、臨床の場で必要とされる知識体系を構築する。また、整形外科的な診断法や治療法について臨床に必要な知識を得る。

■ 授業計画

第１回　整形外科総論１　　歴史、筋骨格系組織（骨、軟骨、靭帯、筋肉など）の生理学につき学ぶ
第２回　整形外科総論２　　歴史、筋骨格系組織（骨、軟骨、靭帯、筋肉など）の生理学につき学ぶ
第３回　骨折と脱臼１　骨折と脱臼につき総括的に述べ、その治癒のメカニズムや治療に対する取り組み方を学ぶ
第４回　骨折と脱臼２　骨折と脱臼につき総括的に述べ、その治癒のメカニズムや治療に対する取り組み方を学ぶ
第５回　骨と関節の感染症　骨と関節の感染症につき学ぶ。
第６回　関節リウマチ　　関節リウマチとその類縁疾患につき学ぶ。
第７回　慢性関節疾患――退行変性による慢性関節疾患につき学ぶ。
第８回　壊死性骨疾患――骨壊死の特徴につき学ぶ。
第９回　骨系統疾患　――骨系統疾患につき学ぶ。
第10回　代謝性骨疾患――代謝性骨疾患につき学ぶ。
第11回　腫瘍　１　――筋骨格系腫瘍につき学び、現代の治療に触れる。
第12回　腫瘍　２　――筋骨格系腫瘍につき学び、現代の治療に触れる。
第13回　予備日
第14回　予備日
第15回　脊椎と脊髄　１　――脊椎と脊髄疾患、外傷につき学ぶ。
第16回　脊椎と脊髄　２　――脊椎と脊髄疾患、外傷につき学ぶ。
第17回　股関節　――股関節疾患、外傷につき学ぶ。
第18回　膝関節　――膝関節疾患につき述べ、固有の治療法につき学ぶ。
第19回　膝のスポーツ傷害　１―膝のスポーツ傷害につき述べ、最新治療法につき学ぶ。
第20回　膝のスポーツ傷害　２―膝のスポーツ傷害につき述べ、最新治療法につき学ぶ。
第21回　足と足関節　１――足と足関節の傷害につき学ぶ。
第22回　足と足関節　２――足と足関節の傷害につき学ぶ。
第23回　下腿　――下腿の傷害につき学ぶ。
第24回　肩　――肩関節スポーツ傷害を中心に学び、最新治療に触れる。
第25回　肘　――肘関節疾患、傷害につき学ぶ。
第26回　手　１　――手の外科につき学ぶ。
第27回　手　２　――手の外科につき学ぶ。
第28回　予備日
第29回　予備日
第30回　予備日

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 教　科　書

書　名：標準整形外科
出版社：医学書院

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	臨床神経学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	阿部　和夫・石倉　隆・高岡　俊雄		
学年	2	総単位数	2単位
開講時期	通年	選択･必修	必修

■ 内　　容

臨床神経学は、前半では、神経疾患について、後半では前半の講義を振り返りながら、理学療法士、作業療法士の視点から神経症候について講義を行います。臨床神経学を理解することは、理学療法士・作業療法士を目指す学生にとって不可欠であるにも関わらず、大脳から筋肉あるいは感覚器に至る広汎な解剖学的領域に関与する多彩な疾患を学習することに対して負担を感じる学生が多いかもしれません。本講義では、神経・筋疾患でみられる主要な疾患とそれにともなう障害の特性について、その疾患概念、病態、発症機構、神経科学的検査についての基礎知識および治療について学習します。

■ 目　　標

リハビリテーション医学およびリハビリテーション医療に携わる職種として必要不可欠な神経学の知識を取得することを目標にします。一方通行の授業ではなく、学生が積極的にかつ真摯に学習に取り組むことを期待します。

■ 授業計画

第１回　神経内科学総論
第２回　機能性疾患（頭痛など）
第３回　脳血管障害
第４回　脳腫瘍
第５回　運動ニューロン病
第６回　脊髄小脳変性症
第７回　パーキンソン病
第８回　パーキンソン病以外の錐体外路疾患
第９回　脱随疾患
第10回　感染症
第11回　脊髄疾患
第12回　末梢神経障害（ニューロパチーなど）
第13回　筋疾患、神経筋接合部での疾患
第14回　てんかん（失神との鑑別）
第15回　認知症
第16回　神経機能解剖の復習１：大脳皮質の機能局在
第17回　神経機能解剖の復習２：運動路
第18回　神経機能解剖の復習３：感覚路
第19回　セラピストとしての神経症候のとらえ方１：意識障害のメカニズムと症状
第20回　セラピストとしての神経症候のとらえ方２：運動麻痺のメカニズムと症状
第21回　セラピストとしての神経症候のとらえ方３：運動失調のメカニズムと症状
第22回　セラピストとしての神経症候のとらえ方４：錐体外路症候のメカニズムと症状
第23回　セラピストとしての神経症候のとらえ方５：姿勢異常と歩行障害のメカニズムと症状
第24回　セラピストとしての神経症候のとらえ方６：筋委縮のメカニズムと症状
第25回　セラピストとしての神経症候のとらえ方７：感覚障害のメカニズムと症状
第26回　セラピストとしての神経症候のとらえ方８：高次脳機能障害のメカニズムと症状
第27回　脳血管障害の神経症候のとらえ方
第28回　パーキンソン病およびその他の錐体外路疾患の神経症候のとらえ方
第29回　脊髄小脳変性症の神経症候のとらえ方
第30回　カンファレンス

■ 評価方法

試験75％
レポート25％

■ 教　科　書

書　名：メディカルスタッフのための神経内科学　→ この教科書は後半で使用します。
著者名：河村　満
出版社：医歯薬出版

■ 参　考　書

書　名：神経の病気
著者名：図説カラダ大辞典編集委員会　編
出版社：金沢医科大学出版局

書　名：神経心理学入門
著者名：山鳥重
出版社：医学書院

■ 留意事項

私語など、他の受講者および講義をしている私の迷惑になる行為は、言うまでもなく厳禁です。医療業界で働くための最低限の常識を身につけさせるために厳しく注意をします。

授業科目	臨床運動学
学科名	理学療法学専攻（必修）
	作業療法学専攻（選択）

担当者	島　雅人		
学　　年	２年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	選択 /必修

■ 内　　容

運動学総論、運動学各論、運動学実習で修得した知識を踏まえ、疾病や外傷により生じる心身機能・身体構造の変化や活動の変化について学ぶ。実際の運動を教材等で観察し、模倣しながら、障害のある対象者の運動特性を学ぶ。

■ 目　　標

疾病や外傷により生じる心身機能・身体構造の変化、運動・活動を理解できる。
障がい者の姿勢や動作を観察し、その特徴や要因を検討することができる。
機能障害と能力障害の関連を理解できる

■ 授業計画

第１回　コース・ガイダンス：講義の進め方、評定の他、これまでに学んだ基礎運動学との関連性を学ぶ
　　関節可動域制限による運動や活動の変化を学ぶ
第２回　関節可動域制限による運動や活動の変化を学ぶ
第３回　関節可動域制限による運動や活動の変化を学ぶ
第４回　関節可動域制限による運動や活動の変化を学ぶ
第５回　関節可動域制限による運動や活動の変化を学ぶ
第６回　筋力低下（廃用性・末梢神経障害　等）による運動や活動の変化を学ぶ
第７回　筋力低下（廃用性・末梢神経障害　等）による運動や活動の変化を学ぶ
第８回　筋力低下（廃用性・末梢神経障害　等）による運動や活動の変化を学ぶ
第９回　筋力低下（廃用性・末梢神経障害　等）による運動や活動の変化を学ぶ
第10回　筋力低下（廃用性・末梢神経障害　等）による運動や活動の変化を学ぶ
第11回　筋力低下（廃用性・末梢神経障害　等）による運動や活動の変化を学ぶ
第12回　疾患（中枢神経障害、神経筋疾患　等）による運動や活動の変化を学ぶ
第13回　疾患（中枢神経障害、神経筋疾患　等）による運動や活動の変化を学ぶ
第14回　疾患（中枢神経障害、神経筋疾患　等）による運動や活動の変化を学ぶ
第15回　本講義で学んだことについて復習、再確認を行う

■ 評価方法

定期試験：80％　　小テスト20％

■ 教　科　書

書　名：病態運動学
著者名：奈良　勲
出版社：医学書院

■ 参 考 書

書　名：基礎運動学
著者名：中村隆一、斎藤宏
出版社：医歯薬出版

書　名：カラー版　筋骨格系のキネシオロジー原著弟２版
著者名：Donald A.Neumann 著 / 嶋田智明ほか　監訳
出版社：医歯薬出版

書　名：ブルンストローム臨床運動学　原著第６版
著者名：Peggy A.Houglum
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：ペリー歩行分析　正常歩行と異常歩行　第２版
著者名：Jacquelin Perry　著 / 武田　功ほか監修
出版社：医歯薬出版

■ 留 意 事 項

授業科目	精神医学Ⅰ	担当者	小畔　美弥子		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

主な精神疾患について症状・診断・治療を学ぶ

■ 目　　標

精神医学に興味を持ち，基本知識を身につける

■ 授業計画

第１回　精神医学とは　　精神疾患の診断・分類
第２回　精神症状とその評価
第３回　統合失調症
第４回　アルコール・薬物関連障害
第５回　認知症
第６回　気分障害
第７回　神経症性障害①
第８回　神経性障害②
第９回　発達障害・児童精神医学
第10回　パーソナリティー障害
第11回　摂食障害
第12回　睡眠障害
第13回　治療①
第14回　治療②
第15回　精神医療の関連法規・福祉

■ 評価方法

筆記試験80％，出席・受講態度20％

■ 教　科　書

書　名：text 精神医学
著者名：加藤進昌　神庭重信
出版社：南山堂

■ 参　考　書

書　名：パーソナリティー障害の診断と治療
著者名：ナンシーマックウィリアムズ
出版社：創元社

■ 留意事項

授業科目	精神医学	担当者	小畔　美弥子		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

主な精神疾患について症状・診断・治療を学ぶ

■ 目　　標

精神医学に興味を持ち，基本知識を身につける

■ 授業計画

第１回　精神医学とは　　精神疾患の診断・分類
第２回　精神症状とその評価
第３回　統合失調症
第４回　アルコール・薬物関連障害
第５回　認知症
第６回　気分障害
第７回　神経症性障害①
第８回　神経性障害②
第９回　発達障害・児童精神医学
第10回　パーソナリティー障害
第11回　摂食障害
第12回　睡眠障害
第13回　治療①
第14回　治療②
第15回　精神医療の関連法規・福祉

■ 評価方法

筆記試験80％，出席・受講態度20％

■ 教　科　書

書　名：text 精神医学
著者名：加藤進昌　神庭重信
出版社：南山堂

■ 参　考　書

書　名：パーソナリティー障害の診断と治療
著者名：ナンシーマックウィリアムズ
出版社：創元社

■ 留意事項

授業科目	精神医学Ⅱ
学科名	理学療法学専攻（選択）
	作業療法学専攻（必修）

担当者	足立　一		
学　　年	２年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	選択/必修

■ 内　　容

教科書に沿った講義と講義終了後のレポート作成を中心に進めていく。全15回主体的な参加を促す。（教科書は必ず持参すること）

■ 目　　標

精神医学の変遷や現状，基本概念，疾患別の特性や支援の実際についての知識を深める．

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
　　精神障害の成因と分類
第２回　精神保健医療福祉の現状・歴史①
第３回　精神保健医療福祉の現状・歴史②
第４回　精神機能とその障害①（意識・知能・性格・記憶・欲動・自我・知覚・思考）
第５回　精神機能とその障害②（意識・知能・性格・記憶・欲動・自我・知覚・思考）
第６回　精神機能とその障害③（意識・知能・性格・記憶・欲動・自我・知覚・思考）
第７回　精神医療における各種治療とリハビリテーション①（薬物療法・心理療法）
第８回　精神医療における各種治療とリハビリテーション②（薬物療法・心理療法）
第９回　精神医療における各種治療とリハビリテーション③（薬物療法・心理療法）
第10回　疾患別特性と治療，リハビリテーション①（気分障害）
第11回　疾患別特性と治療，リハビリテーション②（神経症性障害）
第12回　疾患別特性と治療，リハビリテーション③（てんかん）
第13回　疾患別特性と治療，リハビリテーション④
　　（精神作用物質による精神および行動の障害のリハビリテーション）
第14回　疾患別特性と治療，リハビリテーション⑤（統合失調症）
第15回　疾患別特性と治療，リハビリテーション⑥（その他の疾患）

■ 評価方法

３回の確認テストと10回のレポート作成，定期試験の結果で総合的に評価する．

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　精神医学
著者名：奈良勲　鎌倉矩子　監修
出版社：医学書院

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	精神科リハビリテーション学
学科名	理学療法学専攻（選択）
	作業療法学専攻（必修）

担当者	足立　一		
学　　年	２年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	選択/必修

■ 内　　容

精神科リハビリテーションに関する教材を用いた講義及び演習を行う

■ 目　　標

精神科リハビリテーションの基本概念，回復と評価・支援の実際，関連する地域社会資源，制度についての知識を深める

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
　　精神科リハビリテーションの定義
第２回　精神保健医療福祉の現状と歴史
第３回　精神疾患・障害の成因と分類
第４回　精神機能とその障害①（意識・知能・性格）
第５回　精神機能とその障害②（記憶・欲動・自我）
第６回　精神機能とその障害③（知覚・思考）
第７回　精神科治療と各種リハビリテーション①（薬物療法）
第８回　精神科治療と各種リハビリテーション②（リハビリテーション評価）
第９回　精神科治療と各種リハビリテーション③（リハビリテーション）
第10回　疾患別リハビリテーション①（統合失調症）
第11回　疾患別リハビリテーション②（気分障害）
第12回　疾患別リハビリテーション③（神経症性障害）
第13回　疾患別リハビリテーション④（てんかん）
第14回　疾患別リハビリテーション⑤（精神作用物質による行動の障害）
第15回　疾患別リハビリテーション⑥（その他）
まとめ

■ 評価方法

定期試験：60％
小テスト：30％，計３回
レポート：10％．計１回

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　精神医学
著者名：奈良勲　鎌倉矩子　監修
出版社：医学書院

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	小児科学
学科名	理学療法学専攻
	作業療法学専攻

担当者	非常勤		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	選択

■ 内　　容

小児の成長・発達、小児の形態的・生理的特徴。
よくみられる疾患、見逃せない疾患を中心とした小児の病気及び予防接種。
母子保健について調べる。

■ 目　　標

小児の成長・発達・小児病学・小児保健等の理解して小児科学を把握すること。

■ 授業計画

第１回　小児の発育・発達
　　小児の生理の特徴
第２回　乳幼児の栄養と生活
第３回　予防接種、母子保健
第４回　出生前小児科学、新生児学
第５回　呼吸器疾患
第６回　消化器疾患
第７回　循環器疾患
第８回　小児特有の細菌感染症、ウィルス感染症
第９回　アレルギー疾患、免疫疾患
第10回　神経疾患
第11回　代謝、内分泌疾患
第12回　腎、泌尿器疾患
第13回　血液、悪性腫瘍、筋疾患
第14回　心身症、心理的疾患
第15回　小児診療の特徴　　事故・救急

■ 評価方法

筆記試験　70%　　小テスト15%　　出席点15%

■ 教　科　書

書　名：最新育児小児病学
著者名：黒田恭弘
出版社：南江堂

書　名：小児・思春期診療　最新マニュアル
著者名：五十嵐　隆
出版社：日本医師会

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	老年医学	担当者	藤岡　重和・森田婦美子 大中　玄彦・藤本　宣正		
学科名	理学療法学専攻	学年	２年	総単位数	１単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	選択

■ 内　　容

老年期にみられる障害の特性を理解するために老化のメカニズムや生理学的特性、老年期の心理、老化に伴う生活機能の変化、高齢者を取りまく地域の問題など幅広く学習する。また、老化に伴い特徴的に現れる疾患・障害とその病態についても学習する。

■ 目　　標

１．老化に伴う生理機能変化、老年期の心理、老化に伴う生活機能の変化を理解する
２．老化に伴い特徴的に現れる疾患・障害とその病態について説明できる

■ 授業計画

第１回　老年医学総論（１）　老化と老年病の考え方（藤岡）
第２回　老年医学総論（２）　加齢に伴う生理機能変化（藤岡）
第３回　老年医学総論（３）　高齢者に多い症候とそのアセスメントについて（森田）
第４回　老年医学総論（４）　老年期の心理、老化に伴う生活機能の変化と高齢者へのアプローチ（森田）
第５回　老年医学各論（１）　心、血管機能の老化と循環器疾患（大中）
第６回　老年医学各論（２）　呼吸機能の老化と呼吸器疾患（大中）
第７回　老年医学各論（３）　腎機能、内分泌、代謝機能の老化と疾患（大中）
第８回　老年医学各論（４）消化機能の老化と消化器疾患（大中）
第９回　老年医学各論（５）　加齢による免疫機能の変化、高齢者の感染症（大中）
第10回　老年医学各論（６）　神経、骨、運動機能の老化と疾患、感覚機能の老化と疾患（藤岡）
第11回　泌尿器科総論（解剖と生理、診断と検査法)、代表的な疾患（尿路感染症、尿路結石症）（藤本）
第12回　代表的な疾患（尿路・生殖器の腫瘍、神経因性膀胱）（藤本）
第13回　高齢者をとりまく地域の諸問題について（森田）
第14回　高齢者の医療、介護、福祉、保健（森田）
第15回　総復習（藤岡）

■ 評価方法

定期試験　80%　小テスト　10%　　出席、態度　10%

■ 教　科　書

「標準理学療法学作業療法学　専門基礎分野　老年学　第３版」 医学書院（2009年）

■ 参　考　書

「新老年学第3版」東京大学出版社（2010年）

■ 留意事項

授業科目	理学療法概論
学科名	理学療法学専攻

担当者	藪中　良彦・佐藤　睦美 大槻　桂右・岩田　篤		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法士になる事を目標に入学してきてはいるが、理学療法のわずかな部分の知識しかない学生に対して、今後４年間学ぶ理学療法の大枠を示す。

■ 目　　標

理学療法の大枠を理解することにより、今後４年間で学ばなければならない内容の概略を把握する。

■ 授業計画

第１回　当大学の理学療法学専攻のカリキュラムの解説、理学療法の歴史及び概念
第２回　理学療法の対象と活動分野
第３回　理学療法の流れと方法
第４回　理学療法と障害モデル
第５回　理学療法の教育、根拠に基づいた理学療法
第６回　理学療法に関係する法律と医療保険及び介護保険制度
第７回　中枢神経疾患理学療法概論
第８回　骨関節疾患理学療法概論（スポーツリハビリテーションを含む）
第９回　呼吸循環疾患理学療法概論
第10回　小児理学療法概論
第11回　記録・報告書の書き方
第12回　個人情報の管理、対象者の権利、医療専門職としての倫理
第13回　医療事故
第14回　感染症対策
第15回　臨床実習において学生に求められるもの

■ 評価方法

出席（欠席－4点、遅刻／早退－2点）
小テスト（40点）
定期試験（60点）

■ 教　科　書

書　名：理学療法概論テキスト　改訂第２版
著者名：監修　細田多穂、編集　中島喜代彦、森田正治、久保田章仁
出版社：南江堂

■ 参　考　書

書　名：理学療法学概論　第３版
著者名：監修　千住秀明
出版社：神陵文庫

■ 留意事項

授業科目	理学療法概論実習
学科名	理学療法学専攻

担当者	棚　千磨・伊禮　まり子		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

専任教員と共に国内医療施設で３日間の見学実習を行う。事前に１日を使いオリエンテーションと演習を行う。また、見学後１日を使用して、演習を実施する。

■ 目　　標

現在の国内医療施設における理学療法の概観を理解する。また、障害について実際の対象者様の生活像を理解する。特に理学療法士の仕事を理解することと、対象者様や病院スタッフの方とスムーズにコミュニケーションを取れるようになることが具体的な目標である。

■ 授業計画

実習施設　協力医療機関
実習期間　３日間（前後に１日ずつ学内で演習を行う）
実習形態　協力病院において、専任教員と臨床実習指導者の指導／監督の下、患者と直接に対応する。専任教員は学生の臨床現場を観察し、学生の臨床実習に臨む態度などを適切に把握し、臨床実習指導者と綿密に連絡を取りながら必要なフォローを実施する。
実習の進め方　理学療法概論で学んだ問診、情報収集、評価、運動療法、物理療法などを実際の臨床現場で体験し、理解を深める。実習の進め方は、臨床現場の見学と専任教員のフォローを織り交ぜて実施する。

■ 評価方法

出席、実習態度、臨床実習実施記録の内容を基に、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 教　科　書

書　名：PT 臨床実習ルートマップ
著者名：柳澤健
出版社：メジカルビュー社

■ 参　考　書

■ 留意事項

臨床現場での学習であるため、事前準備を充分に行い、現場の規則を厳守し、事故がないように努めること。

授業科目	臨床実習Ⅰ
学科名	理学療法学専攻

担当者	棚　千磨・伊禮　まり子		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

専任教員と共に国内医療施設で３日間の見学実習を行う。事前に１日を使いオリエンテーションと演習を行う。また、見学後１日を使用して、演習を実施する。

■ 目　　標

現在の国内医療施設における理学療法の概観を理解する。また、障害について実際の対象者様の生活像を理解する。特に理学療法士の仕事を理解することと、対象者様や病院スタッフの方とスムーズにコミュニケーションを取れるようになることが具体的な目標である。

■ 授業計画

実習施設　協力医療機関
実習期間　３日間（前後に１日ずつ学内で演習を行う）
実習形態　協力病院において、専任教員と臨床実習指導者の指導／監督の下、患者と直接に対応する。専任教員は学生の臨床現場を観察し、学生の臨床実習に臨む態度などを適切に把握し、臨床実習指導者と綿密に連絡を取りながら必要なフォローを実施する。
実習の進め方　理学療法概論で学んだ問診、情報収集、評価、運動療法、物理療法などを実際の臨床現場で体験し、理解を深める。実習の進め方は、臨床現場の見学と専任教員のフォローを織り交ぜて実施する。

■ 評価方法

出席、実習態度、臨床実習実施記録の内容を基に、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 教　科　書

書　名：PT 臨床実習ルートマップ
著者名：柳澤健
出版社：メジカルビュー社

■ 参　考　書

■ 留意事項

臨床現場での学習であるため、事前準備を充分に行い、現場の規則を厳守し、事故がないように努めること。

授業科目	理学療法障害学
学科名	理学療法学専攻

担当者	伊禮　まり子		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法と障害について学ぶ。国際障害分類（ICIDH）と国際生活機能分類（ICF）について学び、ICFに基づく障害の捉え方を理解する。理学療法において対象となる障害について、障害像・原因・評価・アプローチの概要を学ぶ。

■ 目　　標

理学療法と障害について理解する。国際障害分類（ICIDH）と国際生活機能分類（ICF）の違いを理解し、ICF に基づいた障害の捉え方を経験する。理学療法において対象となる障害について、障害像･原因･評価･アプローチの概要を理解する。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション・理学療法と障害
第２回　国際障害分類（ICIDH）と国際生活機能分類（ICF）
第３回　障害各論（痛み）
第４回　障害各論（関節可動域制限）
第５回　障害各論（筋力低下）
第６回　障害各論（筋緊張異常）
第７回　障害各論（運動麻痺）
第８回　障害各論（協調性障害）
第９回　障害各論（感覚障害）
第10回　障害各論（平衡機能障害）
第11回　障害各論（全身持久力）
第12回　障害各論（基本動作障害）
第13回　障害各論（歩行障害）
第14回　障害各論（ADL 障害）
第15回　まとめ

■ 評価方法

筆記試験（90%）、小テスト（10%）に出席状況を併せて評価する。

■ 教　科　書

■ 参 考 書

書　名：リハビリテーションビジュアルブック
著者名：落合慈之監修　稲川利光編集
出版社：学研

書　名：ビジュアルレクチャー　基礎理学療法学
著者名：大橋ゆかり　編集
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：機能障害学入門
著者名：沖田実，松原貴子，森岡周　編集
出版社：神陵文庫

書　名：ICF の理解と活用
著者名：上田敏
出版社：きょうされん

■ 留 意 事 項

授業科目	理学療法管理学
学科名	理学療法学専攻

担当者	今井　公一　他		
学　　年	4年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

日本における理学療法の実際から、各職場の業務とその管理について学びます。また、理学療法士に求められている能力について、国家試験の出題内容から理解します。

■ 目　　標

1．理学療法士の各職場の現状を理解する。
2．理学療法士に求められている能力について国家試験の出題内容からまとめる

■ 授業計画

第1回　理学療法士に求められている能力（グループワーク1）
第2回　理学療法士に求められている能力（グループワーク2）
第3回　理学療法士に求められている能力（グループワーク3）
第4回　理学療法士に求められている能力（グループワーク4）
第5回　理学療法士に求められている能力（グループワーク5）
第6回　理学療法士に求められている能力（グループワーク6）
第7回　理学療法士に求められている能力（グループワーク7）
第8回　理学療法士に求められている能力（グループワーク8）
第9回　理学療法士に求められている能力（グループワーク9）
第10回　理学療法士に求められている能力（グループワーク10）
第11回　理学療法業務と管理（1）
第12回　理学療法業務と管理（2）
第13回　理学療法業務と管理（3）
第14回　理学療法業務と管理（4）
第15回　理学療法業務と管理（5）

■ 評価方法

出席点50%　提出物　50%

■ 教　科　書

書　名：理学療法士過去問題集10年分　共通問題 / 専門問題
著者名：久美出版編集部
出版社：久美　（株）

■ 参　考　書

書　名：理学療法士・作業療法士国家試験必須ポイント
著者名：専門基礎（基礎医学）、専門基礎（臨床医学）、障害別 PT 治療学、基礎 PT 学
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

授業科目	理学療法研究法
学科名	理学療法学専攻

担当者	伊禮　まり子		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法学における研究の意義、目的および研究を遂行する際の具体的な方法論について学ぶ。また、本専攻教員のこれまでの研究活動および現在の研究テーマやゼミでの活動に触れ、今までの学習内容などに基づく興味と合わせて、卒業研究において希望する研究テーマについて整理する。

■ 目　　標

・理学療法学における研究の意義、目的および研究を遂行する際の具体的な方法論について理解することができる。
・今までの学習内容および教員の研究活動などに基づいて、自分の興味のある分野について考え、希望する研究テーマについて整理することができる。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーションと理学療法研究の必要性（EBM・EBPT)
第２回　研究デザイン
第３回　研究計画・研究倫理
第４回　文献検索
第５回　文献研究
第６回　データの処理
第７回　データ特性の表現①
第８回　データ特性の表現②
第９回　統計の基礎
第10回　卒業研究ゼミ、教員研究活動紹介
第11回　卒業研究ゼミ、教員研究活動紹介
第12回　卒業研究ゼミ、教員研究活動紹介
第13回　卒業研究ゼミ、教員研究活動紹介
第14回　レポートまとめ（１）
第15回　レポートまとめ（２）

■ 評価方法

レポート（80%)、出席・態度（20%）

■ 教　科　書

■ 参 考 書

書　名：はじめての研究法　コメディカルの研究法入門
著者名：千住秀明・玉利光太郎
出版社：神陵文庫

書　名：標準理学療法学専門分野　理学療法研究法
著者名：内山靖　編集
出版社：医学書院

書　名：理学療法科学シリーズ　理学療法研究法入門第３版
著者名：理学療法科学学会　監修
出版社：iPEC

書　名：健康・スポーツ科学のための研究方法　研究計画の立て方とデータ処理方法
著者名：出村愼一
出版社：杏林書院

書　名：保健・医療のための研究法入門
著者名：Diana M. Bailey 著　朝倉隆司監訳
出版社：協同医書出版社

■ 留 意 事 項

授業科目	理学療法研究法実習
学科名	理学療法学専攻

担当者	伊禮　まり子		
学年	4年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

研究における計画書や論文、プレゼンテーションの意義、方法について学ぶとともに、実際の自分の卒業研究テーマについて、計画書の作成から具体的な方法論の検討、研究概略のプレゼンテーションを経験する。

■ 目　　標

・研究における計画書の意義、方法を理解し、卒業研究についての研究計画書を作成、発表することができる。
・研究計画書に基づいた研究の方法論を検討することができる。
・研究における論文作成やプレゼンテーションの意義、方法を理解し、卒業研究の概略を発表することができる。

■ 授業計画

第１回　研究計画書の意義、方法
第２回　研究計画書作成
第３回　研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
第４回　研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
第５回　研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
第６回　研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
第７回　研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
第８回　研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
第９回　研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
第10回　研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
第11回　論文作成の意義
第12回　論文作成の方法
第13回　プレゼンテーションの方法
第14回　卒業研究概略発表
第15回　卒業研究概略発表

■ 評価方法

研究計画書20%、研究計画書発表20%、卒業研究概略の内容40%、
卒業研究概略のプレゼンテーション20%

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	理学療法評価学Ⅰ（概論・測定・評価）
学科名	理学療法学専攻

担当者	今井　公一		
学年	1年	総単位数	2単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法の対象者をどのような視点で理解すればよいのか、また対象者の生活像の理解と問題分析のためにどのような具体的な方法があるのか、総論的な内容を学習した後、評価法の各論を学びます。各論の個々の内容は目標を参照。

■ 目　　標

1．生活機能について説明できる　2．理学療法評価の過程について説明できる　3．理学療法評価実施にあたってのリスクについて説明できる　4．形態測定及び関節可動域測定の方法について説明できる　5．筋機能の評価について説明できる　6．筋力測定の方法について説明できる　7．神経機能（意識･知能･高次脳機能、運動麻痺、協調障害、感覚障害、反射・反応、筋緊張）の評価について説明できる　8．神経系に対する個々の評価方法について説明できる

■ 授業計画

第1回　生活機能と理学療法評価
第2回　理学療法評価の過程
第3回　理学療法評価に必要となる視点と臨床的能力
第4回　理学療法評価技術の実際
第5回　日常生活と評価（1）
第6回　日常生活と評価（2）
第7回　からだのしくみと評価（循環器）
第8回　からだのしくみと評価（呼吸器）
第9回　からだのしくみと評価（骨・関節）
第10回　からだのしくみと評価（脳と神経）
第11回　筋骨格系の評価（1）
第12回　筋骨格系の評価（2）
第13回　筋骨格系の評価（3）
第14回　筋骨格系の評価（4）
第15回　筋骨格系の評価（5）
第16回　筋骨格系の評価（6）
第17回　筋骨格系の評価（7）
第18回　筋骨格系の評価（8）
第19回　筋骨格系の評価（9）
第20回　神経系の評価（1）
第21回　神経系の評価（2）
第22回　神経系の評価（3）
第23回　神経系の評価（4）
第24回　神経系の評価（5）
第25回　神経系の評価（6）
第26回　神経系の評価（7）
第27回　神経系の評価（8）
第28回　神経系の評価（9）
第29回　筋・骨格・神経系の評価（総括）
第30回　筋・骨格・神経系の評価（総括）

■ 評価方法

出席点10%　提出物10%　筆記試験80%

■ 教　科　書

書　名：ICF の理解と活用
著者名：上田　敏
出版社：きょうされん

書　名：理学療法評価法
著者名：中島　喜代彦
出版社：神陵文庫

書　名：ブルンストローム臨床運動学
著者名：武田　功　監訳
出版社：医歯薬出版

書　名：ベッドサイドの神経の診かた
著者名：田崎　義昭
出版社：南山堂

書　名：新・徒手筋力検査法
著者名：津山直一他訳
出版社：協同医書出版

書　名：絵でみる脳と神経
著者名：馬場元毅
出版社：医学書院

書　名：リハビリテーション評価
著者名：正門由久
出版社：医歯薬出版

■ 参　考　書

書　名：診察と手技がみえる 1
著者名：古川伸行
出版社：MEDIC　MEDIA

書　名：運動療法のための機能解剖学的触診技術　上肢 / 下肢・体幹
著者名：林　典雄
出版社：メジカルビュー社

書　名：筋骨格系のキネシオロジー
著者名：嶋田智明　監訳
出版社：医歯薬出版

書　名：ROM ナビ（DVD）
著者名：青木主税　他
出版社：Round　Flat

■ 留意事項

授業科目	理学療法評価学Ⅰ（概論）
学科名	理学療法学専攻

担当者	今井　公一		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法の対象者をどのような視点で理解すればよいのか、また対象者の生活像の理解と問題分析のためにどのような具体的な方法があるのか、総論的な内容を学習した後、評価法の各論を学びます。各論の個々の内容は目標を参照。

■ 目　　標

1．生活機能について説明できる　2．理学療法評価の過程について説明できる　3．理学療法評価実施にあたってのリスクについて説明できる　4．形態測定及び関節可動域測定の方法について説明できる　5．筋機能の評価について説明できる　6．筋力測定の方法について説明できる　7．神経機能（意識･知能･高次脳機能、運動麻痺、協調障害、感覚障害、反射・反応、筋緊張）の評価について説明できる　8．神経系に対する個々の評価方法について説明できる

■ 授業計画

第１回　生活機能と理学療法評価
第２回　理学療法評価の過程
第３回　理学療法評価に必要となる視点と臨床的能力
第４回　理学療法評価技術の実際
第５回　日常生活と評価（１）
第６回　日常生活と評価（２）
第７回　からだのしくみと評価（循環器）
第８回　からだのしくみと評価（呼吸器）
第９回　からだのしくみと評価（骨・関節）
第10回　からだのしくみと評価（脳と神経）
第11回　筋骨格系の評価（１）
第12回　筋骨格系の評価（２）
第13回　筋骨格系の評価（３）
第14回　筋骨格系の評価（４）
第15回　筋骨格系の評価（５）
第16回　筋骨格系の評価（６）
第17回　筋骨格系の評価（７）
第18回　筋骨格系の評価（８）
第19回　筋骨格系の評価（９）
第20回　神経系の評価（１）
第21回　神経系の評価（２）
第22回　神経系の評価（３）
第23回　神経系の評価（４）
第24回　神経系の評価（５）
第25回　神経系の評価（６）
第26回　神経系の評価（７）
第27回　神経系の評価（８）
第28回　神経系の評価（９）
第29回　筋・骨格・神経系の評価（総括）
第30回　筋・骨格・神経系の評価（総括）

■ 評価方法

出席点10%　提出物10%　筆記試験80%

■ 教　科　書

書　名：ICF の理解と活用
著者名：上田　敏
出版社：きょうされん

書　名：理学療法評価法
著者名：中島　喜代彦
出版社：神陵文庫

書　名：ブルンストローム臨床運動学
著者名：武田　功　監訳
出版社：医歯薬出版

書　名：ベッドサイドの神経の診かた
著者名：田崎　義昭
出版社：南山堂

書　名：新・徒手筋力検査法
著者名：津山直一他訳
出版社：協同医書出版

書　名：絵でみる脳と神経
著者名：馬場元毅
出版社：医学書院

書　名：リハビリテーション評価
著者名：正門由久
出版社：医歯薬出版

■ 参　考　書

書　名：診察と手技がみえる 1
著者名：古川伸行
出版社：MEDIC　MEDIA

書　名：運動療法のための機能解剖学的触診技術　上肢 / 下肢・体幹
著者名：林　典雄
出版社：メジカルビュー社

書　名：筋骨格系のキネシオロジー
著者名：嶋田智明　監訳
出版社：医歯薬出版

書　名：ROM ナビ（DVD）
著者名：青木主税　他
出版社：Round　Flat

■ 留意事項

授業科目	理学療法評価学Ⅱ（測定と評価）
学科名	理学療法学専攻

担当者	今井　公一		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法の対象者をどのような視点で理解すればよいのか、また対象者の生活像の理解と問題分析のためにどのような具体的な方法があるのか、総論的な内容を学習した後、評価法の各論を学びます。各論の個々の内容は目標を参照。

■ 目　　標

1．生活機能について説明できる　2．理学療法評価の過程について説明できる　3．理学療法評価実施にあたってのリスクについて説明できる　4．形態測定及び関節可動域測定の方法について説明できる　5．筋機能の評価について説明できる　6．筋力測定の方法について説明できる　7．神経機能（意識･知能･高次脳機能、運動麻痺、協調障害、感覚障害、反射・反応、筋緊張）の評価について説明できる　8．神経系に対する個々の評価方法について説明できる

■ 授業計画

第1回　生活機能と理学療法評価
第2回　理学療法評価の過程
第3回　理学療法評価に必要となる視点と臨床的能力
第4回　理学療法評価技術の実際
第5回　日常生活と評価（1）
第6回　日常生活と評価（2）
第7回　からだのしくみと評価（循環器）
第8回　からだのしくみと評価（呼吸器）
第9回　からだのしくみと評価（骨・関節）
第10回　からだのしくみと評価（脳と神経）
第11回　筋骨格系の評価（1）
第12回　筋骨格系の評価（2）
第13回　筋骨格系の評価（3）
第14回　筋骨格系の評価（4）
第15回　筋骨格系の評価（5）
第16回　筋骨格系の評価（6）
第17回　筋骨格系の評価（7）
第18回　筋骨格系の評価（8）
第19回　筋骨格系の評価（9）
第20回　神経系の評価（1）
第21回　神経系の評価（2）
第22回　神経系の評価（3）
第23回　神経系の評価（4）
第24回　神経系の評価（5）
第25回　神経系の評価（6）
第26回　神経系の評価（7）
第27回　神経系の評価（8）
第28回　神経系の評価（9）
第29回　筋・骨格・神経系の評価（総括）
第30回　筋・骨格・神経系の評価（総括）

■ 評価方法

出席点10%　提出物10%　筆記試験80%

■ 教　科　書

書　名：ICF の理解と活用
著者名：上田　敏
出版社：きょうされん

書　名：理学療法評価法
著者名：中島　喜代彦
出版社：神陵文庫

書　名：ブルンストローム臨床運動学
著者名：武田　功　監訳
出版社：医歯薬出版

書　名：ベッドサイドの神経の診かた
著者名：田崎　義昭
出版社：南山堂

書　名：新・徒手筋力検査法
著者名：津山直一他訳
出版社：協同医書出版

書　名：絵でみる脳と神経
著者名：馬場元毅
出版社：医学書院

書　名：リハビリテーション評価
著者名：正門由久
出版社：医歯薬出版

■ 参　考　書

書　名：診察と手技がみえる 1
著者名：古川伸行
出版社：MEDIC　MEDIA

書　名：運動療法のための機能解剖学的触診技術　上肢 / 下肢・体幹
著者名：林　典雄
出版社：メジカルビュー社

書　名：筋骨格系のキネシオロジー
著者名：嶋田智明　監訳
出版社：医歯薬出版

書　名：ROM ナビ（DVD）
著者名：青木主税　他
出版社：Round　Flat

■ 留意事項

授業科目	理学療法評価学Ⅱ（評価プロセス）
学科名	理学療法学専攻

担当者	今井　公一		
学　　年	２年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法評価学Ⅰで学んだ個々の検査・測定方法に加えて、各論的に重要な評価方法を学び、後半は臨床適応のために今まで学んできた評価方法についての理解を深めます。

■ 目　　標

１．各論で学んだ個々の評価方法について説明できる
２．治療プログラムの立案を前提とした臨床的思考について考えを述べることができる。

■ 授業計画

第１回　理学療法評価各論　（１）
第２回　理学療法評価各論　（２）
第３回　理学療法評価各論　（３）
第４回　理学療法評価各論　（４）
第５回　理学療法評価各論　（５）
第６回　理学療法評価各論　（６）
第７回　理学療法評価各論　（７）
第８回　理学療法評価各論　（８）
第９回　理学療法評価　臨床適応（１）
第10回　理学療法評価　臨床適応（２）
第11回　理学療法評価　臨床適応（３）
第12回　理学療法評価　臨床適応（４）
第13回　理学療法評価　臨床適応（５）
第14回　理学療法評価　臨床適応（６）
第15回　理学療法評価　総括

■ 評価方法

出席点10%　提出物10%　筆記試験80%

■ 教　科　書

書　名：理学療法評価法
著者名：中島　喜代彦
出版社：神陵文庫

書　名：運動療法のための機能解剖学的触診技術　上肢 / 下肢・体幹
著者名：林　典雄
出版社：メジカルビュー社

書　名：リハビリテーション評価
著者名：正門由久
出版社：医歯薬出版

書　名：ベッドサイドの神経の診かた
著者名：田崎　義昭
出版社：南山堂

書　名：新・徒手筋力検査法
著者名：津山直一他訳
出版社：協同医書出版

書　名：絵でみる脳と神経
著者名：馬場元毅
出版社：医学書院

書　名：診察と手技がみえる 1
著者名：古川伸行
出版社：MEDIC　MEDIA

■ 参　考　書

書　名：理学療法評価学　改訂第 4 版
著者名：松澤　正
出版社：金原出版

書　名：DVD　研修医のための基本技能　神経学的診察 1、 2
著者名：大石　実
出版社：丸善

書　名：実践　早期離床完全マニュアル
著者名：かつ川　元
出版社：慧文社

■ 留 意 事 項

授業科目	理学療法評価学Ⅲ（評価プロセス）
学科名	理学療法学専攻

担当者	今井　公一		
学　　年	２年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法評価学Ⅰで学んだ個々の検査・測定方法に加えて、各論的に重要な評価方法を学び、後半は臨床適応のために今まで学んできた評価方法についての理解を深めます。

■ 目　　標

１．各論で学んだ個々の評価方法について説明できる
２．治療プログラムの立案を前提とした臨床的思考について考えを述べることができる。

■ 授業計画

第１回　理学療法評価各論　（１）
第２回　理学療法評価各論　（２）
第３回　理学療法評価各論　（３）
第４回　理学療法評価各論　（４）
第５回　理学療法評価各論　（５）
第６回　理学療法評価各論　（６）
第７回　理学療法評価各論　（７）
第８回　理学療法評価各論　（８）
第９回　理学療法評価　臨床適応（１）
第10回　理学療法評価　臨床適応（２）
第11回　理学療法評価　臨床適応（３）
第12回　理学療法評価　臨床適応（４）
第13回　理学療法評価　臨床適応（５）
第14回　理学療法評価　臨床適応（６）
第15回　理学療法評価　総括

■ 評価方法

出席点10%　提出物10%　筆記試験80%

■ 教　科　書

書　名：理学療法評価法
著者名：中島　喜代彦
出版社：神陵文庫

書　名：運動療法のための機能解剖学的触診技術　上肢 / 下肢・体幹
著者名：林　典雄
出版社：メジカルビュー社

書　名：リハビリテーション評価
著者名：正門由久
出版社：医歯薬出版

書　名：ベッドサイドの神経の診かた
著者名：田崎　義昭
出版社：南山堂

書　名：新・徒手筋力検査法
著者名：津山直一他訳
出版社：協同医書出版

書　名：絵でみる脳と神経
著者名：馬場元毅
出版社：医学書院

書　名：診察と手技がみえる 1
著者名：古川伸行
出版社：MEDIC　MEDIA

■ 参　考　書

書　名：理学療法評価学　改訂第 4 版
著者名：松澤　正
出版社：金原出版

書　名：DVD　研修医のための基本技能　神経学的診察 1、 2
著者名：大石　実
出版社：丸善

書　名：実践　早期離床完全マニュアル
著者名：かつ川　元
出版社：慧文社

■ 留 意 事 項

授業科目	理学療法評価学実習
学科名	理学療法学専攻

担当者	牧之瀬　一博		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

3年次で行う理学療法評価学実習は，臨床場面を強く意識して行う。特に，症例プレゼンテーションや模擬的なカンファレンス，ペーパーペイシェントに対する評価の臨床思考過程から実技までを行う．これらの実施を通して，総合臨床実習に向けた臨床思考能力及び評価技術をトレーニングする場とする．また，各疾患別の理学療法評価を体系的に学ぶ.

■ 目　　標

カンファレンスを通して，臨床思考の在り方を学ぶ.
基本的な疾患に対して，障害像の理解と理学療法評価を学ぶ.
総合臨床実習に向けた基本的な評価技術の確立を目標とする.

■ 授業計画

第1回　理学療法評価学実習の目指すところ（症候障害学ならびにクリニカル・リーズニング）
第2回　カンファレンス形式による症例プレゼンテーションと模擬カンファレンス①
第3回　カンファレンス形式による症例プレゼンテーションと模擬カンファレンス②
第4回　カンファレンス形式による症例プレゼンテーションと模擬カンファレンス③
第5回　総合臨床実習に向けたオリエンテーション
　　実習に向けた演習（レポートなどの記載方法）
第6回　脳血管症例に対する臨床思考過程，検査測定実技，統合解釈
第7回　脳血管症例に対する臨床思考過程，検査測定実技，統合解釈
第8回　神経変性疾患（パーキンソン病など）症例に対する臨床思考過程，検査測定実技，統合解釈
第9回　神経変性疾患（パーキンソン病など）症例に対する臨床思考過程，検査測定実技，統合解釈
第10回　運動器疾患（腰椎ヘルニアなど）症例に対する臨床思考過程，検査測定実技，統合解釈
第11回　運動器疾患（大腿骨頚部骨折など）症例に対する臨床思考過程，検査測定実技，統合解釈
第12回　基本的な症例に対する医療面接・検査測定・動作観察など理学療法評価過程の実技演習
第13回　その他の疾患に関する評価実習
　　例として、呼吸循環不全・脊髄損傷・脳性麻痺の障害像の理解と理学療法評価
第14回　その他の疾患に関する評価実習
　　例として、呼吸循環不全・脊髄損傷・脳性麻痺の障害像の理解と理学療法評価
第15回　基本的なクリニカルリーズニングの知識のまとめ

■ 評価方法

発表点（20%），実技試験（40%），筆記試験（40%）
出席（欠席：－4点、遅刻：－2点）遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする.

■ 教　科　書

書　名：症候障害学序説　理学療法の臨床思考過程モデル
著者名：内山　靖
出版社：文光堂

書　名：標準理学療法学 専門分野 理学療法評価学（第２版）
著者名：内山靖（編集）
出版社：医学書院

■ 参　考　書

書　名：ベッドサイドの神経の診かた
著者名：田崎　義昭
出版社：南山堂

書　名：新・徒手筋力検査法　原著第８版
著者名：津山直一，他（訳）
出版社：共同医書出版

書　名：神経診察クローズアップ　正しい病巣診断のコツ
著者名：鈴木則宏（編集）
出版社：メジカルレビュー社

■ 留 意 事 項

授業科目	理学療法評価学演習
学科名	理学療法学専攻

担当者	牧之瀬　一博		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

「理学療法評価学」で学んだ基本的な検査測定手技のより臨床的意義と，各種神経学的検査を習得する．各種検査の臨床的意義や結果の判定方法を考察し，学生同士で正確に検査を行い，判定できることを目標にする．また臨床思考過程の理解のために，ペーパーペイシェントを用いて演習を行う．演習は実技トレーニングと思考能力トレーニングから構成する．

■ 目　　標

各種検査の基本的方法を学生同士間で正確に実施することができる．
ペーパーペイシェントの障害像から評価すべき項目を挙げることができる．
行動学習を通して，国家試験頻出レベルの知識を自分のものとする．

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
　　理学療法評価学演習の目指すところ
第２回　カルテ情報の診方：情報収集とコミュニケーション演習
　　バイタルサインの診方
第３回　神経学的検査（腱反射・筋緊張検査・病的反射）
　　中枢性麻痺と末梢性麻痺の理解と筋緊張検査
第４回　神経学的検査（腱反射・筋緊張検査・病的反射）
　　中枢性麻痺と末梢性麻痺の理解と筋緊張検査
第５回　感覚の評価
　　感覚検査の意義と実技，病態との兼ね合い
第６回　徒手筋力検査（上肢・体幹）
　　筋力に関する演習・実技
第７回　徒手筋力検査（下肢・体幹）
　　筋力に関する演習・実技
第８回　関節可動域検査（上肢・体幹）
　　関節可動域制限に関する演習・実技
第９回　関節可動域検査（下肢・体幹）
　　関節可動域制限に関する演習・実技
第10回　痛みの基本的評価
　　形態測定
第11回　ペーパーペイシェントを用いた中枢神経障害疾患（脳血管障害）の障害像の理解
第12回　ペーパーペイシェントを用いた中枢神経障害疾患（神経変性疾患）の障害像の理解
第13回　ペーパーペイシェントを用いた運動器疾患の障害像の理解
第14回　臨床実習Ⅲオリエンテーション
　　臨床実習Ⅲに向けた演習
第15回　ベーシックなバイタルサインの測定，関節可動域測定，徒手筋力検査，各種基本的検査法
　　まとめと実技

■ 評価方法

提出課題（20%），実技試験（30%），筆記試験（50%）
出席（欠席：－4点、遅刻：－2点）遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする．

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法学 専門分野 理学療法評価学（第２版）
著者名：内山靖（編集）
出版社：医学書院

書　名：新・徒手筋力検査法　原著第８版
著者名：津山直一，他（訳）
出版社：共同医書出版

書　名：ベッドサイドの神経の診かた
著者名：田崎　義昭
出版社：南山堂

■ 参　考　書

書　名：神経診察クローズアップ　正しい病巣診断のコツ
著者名：鈴木則宏（編集）
出版社：メジカルレビュー社

■ 留意事項

教科書は講義時に指定する．初回講義では，指定教科書は必要ない．

授業科目	運動療法学Ⅰ（概論）
学科名	理学療法学専攻

担当者	牧之瀬　一博		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法における運動療法の位置づけと基本的概念を講義と演習から学ぶ.
解剖学・運動学・生理学などの基礎科目に立脚した学びを通して，運動療法を理解する.

■ 目　　標

各種運動療法技術の理論・目的・方法・適応について理解し，説明できること.
解剖・運動・生理学などに裏打ちされた運動療法を理解する.

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
　　運動療法の概念：定義や目的，対象疾患，EBM
第２回　関節可動域障害に対する運動療法
第３回　関節可動域障害に対する運動療法
第４回　関節可動域障害に対する運動療法
第５回　筋力低下に対する運動療法
第６回　筋力低下に対する運動療法
第７回　筋力低下に対する運動療法
第８回　持久力増強運動
第９回　運動と呼吸・循環・代謝
第10回　協調性障害に対する運動療法
第11回　一般的な運動療法についてのまとめ
第12回　運動学習を目的とした運動療法
第13回　痛みに対する運動療法
　　特殊な運動療法
第14回　組織の病態生理と修復
第15回　講義全体のまとめ

■ 評価方法

提出課題（20%），小テスト（20%）, 筆記試験（60%）
出席（欠席：－4点、遅刻：－2点）遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする.

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法学 専門分野 運動療法学 総論（第３版）
著者名：吉尾雅春編（編集）
出版社：医学書院

■ 参　考　書

書　名：エビデンスに基づく理学療法　活用と臨床思考過程の実際
著者名：内山靖（編集）
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

授業科目	運動療法学Ⅰ
学科名	理学療法学専攻

担当者	牧之瀬　一博		
学年	２年	総単位数	２単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法における運動療法の位置づけと基本的概念を講義と演習から学ぶ.
解剖学・運動学・生理学などの基礎科目に立脚した学びを通して，運動療法を理解する.

■ 目　　標

各種運動療法技術の理論・目的・方法・適応について理解し，説明できること.
解剖・運動・生理学などに裏打ちされた運動療法を理解する.

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
　　運動療法の概念：定義や目的，対象疾患，EBM
第２回　関節可動域障害に対する運動療法
第３回　関節可動域障害に対する運動療法
第４回　関節可動域障害に対する運動療法
第５回　筋力低下に対する運動療法
第６回　筋力低下に対する運動療法
第７回　筋力低下に対する運動療法
第８回　持久力増強運動
第９回　運動と呼吸・循環・代謝
第10回　協調性障害に対する運動療法
第11回　一般的な運動療法についてのまとめ
第12回　運動学習を目的とした運動療法
第13回　痛みに対する運動療法
　　特殊な運動療法
第14回　組織の病態生理と修復
第15回　講義全体のまとめ

■ 評価方法

提出課題（20%），小テスト（20%）, 筆記試験（60%）
出席（欠席：－4点、遅刻：－2点）遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする.

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法学 専門分野 運動療法学 総論（第３版）
著者名：吉尾雅春編（編集）
出版社：医学書院

■ 参　考　書

書　名：エビデンスに基づく理学療法　活用と臨床思考過程の実際
著者名：内山靖（編集）
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

授業科目	運動療法学Ⅱ
学科名	理学療法学専攻

担当者	島　雅人		
学年	3年	総単位数	2単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

運動療法学Ⅰで学んだ知識をもとに、学生間での実技演習を通して各運動療法の基本的な技術を身につける。また、障害を有する対象者に対して、どのようにリスクを管理しながら効果的な運動療法を実施していくかを思考し模擬的に実施する。そのため、本学の履修においては、運動療法の原則や疾患の知識を復習しながら学んでいく。

■ 目　　標

1．運動療法に必要な解剖・運動・生理学の知識及び運動療法の原則について理解を深める
2．学生同士で各運動療法技術を実施することができる
3．各運動療法技術を障害のある対象者に実施する際の注意点（リスク）を理解できる
4．各障害を想定した運動療法を模擬的に実施できる

■ 授業計画

第1回　コースガイダンス
　　運動療法Ⅰで学習した内容の確認 / 四肢・体幹の触れ方、他動運動の仕方
第2回　四肢・体幹の触れ方、他動運動の仕方
第3回　四肢・体幹の触れ方、他動運動の仕方
第4回　四肢・体幹の触れ方、他動運動の仕方
第5回　関節可動域制限の要因と治療の実際
第6回　関節可動域制限の要因と治療の実際
第7回　関節可動域制限の要因と治療の実際
第8回　関節可動域制限の要因と治療の実際
第9回　関節可動域制限の要因と治療の実際
第10回　関節可動域制限の要因と治療の実際
第11回　自動介助運動の仕方、神経筋活動の抑制と促通
第12回　自動介助運動の仕方、神経筋活動の抑制と促通
第13回　自動介助運動の仕方、神経筋活動の抑制と促通
第14回　自動介助運動の仕方、神経筋活動の抑制と促通
第16回　抵抗運動の方法
第17回　抵抗運動の方法
第18回　筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
第19回　筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
第20回　筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
第21回　筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
第22回　筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
第23回　筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
第24回　全身持久力が低下する要因と運動療法の実際
第25回　全身持久力が低下する要因と運動療法の実際
第26回　全身持久力が低下する要因と運動療法の実際
第27回　全身持久力が低下する要因と運動療法の実際
第28回　実技の到達度確認
第29回　実技の到達度確認
第30回　本講義のまとめ

■ 評価方法

定期試験70%　課題15%　実技テスト15%

■ 教　科　書

書　名：最新　運動療法大全“基礎と実践”＆“エビデンス情報”＜ DVD 付＞ペーパーバック普及版
著者名：キャロリン・キスナー / リン・アラン・コルビー　他
出版社：ガイアブックス

■ 参　考　書

書　名：標準理学療法学 専門分野　運動療法学総論　第３版
著者名：シリーズ監修：奈良　勲　編集：吉尾　雅春
出版社：医学書院

書　名：関節可動域制限―病態の理解と治療の考え方　第２版
著者名：沖田　実
出版社：三輪書店

書　名：骨格筋の構造・機能と可塑性―理学療法のための筋機能学　原著第３版
著者名：Richard L. Lieber（著），望月 久（翻訳）
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：関節機能解剖学に基づく整形外科運動療法ナビゲーション : 上肢
著者名：整形外科リハビリテーション学会
出版社：メジカルビュー社

書　名：関節機能解剖学に基づく整形外科運動療法ナビゲーション : 下肢・体幹
著者名：整形外科リハビリテーション学会
出版社：メジカルビュー社

■ 留意事項

授業科目	小児期理学療法治療学
学科名	理学療法学専攻

担当者	藪中　良彦		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

正常発達と共に各疾患別の発達を理解し、小児理学療法評価法を学び、各小児疾患別の治療プログラム立案について学習する。

■ 目　　標

脳性麻痺や二分脊椎や筋ジストロフィー等の小児理学療法対象疾患のある子ども達に対して、適切な評価･治療が行えるようになること。

■ 授業計画

第１回　姿勢反射、１歳までの運動発達
第２回　脳性麻痺概論
第３回　脳性麻痺概論，小児理学療法評価法
第４回　脳性麻痺概論，小児理学療法評価法
第５回　脳性麻痺概論，小児理学療法評価法
第６回　脳性麻痺　痙直型片麻痺
第７回　脳性麻痺　痙直型両麻痺
第８回　脳性麻痺　痙直型四肢麻痺
第９回　脳性麻痺　アテトーゼ型
第10回　脳性麻痺　アテトーゼ型，失調型
　　小児整形疾患
第11回　小児整形疾患
第12回　子どもの遺伝性疾患
第13回　重症心身障害
第14回　子どもの呼吸障害
第15回　低出生体重児・ハイリスク児

■ 評価方法

出席（欠席－4点、遅刻／早退－2点）
小テスト（40点）
定期試験（60点）

■ 教　科　書

書　名：イラストでわかる小児理学療法
著者名：上杉雅之　監修
出版社：医歯薬出版株式会社

■参 考 書

書　名：小児理学療法学テキスト
著者名：細田多穂
出版社：南江堂

書　名：理学療法　Mook 15　子どもの理学療法　脳性麻痺の早期アプローチから地域理学療法まで
著者名：黒川幸雄、高橋正明、鶴見隆正
出版社：三輪書店

書　名：PT マニュアル　小児の理学療法
著者名：河村光俊
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：発達障害児の新しい療育　こどもと家族とその未来のために
著者名：今川忠男
出版社：三輪書店

書　名：モーターコントロール　原著第４版　運動制御の理論から臨床実践へ
著者名：田中 繁、高橋 明
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：乳児の発達　写真でみる０歳児
著者名：髙橋孝文
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：GMFM －粗大運動能力尺度
著者名：近藤 和泉、福田 道隆、青山 香
出版社：医学書院

書　名：Clinics in Developmental Medicine　Gross Motor Function Measure
（GMFM-66 & GMFM-88）User's Manual　2nd Edition
著者名：Dianne J. Russell、Peter L. Rosenbaum、Lisa M. Avery、Marilyn Wright
出版社：Mac Keith Press

書　名：Gross Motor Function Measure (GMFM) Self-Instructional Training CD-ROM
著者名：Mary Lane、Dianne Russell
出版社：Mac Keith Press

書　名：PEDI　リハビリテーションのための子どもの能力低下評価表
著者名：里宇明元、近藤和泉、問川博之
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：脳性まひ児の24時間姿勢ケア－ The Chailey Approach to Postural Management
著者名：今川忠男
出版社：三輪書店

書　名：脳損傷による異常姿勢反射活動
著者名：梶浦 一郎
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：脳性麻痺の運動障害　原著第２版
著者名：梶浦 一郎
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：脳性麻痺の類型別運動発達
著者名：梶浦 一郎
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：脳性まひ児の家庭療育　原著第３版
著者名：梶浦 一郎
出版社：医歯薬出版株式会社

■参 考 書

書　名：赤ちゃんの運動発達　絵でみる治療アプローチ
著者名：芝田利生、櫻庭修
出版社：協同医書出版社

書　名：誕生から１歳まで　機能的姿勢－運動スキルの発達
著者名：髙橋智宏
出版社：協同医書出版社

書　名：アテトーゼ・失調・低緊張の評価と治療：子どもへの感覚運動入力の実際
著者名：調 誠也、調 信子、鈴木 ほがら
出版社：協同医書出版社

書　名：ボバース概念の実戦ハンドブック
著者名：紀伊克昌
出版社：パシフィックサプライ株式会社

書　名：子育てと健康シリーズ17　子どもの障害をどう受容するか
著者名：中田 洋二郎
出版社：大月書店

書　名：子育てと健康シリーズ21　医療的ケアハンドブック
著者名：横浜「難病児の在宅療育」を考える会
出版社：大月書店

書　名：240動画でわかる赤ちゃんの発達地図―胎児・新生児期から歩行するまでの発達のつながりが理解できる
著者名：木原 秀樹
出版社：メディカ出版

書　名：ネオネイタルケア2009年秋季増刊新生児発達ケア実践マニュアル
　　（ネオネイタルケア 09年秋季増刊）
著者名：木原 秀樹
出版社：メディカ出版

書　名：新生児理学療法
著者名：大城昌平 , 木原秀樹
出版社：メディカルプレス

書　名：視覚機能の発達障害
著者名：紀伊克昌
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：手の発達機能障害
著者名：紀伊克昌
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：EBOT 時代の評価法　作業療法ジャーナル増刊号　Vol.38. No. 7 . 2004
出版社：三輪書店

書　名：上肢 - 上部体幹の機能改善―評価と治療アプローチ
著者名：高橋 智宏、柴田 秀雄、辻 薫
出版社：協同医書出版社

書　名：発達障害と作業療法（基礎編）
著者名：岩崎 清隆、鎌倉 矩子、山根 寛、二木 淑子
出版社：三輪書店

書　名：発達障害と作業療法（実践編）
著者名：岩崎 清隆、岸本 光夫、鎌倉 矩子、山根 寛
出版社：三輪書店

■ 参 考 書

書　名：脳性麻痺のクリニカルリーズニングアプローチ―理学療法・作業療法評価と治療
著者名：上杉雅之、成瀬進
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：イラストでわかるスペシャルシーティング―姿勢評価アプローチ
著者名：上杉雅之、成瀬進
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：重症心身障害療育マニュアル
著者名：江草 安彦、岡田 喜篤、鈴木 康之、末光 茂
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：重症心身障害療育マニュアル
著者名：江草 安彦、岡田 喜篤、末光 茂、鈴木 康之
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：重症児の QOL(クオリティー・オブ・ライフ)―「医療的ケア」ガイド
著者名：藤岡 一郎
出版社：クリエイツかもがわ

書　名：こどもの整形外科疾患の診かた―診断・治療から患者家族への説明まで
著者名：亀ヶ谷 真琴
出版社：医学書院

書　名：脳性麻痺リハビリテーションガイドライン　第２版
著者名：日本リハビリテーション医学会
出版社：医学書院

■ 留 意 事 項

授業科目	呼吸器障害理学療法治療学
学科名	理学療法学専攻

担当者	野村　卓生		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

「呼吸と運動」に関する解剖学・生理学的な基本知識を整理し、呼吸器疾患の病態およびその基本治療を学ぶ。酸素化能障害や換気能力障害などの呼吸器の障害に対する評価と理学療法について、その禁忌やリスク管理をふまえて講義し、実技実習を行う。

■ 目　　標

肺解剖 T シャツやペットボトルを利用した肺胞モデルの製作、フィジカルアセスメント、呼吸機能検査や運動耐容能評価の実習もふまえ、疾患、病態、病期（急性期、慢性期）に応じた理学療法について理解を深める。

■ 授業計画

第１回　「運動と呼吸」
内部障害の範囲と特徴を理解する。呼吸器系の役割と運動時の適応、呼吸器系の障害が運動を制限するメカニズムを学習する。

第２回　「酸素化能、換気能力」
酸素化能障害、換気能力障害の基本的概念をふまえ理解する。酸素化能、換気能力の基本的な評価法について学習する。

第３回　「呼吸理学療法における評価１」
基本となる胸部の観察、呼吸困難の評価方法、打診、聴診の実際を学習する。

第４回　「呼吸理学療法における評価２」
呼吸機能、運動耐容能の評価方法について、その実際を学習する。

第５回　「慢性閉塞性肺疾患（COPD）の理学療法」
COPD における障害、呼吸器疾患患者の ADL および QOL 低下の特徴を理解し、特有の評価方法について学習する。他部門からの情報、理学療法評価結果に基づいた理学療法を学習する。

第６回　「拘束性肺疾患、外科手術後、その他呼吸器疾患の理学療法」
疾患、病態の特徴を理解し、特有の評価方法、理学療法について学習する。外科手術が生体に与える影響を理解し、術前後および急性増悪例への理学療法を学習する。

第７回　「排痰法」
呼吸リハビリテーションにおける排痰法の目的とその適応、徒手的および体位肺痰法の実際を学習する。

第８回　「理学療法士による吸引行為」
吸引プロトコル（日本理学療法士協会）に沿って吸引のための基礎知識、実際の概要を学習する。

■ 評価方法

期末試験　70%、提出課題（場合によっては小テスト）　30%

■ 教　科　書

書　名：内部障害理学療法学テキスト
著者名：細田多穂　監、山崎裕司・川俣幹雄・丸岡　弘　編集
出版社：南江堂

■ 参 考 書

書　名：ゴールド・マスター・テキスト　内部障害系理学療法学
著者名：柳澤　健　編集
出版社：メジカルビュー社

書　名：動画でわかる呼吸リハビリテーション　第２版
著者名：高橋仁美・塩谷隆信・宮川哲夫
出版社：中山書店

書　名：呼吸・心臓リハビリテーション　ビジュアル実践リハ
著者名：高橋哲也・間瀬教史
出版社：羊土社

書　名：理学療法テキスト 内部障害理学療法学 呼吸
著者名：石川朗・玉木　彰
出版社：中山書店

書　名：DVD で学ぶ呼吸理学療法テクニック　呼吸と手技のタイミングがわかる動画91
著者名：玉木　彰
出版社：南江堂

書　名：呼吸リハビリテーションマニュアル　運動療法
著者名：日本呼吸管理学会、日本呼吸器学会、日本理学療法士協会　編
出版社：日本呼吸管理学会、日本呼吸器学会、日本理学療法士協会

書　名：呼吸機能検査ガイドライン、呼吸機能検査ガイドラインⅡ
著者名：日本呼吸器学会
出版社：メディカルレビュー社

書　名：酸素療法ガイドライン
著者名：日本呼吸器学会、日本呼吸管理学会　編
出版社：メディカルレビュー社

■ 留 意 事 項

授業では、個人情報に関わる資料を提示する場合がある。取り扱いには十分に留意しなければならないことを認識して望むこと。授業には出席することが必須の前提であり、無断欠席、遅刻には十分に注意し、実習にも積極的に参加すること。実習を行う際には大学指定のジャージや白衣（KC）など実技を行いやすい衣服を着用し、爪は短く切っておくこと。

授業科目	代謝障害理学療法治療学
学科名	理学療法学専攻

担当者	野村　卓生		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

「代謝と運動」に関する生理学・生化学的な基本知識を整理し、代表的な代謝障害である糖尿病の病態およびその基本治療を学ぶ。長期にわたる糖代謝障害によって発症する糖尿病特有の合併症や足病変への理学療法、理学療法士の関わりについて講義し、実技実習を行う。

■ 目　　標

自己血糖測定、糖尿病足病変のスクリーニング方法や糖尿病多発神経障害の簡易診断基準の実習もふまえ、病型、病態、病期に応じた理学療法について理解を深める。

■ 授業計画

第１回　「代謝と運動」
内部障害の範囲と特徴を理解する。運動時における代謝系の適応、代謝系の障害が運動を制限するメカニズムを学習する。

第２回　「代謝疾患総論」
糖尿病、肥満症、メタボリックシンドローム、脂質異常症等について、日本における患者数、疾患の概要と診断基準等の概略について学習する。

第３回　「糖尿病合併症」
低血糖に代表される急性合併症、糖尿病特有の慢性合併症（網膜症・腎症・神経障害）について学習する。

第４回　「糖尿病管理」
糖尿病の基本的治療法、とくに運動療法についてその概要を学習する。また、自己管理を支援するための患者教育の重要性を理解する。

第５回　「糖尿病理学療法１（導入編）」
一般的な糖尿病患者、および糖尿病合併症を有する患者への理学療法、理学療法士の関わりについて、その具体を演習形式で学習する。

第６回　「糖尿病理学療法２（実践編）」
実際に自己血糖測定を行い、理学療法を効果的かつ安全に進める上で必要な血液生化学的データの理解を深める。

第７回　「糖尿病理学療法３（応用編）」
振動覚検査、アキレス腱反射など糖尿病神経障害の簡易診断基準の一つともなる身体評価について演習形式で学習する。また、その結果を如何に患者教育に活用するかについて学習する。

第８回　「糖尿病理学療法４（総合演習）」
仮想症例を提示し、問題点の抽出、プログラムの作成から効果判定をどのように行うかまでの一連の理学療法介入の思考プロセスを経験する。

■ 評価方法

期末試験　70%、提出課題（場合によっては小テスト）　30%

■ 教　科　書

書　名：内部障害理学療法学テキスト　改訂第２版
著者名：細田多穂　監修、山崎裕司・川俣幹雄・丸岡　弘　編集
出版社：南江堂

■参 考 書

書　名：考える理学療法 内部障害編 評価から治療手技の選択
著者名：丸山仁司・竹井　仁・黒澤和生　常任編集、石黒友康・高橋哲也　ゲスト編集
出版社：文光堂

書　名：標準理学療法学　専門分野　内部障害理学療法学
著者名：奈良　勲　シリーズ監修、吉尾雅春・高橋哲也　編集
出版社：医学書院

書　名：標準理学療法学　専門分野　理学療法　臨床実習とケーススタディ第２版
著者名：奈良　勲　シリーズ監修、鶴見隆正・辻下守弘　編集
出版社：医学書院

書　名：標準理学療法学　専門分野　病態運動学
著者名：奈良勲　シリーズ監修、星文彦・新小田幸一・臼田滋　編集
出版社：医学書院

書　名：運動療法学　第２版
著者名：市橋則明　編集
出版社：文光堂

書　名：歩行を診る　観察から始める理学療法実践
著者名：奈良　勲　監修、松尾善美　編集
出版社：文光堂

書　名：糖尿病療養指導ガイドブック2014
著者名：日本糖尿病療養指導士認定機構　編集
出版社：メディカルレビュー社

書　名：科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン2013
著者名：日本糖尿病学会　編集
出版社：南江堂

■留 意 事 項

授業では、個人情報に関わる資料を提示する場合がある。取り扱いには十分に留意しなければならないことを認識して望むこと。授業には出席することが必須の前提であり、無断欠席、遅刻には十分に注意し、実習にも積極的に参加すること。実習を行う際には大学指定のジャージや白衣（KC）など実技を行いやすい衣服を着用し、爪は短く切っておくこと。血糖測定の実習では、穿刺器具を使用するため取扱いに留意し、感染に関しては特に注意すること。

授業科目	中枢神経障害理学療法治療学
学科名	理学療法学専攻

担当者	岩田　篤		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

中枢神経疾患の理学療法における脳神経科学の重要性を説き，根拠ある理学療法を展開するための基礎知識の習得とその方法論を学習する。

■ 目　　標

中枢神経疾患による理学療法において，検査・測定結果から科学的根拠に基づいた臨床推論ができることを目標とする。

■ 授業計画

第１回　中枢神経疾患理学療法の脳神経科学の重要性と脳神経科学の理学療法への応用
第２回　脳神経解剖と脳神経機能系
第３回　脳血管障害の病態と症候
第４回　脳血管障害の理学療法
第５回　パーキンソン病の病態と症候
第６回　パーキンソン病の理学療法
第７回　運動失調症の病態と症候
第８回　運動失調症の理学療法

■ 評価方法

筆記試験　100％

■ 教科書

書　名：15レクチャーシリーズ　神経障害理学療法学Ⅰ
著者名：石川　朗（責任編集）
出版社：中山書店

書　名：15レクチャーシリーズ　神経障害理学療法学Ⅱ
著者名：石川　朗（責任編集）
出版社：中山書店

■ 参考書

書　名：脳卒中ビジュアルテキスト　第２版
著者名：高木康行
出版社：医学書院

書　名：脳の機能解剖と画像診断
著者名：真柳佳昭
出版社：医学書院

書　名：脳神経疾患ビジュアルブック
著者名：落合慈之
出版社：学研

■ 留意事項

講義の進度は非常に速いので，脳神経解剖学，脳神経生理学の復習をしておくことを希望する。

授業科目	老年期理学療法治療学
学科名	理学療法学専攻

担当者	上田　陽之		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

健常者の身体機能（筋・骨格系を中心に）の操作方法と姿勢・動作の介入方法を学習する。
活動性の低下した高齢者の拘縮、変形のメカニズムを学習する。
高齢者の寝返り、起き上がり動作、座位姿勢、立ち上がり動作などの特徴を知り、介入方法を学習する。

■ 目　　標

慢性期病院（療養型病院）における高齢者の生活機能の向上・維持に対するチームアプローチ
の重要性を学習する。
高齢者の姿勢・動作の特性を知り、リハビリテーションにおける理学療法評価・治療を学習する。

■ 授業計画

第１回　正常動作とバランス反応
第２回　演習（１）正常動作とバランス
第３回　異常運動パターン
　　異常な筋緊張
第４回　演習（２）異常な筋緊張の評価と介入法
第５回　老年期の廃用症候群（特に変形、関節拘縮）のメカニズム
第６回　演習（３）変形、、関節拘縮の介入法
第７回　老年期の基本的な姿勢動作の評価
　　寝返り、起き上がり、座位、立ち上がり、立位
第８回　演習（４）姿勢・動作の介入法

■ 評価方法

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：Steps　to　Follo　ステップス　トウ　フォロー
著者名：富田昌夫（監訳）
出版社：シュプリンガー・フェアラーク東京

書　名：動く骨
著者名：栢野忠雄
出版社：スキージャーナル

書　名：拘縮予防・改善のための介護
著者名：田中義行
出版社：中央法規

■ 留意事項

授業科目	循環器障害理学療法治療学
学科名	理学療法学専攻

担当者	大槻　桂右		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

循環器疾患患者は増加の一途を辿っている。特に動脈硬化症を背景とする心筋梗塞, 狭心症, 末梢循環不全, 心不全は国家試験出題数も多い。理学療法士はそれらに対する全般的な医学的知識とリハビリテーションの介入の方法論を学ばなければならない。循環器領域での理学療法士の役割 (ICU 急性期･回復期･生活期) を講義する。

■ 目　　標

心臓疾患の病態生理とリハビリテーションの在り方を学ぶ。
ペーパーペイシェントを通して心疾患の臨床推論の在り方を学ぶ。

■ 授業計画

第１回　心臓リハビリテーションの概説
第２回　急性心筋梗塞に対する理学療法評価ならびに運動療法を学ぶ。
第３回　回復期心筋梗塞に対する理学療法評価ならびに運動療法を学ぶ。
第４回　心不全に対する理学療法評価ならびに運動療法を学ぶ。
第５回　心不全に対する理学療法評価ならびに運動療法を学ぶ。
第６回　不整脈を合併する症例に対する理学療法評価ならびに運動療法を学ぶ。
第７回　末梢循環不全に対する理学療法評価ならびに運動療法を学ぶ。
第８回　ペーパーペイシェントを用いて , 心疾患に対する臨床推論を学ぶ。

■ 評価方法

筆記試験80% 出席点20% で評価する。

■ 教　科　書

書　名：内部障害理学療法学テキスト
著者名：細田多穂 , 山崎裕司 , 川俣幹雄 , 丸岡弘
出版社：南江堂

■ 参　考　書

書　名：循環器理学療法の理論と技術
著者名：増田 卓 , 松永 篤彦
出版社：メジカルビュー社

■ 留意事項

講義中の私語は厳禁とする。講義中に注意を何度が受け , かつ改善が認められな場合は講義を妨害したとみなし , 対象学生に対して退室を指示することがある。真剣に取り組む姿勢を求める。

授業科目	神経筋障害理学療法治療学
学科名	理学療法学専攻

担当者	井上　悟		
学　　年	３年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

神経筋疾患の内、神経難病と言われる一部の疾患の臨床講義（症例紹介含む）を行う。

■ 目　　標

神経筋疾患の臨床での理学療法の実際について認識する。

■ 授業計画

第１回　神経筋疾患の PT 総論：オリエンテーション
第２回　パーキンソン病 PD の理学療法
第３回　運動失調症：脊髄小脳変性症 SCD の理学療法
第４回　多発性硬化症 MS の理学療法
第５回　運動ニューロン疾患：筋萎縮性側索硬化症 ALS の理学療法とケア
第６回　ニューロパチー：ギランバレー症候群 GBS の理学療法
第７回　筋疾患１：進行性筋ジストロフィー症（脊椎手術例）の理学療法
第８回　筋疾患２：筋炎の理学療法

■ 評価方法

筆記試験70%、出席・授業態度等30%（遅刻・欠席は減点する。）

■ 教　科　書

書　名：臨床神経学（神経内科学：阿部先生）の講義資料　持参必須
著者名：阿部和夫
出版社：阿部先生：コピー代のみ

■ 参　考　書

書　名：15レクチャー　理学療法テキスト：神経障害理学療法学Ⅱ
著者名：総編集：石川　朗
出版社：中山書店、2012年

書　名：標準理学療法学・作業療法学：神経内科学　第２版
著者名：川平和美
出版社：医学書院

書　名：「神経リハビリテーション」
著者名：岩崎祐三他訳
出版社：医学書院

■ 留意事項

臨床講義のため、阿部先生の講義資料を忘れると、講義についていけない。注意を！
なお参考図書の１番目は、神経理学療法の教科書に指定されている。

授業科目	リウマチ・有痛性障害理学療法治療学
学科名	理学療法学専攻

担当者	佐藤　睦美		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

関節リウマチの病態と慢性痛の機序を学び、それらに対する根拠のある理学療法を学ぶ

■ 目　　標

慢性関節リウマチの病態と有痛性障害の背景を理解し、理学療法評価と治療プログラムを立案できるようになる。

■ 授業計画

第1回　ガイダンス
　　関節リウマチの病態と治療
第2回　関節リウマチに対する理学療法
第3回　関節リウマチに対する理学療法
第4回　関節リウマチに対する理学療法のまとめ
第5回　有痛性障害に対する理学療法：　慢性痛のメカニズム
第6回　有痛性障害に対する理学療法：　CRPS
第7回　有痛性障害に対する理学療法：　評価と治療
第8回　有痛性障害に対する理学療法のまとめ

■ 評価方法

筆記試験　100%

■ 教科書

書　名：ペインリハビリテーション
著者名：松原貴子・沖田実・森岡周（編）
出版社：三輪書店

■ 参考書

書　名：理学療法 MOOK 3 疼痛の理学療法　慢性痛の理解とエビデンス　第2版
著者名：鈴木重行（編）
出版社：三輪書店

書　名：理学療法士臨床判断フローチャート
著者名：奈良　勲（監修），松尾善美（編）
出版社：文光堂

書　名：標準理学療法学　専門分野　理学療法学　各論　第3版
著者名：吉尾雅春（編）
出版社：医学書院

■ 留意事項

リウマチの講義の際には、整形外科学の教科書を持参すること。

授業科目	運動器・スポーツ障害理学療法治療学
学科名	理学療法学専攻

担当者	佐藤　睦美		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

運動器障害，スポーツ傷害の病態を学び、理学療法評価・治療への展開を学ぶ

■ 目　　標

運動器障害，スポーツ傷害の各疾患に応じた理学療法評価と治療を立案・実施する

■ 授業計画

第1回　ガイダンス　骨折・脱臼の理学療法
第2回　肩関節障害の理学療法①
第3回　肩関節障害の理学療法②
第4回　肘・手関節・手指障害の理学療法①
第5回　肘・手関節・手指障害の理学療法②
第6回　股関節障害の理学療法①
第7回　股関節障害の理学療法①
第8回　膝関節障害の理学療法①
第9回　膝関節障害の理学療法②
第10回　膝関節障害の理学療法③
第11回　下腿・足部・足関節障害の理学療法
第12回　脊柱障害の理学療法①
第13回　脊柱障害の理学療法②
第14回　スポーツ障害の理学療法①
第15回　スポーツ障害の理学療法②

■ 評価方法

小テスト30%，筆記試験70%

■ 教　科　書

書　名：15レクチャーシリーズ　運動器障害理学療法学Ⅰ
著者名：河村廣幸（責任編集）
出版社：中山書店

書　名：15レクチャーシリーズ　運動器障害理学療法学Ⅱ
著者名：河村廣幸（責任編集）
出版社：中山書店

書　名：実践PTノート 第2版　運動器障害の理学療法
著者名：小柳磨毅（編）
出版社：三輪書店

■ 参 考 書

書　名：標準理学療法学　専門分野　理学療法学　各論　第3版
著者名：吉尾雅春（編）
出版社：医学書院

書　名：整形外科 術後理学療法プログラム　改訂第2版
著者名：島田洋一，高橋仁美（編）
出版社：メジカルビュー社

書　名：スポーツ膝の臨床
著者名：史野根生
出版社：金原出版

書　名：理学療法 MOOK 9 スポーツ傷害の理学療法 第2版
著者名：福井勉・小柳磨毅（編）
出版社：三輪書店

書　名：ビジュアル実践リハ　整形外科リハビリテーション
著者名：相澤純也・中丸宏二（編）
出版社：羊土社

書　名：整形外科疾患ビジュアルブック
著者名：落合慈之（監修），下出真法（編）
出版社：学研

■ 留 意 事 項

授業科目	健康増進理学療法学
学科名	理学療法学専攻

担当者	佐藤　秀紀		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

高齢社会の現代においては、健全な社会構築のために疾病や障害予防のための健康増進が注目されている。この講義では、予防のための理学療法のあり方についてテーマとし、健康増進を目的とした理学療法における基本的な評価、運動療法の理論と実際について学ぶ。

■ 目　　標

健康増進を目的とした理学療法における基本的な評価、運動療法の理論と実際について理解する。

■ 授業計画

第１回　健康概念の変遷と健康増進
第２回　脳血管疾患を有する人の健康増進　①脳卒中の対策　リハビリテーションと再発予防
第３回　脳血管疾患を有する人の健康増進　②パーキンソン病の対策　日常生活のケアとは？
第４回　運動器疾患を有する人の健康増進　①首の痛み　首の痛みの対処法
第５回　運動器疾患を有する人の健康増進　②肩の痛み　肩の痛みを長引かせない！
第６回　運動器疾患を有する人の健康増進　③手のトラブル　早めに解消！手のトラブル
第７回　運動器疾患を有する人の健康増進　④股関節の痛み　上手につきあう股関節の病気
第８回　運動器疾患を有する人の健康増進　⑤腰の痛み　ここまで進んだ腰痛対策
第９回　運動器疾患を有する人の健康増進　⑥膝の痛みと踵の痛み
第10回　運動器疾患を有する人の健康増進　⑦関節リウマチの対策　上手につきあい悪化を防ぐ暮らし方
第11回　脳性麻痺児のケア
第12回　筋ジストロフィーと二分脊椎児のケア
第13回　糖尿病・動脈硬化を有する人の健康増進　足が危ない！糖尿病のフットケア
第14回　呼吸器疾患を有する人の健康増進　肺年齢と COPD　生活を楽にする工夫
第15回　まとめ

■ 評価方法

小テスト50％、学期末試験50％

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	物理療法学実習
学科名	理学療法学専攻

担当者	棚　千磨		
学　　年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

物理療法学実習では、実際に物理療法機器を操作し、生体の反応を体感してもらいます。
それに際しては、出力や温度などの物理療法機器の設定、適応・禁忌などのリスク管理などを重点的に学習してもらいます。また、機器を操作するにあたっては、それを扱うに足る知識があること確認してから、機器操作の許可を出します。
班に分かれ、各物理療法機器をローテーションで実習してもらいます。

■ 目　　標

1．物理療法機器操作に際し、リスク管理を行えるようになる。
2．適切に物理療法機器を選択できるようになる。
3．適切に物理療法機器を操作できるようになる。
4．物理療法施行後の生体反応を見極めることができるようになる。
5．物理療法と生体反応の関係性に考察が及ぶようになる。

■ 授業計画

第1回　オリエンテーション
　　（①ホットパック、②パラフィン、③寒冷療法、④極超短波）
第2回　オリエンテーション
　　（⑤超音波、⑥低周波、⑦干渉波）
第3回　オリエンテーション
　　（⑧牽引［頚椎・腰椎］、⑨水治療法［渦流浴］、⑩マッサージ）
第4回　実習　第1回目
　　実習前に指定された各班が、ローテーションで治療手段の実習を行う。
　　翌週の実習開始前に各自レポートにまとめて提出する。2回目以後も同様とする。
第5回　実習　第2回目
第6回　実習　第3回目
第7回　実習　第4回目
第8回　実習　第5回目
第9回　実習　第6回目
第10回　実習　第7回目
第11回　実習　第8回目
第12回　実習　第9回目
第13回　実習　第10回目
第14回　まとめ
第15回　まとめ（実技テスト）

■ 評価方法

筆記試験20%　出席数・受講態度30%（無断欠席・遅刻は減点）　レポート・実技テスト50%

■ 教　科　書

配布する手引きを使用。

■ 参　考　書

書　名：標準理学療法学　専門分野　物理療法学　第３版
著者名：網本和編
出版社：医学書院

■ 留意事項

１．学生全員が験者、被験者を必ず体験すること。
２．リスク管理事項を絶対に遵守すること。
３．実習第１回目から第10回目までの班実習では、10回の実習項目について全員がレポートを提出する。
４.「実習の手引き」をあらかじめ十分に熟読･予習してきて､実習開始後速やかに行動ができるようにする。

授業科目	義肢装具学
学科名	理学療法学専攻

担当者	井上　悟		
学　　年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

義肢装具に関する基本的事項を学習し、各種義肢装具の特性と構造を紹介する。

■ 目　　標

臨床で用いる義肢装具の基本的知識を増やす。
臨床で使用される義肢装具の種類、特徴、機能が説明できる。

■ 授業計画

第1回　オリエンテーション（授業計画の概要と成績判定方法の説明）
　　義肢学1　切断総論1
第2回　義肢学2　切断総論2
第3回　義肢学3　義足総論
第4回　義肢学4　下腿切断と下腿義足1
第5回　義肢学5　下腿義足2
第6回　義肢学6　下腿義足3
第7回　義肢学7　大腿切断と大腿義足1
第8回　義肢学8　大腿義足2
第9回　義肢学9　大腿義足3
第10回　義肢学10　大腿義足4
第11回　装具学1　装具総論（下肢装具を中心に）
第12回　装具学2　靴と靴型装具（FO）
第13回　装具学3　短下肢装具（AFO）
第14回　装具学4　長下肢装具（KAFO）、膝装具（KO）
第15回　装具学5　骨盤帯付き長下肢装具（HKAFO）、股関節装具（HO）

■ 評価方法

筆記試験　70%、授業態度　30%　（遅刻・欠席は減点対象）で総合評価します。

■ 教科書

書　名：義肢装具学（第4版）
著者名：川村次郎・他編
出版社：医学書院、定価：7350円、2009年

■ 参考書

書　名：切断と義肢
著者名：澤村誠志
出版社：医歯薬出版、定価：7350円、2007年

書　名：装具学　第4版
著者名：日本義肢装具学会
出版社：医歯薬出版：6200円、2013年

書　名：義肢装具のチェックポイント　第7版
著者名：日本リハビリテーション医学会
出版社：医学書院：7980円、　年

■ 留意事項

授業科目	義肢装具学実習
学科名	理学療法学専攻

担当者	井上　悟		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

・義肢装具に関する基本的事項を学習し、各種義肢装具の特性と構造を紹介する。臨床で用いる義肢装具の基本的知識を増やす。
・最新の義肢装具ハードウェアーの紹介と義肢装具士と地域医療連携について

■ 目　　標

・対象者の障害レベルに応じた義肢装具の類別ができる。
・各種障害に対する義肢装具の選択と適合判定ができる。
・義肢装具の最新トピックスを紹介し、福祉用具としての義肢装具を最大限にリハビリテーションに生かして利用して欲しい事と、地域医療そしてコ・メディカルとしての義肢装具士との連携を話しをしたい。

■ 授業計画

第１回　義肢学演習１　股関節離断と股義足
第２回　義肢学演習２　膝離断と膝義足
第３回　義肢学演習３　サイム切断とサイム義足
第４回　義肢学演習４　足部切断と足部義足
第５回　義肢学演習５　切断者の理学療法１
第６回　義肢学演習６　切断者の理学療法２
第７回　義肢学演習７　切断者の理学療法３
第８回　義肢学演習７　切断者の理学療法４（高木）：実習指導含む
第９回　義肢学演習８　切断者理学療法のトピックス（高木）
第10回　装具学演習１　疾患・障害別装具１　CVA 片麻痺の装具
第11回　装具学演習２　疾患・障害別装具２　対麻痺、二分脊椎の装具
第12回　装具学演習３　疾患・障害別装具３　体幹・頸椎装具、側弯症装具
第13回　装具学演習４　疾患・障害別装具４　頚随損傷、末梢神経損傷の上肢装具
第14回　装具学演習５　疾患・障害別装具５　小児疾患用装具、整形外科的治療用装具、その他
第15回　装具学演習６　義肢・装具の最新情報、最新の支給制度など（西野）

■ 評価方法

筆記試験　70%、授業態度　30%　（遅刻・欠席は減点対象）で総合評価します。

■ 教　科　書

書　名：義肢装具学（第４版）
著者名：川村次郎・他編
出版社：医学書院、定価：7350円、2009年

■ 参 考 書

書　名：切断と義肢
著者名：澤村誠志
出版社：医歯薬出版、定価：7350円、2007年

書　名：装具学　第３版
著者名：日本義肢装具学会
出版社：医歯薬出版：6200円、2013年

書　名：義肢装具のチェックポイント　第７版
著者名：日本リハビリテーション医学会
出版社：医学書院：7980円

■ 留 意 事 項

授業科目	日常生活活動学
学科名	理学療法学専攻

担当者	牧之瀬　一博		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

日常生活活動学では，普段意識する事無く行っている日常生活が，理学療法において重要な評価・介入対象であることを理解し，活動を専門的な視点で見る事を学ぶ．日常生活に関与する諸活動の概念，生活関連活動，運動学との関係，各種評価法などの理解を深める．主な疾患や病態の日常生活活動の特徴並びに介助法や指導法について学習する．

■ 目　　標

日常生活の活動を見る事の重要性を認識する．
日常生活に関与する諸活動の概念，分析，評価及び練習についての知識を深める．
代表的な自助具や福祉・生活支援機器についての知識を習得する．
代表的疾患の日常生活活動の特徴並びに介助法や指導法について修得する．

■ 授業計画

第１回　総論①日常生活活動（ADL）の概念と範囲
第２回　総論②基本的 ADL と生活関連活動
第３回　総論③基本的 ADL と生活の質
第４回　総論④ ADL と運動学
第５回　総論⑤ ADL 評価（代表的評価法）
第６回　総論⑥ ADL と周辺機器（自助具や歩行補助具など）
　　各論①片麻痺の ADL（前半）
第７回　各論①片麻痺の ADL（後半）
　　各論②脊髄損傷の ADL（前半）
第８回　各論②脊髄損傷の ADL（後半）
第９回　各論③脳性麻痺の ADL
第10回　各論④神経筋疾患・難病の ADL
第11回　各論⑤関節リウマチの ADL
第12回　各論⑥人工股関節の ADL
第13回　各論⑦内科疾患（呼吸器疾患・循環器疾患）の ADL
第14回　各論⑧切断の ADL
　　⑨高齢者の ADL
第15回　まとめ

■ 評価方法

提出課題（30%），小テスト（20%），筆記試験（50%）
出席（欠席：－4点、遅刻：－2点）遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする．

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法学 専門分野 日常生活活動学・生活環境学（第４版）
著者名：鶴見隆正（編集）
出版社：医学書院

■ 参　考　書

書　名：新版　日常生活活動（ADL）―評価と支援の実際―
著者名：土屋弘吉等
出版社：医歯薬出版

書　名：姿勢と動作　― ADL その基礎から応用まで―（第３版）
著者名：斉藤宏他著
出版社：メヂカルフレンド社

■ 留 意 事 項

提出課題を課す.
事前に予告し，復習を兼ねた小テストを実施する.

授業科目	日常生活活動学実習
学科名	理学療法学専攻

担当者	牧之瀬　一博		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

日常生活活動学実習では，姿勢と動作の基礎的知識，起居・移動・移乗及び段差・階段・歩行に関わる自力動作と介助法を修得する．車いす操作法，及び車いすのキャスター上げを体得する．各論として，主な疾患者の特徴的動作を習得させる．

■ 目　　標

姿勢と動作の基礎的知識が理解できる．
起居・移動・移乗動作に関わる自力動作と介助法が理解でき，かつ安全に実践できる．
車いす操作，及び車いすキャスター上げができる．
主な疾患者の特徴的動作が理解でき，指導方法も理解できるようになる．

■ 授業計画

第１回　実習オリエンテーション
　　姿勢と動作の基礎知識（概念，身体力学，姿勢と身体構造、姿勢反射）
第２回　基本の姿勢，移動
第３回　日常生活活動における姿勢と動作
　　ベッド上移動の自力動作と介助法
第４回　日常生活活動における姿勢と動作
　　ベッド上起居動作の自力動作と介助法
第５回　平地歩行，段差・階段昇降（自力，介助）
第６回　片麻痺と対麻痺における移動動作（自力，介助）
第７回　片麻痺者・対麻痺者の移乗法，及び介助法（自力，介助）
第８回　片麻痺者・対麻痺者の車いす操作法（自力）
第９回　車いす操作・キャスター上げ
第10回　各論①片麻痺者の特徴的動作
第11回　各論②脊髄損傷（四肢麻痺，対麻痺）者の特徴的動作
第12回　各論③関節リウマチ者，人工股関節者の特徴的動作
第13回　各論④筋萎縮性疾患（筋ジストロフィー，筋萎縮性側索硬化症）の特徴的動作
　　神経筋疾患（脊髄小脳変性症，パーキンソン病，多発性硬化症）の特徴的動作
第14回　各論⑤内科疾患（呼吸器疾患・循環器疾患）の ADL
　　脳性麻痺（児，者），切断（下肢，上肢）者，高齢者の特徴的動作
第15回　トランスファーや介助法などの実技

■ 評価方法

実技試験（30％），提出課題（20％），筆記試験（50％）
出席（欠席：－4点、遅刻：－2点）遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする．

■ 教　科　書

書　名：姿勢と動作　― ADL その基礎から応用まで―（第３版）
著者名：斉藤宏他著
出版社：メヂカルフレンド社

書　名：標準理学療法学 専門分野 日常生活活動学・生活環境学（第４版）
著者名：鶴見隆正編
出版社：医学書院

■ 参　考　書

書　名：新版　日常生活活動（ADL）―評価と支援の実際―
著者名：土屋弘吉等
出版社：医歯薬出版

■ 留 意 事 項

授業科目	地域理学療法学
学科名	理学療法学専攻

担当者	岩田　篤		
学　　年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

地域医療の成り立ち（歴史）を概観しつつ，そこでの理学療法士の役割や，種々（職種間，施設間）の連携の重要性を整理し，地域での暮らしを支えるに必要な基礎知識について学修する。

■ 目　　標

地域医療における理学療法士の役割と方法論，またそれを支えるシステム（制度と社会資源）の重要性について理解することを目標とする。

■ 授業計画

第1回　オリエンテーション
第2回　地域リハビリテーション
第3回　地域理学療法
第4回　障害者福祉と障害者施策
第5回　介護保険制度の概要
第6回　介護保険で利用できる各種サービス
第7回　介護保険における施設サービスと障害者自立支援法
第8回　訪問リハビリテーション
第9回　通所リハビリテーション
第10回　福祉用具と住宅改修
第11回　在宅医療にかかわる知識～褥瘡～
第12回　高齢者の身体特性
第13回　介護予防
第14回　事例検討
第15回　総括

■ 評価方法

筆記試験　100%

■ 教科書

授業ごとに資料を配布します

■ 参考書

書　名：ビジュアルレクチャー　地域理学療法学
著者名：浅川育世
出版社：医歯薬出版

書　名：標準理学療法学専門分野地域理学療法学
著者名：牧田光代
出版社：医学書院

■ 留意事項

制度は時代の変遷とともに見直され常に変化するものである。特に社会保障関連はここ数年来のトピックスであり，ニュースで取り上げられることも少なくない。皆さんが今後直面する現実問題としてそれらに関心を持ち，積極的にディスカッションに参加することを切に望む。

授業科目	生活環境論	担当者	田中　仁		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

リハビリテーションに関わる生活環境を、患者（利用者）を取り巻く生活地域に視点をおいて考える。

■ 目　　標

現在日本における患者（利用者）の在宅環境（家屋、福祉用具等）を、医療保険、介護保険の現行制度を通して、リハビリテーションの視点で理解する。

■ 授業計画

第１回　地域リハビリテーションと生活環境
第２回　行政・制度的環境（社会保障制度について）
第３回　行政・制度的環境（医療保険制度について）
第４回　行政・制度的環境（介護保険制度について）
第５回　行政・制度的環境（介護保険制度について）
第６回　福祉・リハビリテーション関連機器（福祉用具について）
第７回　福祉・リハビリテーション関連機器（移動関連機器について）
第８回　福祉・リハビリテーション関連機器（移乗関連機器について）
第９回　福祉・リハビリテーション関連機器（起居関連機器について）
第10回　福祉・リハビリテーション関連機器（移乗・起居関連機器について・実技練習）
第11回　福祉・リハビリテーション関連機器（床ずれ防止関連用具について）
第12回　住宅改修の基礎知識（住宅改修に取り組む姿勢）
第13回　住宅改修の基礎知識（住宅改修の進め方）
第14回　住宅改修の基礎知識（介護保険における住宅改修等）
第15回　まとめ

■ 評価方法

試験100%

■ 教　科　書

書　名：六訂　福祉用具専門相談員研修用テキスト
著者名：社団法人　シルバーサービス振興会
出版社：中央法規出版株式会社

■ 参　考　書

書　名：生活環境論　第６版 生活支援の視点と方法
著者名：木村 哲彦　　監修
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：地域リハビリテーション論 Ver.5
著者名：大田仁史　編集
出版社：三輪書店

■ 留意事項

授業科目	卒業研究論文
学科名	理学療法学専攻

担当者	理学療法学専攻教員		
学年	4年	総単位数	4単位
開講時期	通年	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法に関する研究を通じて、研究手法や現象に対する考察の手順を学ぶ

■ 目　　標

研究手法の基礎を理解し、自ら考察する力を養う。

■ 授業計画

第１回　　オリエンテーション
第２回　　文献検索の方法：　インターネットを利用した論文の検索方法について学ぶ
第３～８回　先行研究論文の抄読：　各グループで発表を行い、研究テーマや手法について考える
第８～11回　研究計画書の作成：　規定の書式に従い計画書を作成し、担当教員の指導を受ける
第12～22回　研究データを収集する（文献、資料、実験・測定）
第23～33回　収集した研究データを整理・解析する：　結果をまとめグループ内で発表する
第34～40回　得られた結果について考察する：得られた結果に対する考察をまとめグループ内で発表する
第41～48回　論文を作成する：　規定の書式に従い論文を作成し、担当教員の指導を受ける
第49～53回　研究報告会用のプレゼンテーション資料、配付資料を作成する
第53～58回　研究報告会：　全体で報告会を実施し、他者の発表に対して積極的に質問をする。
第59～60回　卒業研究論文を完成させる：　研究報告会での質疑応答や指摘をふまえて論文を修正する。

■ 評価方法

出席状況（20%），研究報告会での発表状況（30%），卒業研究論文（50%）

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：入門はじめての統計解析
著者名：石村貞夫
出版社：東京図書

書　名：すぐわかる統計解析
著者名：石村貞夫
出版社：東京図書

書　名：すぐわかる統計処理の選び方
著者名：石村貞夫・石村光資郎
出版社：東京出版

書　名：学生・研究者のための 使える！PowerPoint スライドデザイン 伝わるプレゼン1つの原理と3つの技術
著者名：宮野公樹
出版社：化学同人

書　名：これから学会発表する若者のために - ポスターと口頭のプレゼン技術 -
著者名：酒井聡樹
出版社：共立出版

書　名：これから論文を書く若者のために
著者名：酒井聡樹
出版社：共立出版

■ 留意事項

授業科目	臨床実習Ⅰ
学科名	理学療法学専攻

担当者	梛　千磨・伊禮　まり子		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

国内医療施設で１週間の臨床実習を行う。

■ 目　　標

対象者の障害について、実際の生活像と共にそれを阻害している機能的な問題の実像を、医療面接、PT見学、観察、触知、検査･測定などを通じて理解する。また、これまでに学習した評価技術の適応にあたって、臨床適応の際の課題について整理する。

■ 授業計画

実習施設　協力医療機関
実習期間　１週間
実習形態　協力病院において、専任教員と臨床実習指導者の指導／監督の下、これまでに修得した検査・測定技術を駆使し、対象者様の障害像に迫る。専任教員は学生の臨床実習現場を観察し、学生の学習課題などを適切に把握し、臨床実習指導者と綿密に連絡を取りながら必要なフォローを実施する。
実習の進め方　理学療法評価学Ⅰ、Ⅱで学んだ問診、情報収集、ROM-T、MMT、感覚検査などの基本的な測定、評価をなるべく多く体験する。また、解剖学、生理学、運動学、臨床医学等の知識を基に、一人の対象者様に対して適切な機能障害の検査測定項目を選択し、的確に実施する。実習の進め方は、臨床現場実習と専任教員のフォローを織り交ぜて実施する。

■ 評価方法

出席、実習態度、臨床実習実施記録の内容、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 教　科　書

書　名：PT 臨床実習ルートマップ
著者名：柳澤健
出版社：メジカルビュー社

書　名：症候障害学序説　理学療法の臨床思考過程モデル
著者名：内山　靖
出版社：文光堂

■ 参　考　書

■ 留意事項

臨床実習Ⅰは、実際の臨床現場での実習となる。臨床実習実施要綱には、臨床実習の目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	臨床実習Ⅲ
学科名	理学療法学専攻

担当者	梛　千磨・伊禮まり子		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

国内医療施設で１週間の臨床実習を行う。

■ 目　　標

対象者の障害について、実際の生活像と共にそれを阻害している機能的な問題の実像を、医療面接、PT見学、観察、触知、検査･測定などを通じて理解する。また、これまでに学習した評価技術の適応にあたって、臨床適応の際の課題について整理する。

■ 授業計画

実習施設　協力医療機関
実習期間　１週間
実習形態　協力病院において、専任教員と臨床実習指導者の指導／監督の下、これまでに修得した検査・測定技術を駆使し、対象者様の障害像に迫る。専任教員は学生の臨床実習現場を観察し、学生の学習課題などを適切に把握し、臨床実習指導者と綿密に連絡を取りながら必要なフォローを実施する。
実習の進め方　理学療法評価学Ⅰ、Ⅱで学んだ問診、情報収集、ROM-T、MMT、感覚検査などの基本的な測定、評価をなるべく多く体験する。また、解剖学、生理学、運動学、臨床医学等の知識を基に、一人の対象者様に対して適切な機能障害の検査測定項目を選択し、的確に実施する。実習の進め方は、臨床現場実習と専任教員のフォローを織り交ぜて実施する。

■ 評価方法

出席、実習態度、臨床実習実施記録の内容、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 教　科　書

書　名：PT 臨床実習ルートマップ
著者名：柳澤健
出版社：メジカルビュー社

書　名：症候障害学序説　理学療法の臨床思考過程モデル
著者名：内山　靖
出版社：文光堂

■ 参　考　書

■ 留意事項

臨床実習Ⅰは、実際の臨床現場での実習となる。臨床実習実施要綱には、臨床実習の目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	臨床実習Ⅳ
学科名	理学療法学専攻

担当者	岩田　篤・梛　千磨		
学　　年	３年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

国内医療施設で１週間の臨床実習を行う。

■ 目　　標

臨床実習指導者の指導の下，理学療法評価プロセスの全体を経験する。具体的には，生活上の問題点を捉えた上で，理学療法評価から機能障害と能力障害との結びつきを明らかにし，問題点の抽出，治療の方向性を理解することが目標である。

■ 授業計画

実習施設　協力医療機関

実習期間　１週間

実習形態　協力病院において，専任教員と臨床実習指導者の指導／監督の下，これまでに修得した検査・測定技術を駆使し，対象者様の障害像に迫る。専任教員は学生の臨床実習現場を観察し，学生の学習課題などを適切に把握し，臨床実習指導者と綿密に連絡を取りながら必要なフォローを実施する。

実習の進め方　臨床医学，理学療法治療学，日常生活活動学の知識を基に評価項目を選択し，理学療法評価学で学んだ問診，情報収集，ROM-T，MMT，感覚検査などの基本的な測定・評価を実施して機能障害の評価を行う。評価結果を解剖学，生理学，運動学，臨床医学，理学療法治療学，日常生活活動学などの知識を基に解釈を行い，機能障害と能力障害の結びつきを理解する。そして，問題点を抽出して目標設定を行う。実習の進め方は，実習現場実習と専任教員のフォローを必要に応じて織り交ぜて実施する。

■ 評価方法

出席，実習態度，臨床実習実施記録の内容を基に，専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 教　科　書

書　名：症候障害学序説　理学療法の臨床思考過程モデル
著者名：内山　靖
出版社：文光堂

■ 参　考　書

■ 留意事項

臨床実習Ⅳは，実際の臨床現場での実習となる。臨床実習実施要綱には，臨床実習の目的や注意点が記載されているので，実習前に再度読み直し，理解しておくこと。

授業科目	総合臨床実習Ⅰ
学科名	理学療法学専攻

担当者	藪中　良彦　他		
学年	3年	総単位数	2単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

国内医療施設または介護老人保健施設で２週間の臨床実習を行う。

■ 目　　標

臨床実習指導者の指導の下で、理学療法評価からプログラム立案までのプロセスを経験する。具体的には、ICF（又は ICIDH) の枠組みの中で、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定を行い、具体的治療プログラム立案が行えるようになる。

■ 授業計画

実習施設　近畿圏を中心とした全国の一般病院、リハビリテーション病院、介護老人保健施設

実習期間　２週間

実習形態　臨床実習指導者の監督の下に、対象者様に合わせた評価項目を選択･実施し、統合と解釈を行い、問題点を抽出し、目標設定を行い、治療プログラムを立案する。専任教員が適宜訪問し、学生の実習態度や実習目標達成度を把握する。専任教員訪問時には、学生自身の問題解決のためのディスカッション時間を設ける。

実習の進め方　解剖学、生理学、運動学、臨床医学、理学療法評価学、理学療法治療学、日常生活活動学、地域理学療法学等の知識を駆使して、評価を行い、ICF（又は ICIDH) の枠組みの中で統合と解釈を行い、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定を行い、具体的治療プログラムを立案する。実習の進め方は、実習施設の実情に合わせ、専任教員と臨床実習指導者で計画する。

■ 評価方法

出席、実習態度、総合臨床実習症例レジメと ICF/ICIDH 枠組み図の内容、学内症例発表会の発表内容等を基に、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 教　科　書

書　名：PT 臨床実習ルートマップ
著者名：柳澤健
出版社：メジカルビュー社

■ 参　考　書

■ 留意事項

総合臨床実習実施要綱には、総合臨床実習Ⅰの目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	総合臨床実習Ⅱ
学科名	理学療法学専攻

担当者	藪中　良彦　他		
学　　年	４年	総単位数	８単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

国内医療施設で８週間の臨床実習を行うと共に、途中に１週間の学内演習を行う。

■ 目　　標

臨床実習指導者の指導の下で、理学療法評価からプログラム立案、プログラム実施のまでの一連の理学療法プロセスを経験する。具体的には、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定、具体的治療プログラム立案、適切なプログラム実施が行えるようになる。

■ 授業計画

実習施設　近畿圏を中心とした全国の一般病院、リハビリテーション病院

実習期間　８週間＋１週間の学内演習

実習形態　臨床実習指導者の監督の下に、対象者様に合わせた評価項目を選択･実施し、統合と解釈を行い、問題点を抽出し、目標設定を設定し、治療プログラム立案し、治療プログラム実施する。専任教員が適宜訪問し、学生の実習態度や実習目標達成度を把握する。専任教員訪問時には、学生自身の問題解決のためのディスカッション時間を設ける。また、１週間の学内演習では、４週間の実習のまとめと残り４週間の実習のための準備を専任教員の指導の下実施する。

実習の進め方　解剖学、生理学、運動学、臨床医学、理学療法評価学、理学療法治療学、日常生活活動学、地域理学療法学等の知識を駆使して、評価を行い、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で統合と解釈を行い、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定を行い、具体的治療プログラムを立案し実施する。実習の進め方は、実習施設の実情に合わせ、専任教員と臨床実習指導者で計画する。

■ 評価方法

出席、実習態度、総合臨床実習症例レジメとICF/ICIDH枠組み図の内容、学内症例発表会の発表内容等を基に、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 教　科　書

書　名：PT臨床実習ルートマップ
著者名：柳澤健
出版社：メジカルビュー社

■ 参　考　書

■ 留意事項

総合臨床実習実施要綱には、総合臨床実習Ⅱの目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	総合臨床実習Ⅲ
学科名	理学療法学専攻

担当者	藪中　良彦　他		
学　　年	４年	総単位数	８単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

国内医療施設で８週間の臨床実習を行うと共に、途中に１週間の学内演習を行う。

■ 目　　標

臨床実習指導者の指導の下で、理学療法評価からプログラム実施のまでの一連の理学療法プロセスを経験する。具体的には、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定、具体的治療プログラム立案、適切なプログラム実施、治療効果判定に基づく治療プログラムの変更が行えるようになる。

■ 授業計画

実習施設　近畿圏を中心とした全国の一般病院、リハビリテーション病院

実習期間　８週間＋１週間の学内演習

実習形態　臨床実習指導者の監督の下に、対象者様に合わせた評価項目を選択･実施し、統合と解釈を行い、問題点を抽出し、目標設定を設定し、治療プログラム立案し、治療プログラム実施する。専任教員が適宜訪問し、学生の実習態度や実習目標達成度を把握する。専任教員訪問時には、学生自身の問題解決のためのディスカッション時間を設ける。また、１週間の学内演習では、４週間の実習のまとめと残り４週間の実習のための準備を専任教員の指導の下実施する。

実習の進め方　解剖学、生理学、運動学、臨床医学、理学療法評価学、理学療法治療学、日常生活活動学、地域理学療法学等の知識を駆使して、評価を行い、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で統合と解釈を行い、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定を行い、具体的治療プログラムを立案し実施する。実習の進め方は、実習施設の実情に合わせ、専任教員と臨床実習指導者で計画する。

■ 評価方法

出席、実習態度、総合臨床実習症例レジメとICF/ICIDH枠組み図の内容、学内症例発表会の発表内容等を基に、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 教　科　書

書　名：PT臨床実習ルートマップ
著者名：柳澤健
出版社：メジカルビュー社

■ 参　考　書

■ 留意事項

総合臨床実習実施要綱には、総合臨床実習Ⅲの目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	基礎作業療法学Ⅰ
学科名	作業療法学専攻

担当者	吉田　文		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

作業を経験しながら、人にとって「作業」とは何かを考え、人の暮らしを構成する作業を分析するための演習を行う

■ 目　　標

･「作業・作業活動」とは何かを知る
･作業活動の構造を理解する
･作業分析を学ぶ

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション　作業とは何か？
第２回　作業経験と生活スタイル
第３回　工程（行動レベル）分析の演習・方法
第４回　目的指向的行為（動作レベル）分析の演習・方法
第５回　環境要因の分析
第６回　作業分析演習①
第７回　作業分析演習②
第８回　作業分析演習③
第９回　作業分析演習④
第10回　作業遂行の包括的理解①
第11回　作業遂行の包括的理解②
第12回　創作活動の特性と道具①
第13回　創作活動の特性と道具②
第14回　創作活動の特性と道具③
第15回　まとめ

■ 評価方法

小テスト20%、提出物60%、学習態度20%（出席状況、授業への取り組み）で総合的に評価します。また、無届けの場合はどのような事情であっても、遅刻・早退－3点、欠席－5点を減点します。届け出があり、やむを得ない事情の場合は考慮します。

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学　基礎作業学第２版（２年生の作業療法学Ⅲと同じ教科書です）
著者名：小林夏子他
出版社：医学書院

書　名：古川　宏　監修
著者名：つくる・あそぶを治療にいかす　作業活動実習マニュアル
出版社：医歯薬出版

■ 参　考　書

書　名：吉川ひろみ
著者名：「作業」って何だろう
出版社：医師薬出版

書　名：吉川ひろみ
著者名：COPM/AMPS スターティングガイド
出版社：医学書院

■ 留 意 事 項

人にとって「作業とは何か」を理解し、治療に応用することは、作業療法士の専門性の中核です。専門職としての最初の一歩を学びましょう。

授業科目	基礎作業療法学Ⅱ
学科名	作業療法学専攻

担当者	平尾　一幸		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

ICF を参考にすれば、心身機能の回復には活動の活性化と社会参加の促進が重要な影響をもつとされる。人間の生活において、作業活動は中心的な意味をもつ。作業活動の科学的理解のため、作業活動分析を中心としたとらえ方を身につける。

■ 目　　標

1) ライフサイクルと活動について知る
2）作業活動分析の理論的背景を理解する
3）医療・保健・福祉の各領域で応用されている作業療法活動の実際を学ぶ

■ 授業計画

第１回　作業を応用したリハビリテーション活動の内容の紹介
第２回　作業活動を科学的にとらえる
第３回　作業活動分析の意義
第４回　作業活動遂行ということ
第５回　作業遂行の理論（生体力学的観点から）
第６回　評価演習（作業活動の観察）
第７回　作業遂行の理論（精神機能的観点から）
第８回　評価演習（対象者の面接）
第９回　作業遂行の理論（認知－行動的観点から）
第10回　評価演習（検査法の活用）
第11回　作業遂行の理論（発達的観点から）
第12回　作業遂行の理論（社会学的観点から）
第13回　活動の活性化と社会参加：エンパワメント
第14回　活動の活性化と社会参加：環境整備
第15回　作業活動の研究活動

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
レポートおよび発表　40%，定期試験　60%
なお，欠席，遅刻早退は減点対象　（一回に付き，事前届出あり：－2点，　事前届出なし：－10点）

■ 教　科　書

適宜、資料は配布する。

■ 参　考　書

■ 留意事項

作業療法士の活動内容を正しく理解し、専門職としての役割と責任を知ってほしい。

授業科目	基礎作業療法学Ⅲ
学科名	作業療法学専攻

担当者	吉田　文		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

様々な作業分析の演習を中心にすすめていく。各作業の分析方法や治療的意味、段階付等について講義を行う。

■ 目　　標

様々な作業活動を分析し、治療に応用できる

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション　工程分析・目的指向的行為の分析の復習
第２回　運動（身体機能・身体構造）レベルの分析方法の演習
第３回　認知（精神機能）レベルの分析方法の演習
第４回　作業分析演習①
第５回　作業分析演習②
第６回　作業分析演習③
第７回　作業分析演習④
第８回　ニーズからの課題分析の方法
第９回　課題分析演習①
第10回　課題分析演習②
第11回　作業活動の治療的応用（身体障害）
第12回　作業活動の治療的応用（精神障害）
第13回　作業活動の治療的応用（知的障害）
第14回　作業活動の治療的応用（発達障害）
第15回　まとめ

■ 評価方法

提出物70%（形式・内容・提出期限）、学習態度30%（出席状況、授業への取り組み、連絡）
また､無届けの場合はどのような事情であっても､遅刻･早退－3点､欠席－5点を減点します。届け出があり、やむを得ない事情の場合は考慮します。

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学　基礎作業学第２版（２年生の作業療法学Ⅲと同じ教科書です）
著者名：小林夏子他
出版社：医学書院

■ 参　考　書

■ 留意事項

人にとって「作業とは何か」を理解し、作業分析を行い、治療に応用することは、作業療法士の専門性の中核です。臨床の場で活用できる力を身につけていきましょう。

授業科目	基礎作業療法学Ⅳ
学科名	作業療法学専攻

担当者	辻　　郁		
学　　年	２年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

作業活動の枠組みを活用した実際の作業活動（手工芸，芸術活動，スポーツなど）の準備と提供方法について学ぶ.
本科目では，知的障害者へのスポーツ（サッカー）に焦点を当て，参加支援の実際を通して学ぶ.

■ 目　　標

作業活動の枠組みから，その作業を分析し特徴を述べることが出来る.
作業を提供するために必要な準備が出来る.
対象者のニーズに合わせた作業活動の選択と指導が出来る.

■ 授業計画

第１回　知的障がい者サッカーの概説と支援の実際
第２回　作業分析　　サッカーの特徴，練習方法，ルール，コーチングなど）
第３回　対象者の観察　サッカー練習の支援①
第４回　対象者の観察　サッカー練習の支援②
第５回　対象者の観察　サッカー練習の支援③
第６回　対象者の観察　サッカー練習の支援④
第７回　作業の構造化，段階づけ，アダプテーション①
第８回　作業の構造化，段階づけ，アダプテーション②
第９回　対象者の観察　サッカー練習の支援⑤
第10回　対象者の観察　サッカー練習の支援⑥
第11回　作業の構造化，段階づけ，アダプテーション③
第12回　対象者の観察　サッカー練習の支援⑦
第13回　対象者の観察　サッカー練習の支援⑧
第14回　作業の構造化，段階づけ，アダプテーション④
第15回　まとめ

■ 評価方法

授業への参加・取り組み方20%，提出物30%，試験レポート50%　　なお，再試験の場合は試験点100%
事前連絡及び届け出がある場合の遅刻・早退－1点，欠席－3点，無届け遅刻・早退－3点，欠席－5点

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学　基礎作業学第２版
著者名：小林夏子他
出版社：医学書院

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業日程が変則的になります．事前連絡をするので，よく注意しておくこと

授業科目	基礎作業療法学実習
学科名	作業療法学専攻

担当者	吉田　文		
学　　年	２年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

作業活動の枠組みを活用した作業活動の提供方法について学ぶ。また、作業を提供する為に必要な準備、提供方法の理解を深める。実際の活動体験（手工芸、芸術活動、スポーツ等）を通して作業活動を対象者に教授する際のポイントを学ぶ。

■ 目　　標

作業活動の枠組みを利用した作業活動の提供方法を述べることが出来る。作業を提供する為に必要な準備ができる。作業の特徴を理解し、対象者に合わせて作業活動を選択し、指導することができる。

■ 授業計画

授業計画：地域生活をしている知的障害をもつ方のサッカー大会参加までの支援をすることで、対象者に合わせた作業分析、実際の作業の提供方法（段階付け、アダプテーション）を理解し、実施できるようになる。

第１回　知的障がい者サッカーについての概説と支援の実際
第２回　サッカーの作業分析 (サッカーの特徴、練習方法、ルール、コーチングなど)
第３回　対象者の観察、個別のサッカー練習の支援①
第４回　前回の活動の振り返り、対象者の観察、個別のサッカー練習の支援②
第５回　前回の活動の振り返り、対象者の観察、個別のサッカー練習の支援③
第６回　前回の活動の振り返り、対象者の観察、個別のサッカー練習の支援④
第７回　サッカー練習の構造化、個人の観察評価に基づく段階づけ・アダプテーションの検討①
第８回　サッカー練習の構造化、個人の観察評価に基づく段階づけ・アダプテーションの検討②
第９回　サッカー練習の運営補助、対象者の観察、個別のサッカー練習の支援⑤
第10回　前回の活動の振り返り、サッカー練習の運営補助、対象者の観察、個別のサッカー練習の支援⑥
第11回　サッカー練習の構造化、個人の観察評価に基づく段階づけ・アダプテーションの検討③
第12回　サッカー練習の運営補助、個別のサッカー練習の支援⑦
第13回　前回の活動の振り返り、サッカー練習の運営補助、対象者の観察、個別のサッカー練習の支援⑧
第14回　サッカー練習の構造化、個人の観察評価に基づく段階づけ・アダプテーションの検討④
第15回　サッカー練習全体の作業分析と運営のポイントのまとめ

■ 評価方法

実習形式の授業のため参加が原則です。参加や取り組みに対して配点しますので、欠席の場合はこの部分の点がありません。事前連絡がありかつ届け出がある場合は遅刻・早退－1点、欠席－3点を減点します。また無届けの場合、遅刻・早退－3点、欠席－5点を減点します。やむを得ない事情で欠席・遅刻・早退される場合は考慮します。授業への参加・取り組み方20%、提出物30%、試験レポート50％で総合的に評価します。再試験においては、試験のみの点数で判断します。

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学　基礎作業学第２版（２年生の作業療法学Ⅲと同じ教科書です）
著者名：小林夏子他
出版社：医学書院

■ 参　考　書

書　名：山根　寛
著者名：ひとと集団・場―ひとの集まりと場を利用する.
出版社：三輪書店

書　名：山根　寛
著者名：ひとと作業・作業活動―ひとにとって作業とは？どのように使うのか？.
出版社：三輪書店

書　名：有馬正高
著者名：知的障害のことがよくわかる本
出版社：講談社

■ 留 意 事 項

授業の日程が変則的になります。また、授業の進み具合等により予定が変更になる場合もあります。事前に連絡しますので注意して下さい。

授業科目	作業療法評価学Ⅰ（概論）
学科名	作業療法学専攻

担当者	清水　大輔		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

作業療法過程において、対象者・児の評価は重要である。心身の構造・機能のみでなく、活動や（社会）参加の制約についても理解する。また、個人因子のみでなく生活全般を取り巻く環境についても把握しておく必要がある。この講義では、作業療法の基礎となる評価について学び、自らの知識・技術を高める。

■ 目　　標

1）作業療法の評価過程を理解する
2）評価方法について知識を整理し、技術を身につける
3）身体障害、精神障害、老年期障害、発達障害の各領域における評価について学ぶ

■ 授業計画

第1回　評価とは：目的、対象、種類
第2回　評価過程
第3回　観察法
第4回　演習：観察法
第5回　面接法
第6回　演習：面接法
第7回　検査法
第8回　演習：検査法（身体機能）
第9回　演習：検査法（精神機能）
第10回　演習：検査法（高次脳機能）
第11回　演習：検査法（発達的側面）
第12回　演習：検査法（環境的側面）
第13回　情報の整理、統合と解釈
第14回　記録・報告
第15回　情報の管理

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
レポートおよび発表　40%，定期試験　60%
なお，欠席，遅刻早退は減点対象　（一回に付き，事前届出あり：－2点，　事前届出なし：－10点）

■ 教科書

書　名：標準作業療法学　作業療法評価学
著者名：編集：岩崎テル子　他
出版社：医学書院

■ 参考書

書　名：誰でもわかる動作分析
著者名：小島正義
出版社：南江堂、2011

■ 留意事項

作業療法活動にとって、対象者・児の評価は基本となる。過程と方法を正しく理解し、適切な知識と技術を身につけてほしい。

授業科目	作業療法評価学Ⅱ（測定と評価）
学科名	作業療法学専攻

担当者	清水・島田・弦牧		
学年	２年	総単位数	２単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

作業療法評価場面で用いる各種検査・測定にはどのようなものがあるかを知り、その方法を理解する。

■ 目　　標

1.作業療法場面で用いる検査・測定を知る
2.作業療法場面で用いいる検査・測定を正しい方法で行う
3.作業療法場面で用いる検査・測定を正確に実施する（オリエンテーション含む）

■ 授業計画

第１回　バイタルサインの測定
第２回　バイタルサインの測定
第３回　関節の動きと各種測定
第４回　関節の動きと各種測定
第５回　関節の動きと各種測定
第６回　関節の動きと各種測定
第７回　関節の動きと各種測定
第８回　関節の動きと各種測定
第９回　筋力測定の方法
第10回　筋力測定の方法
第11回　筋力測定の方法
第12回　筋力測定の方法
第13回　反射のみかた
第14回　反射のみかた、筋緊張のみかた
第15回　筋の随意運動のみかた
第16回　筋の随意運動のみかた
第17回　筋の随意運動のみかた
第18回　筋の随意運動のみか
第19回　高次脳機能障害のみかた
第20回　高次脳機能障害のみかた
第21回　高次脳機能障害のみかた
第22回　高次脳機能障害のみかた
第23回　バランスの見方
第24回　バランスの見方
第25回　12脳神経のみかた
第26回　12脳神経のみかた
第27回　ADL 評価について
第28回　ADL 評価について
第29回　感覚障害のみかた
第30回　感覚障害のみかた

■ 評価方法

筆記試験・実技試験で評価する。配点は筆記試験70％、実技試験30% とする。いずれの試験も60% 以上で合格とする。筆記試験・実技試験共に再試験は実施する。遅刻・欠席は減点扱いとする。無断遅刻・無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻・欠席は -5点とする。

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学 作業療法評価学 第２版
著者名：岩崎テル子他
出版社：医学書院

書　名：ベッドサイドの神経の診かた　改定17版
著者名：田崎義昭他
出版社：南山堂

書　名：新・徒手筋力検査法 第８版
著者名：津山直一他
出版社：協同医書出版社

■ 参　考　書

■ 留意事項

反射検査では、打鍵器を使用するため、授業までに各自で購入し準備してくこと。解剖学・生理学・運動学等の基礎知識が必須であるため、事前に知識を整理しておくこと。また、授業時間内ですべてを網羅することは困難であるため授業の予習・復習を行い能動的に取り組むこと。実技練習中は、動きやすい服装・靴で参加すること。

授業科目	作業療法評価学Ⅲ（評価プロセス）
学科名	作業療法学専攻

担当者	辻　　郁・橋本　卓也 井口　知也・清水　大輔		
学　　年	２年	総単位数	２単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

提示された事例の情報を十分読み込み理解して整理することで，作業療法評価の方法と考え方を学ぶものである.

■ 目　　標

提示された事例の
1．記述内容が理解でき，専門用語が系統的に知識として蓄積できる
2．情報を生活機能（或いは障害）の階層に分類整理できる
3．情報の収集法（面接・観察・検査測定など）とその実施方法がわかる
4．全体像が分かる（情報を統合し解釈できる）
5．作業療法ニーズが抽出でき，その理由を説明できる
6．作業療法計画（長期目標・短期目標・具体的なプログラム・判定指標など）が立案できる

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
　　障害の階層的理解および作業療法評価（講義）
第２回　見学実習事例分析（演習により学習とレポート作成）
第３回　見学実習事例分析２
第４回　見学実習事例分析３
第５回　精神障害事例の分析及び統合と解釈（演習）
第６回　精神障害事例の分析及び統合と解釈２
第７回　精神障害事例の分析及び統合と解釈３
第８回　精神障害事例の分析及び統合と解釈４
第９回　精神障害事例の分析及び統合と解釈５
第10回　精神障害事例の分析及び統合と解釈６
第11回　中枢身体機能障害事例の分析及び統合と解釈（演習）
第12回　中枢身体機能障害事例の分析及び統合と解釈２
第13回　中枢身体機能障害事例の分析及び統合と解釈３
第14回　中枢身体機能障害事例の分析及び統合と解釈４
第15回　中枢身体機能障害事例の分析及び統合と解釈５
第16回　中枢身体機能障害事例の分析及び統合と解釈６
第17回　整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈（演習）
第18回　整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈２
第19回　整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈３
第20回　整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈４
第21回　整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈５
第22回　整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈６
第23回　発達障害事例の分析及び統合と解釈（演習）
第24回　発達障害事例の分析及び統合と解釈２
第25回　発達障害事例の分析及び統合と解釈３
第26回　発達障害事例の分析及び統合と解釈４
第27回　発達障害事例の分析及び統合と解釈５
第28回　発達障害事例の分析及び統合と解釈６
第29回　評価プロセスのまとめ
第30回　評価プロセスのまとめ２

■ 評価方法

レポートで評価する
欠席，遅刻，早退は減点対象とする（事前届出なし－10点，届出あり－５点）

■ 教　科　書

書　名：　標準作業療法学　作業療法評価学
著者名：　岩崎テル子　編集
出版社：　医学書院

■ 参　考　書

■ 留意事項

他者に説明できるまで，調べて熟考すること　分からないままにしない

授業科目	身体障害治療学Ⅰ
学科名	作業療法学専攻

担当者	清水　大輔		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

身体障害に対する作業療法における基本的知識を学ぶ。疾患に共通して用いられる手技を実技を交えて実施する。また、治療原理や作業療法の実施に必要な考え方を疾患ごとの特徴を踏まえ、事例を交えて学ぶ。

■ 目　　標

1.作業療法に必要な推論を理解できる。
2.作業療法の治療原理を理解し、実践できる技術を習得する。
3.各疾患ごとの治療の考え方が分かる。

■ 授業計画

第1回　身体機能作業療法の作業療法原理
第2回　身体機能作業療法の作業療法原理
第3回　様々な治療手技
第4回　慢性関節リウマチの作業療法
第5回　身体機能作業療法実践の枠組み
第6回　身体機能作業療法実践の枠組み
第7回　末梢神経系の作業療法
第8回　末梢神経系の作業療法
第9回　脊髄損傷の作業療法
第10回　脊髄損傷の作業療法
第11回　切断の作業療法
第12回　切断の作業療法
第13回　熱傷・呼吸器疾患・心疾患・糖尿病の作業療法
第14回　熱傷・呼吸器疾患・心疾患・糖尿病の作業療法
第15回　熱傷・呼吸器疾患・心疾患・糖尿病の作業療法

■ 評価方法

筆記試験・実技試験で評価する。配点は筆記試験70％、実技試験30% とする。いずれの試験も60% 以上で合格とする。筆記試験・実技試験共に再試験は実施する。遅刻・欠席は減点扱いとする。無断遅刻・無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻・欠席は－5点とする。

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学 — 専門分野 身体機能作業療法学
著者名：編集：岩崎テル子他
出版社：医学書院

■ 参　考　書

書　名：標準作業療法学 — 専門分野 作業療法評価学
著者名：編集：岩崎テル子他
出版社：医学書院

書　名：ベッドサイドの神経の診かた
著者名：田崎義昭
出版社：南山堂

書　名：中枢神経疾患に対する作業療法 具体的介入論から ADL・福祉用具・住環境への展開
著者名：編集：山本伸一
出版社：三輪書店

書　名：動画で学ぶ脊髄損傷のリハビリテーション
著者名：編集：田中宏太佳 他
出版社：医学書院

■ 留 意 事 項

解剖学・生理学・運動学等の基礎知識や各疾患の知識が必須であるため、事前に知識を整理しておくこと。また、授業時間内ですべてを網羅することは困難であるため授業の予習・復習を行い能動的に取り組むこと。身体障害治療学Ⅱと並行して進めるため両方の科目を統合して理解すること。

授業科目	身体障害治療学Ⅱ
学科名	作業療法学専攻

担当者	島田　康雄・弦牧　美歩		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

身体障害に対する作業療法における基本的知識を学ぶ。疾患に共通して用いられる手技を実技を交えて実施する。また、治療原理や作業療法の実施に必要な考え方を疾患ごとの特徴を踏まえ、事例を交えて学ぶ。

■ 目　　標

1.作業療法に必要な推論を理解できる。
2.作業療法の治療原理を理解し、実践できる技術を習得する。
3.各疾患ごとの治療の考え方が分かる。

■ 授業計画

第1回　身体機能作業療法学の基礎
第2回　様々な治療手技
第3回　身体機能作業療法実践の枠組み
第4回　慢性関節リウマチの作業療法
第5回　慢性関節リウマチの作業療法
第6回　慢性関節リウマチの作業療法
第7回　末梢神経系の作業療法
第8回　脳血管障害の作業療法
第9回　脳血管障害の作業療法
第10回　脳血管障害の作業療法
第11回　脳血管障害の作業療法
第12回　脳血管障害の作業療法
第13回　脳血管障害の作業療法
第14回　脊髄損傷の作業療法
第15回　脊髄損傷の作業療法

■ 評価方法

筆記試験・実技試験で評価する。配点は筆記試験70％、実技試験30% とする。いずれの試験も60% 以上で合格とする。筆記試験・実技試験共に再試験は実施する。遅刻・欠席は減点扱いとする。無断遅刻・無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻・欠席は－5点とする。

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学 - 専門分野 身体機能作業療法学
著者名：編集：岩崎テル子他
出版社：医学書院

■ 参 考 書

書　名：身体障害作業療法学（作業療法学 ゴールド・マスター・テキスト 4）
著者名：長崎 重信
出版社：メジカルビュー社

書　名：高次脳機能障害作業療法学（作業療法学ゴールド・マスター・テキスト）
著者名：長崎 重信、鈴木 孝治
出版社：メジカルビュー社

書　名：標準作業療法学 高次能機能作業療法学（標準作業療法学 専門分野）
著者名：能登真一
出版社：医学書院

書　名：作業療法士のためのハンドセラピー入門（第２版）
著者名：中田 眞由美、大山 峰生
出版社：三輪書店

■ 留 意 事 項

解剖学・生理学・運動学等の基礎知識や各疾患の知識が必須であるため、事前に知識を整理しておくこと。また、授業時間内ですべてを網羅することは困難であるため授業の予習・復習を行い能動的に取り組むこと。身体障害治療学Ⅰと並行して進めるため両方の科目を統合して理解すること。

授業科目	身体障害治療学Ⅲ
学科名	作業療法学専攻

担当者	清水　大輔		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

身体障害に対する作業療法における基本的知識を学ぶ。疾患に共通して用いられる手技を実技を交えて実施する。また、治療原理や作業療法の実施に必要な考え方を疾患ごとの特徴を踏まえ、事例を交えて学ぶ。

■ 目　　標

1.作業療法に必要な推論を理解できる。
2.作業療法の治療原理を理解し、実践できる技術を習得する。
3.各疾患ごとの治療の考え方が分かる。

■ 授業計画

第1回　骨疾患の作業療法
第2回　骨疾患の作業療法
第3回　骨疾患の作業療法
第4回　骨疾患の作業療法
第5回　骨疾患の作業療法
第6回　骨疾患の作業療法
第7回　神経・筋疾患の作業療法
第8回　神経・筋疾患の作業療法
第9回　ターミナルケアの作業療法
第10回　ターミナルケアの作業療法
第11回　作業療法実践の枠組み
第12回　作業療法実践の枠組み
第13回　作業療法実践の枠組み
第14回　作業療法実践の枠組み
第15回　作業療法実践の枠組み

■ 評価方法

筆記試験・実技試験で評価する。配点は筆記試験70%、実技試験30% とする。いずれの試験も60% 以上で合格とする。筆記試験・実技試験共に再試験は実施する。遅刻・欠席は減点扱いとする。無断遅刻・無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻・欠席は－5点とする。

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学 ― 専門分野 身体機能作業療法学
著者名：編集：岩崎テル子他
出版社：医学書院

■ 参 考 書

書　名：身体障害作業療法学（作業療法学 ゴールド・マスター・テキスト 4）
著者名：長崎 重信
出版社：メジカルビュー社

書　名：高次脳機能障害作業療法学（作業療法学ゴールド・マスター・テキスト）
著者名：長崎 重信、鈴木 孝治
出版社：メジカルビュー社

書　名：標準作業療法学 高次能機能作業療法学（標準作業療法学 専門分野）
著者名：能登真一
出版社：医学書院

書　名：作業療法士のためのハンドセラピー入門（第２版）
著者名：中田 眞由美、大山 峰生
出版社：三輪書店

■ 留 意 事 項

解剖学・生理学・運動学等の基礎知識や各疾患の知識が必須であるため、事前に知識を整理しておくこと。また、授業時間内ですべてを網羅することは困難であるため授業の予習・復習を行い能動的に取り組むこと。

授業科目	精神障害治療学Ⅰ
学科名	作業療法学専攻

担当者	足立　一		
学　　年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

教科書を用いた講義と演習.
モデルケースを使用した演習.
作業療法実践者からの報告.

■ 目　　標

精神障害者に対する作業療法の治療計画が立案できる.

■ 授業計画

第1回　オリエンテーション
　　精神医療と作業療法の歴史
第2回　精神障害者の捉え方・障害構造論
第3回　精神障害リハビリテーション治療理論　精神分析学・発達理論・集団理論
第4回　精神障害リハビリテーション治療理論　認知行動理論・社会的学習理論
第5回　精神障害リハビリテーション治療技法　生活技能訓練・心理教育・家族療法
第6回　作業療法実践報告
第7回　精神障害作業療法の流れ
　　治療目標とプログラムの立て方
第8回　精神医学の基礎知識
第9回　疾患別作業療法　統合失調症　講義
第10回　疾患別作業療法　統合失調症　演習
第11回　疾患別作業療法　気分障害・神経症性障害　講義
第12回　疾患別作業療法　気分障害・神経症性障害　演習
第13回　疾患別作業療法　精神作用物質使用による精神および行動の障害・器質性精神障害
第14回　疾患別作業療法　その他
第15回　作業療法実践報告

■ 評価方法

レポートと小テスト、定期試験で総合的に評価する

■ 教　科　書

書　名：作業療法学全書改訂第3版第5巻作業治療学2精神障害
著者名：社団法人日本作業療法士協会監修　冨岡詔子・小林正義編集
出版社：協同医書出版社

書　名：作業療法学ゴールド・マスターテキスト6精神障害作業療法学
著者名：長﨑重信監修　山口芳文編集
出版社：株式会社メジカルビュー社

■ 参　考　書

書　名：標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　精神医学
著者名：奈良勲　鎌倉矩子　監修
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	精神障害治療学Ⅱ
学科名	作業療法学専攻

担当者	足立　一		
学　　年	3年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

教科書を用いた講義と演習 .
モデルケースを使用した演習 .
実践者からの報告 .

■ 目　　標

精神障害者に対する作業療法評価・治療に必要な基本的視点と方法を理解する .

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
　　精神医学の復習
　　精神障害治療学Ⅰの復習
第２回　精神障害作業療法治療計画立案　演習
第３回　基本的コミュニケーション・対人関係
第４回　作業療法実践報告
第５回　精神障害作業療法基本的実践論（面接・観察）
第６回　精神障害作業療法基本的実践論（検査・測定）
第７回　精神障害作業療法基本的実践論（情報収集）
第８回　作業療法実践報告
第９回　精神障害作業療法の評価計画の立て方
第10回　ストレングスモデル
第11回　就労支援
第12回　司法精神医療
第13回　精神障害作業療法の実際①
第14回　精神障害作業療法の実際②
第15回　精神障害作業療法の実際③

■ 評価方法

小テストとレポート、定期試験で総合的に評価する

■ 教　科　書

書　名：作業療法学全書改訂第３版第５巻作業治療学２精神障害
著者名：社団法人日本作業療法士協会監修　冨岡詔子・小林正義編集
出版社：協同医書出版社

書　名：作業療法学ゴールド・マスターテキスト６精神障害作業療法学
著者名：長﨑重信監修　山口芳文編集
出版社：株式会社メジカルビュー社

■ 参　考　書

書　名：標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　精神医学
著者名：奈良勲　鎌倉矩子　監修
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	発達障害治療学Ⅰ
学科名	作業療法学専攻

担当者	小林　哲理		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

発達障害領域の作業療法についての基礎知識と治療理論を説明する。
作業療法の役割を施設、地域、家庭など環境に対応させながら紹介する。
作業療法の評価と目的について、子どもの生活における遊びや作業課題全般への関わりをもつ視点で学習する。
感覚・知覚・認知・行動の発達と障害との相互関係を考慮した治療計画の立て方を演習する。

■ 目　　標

発達障害における生活の困難さを理解し、、子どもの潜在能力を引き出す作業療法の役割を理解し、他者に説明できる。子どもに必要な遊びや作業が可能になるために必要な評価を説明し、その一部を実施することができる。モデルの事例で評価から得られた情報を統合・解釈し、治療を計画し、他者に説明できる。

■ 授業計画

第１回　発達障害治療学　総論
第２回　子どもの生活と ICF
第３回　発達障害の作業療法に応用する治療理論
第４回　作業療法士の役割と実施形態
第５回　評価と治療・援助の実践課程①　評価の目的と方法
第６回　評価と治療・援助の実践課程②　評価の選択と実施上の留意点
第７回　評価と治療・援助の実践課程③　評価結果の統合と解釈
第８回　評価と治療・援助の実践課程④　説明責任と同意のプロセス
第９回　評価と治療・援助の実践課程⑤　治療と援助の方法　発達促進・機能獲得
第10回　評価と治療・援助の実践課程⑥　治療・援助方法　代償・適応
第11回　評価と治療・援助の実践課程⑦　治療・援助方法　環境調整
第12回　評価と治療・援助の実践課程⑧　記録と効果判定
第13回　発達過程の基礎知識と治療への応用①　心身機能の発達
第14回　発達過程の基礎知識と治療への応用②　活動と参加の発達
第15回　地域で求められる発達支援と制度の理解

■ 評価方法

試験60％　提出課題20％　演習と授業中の態度20％

■ 教　科　書

書　名：作業療法学全書　改訂第３版　６　作業治療学　発達障害
著者名：田村良子編集　社団法人日本作業療法士協会監修
出版社：協同医書出版社

書　名：発達障害と作業療法 [基礎編]
著者名：岩崎清隆著　鎌倉矩子・山根寛・二木淑子編
出版社：三輪書店

■ 参　考　書

■ 留意事項

演習の際は動きやすい服装で参加してください。

授業科目	発達障害治療学Ⅱ
学科名	作業療法学専攻

担当者	小林　哲理		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

前期で学んだ作業療法の役割、評価と治療計画の作成方法を踏まえて、疾患障害年齢別に作業療法における援助技法を学習する。環境設定、活動の選択と段階づけ、実際の治療における援助技法、チームアプローチについて演習する。

■ 目　　標

障害がある子どもの疾患別、年齢別、作業療法の実際についてモデル事例を通じて理解する。遊びや作業を可能にする援助技法の基本を習得する。また、簡単な自助具作成や、家庭や学校生活で実践できるマネジメントプログラムの作成ができることを目指す。演習を通じてチームでのアプローチを理解する。

■ 授業計画

第１回　疾患・障害別作業療法の実際　子どもとして理解すること
第２回　脳性麻痺　両麻痺
第３回　脳性麻痺　片麻痺
第４回　脳性麻痺　アテトーゼ
第５回　脳性麻痺　失調
第６回　感染症疾患等
第７回　重症心身障害　四肢麻痺
第８回　神経・筋系疾患　筋ジストロフィー症
第９回　骨系統疾患
第10回　自閉症スペクトラム
第11回　学習障害
第12回　注意欠陥多動性障害
第13回　知的障害
第14回　視覚障害・聴覚障害
第15回　演習とまとめ

■ 評価方法

試験60％　提出課題20％　演習と授業中の態度20％

■ 教　科　書

書　名：作業療法学全書　改訂第３版　６　作業治療学　発達障害
著者名：田村良子編集　社団法人日本作業療法士協会監修
出版社：協同医書出版社

書　名：発達障害と作業療法 [実践編]
著者名：岩崎清隆、岸本光夫著　鎌倉矩子・山根寛・二木淑子編
出版社：三輪書店

■ 参　考　書

■ 留意事項

演習の際は、動きやすい服装で参加してください

授業科目	老年期障害治療学Ⅰ
学科名	作業療法学専攻

担当者	井口　知也		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

高齢者の加齢による身体的，心理的，社会的な変化や老年期障害に対する評価，治療に関する基礎知識を学ぶ．老年期特有の障害に対する作業療法アプローチの概要やマネジメントを教授する．

■ 目　　標

1）高齢者の生きてきた時代背景・社会の推移について理解を深める．
2）高齢者の心身機能，その特性について理解を深める．
3）老年期障害の生活・障害構造，社会資源を理解し，それらに対する具体的援助を考える．

■ 授業計画

第1回　高齢社会に伴う諸問題
第2回　高齢者の生きてきた時代背景・社会の推移について1
第3回　高齢者の生きてきた時代背景・社会の推移について2
第4回　高齢期の特徴1
第5回　高齢期の特徴2
第6回　介護保険制度
第7回　老年期作業療法の実践（基本的枠組み）
第8回　老年期作業療法の実践（特定高齢者，一般高齢者について）
第9回　老年期障害のマネジメント1
第10回　老年期障害のマネジメント2
第11回　老年期疾患別作業療法（認知症）①
第12回　老年期疾患別作業療法（認知症）②
第13回　老年期疾患別作業療法（整形疾患）
第14回　老年期疾患別作業療法（中枢神経疾患）
第15回　まとめ

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
レポートおよび発表　40%，定期試験　60%するが，いずれも60%以上ないと合格としない．
なお，欠席，遅刻早退は減点対象　（無断遅刻･無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻･欠席は－5点とする）

■ 教　科　書

書　名：作業療法学全書第7巻　老年期
著者名：村田　和香　編集
出版社：協同医書出版社

■ 参 考 書

書　名：老年期障害領域の作業療法
著者名：山田　孝　編集
出版社：中央法規

書　名：作業療法学全書第13巻　地域作業療法学
著者名：太田　睦美　編集
出版社：協同医書出版社

書　名：認知症の作業療法
著者名：小川　敬之，竹田　徳則　編集
出版社：医歯薬出版

■ 留 意 事 項

個々の文脈にある人間と生活という視点に立ち，作業の意味をしっかり捉えること．その上で，高齢者にとっての作業とは何かを考え，生活を支援する者としての作業療法士の役割の意味を吟味してほしい．

授業科目	老年期障害治療学Ⅱ
学科名	作業療法学専攻

担当者	井口　知也		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

高齢者の特性に合わせた評価の方法，高齢者に対して使用頻度の高い生活評価，身体機能評価、認知機能評価，心理機能評価の実施方法などについて演習を実施する．評価から得られた情報をもとに全体像を把握する方法を学び，個々の文脈に沿った意味ある作業を提供し実践できる手だてを教授する．

■ 目　　標

老年期での作業療法実践に必要となる技術の習得を目指す．

■ 授業計画

第１回　老年期障害治療学Ⅰの振り返りと老年期障害治療学Ⅱのオリエンテーション
第２回　老年期作業療法の実際（プロセス）
第３回　老年期作業療法の実際（検査測定）
第４回　老年期作業療法の実際（計画立案と実施，再考）①
第５回　老年期作業療法の実際（計画立案と実施，再考）②
第６回　入所系サービスにおける作業療法
第７回　施設系サービスにおける作業療法
第８回　通所，訪問系における作業療法
第９回　認知症高齢者に対する事例検討１
第10回　認知症高齢者に対する事例検討２
第11回　認知症高齢者に対する事例検討３
第12回　中枢神経疾患に対する事例検討１
第13回　中枢神経疾患に対する事例検討２
第14回　中枢神経疾患に対する事例検討３
第15回　まとめ

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
レポートおよび発表　40%，定期試験　60%するが，いずれも60%以上ないと合格としない．
なお，欠席，遅刻早退は減点対象　（無断遅刻･無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻･欠席は－5点とする）

■ 教　科　書

書　名：作業療法学全書第７巻　老年期
著者名：村田　和香　編集
出版社：協同医書出版社

■ 参 考 書

書　名：老年期障害領域の作業療法
著者名：山田　孝　編集
出版社：中央法規

書　名：作業療法学全書第13巻　地域作業療法学
著者名：太田　睦美　編集
出版社：協同医書出版社

書　名：認知症の作業療法
著者名：小川　敬之，竹田　徳則　編集
出版社：医歯薬出版

■ 留 意 事 項

個々の文脈にある人間と生活という視点に立ち，作業の意味をしっかり捉えること．その上で，高齢者にとっての作業とは何かを考え，生活を支援する者としての作業療法士の役割の意味を吟味してほしい．

授業科目	作業療法治療学実習Ⅰ
学科名	作業療法学専攻

担当者	清水　大輔		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

教育課程で習得した種々の評価技法を実際の対象者に実施し，身体的・心理的・社会的状況を系統立てて報告する

■ 目　　標

①対象者に合わせた評価が適切に行えること
②情報を整理し，統合することができること
③対象者の全体像をレポートにまとめ，報告ができること

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
　　評価の復習
第２回　評価の復習
第３回　対象者Ⅰ（脳血管障害者）の情報公開・評価計画の立案
第４回　対象者Ⅰ（脳血管障害者）評価実施①
第５回　実習後フィードバック①
第６回　対象者Ⅰ（脳血管障害者）評価実施②
第７回　実習後フィードバック②
第８回　対象者Ⅱ（知的障害者）の情報公開・評価計画の立案
第９回　対象者Ⅱ（知的障害者）評価実施①
第10回　実習後フィードバック①
第11回　対象者Ⅱ（知的障害者）評価実施②
第12回　実習後フィードバック②
第13回　事例まとめ
第14回　事例報告会Ⅰ
第15回　事例報告会Ⅱ

■ 評価方法

レポート：50%　報告：30%　実習態度：20%

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

実習に適した態度で社会性を持って協調的な姿勢で取り組むこと。この科目は作業療法評価で習得した知識・技術が不可欠である。事前準備や復習を必ず行っておくこと。

授業科目	作業療法治療学実習Ⅱ
学科名	作業療法学専攻

担当者	井口　知也		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

教育課程で習得した種々の評価方法および治療技法を，実際の対象者に実施し，ICF の観点から系統立てて，報告する

■ 目　　標

1．作業療法治療学実習Ⅰで習得した知識・技術をもとに，臨床場面で対象者のニーズに合わせた作業療法案が立案できる
2．立案した作業療法計画を実践できる
3．実践結果をフィードバック出来る
4．上記の実践を報告できる

■ 授業計画

第1回　オリエンテーション
障害特性の学習，情報収集案作成
第2回　障害特性の学習，情報収集案作成
第3回　情報の分析と統合
第4回　情報の分析と統合
第5回　作業療法プログラム立案
第6回　作業療法プログラム修正・立案
第7回　実習フィードバック
第8回　事例報告書作成
第9回　障害特性の学習，情報収集案作成
第10回　情報の分析と統合
第11回　作業療法プログラム立案
第12回　作業療法プログラム修正・立案
第13回　実習フィードバック・事例報告書作成
第14回　事例報告
第15回　事例報告

■ 評価方法

レポート：50%，報告：30%，取り組み態度：20%（欠席，遅刻早退も評価される）

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	作業療法技術論Ⅰ
学科名	作業療法学専攻

担当者	井口　知也		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

人間の生活において，作業活動は中心的な意味をもつ．対象者・児の心身機能の回復には活動の活性化と社会参加の促進が重要である．作業活動を有用な治療手段として使うために，作業を科学的に分析し，かつ適切に指導する知識・技術を身につける．

■ 目　　標

1）様々な作業活動の特性、構造と機能を理解する
2）基本的な作業活動の治療的応用ができる
3）対象者・児に合わせた作業活動の実際を学ぶ

■ 授業計画

第1回　作業活動と生活
第2回　演習：自分にとっての作業活動を考える
第3回　作業活動には一定の構造と機能がある
第4回　演習：例示作業の構造と機能を考える
第5回　作業活動の種類
第6回　実技演習：創作的作業①
第7回　実技演習：創作的作業②
第8回　実技演習：創作的作業③
第9回　実技演習：創作的作業①
第10回　実技演習：創作的作業②
第11回　実技演習：創作的作業③
第12回　作業活動の治療的応用（身体機能面）
第13回　作業活動の治療的応用（精神機能面）
第14回　作業活動の治療的応用（ライフサイクルにあわせて）
第15回　作業活動の治療的応用まとめ

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
レポートおよび発表　40%，定期試験　60%するが，いずれも60%以上ないと合格としない．
なお，欠席，遅刻早退は減点対象　（無断遅刻･無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻･欠席は－5点とする）

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

作業療法士の活動内容を正しく理解し，専門職としての役割と責任を知ってほしい．

授業科目	作業療法技術論Ⅱ
学科名	作業療法学専攻

担当者	山田　隆人		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

本講義では、作業療法支援を検討することを目的としている。面接や観察等の作業療法評価を実施し、得られた情報から対象者にとって意味のある作業を明らかにする。さらに、得られた情報から作業遂行上の課題を明らかにする。

■ 目　　標

1）対象者にとって意味のある作業を明らかにする面接・観察手段を身につける
2）面接・観察から得られた情報を適切な専門用語を用いて記録できる
3）収集した情報を ICF に基づいて整理し、作業遂行上の課題を明らかにする
4）日常生活の遂行における課題を整理できる

■ 授業計画

第1回　オリエンテーション
第2回　作業療法での面接（COPM）
第3回　作業療法での面接（COPM）
第4回　作業療法での観察（AMPS）
第5回　作業療法での観察（AMPS）
第6回　作業療法での観察（AMPS）
第7回　面接観察の実践2
第8回　面接観察の実践1
第9回　面接観察の実践1
第10回　面接観察の実践1
第11回　面接観察の実践1
第12回　実践の振り返りとレポートの作成
第13回　実践レポートの作成
第14回　実践レポートの作成
第15回　まとめ

■ 評価方法

■ 教　科　書

書　名：作業療法がわかる COPM・AMPS スターティングガイド
著者名：吉川ひろみ
出版社：医学書院

■ 参　考　書

■ 留意事項

わかりやすい観察および記録は臨床実習で求められる1つの技能でもあるので、しっかり取り組んでほしい。

授業科目	作業療法技術論Ⅲ
学科名	作業療法学専攻

担当者	山田　隆人		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

作業療法では、対象となる方の意味のある作業を見つけ、それら作業の現状を確認し、作業が可能になる支援を行う。その過程で、対象者の生活を評価・観察し分析する。対象者が捉えている作業やその意味、作業の重要性や遂行度、作業への取り組みなどの情報から、支援方針や支援方法を検討する。本講義では、それらの作業を支援する過程を演習を通じて体験する。

■ 目　　標

対象者が行っている作業や対象者の様子を観察することができる
対象者にとっての作業の意味を理解することができる
対象者への作業の提供方法を検討することができる

■ 授業計画

第１回　作業と作業療法、作業の意味
第２回　作業を評価する
第３回　行動を観察する方法１
第４回　行動を観察する方法２
第５回　行動を観察する１
第６回　行動を観察する２
第７回　障害について学ぶ１
第８回　演習１：障害を持つ方々への支援を行う
第９回　演習で観察した様子を報告し、対象者にとっての作業の意味を検討する
第10回　演習で観察した事例から行動を分析する
第11回　演習で観察した事例への支援を検討する
第12回　障害について学ぶ２
第13回　演習２：障害を持つ方々への支援を行う
第14回　演習で観察した事例から行動を分析する
第15回　演習で観察した事例への支援を検討する

■ 評価方法

評価は提出物70％で評価します。演習の出席は20％、演習以外の出席は10％で評価します。
演習で得られた情報を元にワークショップ形式での講義・演習を行います。

■ 教　科　書

書　名：“作業”の捉え方と評価・支援技術
著者名：社団法人　日本作業療法士協会　監修
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参　考　書

書　名：リハビリテーション効果を最大限に出すコツ　第２版
著者名：編集　山﨑裕司・山本淳一
出版社：三輪書店

■ 留意事項

演習のなかでは､実際に障害を持つ方と接する機会があります。また､外部の方々との接点も持ちますので､失礼のない態度で対応して下さい。

授業科目	臨床ゼミナールⅠ
学科名	作業療法学専攻

担当者	吉田　文		
学　　年	２年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

リハビリテーションに関する基本的な概念や制度について理解する。その中で作業療法がどのような役割を果たすのかを学ぶ。また、事例を通してリハビリテーション領域で使われる基本的な用語を学びながら、自分で学習するための方法論を身につける。

■ 目　　標

1）基礎的なリハビリテーションに関する概念や医療・保健・福祉の制度を理解し整理する
2）臨床で使われるリハビリテーション関連用語を理解し、覚える
3）演習を通して、記録、報告の際に適切な用語が使える

■ 授業計画

第１回　健康とは？　　リハビリテーション用語の学習①
第２回　障害とは？　リハビリテーション用語の学習②
第３回　リハビリテーションと ICF　リハビリテーション用語の学習③
第４回　運動器障害①　リハビリテーション用語の学習④
第５回　運動器障害②　リハビリテーション用語の学習 ⑤
第６回　精神障害①　　リハビリテーション用語の学習 ⑥
第７回　精神障害②　　リハビリテーション用語の学習 ⑦
第８回　精神障害③　　リハビリテーション用語の学習 ⑧
第９回　発達障害①　　リハビリテーション用語の学習 ⑨
第10回　発達障害②　　リハビリテーション用語の学習 ⑩
第11回　医療制度　　リハビリテーション用語の学習 ⑪
第12回　保健・行政　　リハビリテーション用語の学習 ⑫
第13回　福祉制度 (介護保険）　リハビリテーション用語の学習 ⑬
第14回　福祉制度 (障害者総合支援法）　リハビリテーション用語の学習⑭
第15回　まとめ

■ 評価方法

小テスト20％、発表・提出物40％、試験40％で総合的に評価します。再試験においては、試験のみの点数で評価します。また、無届けの場合はどのような事情であっても、遅刻･早退 -3点、欠席 -5点を減点します。届け出があり、やむを得ない事情の場合は考慮します。

■ 教　科　書

書　名：リハビリテーション用語解説　ポケットブック
著者名：梅田悦生、梅田紘子
出版社：診断と治療社

書　名：国際生活機能分類 ICF ―国際障害分類改訂版―
著者名：世界保健機構（WHO)
出版社：中央法規

■ 参　考　書

授業中に適宜紹介します

■ 留意事項

授業の進み具合等により予定が変更になる場合もあります。事前に連絡しますので注意して下さい。

授業科目	臨床ゼミナールⅡ
学科名	作業療法学専攻

担当者	吉田　文		
学　　年	２年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

これまでに学んだ作業療法評価学、臨床見学実習等の内容について、臨床例に結びつけながら理解を深める。主には症例報告または障がい当時者との地域生活支援体験を取り上げ、提示される作業療法の実際を深く理解するために、体験を振り返り情報を十分読み込み、グループ学習、ディスカッション、ロールプレイ等の演習を通した学習を行う。

■ 目　　標

論文または障がい当時者との地域生活支援体験から作業療法評価に必要な情報を収集しまとめることができる。地域生活を送る障がい当時者の実際の生活を理解し、必要な作業療法支援を考える事が出来る。学習した内容をレポートにまとめ、的確に他者に伝える事が出来る。

■ 授業計画

基礎作業療法学Ⅳと連動し､地域で生活する知的障がいの方の余暇活動･イベント参加（サッカー大会参加）を通して、地域生活の中で個人の作業の意味と活動制限・参加制約を知り、その評価方法と作業療法支援について考える。

第１回　知的障がいについて、知的障がいがある方の生活について
第２回　記録の書き方について復習
第３回　知的障がい者サッカー練習の観察および記録①
第４回　知的障がい者サッカー練習の観察および記録②
第５回　知的障がい者サッカー練習の観察および記録③
第６回　知的障がい者サッカー練習の観察および記録④
第７回　記録から対象者の障害を考察する①
第８回　記録から対象者・スタッフに情報収集することを検討する①
第９回　知的障がい者サッカー練習の観察および記録⑤
第10回　知的障がい者サッカー練習の観察および記録⑥
第11回　記録から対象者の障害を考察する②　対象者・スタッフに情報収集することを検討する②
第12回　知的障がい者サッカー練習の観察および記録⑦
第13回　知的障がい者サッカー練習の観察および記録⑧
第14回　記録から対象者の障害を考察する③
第15回　記録から対象者の障害を考察する④

■ 評価方法

実習形式の授業のため参加が原則です。参加や取り組みに対して配点しますので、欠席の場合はこの部分の点がありません。事前連絡がありかつ届け出がある場合は遅刻・早退－1点、欠席－3点を減点します。また無届けの場合、遅刻・早退－3点、欠席－5点を減点します。やむを得ない事情で欠席・遅刻・早退される場合は考慮します。授業への参加･取り組み20％､提出物30%､試験レポート50％で総合的に評価します。再試験においては、試験のみの点数で判断します。

■ 教　科　書

書　名：国際生活機能分類 ICF ―国際障害分類改訂版―
著者名：世界保健機構（WHO）
出版社：中央法規

■ 参　考　書

授業中に適宜紹介します

■ 留 意 事 項

授業の日程が変則的になります。また、授業の進み具合等により予定が変更になる場合もあります。事前に連絡しますので注意して下さい。

授業科目	臨床ゼミナールⅢ
学科名	作業療法学専攻

担当者	辻　　郁		
学　　年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

専門基礎科目及び作業療法評価学，作業療法治療学等専門科目で学んだことを基盤とする．人の生活機能（障害）を構造的に捉えることを習得するため，事例報告，ライブケースからの情報収集を行い，ICF に沿って事例分析及び統合を行い，その結果を報告する．

■ 目　　標

1．事例を読み込んで ICF に沿って分析と統合を行い，報告する
2．作業療法治療学実習Ⅰのライブケースから得た情報を ICF に沿って統合し，報告する

■ 授業計画

第1回　オリエンテーション
　　ICF 確認テスト，事例紹介，エッセイ紹介，分析事例の決定
第2回　ICF について
　　事例①の分析
第3回　事例①の分析
　　レポート提出
第4回　ライブケースⅠの分析
第5回　ライブケースⅠに関連する病理・解剖・生理に関する学習
第6回　ライブケースⅠの分析
第7回　ライブケースⅠ　事例報告書作成
第8回　ライブケースⅡの分析
第9回　ライブケースⅡの分析
第10回　ライブケースⅡに関連する病理・解剖・生理に関する学習
第11回　ライブケースⅡの分析
第12回　ライブケースⅡ　事例報告書作成
第13回　ライブケースⅠ，Ⅱ　病理・解剖・生理に関する学習
第14回　ライブケースⅠ，Ⅱ　事例報告書作成
第15回　ライブケースⅠ，Ⅱ　事例報告書作成

■ 評価方法

ポートフォリオ：30%　　レポート：40%　　報告とディスカッション：30%
欠席，遅刻・早退は減点の対象（一回に付き，事前届出なし：－10点，事前届出あり：－2点）

■ 教　科　書

書　名：国際生活機能分類　- 国際障害分類改訂版 -
著者名：世界保健機関（WHO）
出版社：中央法規

■ 参　考　書

■ 留意事項

これまでの学習内容が実践への橋渡しとなるよう，自ら積極的に取り組むこと
自ら取り組むことで，学習の楽しさや作業療法の面白さ，大切さが実感できることを期待する

授業科目	臨床ゼミナールⅣ
学科名	作業療法学専攻

担当者	辻　　郁		
学　　年	3年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

臨床現場での実習直前の準備のための科目とする
作業療法治療学実習Ⅱのライブケースから得た情報を統合解釈し，作業療法計画立案までを報告書としてまとめる

■ 目　　標

1．ライブケースの情報を統合し解釈でき（全体像が示せる），報告書を作成できる
2．ライブケースの作業療法ニーズを抽出することができ，ニーズ充足のための作業療法評価計画が立案できる
3．上記を考察を加えた報告書としてまとめることができる

■ 授業計画

第1回　全体像の把握　エッセイから
第2回　作業療法評価の過程（復習）　講義
第3回　生活機能・障害の階層　講義
第4回　生活機能・障害の階層による事例分析
第5回　ライブケースの全体像の把握-1　情報のまとめの演習とディスカッション
第6回　ライブケースの全体像の把握-2　情報のまとめと演習とディスカッション
第7回　事例報告書の書き方　講義
第8回　全体像の把握　図式化と説明　報告とディスカッション
第9回　全体像の把握　図式化と説明　報告とディスカッション
第10回　作業療法ニーズの抽出，目標と作業療法計画の立案　講義
第11回　ライブケースの作業療法ニーズ-1　報告とディスカッション
第12回　ライブケースの作業療法ニーズ-2　報告とディスカッション
第13回　目標と作業療法計画立案-1　報告とディスカッション
第14回　目標と作業療法計画立案-2　報告とディスカッション
第15回　事例報告書作成　まとめ

■ 評価方法

報告書　60%，報告とディスカッション　40%

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：国際生活機能分類　- 国際障害分類改訂版 -
著者名：世界保健機関（WHO）
出版社：中央法規

■ 留意事項

これまでの講義等での学修が実践への橋渡しとなるよう，自ら積極的に取り組むこと
自ら取り組むことで，学習の楽しさや作業療法のおもしろさ，大切さを実感できることを期待する

授業科目	在宅ケア論
学科名	作業療法学専攻

担当者	山田　隆人		
学年	4年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

作業療法支援は、対象となる方々が居住する地域やその住民へ働きかける場合がある。本講義では、障がいを持ち在宅で暮らすことを支援すること、ケアに着目する。障害を持ち暮らす方々のライフステージ毎に課題は異なる。加えて、それらライフステージ毎の生活支援サービスや法制度について学ぶ。

■ 目　　標

①在宅で暮らすことの支援を挙げることができる
②ライフステージ毎の在宅での課題や問題をあげることができる
③学んだ内容をまとめ報告することができる

■ 授業計画

第１回　在宅の意味を考える、在宅とは
第２回　在宅で暮らしを支援する障害者総合支援法・介護保険法の制度を学ぶ
第３回　ライフステージと支援、ライフステージに合せた支援を学ぶ
第４回　事例Ａを題材に、支援方法、内容を検討する
第５回　事例Ｂを題材に、支援方法、内容を検討する
第６回　事例Ｃを題材に、支援方法、内容を検討する
第７回　現場で活躍しているケアワーカーの実践の話を聞き、在宅におけるケアを理解する
第８回　現場で活躍しているケアワーカーの実践の話を聞き、在宅におけるケアを理解する
第９回　事例Ｄを題材に、個人で得られた情報を基に、在宅生活を送る上での情報をICF基づいて整理する
第10回　事例Ｄを題材に、個人で得られた情報を基に、在宅生活を送る上での課題を挙げ、その因果関係を整理する
第11回　事例Ｄを題材に、在宅生活を送る上での課題を解決しする為の方法を検討し、支援計画を立案する
第12回　計画した支援計画のプレゼンテーション
第13回　トピックス１：社会福祉の枠組み
第14回　トピックス２：実際に行われているケアや生活サービスの場面見学
第15回　トピックス３：実際に行われているケアや生活サービスの場面見学

■ 評価方法

出席30％、提出物70％で判定します。

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：改訂　新・居宅サービス計画ガイドライン
著者名：在宅版ケアプラン作成方法検討委員会
出版社：社会福祉法人　全国社会福祉協議会

書　名：総合支援法とは
著者名：東京都社会福祉協議会
出版社：東京都社会福祉協議会

■ 留意事項

授業科目	地域作業療法学Ⅰ
学科名	作業療法学専攻

担当者	橋本　卓也		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

さまざまなニーズをもつ障害児・者や高齢者等が地域社会の中で“いきいき”と、そして質の高い生活を送ることができるために作業療法士は何を提供することができるのか？当事者の豊かな生活を支えるために必要な作業療法の機能・役割について学ぶ。また、ライフステージにおける生活の変化と、それらに対応した法制度とを関連づけながら地域作業療法についての考察を深める。

■ 目　　標

①地域作業療法の理念や目的を理解する。
②ライフステージ及び障害等に起因する生活の変化に応じた地域作業療法の実践を理解する
③ライフステージの変化や障害児・者の希求する生活に応じた関連法制度を理解する。
④地域作業療法実践過程における多職種・他機関との連携について理解する。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション　　地域リハビリテーションおよび地域作業療法について
第２回　地域作業療法における地域の捉え方について
第３回　ライフステージにおける生活特性と健康・生活ニーズ（乳幼児期～学童期）について
第４回　ライフステージにおける生活特性と健康・生活ニーズ（青年期～壮年期）について
第５回　ライフステージにおける生活特性と健康・生活ニーズ（老年期）について
第６回　ライフステージに応じた障害児・者支援の視点（乳幼児期～学童期）について
第７回　ライフステージに応じた障害者支援の視点（青年期～老年期）について
第８回　ライフステージに応じた障害者支援の視点（ターミナル期等）について
第９回　地域作業療法の対象となりにくい人たちへの支援の視点について
第10回　地域作業療法における評価の視点について（Ⅰ）
第11回　地域作業療法における評価の視点について（Ⅱ）
第12回　ゲストスピーカーから地域作業療法の実践を学ぶ（地域で生活する神経難病の方への作業療法の実際）
第13回　地域作業療法と関連のある法制度（Ⅰ）
第14回　地域作業療法と関連のある法制度（Ⅱ）
第15回　地域作業療法における連携とチームアプローチについて

■ 評価方法

定期試験　80％　　レポート　20％　その他、出席率・授業中の態度等を加味し総合的に評価する

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：地域作業療法学（作業療法学全書　第13巻）
著者名：太田睦美　編著
出版社：協同医書出版社

書　名：地域作業療法学（標準作業療法学全書　専門分野）
著者名：小川恵子　編著
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業への積極的な参加を望む

授業科目	地域作業療法学Ⅱ
学科名	作業療法学専攻

担当者	橋本　卓也		
学年	3年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

現代の日本が抱える高齢者・障害者・児童領域等に起こっている様々な課題を整理する。
また、人々の生活の環境因子としての地域概況から医療・保健・福祉等に関する情報を把握し、作業療法の視点から地域の健康・生活ニーズを推測するとともに、その解決方法を考察する。

■ 目　　標

①既存のデータ等から地域の人々の健康・生活ニーズを推測する（地区診断）とともに当該地域の作業療法士の実態を把握することができる。
②導きだされた健康・生活ニーズに対して作業療法が介入できる視点を考察できる。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション　　現代日本が抱える高齢者・障害者および児童問題について
第２回　既存のデータから日本の高齢者・障害者・児童等の現状と課題について整理を行う（情報収集と発表準備）
第３回　既存のデータから日本の高齢者・障害者・児童等の現状と課題について整理を行う（情報収集と発表準備）
第４回　上記、情報収集に関する報告会（Ⅰ）
第５回　上記、情報収集に関する報告会（Ⅱ）
第６回　地域（地区）診断について（理念と方法）
第７回　既存のデータを通して出身地域の地域診断を行う（情報収集と整理および発表準備）
第８回　既存のデータを通して出身地域の地域診断を行う（情報収集と整理および発表準備）
第９回　地域（地区）診断グループ報告
第10回　地域（地区）診断グループ報告
第11回　地域（地区）診断グループ報告
第12回　事例検討会（グループワーク）
第13回　事例検討会（グループワーク）
第14回　ゲストスピーカーから地域作業療法の実際を学ぶ（ACT の理念と重い精神障害をもつ人たちへの地域生活支援の実際）
第15回　地域作業療法学のまとめ（キーワードでふりかえる地域作業療法）

■ 評価方法

レポート80%　発表内容（資料及び態度）20%　その他、出席率、授業中の態度等、総合的に評価を行う

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：地域に根ざした作業療法
著者名：MarjorieE.Scaffa(編著）　山田孝（監訳）
出版社：協同医書出版社

■ 留意事項

グループワーク等含め、授業への積極的な参加を望む

授業科目	地域作業療法学実習
学科名	作業療法学専攻

担当者	辻　　郁		
学　　年	3年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

地域社会で暮らす障害者との交流を通して，彼らの生活を理解することに努め，地域社会での作業療法士の役割を探ることを目的に，①地域の福祉施設に出向き，施設の協力の下，施設プログラムに参加し，利用者との交流を経験する．②大学内でその経験を統合し，報告する．

■ 目　　標

①施設のプログラムに参加し，複数の利用者と交流できる　②利用者について得られた情報を整理して記録できる　③情報を統合して全体像を掴める　④施設のニーズに応じた作業療法プログラムを企画運営できる　⑤一連の実習経験を統合し，報告できる

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
　　施設情報の収集
第２回　実習①
　　プログラムへの参加，利用者との交流，情報収集
第３回　実習①
　　プログラムへの参加，利用者との交流，情報収集
第４回　記録
　　フィードバック
第５回　実習②
　　プログラムへの参加，利用者との交流，情報収集－2
第６回　実習②
　　プログラムへの参加，利用者との交流，情報収集－2
第７回　記録
　　フィードバック，作業療法プログラムの立案，企画書作成
第８回　実習③
　　プログラムへの参加，利用者との交流，プログラム案提示
第９回　実習③
　　プログラムへの参加，利用者との交流，プログラム案提示
第10回　企画修正，プログラム運営の準備
第11回　実習④
　　プログラムへの運営，利用者との交流
第12回　実習④
　　プログラムへの運営，利用者との交流
第13回　記録，まとめ
第14回　フィードバック，報告準備
第15回　実習報告

■ 評価方法

①実習施設での取り組み態度（30%），②記録内容（40%），③報告内容（30%）
提出物の提出遅れ，欠席，遅刻早退は減点事項である

■ 教　科　書

特になし

■ 参　考　書

書　名：レクリエーション　社会参加を促す治療的レクリエーション
著者名：寺山久美子　監修
出版社：三輪書店

書　名：アクティビティと作業療法
著者名：アクティビティ研究会　編
出版社：三輪書店

書　名：ひとと集団・場　- 人の集まりと場を利用する -
著者名：山根寛・香山明美・加藤寿宏・長倉寿子
出版社：三輪書店

■ 留意事項

施設のプログラム運営の妨げにならないように注意すること，積極的な態度で取り組むこと，作業療法プログラムは意図を持った自由な発想で企画すること

授業科目	日常生活活動学
学科名	作業療法学専攻

担当者	山田　隆人		
学　　年	3年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

本講義では、ICF における活動および参加への支援を検討するための情報収集および収集した情報から作業療法支援の方向性を検討する過程を学ぶ。具体的には、日常生活を遂行する上での動作を分析すること、得られた情報から支援する方法論を学ぶ。生理・生態学的支援に関しては、他の治療学にて実施する。本講義では、環境による支援方法の理解を深める。

■ 目　　標

1）動作分析により、作業を遂行する上での課題を明らかにできる
2）作業遂行上の問題を整理し、支援の方針を明らかにできる
3）環境による支援方法を検討できる

■ 授業計画

第1回　ADL の評価の視点
第2回　姿勢の分析
第3回　生活動作の分析
第4回　生活動作の分析2
第5回　生活動作の分析3
第6回　事例紹介A
第7回　事例検討1
第8回　事例検討2
第9回　支援の方向性と支援方法
第10回　環境による支援方法・福祉用具1
第11回　環境による支援方法・福祉用具2
第12回　環境による支援方法・居住環境1
第13回　環境による支援方法・居住環境2
第14回　環境による支援方法・社会制度1
第15回　環境による支援方法・社会制度2

■ 評価方法

■ 教　科　書

書　名：作業療法技術学3　日常生活活動
著者名：日本作業療法士協会　監修
出版社：協同医書出版

書　名：“作業”の捉え方と評価・支援技術
著者名：社団法人　日本作業療法士協会　監修
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参　考　書

書　名：COPM・AMPS スターティングガイド
著者名：吉川ひろみ
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	卒業研究論文
学科名	作業療法学専攻

担当者	作業療法学専攻教員		
学年	4年	総単位数	3単位
開講時期	通年	選択･必修	必修

■ 内　　容

作業療法領域における具体的なテーマを設定し，研究計画を立て，それに沿って必要な情報や資料を収集し，整理し，結果を導き出す．研究の基本手法を学ぶ．その集大成を卒業論文としてかんせいさせる．研究の結果を報告する．

■ 目　　標

作業療法における問題を科学的根拠に基づいて解決する姿勢と能力を高める
論文を完成させる

■ 授業計画

ゼミ単位で進行する

- オリエンテーション
- 研究テーマの決定 / 先行研究論文の抄読
- 研究計画書の作成
- 研究データの収集
- 収集したデータの整理・解析
- 結果についての考察
- 卒業研究論文の作成
- 報告用資料の作成
- 研究報告会

■ 評価方法

卒業研究論文　50%
報告内容・発表状況　20%
ゼミでの討論・進行態度　30%

■ 教科書

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	臨床見学実習
学科名	作業療法学専攻

担当者	作業療法学専攻教員		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

1．実習施設：一般病院，リハビリテーション病院など
2．実習期間：1施設で5日間の見学実習
3．実習形態：学生は1～3名で臨床実習指導者の指導体制のもと見学実習を行う
4．実習前学習と実習後のまとめと報告会を行う

■ 目　　標

1．作業療法の実施状況を観察し，記録できる
2．リハビリテーションの流れとその中の作業療法（士）の役割を理解する
3．作業療法士を目指す学生として適切な取り組みができる

■ 授業計画

・事前学習課題
・事前学習課題へのフィードバック
・実習前技能演習1　　臨床見学実習に必要な技能の練習を行う
・実習前技能演習2　　臨床見学実習に必要な技能の練習を行う
・臨床見学実習　　実習施設において，5日間の臨床見学実習を行う
・臨床見学実習のまとめ　　実習施設において学んできたことを整理し，理解を深める
・臨床見学実習報告会　　臨床見学実習で学んだことやフィードバックの内容をまとめて報告する

■ 評価方法

実習への取り組み態度：30%，学内の事前・事後学習への取り組み態度：40%，提出物と報告内容：30%

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

本科目は11月より開始し，見学実習は2月に予定している
実習は対象者と実習施設のご好意により行われるため，感謝を礼儀を忘れないこと
実習施設における実習期間のうち，5分の4以上の出席が必要であるため，健康に留意すること
本科目全体を通して，身だしなみや取り組み態度が不適切であると判断した場合，また，無断欠席や正当な理由がない欠席は原則として本実習は中止とする

授業科目	評価学実習
学科名	作業療法学専攻

担当者	作業療法学専攻教員		
学年	3年	総単位数	3単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

1．実習施設　：　一般病院，リハビリテーション病院，介護老人保健施設など
2．実習期間　：　臨床現場での実習は３週間
3．実習形態　：　臨床実習指導者１人と学生１～２名体制
4．専任教員による実習施設訪問：３週間の実習期間中に少なくとも１回は巡回訪問し，
実習指導者，学生との三者でより良い実習に向けた協議の時間を持つ

■ 目　　標

病院や施設などにおいて，作業療法士の指導のもとで作業療法評価を実践する
　作業療法評価計画を立案し，面接，観察，必要な検査測定などから情報を得る
　情報を正確に記録する
　得られた情報を統合し，障害構造を明らかにする
　作業療法目標を設定し，作業療法プログラムを立案する
学内で，上記の実践をさらに統合し，報告会を通じて情報を共有する

■ 授業計画

・事前学習課題
・事前学習課題へのフィードバック
・実習前技能演習１　　臨床見学実習に必要な技能の練習を行う
・実習前技能演習２　　臨床見学実習に必要な技能の練習を行う
・臨床見学実習　　実習施設において，5日間の臨床見学実習を行う
・臨床見学実習のまとめ　　実習施設において学んできたことを整理し，理解を深める
・臨床見学実習報告会　　臨床見学実習で学んだことやフィードバックの内容をまとめて報告する

■ 評価方法

実習への取り組み態度：50%，学内の事前・事後学習への取り組み態度：25%，提出物と報告内容：25%

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

本科目は11月より開始し，見学実習は２月に予定している
実習は対象者と実習施設のご好意により行われるため，感謝を礼儀を忘れないこと
実習施設における実習期間のうち，5分の４以上の出席が必要であるため，健康に留意すること
本科目全体を通して，身だしなみや取り組み態度が不適切であると判断した場合，また，無断欠席や正当な理由がない欠席は原則として本実習は中止とする

授業科目	総合臨床実習Ⅰ
学科名	作業療法学専攻

担当者	作業療法学専攻教員		
学年	4年	総単位数	9単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

近畿圏を中心とした一般病院、リハビリテーション施設へ9週間の実習を行う。本学における各実習担当教員により、実習3週間ごとに本学にて1週間計3回の学内指導と実習前半と後半の計2回の巡回訪問指導を行う。

■ 目　　標

教育課程で習得した知識と技術を、臨床実習指導者の指導の下で、作業療法臨床場面において活用し、対象者（児）のニーズにあわせた治療・訓練・練習・援助ができること。

■ 授業計画

・オリエンテーション
　事前学習（学内）
・実習開始　　施設見学　　担当事例紹介
・担当事例初期評価
・担当事例初期評価レポート作成（学内）
・担当事例初期評価レポート作成（学内）
　担当事例治療計画検討・開始
・担当事例中間報告
・担当事例最終評価
・担当事例治療経過のまとめ（学内）
・担当事例治療経過のまとめ（学内）
・担当事例最終評価
・ケース会議での担当事例治療報告
・担当事例報告書作成（学内）
・担当事例報告書作成（学内）
・実践報告・ディスカッション（学内）

■ 評価方法

学外評価と学内評価の合計点で判定する

■ 教科書

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	総合臨床実習Ⅱ
学科名	作業療法学専攻

担当者	作業療法学専攻教員		
学年	4年	総単位数	9単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

近畿圏を中心とした一般病院、リハビリテーション施設へ9週間の実習を行う。本学における各実習担当教員により、実習3週間ごとに本学にて1週間計3回の学内指導と実習前半と後半の計2回の巡回訪問指導を行う。

■ 目　　標

教育課程で習得した知識と技術を、臨床実習指導者の指導の下で、作業療法臨床場面において活用し、対象者（児）のニーズにあわせた治療・訓練・練習・援助ができること。

■ 授業計画

・オリエンテーション
　事前学習（学内）
・実習開始　　施設見学　　担当事例紹介
・担当事例初期評価
・担当事例初期評価レポート作成（学内）
・担当事例初期評価レポート作成（学内）
　担当事例治療計画検討・開始
・担当事例中間報告
・担当事例最終評価
・担当事例治療経過のまとめ（学内）
・担当事例治療経過のまとめ（学内）
・担当事例最終評価
・ケース会議での担当事例治療報告
・担当事例報告書作成（学内）
・担当事例報告書作成（学内）
・実践報告・ディスカッション（学内）

■ 評価方法

学外評価と学内評価の合計点で判定する

■ 教科書

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	医学総論（公衆衛生・精神保健含む）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	板倉　徹・板倉登志子・松井理直 山本永人　ほか		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

言語聴覚士に必要な医学的知識について学ぶ。

■ 目　　標

言語聴覚士国家試験に必要な知識を身につける。

■ 授業計画

第１回　専門基礎分野　解剖学・生理学・病理学（板倉徹）
第２回　専門基礎分野　臨床神経学・新家系医学（板倉徹）
第３回　専門基礎分野　音響学（松井理直）
第４回　専門基礎分野　音響学（松井理直）
第５回　専門基礎分野　音声学（松井理直）
第６回　専門基礎分野　音声学（松井理直）
第７回　社会保障制度・関係法規（山本永人）
第８回　社会保障制度・関係法規（山本永人）
第９回　専門分野　失語・高次脳機能障害（板倉登志子）
第10回　専門分野　失語・高次脳機能障害（板倉登志子）
第11回　専門分野　失語・高次脳機能障害（吉機俊雄）
第12回　専門分野　失語・高次脳機能障害（吉機俊雄）
第13回　専門分野　失語・高次脳機能障害（吉機俊雄）
第14回　専門分野　失語・高次脳機能障害（吉機俊雄）
第15回　専門分野　失語・高次脳機能障害（吉機俊雄）

■ 評価方法

試験100％　（国家試験と同形式の試験を２回実施、問題は五者択一形式）

■ 教　科　書

書　名：言語聴覚士テキスト
著者名：廣瀬肇　監修
出版社：医歯薬出版

■ 参　考　書

書　名：言語聴覚士のための基礎知識（シリーズ各本）
著者名：医学書院

書　名：標準言語聴覚障害学（シリーズ各本）
著者名：医学書院

書　名：言語聴覚療法シリーズ改訂版（シリーズ各本）
著者名：建帛社

■ 留意事項

授業科目	解剖学	担当者	柴田　雅朗		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

頭・頚部の解剖学的な構造を学び、言語聴覚領域の学習の礎とする。

■ 目　　標

■ 授業計画

第１回　神経系Ⅰ
　　１．神経系の構成　２．中枢神経系とは　３．脊髄　４．延髄と橋　５．中脳
　　６．小脳
第２回　神経系Ⅱ
　　１．間脳（視床と視床下部）　２．大脳　（大脳皮質、大脳基底核、大脳白質）
第３回　脳神経
　　１．脳神経の概略　２．脳神経（三叉神経、顔面神経、内耳神経、舌咽神経、迷走神経、舌下神経）
第４回　脳室系と脳の血管
　　１．脳室　２．髄膜（硬膜、クモ膜、軟膜）　３．脳脊髄液
　　４．脳の血管（内頸動脈とその枝、椎骨動脈とその枝、ウイリス動脈輪、硬膜静脈洞）
第５回　顔面と口腔の解剖
　　１．口蓋　２．口腔底　３．舌と味蕾　４．舌の発生　５．咀嚼筋
　　６．嚥下に働く筋
第６回　喉頭の解剖と
　　１．舌骨と喉頭の軟骨　２．声帯靱帯と声帯ヒダ　３．声門　４．喉頭の筋
　　５．喉頭の神経
第７回　平衡・聴覚器の解剖
　　１．外耳・中耳・内耳の構造　２．聴覚と平衡覚の伝導路と反射路
第８回　三層性胚盤および鰓弓と総復習
　　１.三層性胚盤　２．鰓弓　３．鰓弓由来の筋とその支配神経

■ 評価方法

定期試験　100％

■ 教　科　書

渡辺正仁監修 「PT・OT・ST のための解剖学　第1版」 廣川書店

■ 参　考　書

ネッター解剖学アトラス　訳相磯貞和　南江堂

■ 留意事項

授業科目	生理学
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	宮井　潔		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

生理学は人体機能のしくみを知る基礎的な学問であるが、かなり範囲が広く深いので、
各項目ごとにできるだけ基本的な考え方や重点事項を解説する

■ 目　　標

各分野において、それぞれ基礎となる解剖学と、臨床医学特に内科学との関連づけを
理解するように努める

■ 授業計画

第１回　細胞と内部環境
第２回　血液・生体防御
第３回　循環系
　　小テストと解説
第４回　呼吸機能
第５回　消化と吸収
第６回　胃臓と排泄
第７回　酸・塩基手衡
第８回　内分泌・代謝

■ 評価方法

筆記試験95％　筆記小テスト５％

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法・作業療法専門分野　生理学
著者名：石澤光郎、冨永淳
出版社：医学書院

■ 参　考　書

書　名：スタンダード生理学
著者名：二宮石雄、安藤啓司、彼末一之、木川寛二
出版社：文光堂

■ 留意事項

講義では重点のみ（主としてキーワードの説明）述べるので、それをもとに教科書などでしっかり自習
してほしい

授業科目	病理学
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	橋本　和明		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

疾患の原因は内因と外因に大別される。内因として遺伝＋免疫などがあり、外因として種々の要因がある。その結果、人体は下記１～８の変化を示す。これらの各項目について講義を行う。

■ 目　　標

病気の成り立ちや仕組みを追求する病理学を学ぶことによって、患者の持つ種々の障害の本質の理解を深め、障害とそれに対する治療・リハビリテーションの考察・理解がより深く行えるようになることを目標とする。

■ 授業計画

第１回　退行性病変
第２回　進行性病変
第３回　奇形を含む先天異常
第４回　炎症アレルギー
第５回　循環障害
第６回　腫瘍
第７回　腫瘍
第８回　外傷性変化等

■ 評価方法

試験100％

■ 教科書

書　名：標準理学療法学・作業療法学基礎分野　病理学　第３版
著者名：梶原　博毅／横井　豊治　編集
出版社：医学書院

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	内科学（老年医学含む）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	宮井　潔		
学　　年	２年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

まず健常人の解剖・生理・生化学の基礎知識を簡単に復讐してそれを把握した上で、内科学の総論・各論の全領域にわたる基礎的な重要項目について臨床現場での経験も交えて講義する。

■ 目　　標

内科学は臨床医学の基礎であるが、その範囲は余りにも広く、内容も深いため短期間でそのすべてをマスターするのは大変むずかしい。そこで基礎的な内科学の考え方、必要最小限の知識、専門用語などを理解するよう努める。

■ 授業計画

第１回　内科学総論－病因論（遺伝・感染・腫瘍・代謝異常等）
　　診断学・検査学
第２回　内科学総論－治療医学、予防医学
第３回　内科学各論－血液疾患
第４回　内科学各論－膠原病・アレルギー・免疫疾患
第５回　内科学各論－膠原病・アレルギー・免疫疾患
　　小テスト及び解説
第６回　内科学各論－感染症
第７回　内科学各論－内分泌疾患
第８回　内科学各論－代謝疾患
第９回　内科学各論－循環器疾患
第10回　内科学各論－呼吸器疾患
第11回　内科学各論－胃・泌尿器疾患
第12回　内科学各論－消化管疾患
第13回　内科学各論－肝・胆・膵疾患
第14回　内科学各論－中毒・環境要因による疾患
第15回　老年医学

■ 評価方法

筆記試験95％　筆記小テスト５％

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法・作業療法専門分野　内科学
著者名：大成淨志
出版社：医学書院

■ 参 考 書

書　名：新臨床内科学
著者名：髙久史麿・尾形悦郎
出版社：医学書院

書　名：標準理学療法・作業療法専門分野　老年医学
著者名：大内尉義
出版社：医学書院

書　名：NEW 臨床検査診断学
著者名：宮井潔
出版社：南江堂

■ 留 意 事 項

講義では要点（基本的な考え方・各事項の用語説明などいわば”さわり”）だけを述べることになるので、それをもとに教科書などでしっかり自習してほしい

授業科目	小児科学
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	非公表		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

小児の成長・発達、小児の形態的・生理的特徴。
よくみられる疾患、見逃せない疾患を中心とした小児の病気及び予防接種。
母子保健について調べる。

■ 目　　標

小児の成長・発達・小児病学・小児保健等の理解して小児科学を把握すること。

■ 授業計画

第１回　小児の発育・発達
　　小児の生理の特徴
第２回　乳幼児の栄養と生活
第３回　予防接種、母子保健
第４回　出生前小児科学、新生児学
第５回　呼吸器疾患
第６回　消化器疾患
第７回　循環器疾患
第８回　小児特有の細菌感染症、ウィルス感染症
第９回　アレルギー疾患、免疫疾患
第10回　神経疾患
第11回　代謝、内分泌疾患
第12回　腎、泌尿器疾患
第13回　血液、悪性腫瘍、筋疾患
第14回　心身症、心理的疾患
第15回　小児診療の特徴、事故、救急

■ 評価方法

筆記試験　80％　　小テスト20％

■ 教　科　書

書　名：最新育児小児病学
著者名：黒田恭弘
出版社：南江堂

書　名：小児・思春期診療　最新マニュアル
著者名：五十嵐　隆
出版社：日本医師会

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	精神医学
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	小畔　美弥子		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

主な精神疾患について症状・診断・治療を学ぶ

■ 目　　標

精神医学に興味を持ち，基本知識を身につける

■ 授業計画

第１回　精神医学とは　　精神疾患の診断・分類
第２回　精神症状とその評価
第３回　統合失調症
第４回　アルコール・薬物関連障害
第５回　認知症
第６回　気分障害
第７回　神経症性障害①
第８回　神経性障害②
第９回　発達障害・児童精神医学
第10回　パーソナリティー障害
第11回　摂食障害
第12回　睡眠障害
第13回　治療①
第14回　治療②
第15回　精神医療の関連法規・福祉

■ 評価方法

筆記試験80％，出席・受講態度20％

■ 教科書

書　名：text 精神医学
著者名：加藤進昌　神庭重信
出版社：南山堂

■ 参考書

書　名：パーソナリティー障害の診断と治療
著者名：ナンシーマックウィリアムズ
出版社：創元社

■ 留意事項

授業科目	リハビリテーション医学
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	今井公一・辻　郁・吉田　文 足立　一・清水大輔・澤井里香子		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　容

・理学療法の歴史や定義、理学療法過程、理論的な背景などについて学び、一部実技を通して理解を深めます。(今井)
・講義形式で, 作業療法の歴史や理論的背景, 種々の展開例から作業療法実践の枠組みと実際を学ぶ。(辻、吉田、足立、清水)
・言語聴覚療法に必要なリハ医学の基礎知識及び臨床場面で重要となる事柄を、心理的問題も含めて講義する。(澤井)

■ 目　標

1）理学療法の治療体系について説明できる。2）理学療法の対象について説明できる。3）リスク管理など理学療法の実際について説明できる。(今井)
1）作業療法の枠組みを概観できる。2）作業療法の実践例を知ることで, その専門性を理解できる。(辻、吉田、足立、清水)
1）言語聴覚療法に必要な医学的基礎知識及び代表的な疾患について、患者個人の全体像を把みアプローチするために必要な臨床上の考え方を身につける。(澤井)

■ 授業計画

第1回　理学療法の歴史と定義・対象　(今井)
第2回　理学療法の過程と治療体系　(今井)
第3回　理学療法の実際　(今井)
第4回　理学療法の実際　(今井)
第5回　作業療法の歴史
　　作業療法の“作業”の意味
　　実践の枠組み・理論的背景（辻）
第6回　発達過程における作業療法の実際　　(吉田)
第7回　精神障害者に対する作業療法の実際　　(足立)
第8回　身体障害者に対する作業療法の実際　　(清水)
第9回　リハビリテーション医学の概念と障害学　(澤井)
第10回　廃用症候群・過用 / 誤用症候　(澤井)
　　中枢性神経麻痺の回復
第11回　脳卒中のリハビリ（澤井）
　　運動学習
第12回　目標設定レベルの階層性　　留守居能力　　(澤井)
　　ケアマネージメント　　パーキンソン病のリハビリ
第13回　神経疾患のリハビリ（ALS, SCD）（澤井）
　　ターミナルケア
　　呼吸リハ
第14回　心理的問題について（障害受容、チームワークなど）(澤井)
第15回　授業全体の総合的演習（澤井）
第16回　授業全体の総合的演習（澤井）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：図説　パーキンソン病の理解とリハビリテーション
著者名：山永　裕明、野尻　晋一
出版社：三輪書店

書　名：動画で学ぶ脳卒中のリハビリテーション
著者名：園田　茂
出版社：医学書院

書　名：臨床リハ
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

授業科目	耳鼻咽喉科学
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	平海　清一・藤木　暢也　ほか		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

耳鼻咽喉科疾患の病態と治療について講義を行う。

■ 目　　標

耳鼻咽喉科疾患について、言語聴覚士に必要な知識を身につける。

■ 授業計画

第１回　耳鼻咽喉科・頭頸部外科　総論 / 鼻・咽喉頭・頸部の機能解剖（１）（藤木）
第２回　鼻・咽喉頭・頸部の機能解剖（２）（藤木）
第３回　鼻・咽喉頭・頸部疾患の病態と治療（１）（藤木）
第４回　鼻・咽喉頭・頸部疾患の病態と治療（２）（藤木）
第５回　聴覚・平衡感覚器の構造と機能　（平海）
第６回　外耳・中耳の構造と機能　（平海）
第７回　内耳の構造と機能　（平海）
第８回　中枢聴覚路の構造と機能　（平海）
第９回　外耳疾患の病態と治療（講師非公表）
第10回　中耳疾患の病態と治療（講師非公表）
第11回　内耳疾患の病態と治療（講師非公表）
第12回　聴力改善術（講師非公表）
第13回　前庭・平衡系の構造と機能（講師非公表）
第14回　めまい疾患（講師非公表）
第15回　まとめ（講師非公表）

■ 評価方法

試験100％

■ 教　科　書

書　名：標準言語聴覚障害学　聴覚障害学
著者名：中村　公枝　城間　将江　鈴木　恵子
出版社：医学書院

書　名：言語聴覚士のための基礎知識　耳鼻咽喉科学　第２版
著者名：鳥山　稔
出版社：医学書院

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	臨床神経学
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	小倉　光博		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

スライドを中心に、臨床的に頻度の高い神経疾患をわかりやすく解説する。あわせて、神経解剖、神経生理、神経症候学、神経放射線診断についても解説する。

■ 目　　標

神経解剖、神経生理などの基本的知識をもとに、臨床でよく経験する神経疾患の病態、診断、治療を理解すること。

■ 授業計画

第１回　神経解剖・神経生理
第２回　神経解剖・神経生理
第３回　脳血管障害
第４回　脳血管障害
第５回　脳腫瘍
第６回　脳腫瘍
第７回　頭部外傷
第８回　頭部外傷
第９回　小児頭部外傷・先天奇形
第10回　神経血管症候群
第11回　パーキンソン病
第12回　認知症
第13回　頭痛
第14回　神経変性疾患・感染症
第15回　神経画像診断

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 教科書

■ 参考書

書　名：絵でみる脳と神経　第３版
著者名：馬場元毅
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	形成外科学
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	大倉　正也		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

言語聴覚士に必要な顎顔面外科学

■ 目　　標

基礎知識の習得と理解

■ 授業計画

第１回　総論　(嚥下を含む)
第２回　口唇口蓋裂
第３回　口腔腫瘍
第４回　顎変形症
第５回　顎顔面の再建
第６回　唾液の機能と唾液腺
第７回　試験対策
第８回　試験対策

■ 評価方法

筆記試験（80%），出席状況（無断欠席や遅刻はマイナス評価），の結果を総合的に
評価する.

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

無断欠席や遅刻に注意してください.

授業科目	臨床歯科医学
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	山西　整		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

口腔の構造・機能と口腔に現れる疾患について講義を行う。

■ 目　　標

言語聴覚士として必要な口腔の構造・機能と口腔に現れる疾患について理解する。

■ 授業計画

第１回　口腔の発生、口腔の構造と機能
第２回　顎顔面、口腔領域の奇形、変形
第３回　顎関節疾患、唾液腺疾患
第４回　口腔領域の神経疾患、外傷
第５回　口腔粘膜疾患、口腔領域ののう胞性疾患、炎症
第６回　口腔領域の腫瘍性疾患および腫瘍類似疾患
第７回　顎顔面・口腔領域の再建と機能回復
第８回　中枢性疾患による口腔機能障害、加齢による口腔機能障害

■ 評価方法

出席と試験で評価する

■ 教　科　書

書　名：言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学
著者名：道健一編
出版社：医歯薬出版

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	口腔外科学
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	窪　寛仁		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

顎・口腔の構造と機能および顎・口腔領域の疾患について講義を行う。

■ 目　　標

言語聴覚士として必要な顎・口腔の構造および顎・口腔領域の疾患について理解する。

■ 授業計画

第１回　歯、口腔、顎顔面の構造と機能
第２回　口腔、顎・顔面領域の先天異常、変形
第３回　顎・口腔領域の炎症性疾患、口腔粘膜疾患
第４回　顎・口腔領域の嚢胞性疾患、損傷・外傷
第５回　顎・口腔領域の神経疾患、顎関節疾患、唾液腺疾患
第６回　顎・口腔領域の腫瘍および腫瘍類似疾患
第７回　口腔、顎・顔面領域の手術（再建）と機能回復
第８回　中枢性疾患や加齢による口腔機能障害

■ 評価方法

※　筆記試験　100％
（講義の出席と定期試験（筆記試験）とで評価するが、場合によってはレポートを課すことがある。）

■ 教　科　書

書　名：言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学
著者名：道　健一編
出版社：医歯薬出版

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	呼吸発声系医学（呼吸発声発語系の構造、機能、病理）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	楯谷　一郎・本多　知行		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

音声障害分野：音声障害の基礎及び臨床について、医学的な観点から講義を行う。（楯谷）
嚥下障害分野：嚥下障害の臨床に必要な医学的知識および支援のあり方について学ぶ。（本多）

■ 目　　標

音声障害分野：音声障害のリハビリテーションを行う際に必要となる耳鼻咽喉科学的知識を習得する。
嚥下障害分野：嚥下障害の理解を深め、人間の根源的欲求である「口から食べる」という QOL の向上を目的として、言語聴覚士が支援できる技術と考え方を習得する。（本多）

■ 授業計画

第１回　喉頭の解剖（楯谷）
第２回　発声の生理機構（楯谷）
第３回　喉頭検査法（楯谷）
第４回　喉頭疾患の診断と治療：器質的病変（楯谷）
第５回　喉頭疾患の診断と治療：器質的病変（楯谷）
第６回　喉頭疾患の診断と治療：非器質的病変（楯谷）
第７回　音響分析・音声検査法（楯谷）
第８回　まとめ（楯谷）
第９回　嚥下障害の理解のために必要な解剖・生理（本多）
第10回　嚥下障害の理解のために必要な評価と訓練１（本多）
第11回　嚥下障害の理解のために必要な評価と訓練２（本多）
第12回　嚥下障害におけるチームアプローチと関連事項（本多）
第13回　偽（仮）性球麻痺タイプの嚥下障害の特徴とアプローチ　（本多）
　　球麻痺タイプの嚥下障害の特徴とアプローチ
第14回　変性疾患の嚥下障害に対する特徴とアプローチ（本多）
第15回　嚥下障害の重症度分類と最近の話題（本多）

■ 評価方法

試験100％

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：「摂食・嚥下リハビリテーション」第２版
著者名：金子芳洋
千野直一監修
出版社：医歯薬出版

書　名：「嚥下障害の臨床」第２版
著者名：日本嚥下障害臨床研究会監修
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

授業科目	聴覚系医学（聴覚系の構造、機能、病態）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	金丸　眞一		
学年	2年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

聴覚系の構造・機能・病態と疾患について解説する。

■ 目　　標

聴覚系の構造や機能を理解し、その疾患について言語聴覚士に必要な知識を身につける。

■ 授業計画

第１回　耳科学の概説と聴覚系の構造①（外耳・中耳・内耳）
第２回　聴覚系の機能①（外耳・中耳）
第３回　聴覚系の機能②（内耳）
第４回　聴覚系の機能③（聴神経と視聴中枢経路）
第５回　聴覚系の機能④（聴覚中枢機構、両耳聴能と方向感覚）
第６回　聴覚検査と耳疾患
第７回　聴覚器官の病態①（外耳・中耳疾患①）
第８回　聴覚器官の病態②（外耳・中耳疾患②）
第９回　鼓室形成手術
第10回　聴覚器官の病態③（内耳疾患①）
第11回　聴覚器官の病態④（内耳疾患②）
第12回　内耳再生医学
第13回　聴覚器官の病態⑤（後迷路・中枢性難聴疾患）
第14回　聴覚と音声・言語・音楽
第15回　まとめ

■ 評価方法

試験100%

■ 教　科　書

書　名：言語聴覚士のための聴覚障害学
著者名：喜多村健　編著
出版社：医歯薬出版

書　名：標準言語聴覚障害学　聴覚障害学
出版社：医学書院

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	神経系医学
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	西林　宏起・板倉　徹		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

脳神経外科疾患を含む、神経疾患から機能解剖を学ぶ。

■ 目　　標

日常臨床で遭遇する患者の神経症状、高次脳機能障害を理解する。

■ 授業計画

第１回　頭蓋骨、硬膜、くも膜、軟膜、灰白質、白質の解剖。CT,MRI の画像読影（西林）
第２回　脳脊髄液系、脳血管の解剖（西林）
第３回　大脳皮質の機能・運動感覚野、言語関連野、視覚系、聴覚系（西林）
第４回　皮質脊髄路、皮質核路、体性感覚など（西林）
第５回　間脳（視床、視床下部）（西林）
第６回　大脳基底核、脳幹（西林）
第７回　脳神経、脊髄（西林）
第８回　脳血管系①（板倉）
第９回　脳血管系②（板倉）
第10回　脳脊髄液系（板倉）
第11回　画像診断　CT ①（板倉）
第12回　画像診断　CT ②（板倉）
第13回　画像診断　MRI（板倉）
第14回　画像診断　その他の画像診断（板倉）
第15回　まとめ（板倉）

■ 評価方法

試験100％

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：絵でみる脳と神経　しくみと障害のメカニズム
著者名：馬場　元毅
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	臨床心理学Ⅰ（理論と分類）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	藤井　章乃		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

臨床心理学の概要と人格理論を学び、より人間理解を深める。

■ 目　　標

心をより深く、より広く理解することにより、理想的な人間関係を考察する。

■ 授業計画

第１回　臨床心理学の概要
第２回　臨床心理学の歴史
第３回　臨床心理学演習①
第４回　カウンセリングマインドについて
第５回　精神医学概要
第６回　人格理論　フロイト①
第７回　人格理論　フロイト②
第８回　人格理論　ユング①
第９回　人格理論　ユング②
第10回　人格理論　ロジャーズ
第11回　発達理論　エリクソン
第12回　発達理論　マーラーその他
第13回　その他　基礎理論他
第14回　臨床心理学演習①
第15回　臨床心理学演習②

■ 評価方法

出講 / 受講態度　20%　試験　80%

■ 教　科　書

書　名：「心とかかわる臨床心理」
著者名：川瀬正裕・松本真理子・松本英夫著
出版社：ナカニシヤ出版

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	臨床心理学Ⅱ（査定と心理療法）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	藤井　章乃		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

臨床心理学の援助の方法である心理アセスメントと心理療法の理論を実習により学ぶ。

■ 目　　標

理論と実習を体験することにより理解を深め、実際の臨床において実践できるようにする。

■ 授業計画

第１回　心理アセスメント・パーソナリティ理論
第２回　心理アセスメント１
第３回　心理アセスメント２
第４回　心理アセスメント３
第５回　心理療法　クライエント中心療法①
第６回　心理療法　クライエント中心療法②
第７回　心理療法　精神分析療法
第８回　心理療法　分析的心理療法
第９回　心理療法　遊戯療法
第10回　心理療法　芸術療法①
第11回　心理療法　芸術療法②
第12回　心理療法　行動療法
第13回　心理療法　認知行動療法
第14回　心理療法　その他
第15回　まとめ

■ 評価方法

出席／受講態度　20%　試験80%

■ 教　科　書

書　名：「心とかかわる臨床心理」
著者名：川瀬正裕・松本真理子・松本英夫著
出版社：ナカニシヤ出版

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	生涯発達心理学Ⅰ（乳幼児期）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	工藤　芳幸		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

生涯発達心理学とは、生まれてから死ぬまでの人の一生において、環境（人や物、社会）との相互作用を通じた時系列的な変化を扱う。いわば生老病死、生成と喪失の心理学である。発達アセスメントにもつなげていく為に、新版K式発達検査2001などの検査も参照しながら講義を進めたい。第６回までは年齢区分に沿った子どもの姿を学ぶ。第７回からは、アタッチメントや認知、社会性といった領域ごとの主たる発達理論についての理解を深める。第13回からは、複合的な領域である概念やメタ認知機能、注意・記憶機能（ワーキングメモリ）、知能の捉え方と知能検査（WISC-Ⅳ、K-ABC Ⅱ）について学ぶ。最終回は全体を通したまとめ及び質疑応答から知識の整理を図りたい。

■ 目　　標

乳幼児期の発達の流れを大まかに掴むことと、各領域でポイントになる項目の理解を目標とする。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション：胎生期・新生児期～小学校に上がる頃までの発達と成長を俯瞰する。また受講に当たっての留意事項、学習形式について話したい。

第２回　乳児期前半の子どもの発達：視聴覚教材、検査課題（新版K式発達検査2001など）を通して乳児期前半（０か月～６か月頃）の子どもの大まかな姿について学ぶ。

第３回　乳児期後半の子どもの発達：視聴覚教材、検査課題（新版K式発達検査2001など）を通して、乳児期後半（６か月～１歳前後）の子どもの大まかな姿について学ぶ。

第４回　幼児期前半の子どもの発達：視聴覚教材、検査課題（新版K式発達検査2001など）を通して、幼児期前半（１歳～３歳頃）の子どもの大まかな姿について学ぶ。

第５回　幼児期後半の子どもの発達：視聴覚教材、検査課題（新版K式発達検査2001）などを通して、幼児期後半（４歳～６歳頃）の子どもの大まかな姿について学ぶ。

第６回　乳幼児期の復習。乳幼児期の小テストを実施し、フィードバックを行なう。

第７回　アタッチメントと社会性の発達：Bowlbyのアタッチメント理論を中心に、母子関係における愛着行動、人見知りのメカニズムなどについて解説する。

第８回　認知の発達：乳幼児の認知の発生について理論的体系を築いたスイスの心理学者Piagetの認知発達論について取り上げる。第５回までの講義とリンクさせながら、基本的な考え方について解説する。

第９回　情緒の発達:大人には喜怒哀楽といった感情が確かに「ある」ことが当然と思われるかも知れない。感情もまた、乳児期からの発達過程において学習される。気分・感情・情動・情緒といった言葉で表される状態の初期発達を学ぶ。

第10回　遊びの発達:遊びは総合力である。子どもは手持ちの力を発揮して多様に遊ぶ。遊びを媒介にして、認知や言語、社会性や感情制御といった力を身につけていく。遊びというものについて考えてみたい。

第11回　言語の発達:新版K式発達検査2001などの検査項目も参照しながら、言語発達におけるメルクマールについて解説し、評価の視点について解説する。

第12回　小テスト。講義前半で第１回から第11回までの項目について、年齢と各領域の発達をクロスさせる記述問題を実施する。後半でフィードバックを実施。

第13回　注意・記憶の発達：注意(attention)機能、記憶の発達について取り上げる。

第14回　知能：知能測定の歴史的背景から、現在、使われている知能テストについて解説する。WISC－Ⅲ（Ⅳ）、田中ビネー知能検査Ⅴ、K-ABC Ⅱについて、概要を取り挙げる。

第15回　乳幼児期の発達のまとめと質疑応答

■ 評価方法

期末試験80％、小テスト20％

■ 教　科　書

書　名：コメディカルのための専門分野基礎テキスト 人間発達学
著者名：福田恵美子編
出版社：中外医学社

書　名：幼児期
著者名：岩波新書
出版社：岡本夏木

■ 参　考　書

書　名：新版 K 式発達検査法〈2001年版〉発達のアセスメントと支援
著者名：松下裕・郷間英世（編）
出版社：ナカニシヤ出版

書　名：発達相談と援助―新版 K 式発達検査2001を用いた心理臨床
著者名：川畑 隆・衣斐 哲臣・大島 剛・笹川 宏樹・伏見 真理子・菅野 道英・宮井 研治・梁川 恵（著）
出版社：ミネルヴァ書房

書　名：よくわかる発達心理学
著者名：無藤隆，岡本祐子，大坪治彦（編）
出版社：ミネルヴァ書房

■ 留意事項

適宜、ハンドアウトを配布します。小児関係の講義資料は他科目を含めてファイリングすることをお奨めします。また､岡本夏木｢幼児期｣は各自通読しておいて下さい。幼児期の全体像を掴むことに役立ちます。

授業科目	生涯発達心理学Ⅱ（幼児期～老年期）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	森田　喜治・阪本　裕子 小野　栄　ほか		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■内　　容

森田：幼児期から中年期までの心理的発達と各時期の課題と問題との治療について
阪本・小野ほか：老年期のエイジングとパーソナリティー、認知症の問題、死への対応について解説する。
老年期のエイジングとパーソナリティについて理解を深めて頂き、「失語症」を持つ人に ST が如何に対応すべきかを学んで頂きたい。

■目　　標

対人関係学の立場から情緒の発達の理解と課題及び、病理とその治療についての理解を深め、人間の心の成長、対人関係の成長及び葛藤についての理解を深める。
各発達段階の課題や病理について理解し、適切なアプローチについて考えることができる。

■授業計画

第１回　対人関係学の立場からの乳幼児における母子関係、対人関係についての解説（森田）
第２回　ライフサイクルおける幼児期の課題と対人関係について、対象関係論、心理学的現象学の観点から解説する（森田）
第３回　ライフサイクルおける幼児期の問題行動と治療について解説する（森田）
第４回　ライフサイクルおける児童期の課題と対人関係について、対象関係論、心理学的現象学の観点から解説する（森田）
第５回　ライフサイクルおける児童期の問題行動と治療について解説する（森田）
第６回　ライフサイクルおける青年期前期（思春期）の課題と対人関係について、対象関係論、心理学的現象学の観点から解説する（森田）
第７回　ライフサイクルおける青年期前期（思春期）の問題行動と治療について解説する（森田）
第８回　成人期、中年期の課題と問題、その家族との人間関係について治療を含めた観点から解説する（森田）
第９回　ビデオ鑑賞（「NHK・にんげんドキュメント」にて放映された「お父さん歌ってよ！」を通して失語症患者とその家族の方の心理状態を理解して頂きたい。）（小野）
第10回　老年期のエイジングとパーソナリティー（小野）
第11回　“お年寄りの問題あれこれ”と“老人に接する時の心得”（小野）
第12回　老年期の知的機能－認知症について（阪本）
第13回　老年期の知的機能－認知症のケアについて（阪本）
第14回　死への対応１（講師非公表）
第15回　死への対応２（講師非公表）

■評価方法

森田：出席　70%　レポート　30%
小野・阪本ほか：レポート100%

■教　科　書

特に指定しません

■参　考　書

特に指定しません・講義内で適宜紹介していきます

■留意事項

授業科目	学習・認知心理学Ⅰ（感覚・知覚・学習・記憶）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	芦高　勇気		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内　　容

本講義では、言語聴覚士に必要とされる学習・認知心理学について学びます。前期は感覚・知覚・学習・記憶についてお話します。

■ 目　　標

人間がどのように外の世界をとらえているのか（感覚・知覚）、またどのように新しい行動や知識を獲得していくのか（学習・記憶）を理解することを目標とします。

■ 授業計画

第１回　心理学とは何か？
第２回　感覚の分化と統合Ⅰ（感覚・知覚）
第３回　感覚の分化と統合Ⅱ（感覚・知覚）
第４回　視知覚Ⅰ（感覚・知覚）
第５回　視知覚Ⅱ（感覚・知覚）
第６回　古典的条件付け（学習）
第７回　オペラント条件付け（学習）
第８回　強化スケジュール（学習）
第９回　技能学習（学習）
第10回　社会的学習（学習）
第11回　記憶の過程（記憶）
第12回　短期記憶（記憶）
第13回　長期記憶（記憶）
第14回　記憶の神経過程（記憶）
第15回　前期のまとめ

■ 評価方法

出席状況・試験の結果を総合的に評価する。（試験100％）

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：心理学（第４版）
著者名：鹿取 廣人, 杉本 敏夫, 鳥居 修晃
出版社：東京大学出版会

書　名：認知コンロール　認知心理学の基礎研究から教育・臨床の応用をめざして
著者名：嶋田　博行, 芦高　勇気
出版社：培風館

■ 留意事項

授業科目	学習・認知心理学Ⅱ（思考・言語）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	芦高　勇気		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

本講義では、言語聴覚士に必要とされる学習・認知心理学について学びます。後期は、より高次の認知過程を必要とする思考・言語についてお話します。

■ 目　　標

学習・認知心理学において扱われる人間の問題解決の仕方や知識の構造（思考)、また言語を獲得するにあたり必要な認知発達（言語）に関して理解することを目標とします。

■ 授業計画

第１回　前期のおさらい
第２回　問題解決（思考）
第３回　問題解決と認知発達（思考）
第４回　知識（思考）
第５回　推論と発見（思考）
第６回　言語獲得（言語）
第７回　非言語コミュニケーション（言語）
第８回　前期・後期のまとめ

■ 評価方法

出席状況・試験の結果を総合的に評価する。(試験100%）

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：心理学（第４版）
著者名：鹿取 廣人 , 杉本 敏夫 , 鳥居 修晃
出版社：東京大学出版会

書　名：認知コンロール　認知心理学の基礎研究から教育・臨床の応用をめざして
著者名：嶋田　博行 , 芦高　勇気
出版社：培風館

■ 留意事項

授業科目	心理測定法
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	松井　理直		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

言語聴覚士の仕事で用いられる各種心理測定法の意味に関する理解を深めると共に、
人間の心理を客観的に把握する方法の習得を目指す。

■ 目　　標

言語聴覚士として必要不可欠な心理学の知識を身につけると共に、国家試験問題に対応できる応用力を身につけること。

■ 授業計画

第１回　心理テストの特徴とテストの信頼性・再現性
第２回　精神物理学的測定法（１）― 調整法
第３回　精神物理学的測定法（２）― 極限法と恒常法
第４回　尺度構成について
第５回　一対比較法と感覚尺度
第６回　Weber の法則について
第７回　Fechner の法則について
第８回　Weber-Fechner の法則と音響学の関係
第９回　Stevens のベキ法則について
第10回　信号検出理論について
第11回　統計学の基礎
第12回　各種統計学の考え方
第13回　各種心理テスト法の特徴について
第14回　認知能力とことばの心理
第15回　心理測定法の総復習

■ 評価方法

授業中のミニテストおよび最終テスト

■ 教　科　書

プリントを配布

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	言語学Ⅰ（音声学・形態論）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	松井　理直		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

言語聴覚士の仕事に必要不可欠な「ことば」に関する理解を深めると共に、ことばに関する鋭敏な感覚の涵養を目指す。

■ 目　　標

言語聴覚士として必要不可欠な言語学の知識を身につけると共に、国家試験問題に対応できる応用力を身につけること。

■ 授業計画

第１回　言語学入門 ―「ことば」とはどのようなものか
第２回　記号というシステムの特徴
第３回　音声学入門 ― 調音器官について
第４回　子音の分類
第５回　母音の分類
第６回　日本語音声の特徴
第７回　モーラと音節
第８回　音韻論（１）― 音素について
第９回　音韻論（２）― 韻律構造について
第10回　言語理論の考え方
第11回　音声と文字
第12回　日本語の語彙層の特性
第13回　日本語の形態音韻論
第14回　テンスとアスペクト
第15回　ヴォイスとムード、モダリティ

■ 評価方法

授業中のミニテストおよび最終テスト

■ 教　科　書

プリントを配布

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	言語学Ⅱ（文法・意味・社会言語学）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	松井　理直		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

言語聴覚士の仕事に必要不可欠な「ことば」に関する理解を深めると共に、
ことばに関する鋭敏な感覚の涵養を目指す。

■ 目　　標

言語聴覚士として必要不可欠な言語学の知識を身につけると共に、国家試験問題に対応できる
応用力を身につけること。

■ 授業計画

第１回　動詞形態論の復習
第２回　文法格と深層格
第３回　「は」と「が」― 主題を巡って
第４回　新情報と旧情報
第５回　終助詞の機能
第６回　言語の構造
第７回　生成文法理論の考え方
第８回　言語能力の特性
第９回　ことばの意味
第10回　論理学と意味論
第11回　意味論と語用論
第12回　会話の公準と関連性理論
第13回　社会とことばの関わり
第14回　様々な言語理論
第15回　言語学の総復習

■ 評価方法

授業中のミニテストおよび最終テスト

■ 教　科　書

プリントを配布

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	音声学
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	松井　理直		
学　　年	２年	総単位数	２単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

言語聴覚士の仕事に必要不可欠な「ことば」に関する理解を深めると共に、音声に関する鋭敏な感覚の涵養を目指す。

■ 目　　標

言語聴覚士として必要不可欠な音声学の知識を身につけると共に、国家試験問題に対応できる応用力を身につけること。

■ 授業計画

第１回　ST にとって音声学で学ばなければならないこと
第２回　調音器官の説明
第３回　IPA の子音チャートについて
第４回　有声音と無声音
第５回　調音方法（１）― 破裂音と摩擦音
第６回　調音方法（２）― はじき音と接近音
第７回　調音位置の詳細について
第８回　母音の発音
第９回　日本語の発音 ― 五十音を巡って
第10回　いわゆる四つ仮名について
第11回　ハ行発音について
第12回　特殊拍（１）― 撥音について
第13回　特殊拍（２）― 促音と長音
第14回　IPA の補助記号と構音障害の表記法
第15回　音声学の復習

■ 評価方法

授業中のミニテストおよび最終テスト

■ 教　科　書

プリントを配布

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	音響学Ⅰ（一般音響学）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	松井　理直		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

言語聴覚士の仕事に必要不可欠な「音響に関する性質」に関する理解を深めると共に、
音声・聴覚・音響に関する鋭敏な感覚の涵養を目指す。

■ 目　　標

言語聴覚士として必要不可欠な音響学・音響心理学の知識を身につけると共に、国家試験問題に対応できる応用力を身につけること。

■ 授業計画

第１回　音とは何か ― 疎密波と音の伝播
第２回　音の伝播の仕組みと音速
第３回　周波数の概念
第４回　周波数と周期の関係
第５回　周波数と波長の関係
第６回　指数と対数の計算について
第７回　周波数レベルとメル尺度
第８回　音の強さと音圧
第９回　強さと音圧の関係について
第10回　パワーレベルの計算方法
第11回　様々なタイプのデジベル値
第12回　デジベルに関する理解を深める
第13回　等ラウドネス曲線について
第14回　フォンとソン
第15回　前期の総復習

■ 評価方法

授業中のミニテストおよび最終テスト

■ 教　科　書

プリントを配布

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	音響学Ⅱ（音響音声学・聴覚心理学）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	松井　理直		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

言語聴覚士の仕事に必要不可欠な「音響に関する性質」に関する理解を深めると共に、
音声・聴覚・音響に関する鋭敏な感覚の涵養を目指す。

■ 目　　標

言語聴覚士として必要不可欠な音響学・音響心理学の知識を身につけると共に、国家試験問題に対応できる応用力を身につけること。

■ 授業計画

第１回　複合音の特性
第２回　倍音と基本周波数
第３回　失われた基音と場所説・時間説
第４回　スペクトルについて
第５回　短時間スペクトルの特性
第６回　声帯のスペクトルの特徴
第７回　共鳴とは何か
第８回　共鳴管（１)―閉管の特徴
第９回　共鳴管（２)―開管の特徴
第10回　フォルマントと調音位置
第11回　子音の調音方法と音響特性
第12回　サウンドスペクトログラムの読み方
第13回　音声の音響的特徴のまとめ
第14回　デジタル信号処理
第15回　音響学の総復習

■ 評価方法

授業中のミニテストおよび最終テスト

■ 教　科　書

プリントを配布

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	言語発達学
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	齋藤　典昭		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

子どもの発達の中でも０歳～学齢までの言語の発達について学びます.
前言語期・単語獲得期・前期構文獲得期・中期構文獲得期と進んでいきます．コミュニケーションはことばの前からあるのだろうか？どんなことばから覚えていくのだろうか？話せるようになるのはいつ頃か？字を読んだり書いたりできるのはいつ頃か？ことばを育むにはどうしたらよいのか．これらのことは，ことばの障害とどのような関係にあるのか．といったことを学びます.

■ 目　　標

１．年齢を聞いて，その年齢の言語発達について説明できる
２．子どもを観察し，その子の言語発達について概要を評価できる
３．言語発達についての基礎知識を獲得したことで，言語発達障害が理解できる

■ 授業計画

第１回　ガイダンス
　　発達の区分について
　　課題：０歳～ 12ヵ月の言語発達チャート訳出
第２回　０ヵ月～ 12ヵ月の言語発達チャート　解題
　　課題
第３回　Language – Speech – Communication の違い
　　表象と象徴と AAC の根拠
　　課題
第４回　Language のルールと呼ばれるものについて
　　AAC の機器紹介
　　０ヵ月～６ヵ月のことばの育ち
　　課題
第５回　０ヵ月～６ヵ月のことばの育ち
　　喃語について
　　課題
第６回　喃語について
　　DVD 視聴
　　６ヵ月～ 12ヵ月のことばの育ち
第７回　初語について
　　ポインティングの重要性について
第８回　言語音知覚の発達
　　課題
第９回　復習：前言語期のことばの発達
　　課題
第10回　語彙獲得の第１段階
　　12ヵ月～ 18ヵ月のことばの育ち
第11回　語彙獲得の第２段階
　　18ヵ月～ 24ヵ月のことばの育ち
　　課題
第12回　24ヵ月～ 36ヵ月のことばの育ち
　　会話・語り，かんしゃく，構音ほか
　　課題
第13回　３歳～４歳のことばの育ち
　　課題
第14回　４歳～５歳のことばの育ち
　　会話の発達
　　課題
第15回　語りの発達，語意味の獲得，Red Flags

■ 評価方法

課題提出10%，リアクションペーパー 10%，筆記試験80% で評価します.

■ 教　科　書

書　名：言語聴覚士のための基礎知識　音声学・言語学　p.185-p.274
著者名：今泉 敏ほか
出版社：医学書院

書　名：教材：ブログ　playing with words 365 の記事　speech and language 101 など
著者名：Katie
出版社：http://www.playingwithwords365.com

■ 参　考　書

書　名：ことばの発達の謎を解く
著者名：今井むつみ
出版社：ちくまプリマー新書

書　名：小さなことば
著者名：俵万智
出版社：岩波現代文庫

書　名：新・子どもたちの言語獲得
著者名：小林春美・佐々木正人　編
出版社：大修館書店

書　名：子どもとことば
著者名：岡本夏木
出版社：岩波新書

■ 留意事項

当校のLearning Management SystemであるMoodleとインターネット上にあるブログを活用しますので，操作に慣れておいてください．授業計画の詳細ほかの情報もそちらに載せますのでよろしくお願いします.

授業科目	リハビリテーション概論
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	大西　環・齋藤典昭・大根茂夫 前田留美子・工藤芳幸		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

リハビリテーションの概要についての講義と言語聴覚障害の方との対話会を行う。

■ 目　　標

リハビリテーションの考え方について知る。
言語聴覚障害者とのコミュニケーションについて理解を深め、コミュニケーションに関する自己の課題を知る。言語聴覚障害の方との対話を通して、リハビリテーションへの取り組みや生活の実際を知る。

■ 授業計画

第１回　リハビリテーションとは
　　リハビリテーションの考え方とその概要
第２回　対話会の実施にあたって
　　対話会の意義と取り組むべき課題について
第３回　第１回　言語聴覚障害の方との対話会
第４回　第１回　言語聴覚障害の方との対話会
第５回　第１回　言語聴覚障害の方との対話会
第６回　第２回　言語聴覚障害の方との対話会
第７回　第２回　言語聴覚障害の方との対話会
第８回　第２回　言語聴覚障害の方との対話会
　　対話会を振り返って－コミュニケーションの課題－

■ 評価方法

レポート100％

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	社会保障制度
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	山本　永人		
学　　年	２年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

わが国の社会保障制度を社会福祉制度と比較しながら、その基本的なフレームを解説する。

■ 目　　標

言語聴覚士に必要な基本的な社会保障、社会福祉に関する知識を習得し、単にセラピストのみならず、対人援助職として共通して持つべき基盤とする知識や価値観を醸成する。

■ 授業計画

第１回　社会福祉の定義と専門性
第２回　社会福祉の基本的な理念
第３回　ICF の理解
第４回　社会福祉の歴史
第５回　社会保障制度の基本的な枠組み
第６回　医療保険について
第７回　年金保険について
第８回　労働保険について
第９回　高齢者の福祉と介護保険（１）
第10回　高齢者の福祉と介護保険（２）
第11回　公的扶助制度
第12回　障害者の福祉サービス（１）
第13回　障害者の福祉サービス（２）
第14回　児童の福祉
第15回　社会福祉援助技術

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 教　科　書

書　名：よくわかる社会福祉（最新版）
著者名：山縣文治・岡田忠克
出版社：ミネルヴァ書房

■ 参　考　書

書　名：はじめての社会保障 ― 福祉を学ぶ人へ
著者名：椋野美智子・田中耕太郎
出版社：有斐閣アルマ

■ 留意事項

国家試験対策としても重要です。

授業科目	医療福祉教育・関係法規
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	山本　永人・柴田　浩志 藤井　達也・吉機　俊雄		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

言語聴覚士に関連する法規、言語聴覚士法の成り立ち、聴覚障害者福祉に関する講義を行う。

■ 目　　標

・言語聴覚士に必要な法律の基礎知識を知る。
・言語聴覚士法制定までの道のりや聴覚障害者福祉の歴史と現状について知る。

■ 授業計画

第１回　言語聴覚士法・社会福祉法（山本）
第２回　社会福祉に関連する法律（山本）
第３回　障害者の福祉に関連する法律（１）（山本）
第４回　障害者の福祉に関連する法律（２）（山本）
第５回　聴覚障害者福祉の歴史と現状（柴田）
第６回　聴覚障害者を巡る状況　　福祉分野の取り組みと課題（柴田）
第７回　言語聴覚士法の歴史（吉機）
第８回　職能組織について（藤井）

■ 評価方法

レポート100%

■ 教科書

書　名：よくわかる社会福祉（最新版）
著者名：山縣文治・岡田忠克
出版社：ミネルヴァ書房

■ 参考書

■ 留意事項

教科書は社会保障制度のものと同様です。

授業科目	言語聴覚障害学概論
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	大西　環・齋藤典昭・大根　茂夫 前田留美子・工藤芳幸・森田婦美子		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

・神経系、発声発語器官、頭頚部解剖学への導入
・言語聴覚療法の各領域の臨床について現任者が講義を行う。
・Ⅰ期実習ガイダンス

■ 目　　標

・神経系や発声発語器官、頭頚部の概要を理解する。
・さまざまな臨床現場における言語聴覚療法の臨床を知る。
・実習に先だち、言語聴覚士として必要な各領域の知識や技術の基礎的事項を身につける。

■ 授業計画

第１回　言語聴覚障害とは（大根）
第２回　神経系の解剖学（大根）
第３回　発声発語器官の解剖学（前田）
第４回　頭頚部の解剖学（前田）
第５回　言語聴覚士の現場の声をきく　－臨床の実際を知る１－
第６回　言語聴覚士の現場の声をきく　－臨床の実際を知る２－
第７回　言語聴覚士の役割とは　　ディスカッション
第８回　言語聴覚士の役割とは　　ディスカッション
第９回　言語聴覚士の役割とは　　ディスカッションと課題学習
第10回　言語聴覚士の役割とは　　ディスカッションと課題学習
第11回　言語聴覚士現場の声をきく会から学んだこと　発表
第12回　Ⅰ期実習ガイダンス　　バイタルサインのみかた（講義）
第13回　Ⅰ期実習ガイダンス　　バイタルサインのみかた（演習）
第14回　Ⅰ期実習ガイダンス　　感染症について（講義）
第15回　Ⅰ期実習ガイダンス　　感染症における注意点（演習）

■ 評価方法

ディスカッションと課題発表100％

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	言語聴覚障害診断学
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	森田　婦美子・高木　卓司 ＳＴ専任教員　他		
学　　年	１年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

運動障害性発話障害と摂食・嚥下障害に関する評価について学ぶ。
評価実習に先立ち、小児と成人の対象者にご協力いただき、情報収集や検査などの評価を行う。
カルテからの情報収集の仕方、検査結果の記述や評価報告の作成についても講義する。

■ 目　　標

運動障害性発話障害が生じる神経的基礎を踏まえて発声発語器官の形態、機能の検査、発話の検査による評価を行い、適切な訓練目標を設定して実施できるようになる。
摂食・嚥下分野における援助の考え方とその実際を知る。
小児と成人領域における検査や情報収集を実践し、報告できるようになる。

■ 授業計画

第１回　導入：運動障害性発話障害の障害レベルと評価について（講師非公表）
第２回　発話の検査（標準ディサースリア検査、発話明瞭度検査）（講師非公表）
第３回　呼吸機能、発声機能の評価（講師非公表）
第４回　鼻咽腔閉鎖機能の評価（講師非公表）
第５回　口腔構音機能の評価（講師非公表）
第６回　機器を用いた検査、反射検査など（講師非公表）
第７回　評価結果のまとめと分析（講師非公表）
第８回　研修の目標設定、「倫理」とは、スウェーデンと日本の差の解説等（高木）
第９回　経口摂取のとらえ方、経管栄養の欠点、現場主義的な栄養方法の選択（高木）
　　グループディスカッション「リスクと尊厳の区別」
第10回　嚥下実習（前田）
第11回　評価実習ガイダンス　カルテのみかた（森田）
第12回　評価実習ガイダンス　小児臨床講義（齋藤　工藤）
第13回　評価実習ガイダンス　成人臨床講義（大根　大西）
第14回　評価実習ガイダンス　レポートの書き方（大根）
第15回　評価実習ガイダンス　症例報告書の書き方（大西）

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 教　科　書

書　名：標準ディサースリア検査
著者名：西尾正輝
出版社：インテルナ出版

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	言語聴覚障害特論
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	山本　一郎・名徳　倫明 大西　環　　他		
学　　年	２年	総単位数	２単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

・運動障害性発話障害が生じる神経的基礎を踏まえ、ディサースリアの障害レベルに応じた適切な訓練目標を設定して実施できるようにする。　ディサースリア検査の評価データーから総合的な分析を適切に行い、計画立案の考え方について述べる。
・口腔の果たす２大機能である食べるということ､話すことについてその発生と発達について学ぶ。(山本)
・言語聴覚療法や摂食・嚥下療法を行うに当たって知っておくべきトピックスについて講義を行う。(名徳　ほか)
・国家試験を想定し、領域別問題に取り組む。(大西)

■ 目　　標

・ディサースリア検査の評価データーからディサースリアの障害レベルに応じて、総合的な分析を適切に行い、計画立案ができるようにする。ディサースリア検査の評価データーから総合的な分析を適切に行い、計画立案の考え方について述べる。
・口腔機能を発生と発達の視点から学び、様々な病態に対処できる知識を養う。(山本)
・言語聴覚療法や摂食・嚥下療法を実践する際に知っておくべきことがらについて理解を深める。(名徳　ほか)
・国家試験に必要な知識を身につける。(大西)

■ 授 業 計 画

第１回　総論：ディサースリアの障害レベルとそれに対応した訓練について（講師非公表）
第２回　呼吸機能の治療アプローチ（講師非公表）
第３回　発声機能の治療アプローチ（講師非公表）
第４回　鼻咽腔閉鎖機能の治療アプローチ（講師非公表）
第５回　口腔構音機能の治療アプローチ（講師非公表）
第６回　発話速度の調節法１（講師非公表）
第７回　発話速度の調節法と構音訓練など（講師非公表）
第８回　まとめ（講師非公表）
第９回　顔面・口腔の発生　　口腔機能の発達　(山本)
第10回　唇顎口蓋裂児における哺乳・摂食障害とその対処法（山本）
第11回　唇顎口蓋裂児者における異常構音の分析と治療について
　　エレクトロパラトグラフィー（EPG）を用いた異常構音の分析と治療について（山本）
第12回　薬の基礎知識①用法・用量など（名徳）
第13回　薬の基礎知識②副作用・相互作用など（名徳）
第14回　薬の薬理作用（摂食・嚥下に影響する薬剤）(名徳)
第15回　輸液の基礎と栄養（名徳）
第16回　子ども虐待　　歴史，制度の変遷，虐待の種類（講師非公表）
第17回　虐待に関わる発達的課題　　(被虐待児の心理的特徴等)（講師非公表）
第18回　虐待を取り巻く社会的背景（講師非公表）
第19回　虐待に対しての対応　　被虐待児の支援について（講師非公表）
第20回　言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～（大西）　領域別問題の実践とフィードバック１
第21回　言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～（大西）　領域別問題の実践とフィードバック２
第22回　言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～（大西）　領域別問題の実践とフィードバック３
第23回　言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～（大西）　領域別問題の実践とフィードバック４
第24回　言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～（大西）　領域別問題の実践とフィードバック５
第25回　言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～（大西）　領域別問題の実践とフィードバック６
第26回　言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～（大西）　領域別問題の実践とフィードバック７
第27回　言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～（大西）　領域別問題の実践とフィードバック８
第28回　言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～（大西）　領域別問題の実践とフィードバック９
第29回　言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～（大西）　領域別問題の実践とフィードバック10
第30回　言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～（大西）　領域別問題の実践とフィードバック11

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 教　科　書

書　名：標準ディサースリアテキスト
著者名：西尾正輝
出版社：医歯薬出版

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	失語症Ⅰ（基礎）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	大西　環		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

失語症とはどのような言語障害であるか、基礎的な内容を中心に講義を行う。

■ 目　　標

失語症の言語症状やタイプ分類等、失語症の基礎および観察の仕方を理解する。

■ 授業計画

第１回　失語症とは
　　定義とその障害の特徴
　　臨床の流れ
第２回　失語症の言語症状　　流暢性発話と非流暢性発話
第３回　失語症の言語症状　　認知神経心理学的モデルについて
第４回　失語症の言語症状　　発話症状　（各症状と用語の解説）
第５回　失語症の言語症状　　発話症状　（各症状と用語の解説）
第６回　失語症の言語症状　　聴覚的理解障害　（各症状と用語の解説）
第７回　失語症の言語症状　　読み書きの障害　（各症状と用語の解説）
第８回　失語症のタイプ分類　古典分類の各タイプについて解説
第９回　失語症のタイプ分類　古典分類の各タイプについて解説
第10回　失語症のタイプ分類　皮質下性失語、交叉性失語、小児失語　ほか
第11回　純粋失読と失読失書
第12回　症状の観察の仕方
第13回　症状の観察の仕方
第14回　復習
第15回　まとめ

■ 評価方法

試験100％

■ 教　科　書

書　名：脳卒中後のコミュニケーション障害
著者名：竹内愛子、河内十郎　編著
出版社：協同医書出版社

■ 参　考　書

書　名：標準言語聴覚障害学　失語症
著者名：藤田郁代　立石雅子
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	失語症Ⅱ（評価）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	大根　茂夫		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

失語症の治療・訓練・指導に活用するために各種失語症の検査法を学ぶ。
検査から評価の仕方、成績の解釈の仕方、訓練法の立案を学ぶ。
各種失語症検査を標準的な実施方法で実施できるように演習を行う。

■ 目　　標

1）医療面接等で情報収集し、主訴や問題点を診療録へ簡潔に記載できる。
2）症状に応じた失語症検査・評価ができる。
3）評価結果から失語症の有無、タイプ分類、重症度、予後、関連する障害の有無、などの鑑別診断ができる。
4）鑑別診断の結果を患者や家族へ説明できる。
5）治療・訓練・指導へ活用するために、各種失語症検査を実施できる。

■ 授業計画

第1回　医学的情報の収集
　　心理・社会的側面の情報収集
　　面接の仕方
第2回　スクリーニング検査の意義と実施方法
第3回　失語症タイプ診断の進め方
第4回　標準失語症検査（SITA）の検査法概略と成績の解釈の仕方と言語治療に生かすみかた
第5回　WAB 失語症検査の検査法概略と成績の解釈の仕方と言語治療に生かすみかた
第6回　失語症鑑別診断検査の検査法概略と成績の解釈の仕方と言語治療に生かすみかた
第7回　実用的コミュニケーション能力検査の検査法概略と成績の解釈の仕方と言語治療に生かすみかた
第8回　重度失語症検査の検査法概略と成績の解釈の仕方と言語治療に生かすみかた
第9回　失語症語彙検査の検査法概略と成績の解釈の仕方と言語治療に生かすみかた
第10回　SALA 失語症検査の検査法概略と成績の解釈の仕方と言語治療に生かすみかた
第11回　標準抽象語理解力検査の検査法概略と成績の解釈の仕方と言語治療に生かすみかた
第12回　失語症の掘り下げ検査（失語症構文検査、トークンテスト）の検査法概略と成績の解釈の仕方と言語治療に生かすみかた
第13回　失語症の掘り下げ検査（SLTA 補助テスト、語音弁別検査、モーラ分解・抽出検査）の検査法概略と成績の解釈の仕方と言語治療に生かすみかた
第14回　鑑別診断、経過と予後、訓練・援助の方法の決定
第15回　評価サマリーの書き方

■ 評価方法

筆記試験と実技試験

■ 教　科　書

書　名：なるほど！失語症の評価と治療
著者名：編著　小嶋知幸
　　執筆　大塚裕一、宮本恵美
出版社：金原出版株式会社

書　名：失語症 Q&A　検査結果のみかたとリハビリテーション
著者名：編著　種村　純

書　名：標準失語症検査マニュアル
出版社：新興医学出版社

■ 参　考　書

■ 留 意 事 項

必要に応じて標準失語症検査の実施方法を習得するための補講を行います。

授業科目	失語症Ⅲ（訓練）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	林　正弘		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

失語症を改善させる訓練法の習得、さらに失語症の障害構造の仮説を設定し、その考察に基づいた対処や訓練の選択方法を学習します。

■ 目　　標

単なる知識ではなく、実際にアプローチをするための評価から、訓練プランの立案までを学習します。

■ 授業計画

第１回　臨床の中での失語
第２回　失語症臨床の目標
第３回　評価の目的と着眼点
第４回　失語症訓練の歴史とエビデンス
第５回　訓練法１　　伝統的刺激法
第６回　訓練プランの構築方法
第７回　ビデオ症例１
第８回　訓練法２　　遮断除去法
第９回　ビデオ症例２
第10回　失語にまつわる諸問題　ビデオ症例３
第11回　発話障害（発語失行）
第12回　訓練法３　　機能再編成法
第13回　ビデオ症例４
第14回　訓練法４　　実用的代償法
第15回　訓練計画と訓練手続き

■ 評価方法

定期試験100%

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

教材資料集（1,000円程度）を開講前に配布します。

授業科目	失語症Ⅳ（臨床講義）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	吉機俊雄・大根茂夫・大西　環		
学年	2年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

①失語症者の機能障害・能力障害・心理・社会参加、QOL について考え、支援のポイントを学ぶ。②臨床講義で失語症者のスクリーニング・評価・訓練計画立案・訓練までを行い、グループで検討する。適宜次の内容を指導する（失語症回復の理論と介入の実際　回復時期に合わせた援助　ゴール設定とプログラム立案　訓練の実施　評価報告書の作成）。

■ 目　　標

失語症者のスクリーニング・評価・訓練計画立案・訓練までの一連の流れに沿ったアプローチが指導を受けながら実施できる。

■ 授業計画

第１回　臨床講義１回目　セッションの準備
第２回　臨床講義１回目　成人失語症者が来校し、セッション後のフィードバックにも参加していただく。
第３回　臨床講義１回目　グループでのレポート作成
第４回　臨床講義２回目　セッションの準備
第５回　臨床講義２回目　成人失語症者が来校し、セッション後のフィードバックにも参加していただく。
第６回　臨床講義２回目　グループでのレポート作成
第７回　臨床講義３回目　セッションの準備
第８回　臨床講義３回目　成人失語症者が来校し、セッション後のフィードバックにも参加していただく。
第９回　臨床講義３回目　グループでのレポート作成
第10回　臨床講義４回目　セッションの準備
第11回　臨床講義４回目　成人失語症者が来校し、セッション後のフィードバックにも参加していただく。
第12回　臨床講義４回目　グループでのレポート作成
第13回　臨床講義５回目　セッションの準備
第14回　臨床講義５回目　成人失語症者が来校し、セッション後のフィードバックにも参加していただく。
第15回　臨床講義５回目　グループでのレポート作成　最終会終了後にグループごとに症例報告書を作成する。

■ 評価方法

出席50％　レポート50％

■ 教 科 書

書　名：失語症臨床ガイド 症状別－理論と42症例による訓練・治療の実際
著者名：竹内愛子編集
出版社：協同医書出版

■ 参 考 書

書　名：失語症者の実用コミュニケーション臨床ガイド
著者名：竹内愛子編集
出版社：協同医書出版社

書　名：言語聴覚士のための失語症訓練ガイダンス
著者名：日本言語療法士協会編集
出版社：医学書院

■ 留意事項

活発なグループワーク・質問・討議を期待します。

授業科目	高次脳機能障害Ⅰ（概論）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	森岡　悦子		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

本講義では、高次脳機能に関わる大脳の機能を理解し、高次脳機能障害の基本的知識を習得する。また、高次脳機能の簡易検査の評価方法や結果の用い方を理解し、高次脳機能障害を評価することの意味を学ぶ。

■ 目　　標

高次脳機能障害の基本的知識を習得し、簡単な評価結果から障害メカニズムに基づいて障害を理解できるようになる。

■ 授業計画

第１回　高次脳機能障害の概要：高次脳機能に関わる中枢神経系の機能と大脳の情報処理
第２回　注意機能：注意の基本概念と注意障害の高次脳機能への影響
第３回　記憶：記憶の種類と記憶障害の病態
第４回　視覚認知：視覚性認知のメカニズムと視覚失認の基本概念
第５回　視空間障害：半側空間無視の症状とメカニズム
第６回　行為の障害：失行、習熟運動の解放現象、行為障害についての概要
第７回　高次脳機能障害の評価と結果分析（１）
第８回　高次脳機能障害の評価と結果分析（２）

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 教科書

書　名：標準言語聴覚障害学　高次脳機能障害学
著者名：藤田郁代　監修
出版社：医学書院

■ 参考書

書　名：高次脳機能障害学　第２版
著者名：石合純夫　著
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

授業科目	高次脳機能障害Ⅱ（評価）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	森岡　悦子		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

本講義では、高次脳機能障害の症状を、その症状を捉えるために用いる検査について、内容および施行方法を学び、検査結果から症状をどう捉えるのかを理解する。

■ 目　　標

高次脳機能障害の症状に対応した検査を適切に選択して実施し、検査結果を分析することにより、障害メカニズムに基づいて症状を把握できるようになる。

■ 授業計画

第１回　高次脳機能障害の概論の復習
第２回　視知覚・認知の障害（１）：視知覚・認知のしくみとその障害
第３回　視知覚・認知の障害（２）：視知覚・認知の障害の評価について、目的と実施手順の理解、演習
第４回　視知覚・認知の障害（３）：視知覚・認知の評価結果の解釈と考察
第５回　視空間障害（１）：半側空間無視、構成障害、バリント症候群
第６回　視空間障害（２）：視空間障害の評価について、目的と実施手順の理解、演習
第７回　視空間障害（３）：視空間障害の評価結果の解釈と考察
第８回　身体意識と病態認知の障害：ゲルストマン症候群と病態失認
第９回　記憶障害（１）：記憶の種類と構造、記憶障害の症状
第10回　記憶障害（２）：記憶障害の検査について、目的と実施手順の理解、演習
第11回　記憶障害（３）：記憶障害の検査結果の解釈と考察
第12回　前頭葉と高次脳機能障害（１）：前頭葉機能障害の症状
第13回　前頭葉と高次脳機能障害（２）：遂行機能障害の症状と評価方法
第14回　脳梁離断：左半球優位症状と右半球優位症状、脳梁の機能局在
第15回　脳外傷：脳外傷の基本概念と症状、社会的問題

■ 評価方法

筆記試験90%，提出課題５%，実技試験５%

■ 教　科　書

書　名：標準言語聴覚障害学　高次脳機能障害学
著者名：藤田郁代　監修
出版社：医学書院

書　名：高次脳機能障害学　第２版
著者名：石合純夫　著
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	高次脳機能障害Ⅲ（臨床）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	森岡　悦子		
学　　年	２年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

本講義では、高次脳機検査の分析結果と、脳画像の情報を基に、症状と障害メカニズムを把握し、障害レベルに応じたリハビリテーションについて学ぶ。

■ 目　　標

高次脳機能障害の検査結果の分析と、CT や MRI などの脳画像情報から、症状を正しく捉え、障害メカニズムを考察し、障害レベルに対応したリハビリテーションプログラムを立案することができるようになる。

■ 授業計画

第１回　高次脳機能障害の評価と結果分析（１）
第２回　高次脳機能障害の評価と結果分析（２）
第３回　認知症：原因疾患別初期症状の特徴と経過
第４回　画像診断学（１）　脳画像検査の種類と特徴　水平断における主な脳溝と脳回の同定
第５回　画像診断学（２）　水平断、冠状断、矢状断における主要領域の同定
第６回　画像診断学（３）　高次脳機能障害の画像診断
第７回　高次脳機能障害のリハビリテーション（１）
第８回　高次脳機能障害のリハビリテーション（２）

■ 評価方法

■ 教　科　書

書　名：高次脳機能障害学　第２版
著者名：石合純夫　著
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：標準言語聴覚障害学　高次脳機能障害学
著者名：藤田郁代　監修
出版社：医学書院

書　名：高次脳機能障害マエストロシリーズ②画像の見かた使い方
著者名：三村將、ほか著
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：CT/MRI 画像解剖ポケットアトラス　1　頭部・頸部
著者名：Torsten B. Moeller,Emil Reif　監訳者　町田徹
出版社：メディカル・サイエンス・インターナショナル

■ 参　考　書

書　名：高次脳機能障害ポケットマニュアル
著者名：原寛美　監修
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	言語発達障害Ⅰ（援助法ー基礎）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	齋藤　典昭・工藤　芳幸		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

対人援助職として仕事を進めていく上で必要な基礎技術（コミュニケーションスキル，観察技術，観察内容を記述する技術など）について学ぶ．第１回～第７回は齋藤、第８回～第15回は工藤が担当する．

■ 目　　標

１．臨床実習で適切な接遇ができる
２．臨床実習で困難なく日誌を作成できる

■ 授業計画

第１回　上手なコミュニケーションについて学ぶ：あいさつ，非言語的技術，言語的技術（齋藤）
第２回　上手なコミュニケーションについて学ぶ：傾聴，共感，返信（齋藤）
第３回　上手なコミュニケーションについて学ぶ：心理的防衛機制，コーピングスタイル，リフレーミング（齋藤）
第４回　上手なコミュニケーションについて学ぶ：転移，患者さんの理解度をアップするスキル（齋藤）
第５回　上手なコミュニケーションについて学ぶ：危機的状態にある患者さんの心理を理解する（齋藤）
第６回　上手なコミュニケーションについて学ぶ：面接の逐語録（1，2）を読んで考える（齋藤）
第７回　上手なコミュニケーションについて学ぶ：面接の逐語録（3，4）を読んで考える（齋藤）
　　レポート課題提示
第８回　観察記録の文章作成法（講義・演習）（工藤）
第９回　観察記録の視点（保育所見学実習に向けて）・文章作成法演習（工藤）
第10回　観察記録のまとめ方１（保育所見学実習の記録を用いた演習・記録を再検討する）（工藤）
第11回　観察記録のまとめ方２（保育所見学実習の記録を用いた演習・リライトする）（工藤）
第12回　複数の事象の関係をまとめる・実践に向けた記録法（講義・演習）（工藤）
第13回　ロールプレイ or VTR 視聴を用いた観察記録演習１（ライブで記録を取る）（工藤）
第14回　ロールプレイ or VTR 視聴を用いた観察記録演習２（リライトする）（工藤）
第15回　ロールプレイ or VTR 視聴を用いた観察記録園主３（ライブで記録を取り、整理する）（工藤）

■ 評価方法

上手なコミュニケーションについては提出物10%，定着した知識を問う筆記試験40% で評価する．
記録法については提出物50％で評価する．

■ 教　科　書

書　名：ストレス解決！ナースのコミュニケーション力倍増計画
出版社：メディカ出版

■ 参　考　書

書　名：逐語で学ぶ21の技法　対人援助のための相談面接技術
著者名：岩間伸之
出版社：中央法規

書　名：治療・援助における二つのコミュニケーション
著者名：山根 寛
出版社：三輪書店

書　名：子ども理解のメソドロジー　実践者のための「質的実践研究」ガイドブック
著者名：中坪史典
出版社：ナカニシヤ出版

■ 留意事項

授業科目	言語発達障害Ⅱ（概論）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	齋藤　典昭・工藤　芳幸		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

言語発達障害の基礎的な概念と各障害の特性を学ぶ.
保育への参加をとおして子どもについての知識を広げ，記録を作成する.

■ 目　　標

1．さまざまな言語発達障害の概念と特性を理解し，それぞれの言語発達障害にについて概要を説明できる.
2．子どもの遊びや様子を観察して記録することができる.

■ 授業計画

第1回　小児の発達と言語発達障害概論（工藤）
第2回　知的障害（工藤）
第3回　自閉症スペクトラム障害①（工藤）
第4回　自閉症スペクトラム障害②（工藤）
第5回　注意欠陥多動性障害①（工藤）
第6回　注意欠陥多動性障害②（工藤）
第7回　学習障害／発達性ディスレクシア①（工藤）
第8回　学習障害／発達性ディスレクシア②（工藤）
第9回　特異的言語発達障害（工藤）
第10回　言語発達障害のまとめ（工藤）
第11回　保育所見学学習　観察記録提出（齋藤）
第12回　姿勢・運動の発達（齋藤）
第13回　脳性麻痺　概念（齋藤）
第14回　脳性麻痺　生活上の困難（齋藤）
第15回　拡大・代替コミュニケーション　概要（齋藤）

■ 評価方法

提出物10%，筆記試験90% で評価する.

■ 教　科　書

書　名：絵でわかる言語障害
著者名：毛束真知子
出版社：学研

書　名：標準言語聴覚障害学　言語発達障害
著者名：藤田郁代　監修
出版社：医学書院

■ 参 考 書

書　名：発達障害の子どもの「ユニークさ」を伸ばすテクノロジー
著者名：中邑賢龍
出版社：中央法規

書　名：作業療法士が行う IT 活用支援
著者名：宮永敬一，田中勇次郎　編著
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：タブレット PC・スマホ時代の子どもの教育
著者名：中邑賢龍，近藤武夫　編著
出版社：明治図書

■ 留 意 事 項

授業科目	言語発達障害Ⅲ（評価法－基礎）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	山本　良平		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

発達を学ぶ際に、乳幼児から成人までの理解とアセスメントが重要である。とくに、精神発達に遅れやつまずきを持つ児･者に対して、さまざまな療育や支援の方法があるが、その際、正確なアセスメントを行って、特性を把握し支援計画を立て、効果をみていく必要がある。そのアセスメントツールのひとつが新版K式発達検査2001であり、乳幼児から成人までを対象として、全国で使用されている。本実習では、この検査の開発とその背景、実施法を実際の検査場面のビデオ観察、ロールプレイなどを通して学ぶ。

■ 目　　標

新版K式発達検査2001の歴史、成り立ち、実施法を学び、実施結果の処理が正しくできるようになり、臨床現場での活用を目指す。

■ 授業計画

第１回　発達検査の開発と内容；発達検査の歴史、K式発達検査の成り立ちと標準化
第２回　同　上；検査実施手引き書・検査用紙の見方、検査用具の紹介
第３回　新版K式発達検査2001　～乳児期～；第１葉～２葉：各項目の実施手順・正答基準の説明
第４回　同　上；乳児の検査；ビデオから反応記録・検査結果の整理
第５回　新版K式発達検査2001　～幼児期その１～；第３葉：各項目の実施手順・正答基準の説明
第６回　同　上；幼児の検査①：ビデオから反応記録・検査結果の整理
第７回　新版K式発達検査2001～幼児期その２～；第４葉：各項目の実施手順・正答基準の説明
第８回　同　上；幼児の検査②；ビデオから反応記録・検査結果
第９回　新版K式発達検査2001　～非定型発達 ～；幼児の検査③；非定型発達の場合　その１
第10回　同　上；幼児の検査④；～非定型発達の場合～　その２
第11回　新版K式発達検査2001～小学生以上；第５・６葉：各項目の実施手順・正答基準の説明
第12回　同　上；小学生以上の検査；ビデオから反応記録・検査結果の整理
第13回　新版K式発達検査2001～ロールプレイによる実施練習その他
第14回　同　上；小学生以上の検査；非定型発達の場合
第15回　新版K式発達検査2001；検査結果の解釈・所見の書き方

■ 評価方法

提出課題50%、 受講態度20%、 出席20%

■ 教　科　書

書　名：新版K式発達検査2001　実施手引書
著者名：編著者　生澤雅夫・松下　裕・中瀬　惇
出版社：京都国際社会福祉センター

■ 参 考 書

書　名：京都国際社会福祉センター紀要　発達・療育研究
著者名：2005.10別冊、2012.7別冊
出版社：京都国際社会福祉センター

書　名：新版Ｋ式発達検査法2001年版　標準化資料と実施法
著者名：新版Ｋ式発達検査研究会編
出版社：ナカニシヤ出版

書　名：新版Ｋ式発達検査法2001年版　発達のアセスメントと支援
著者名：松下　裕・郷間英世編
出版社：ナカニシヤ出版

■ 留 意 事 項

３コマ連続、５日間の集中講義とする。次の授業で学ぶ予定の範囲の実施手引書・検査記録用紙・検査用具に目を通しておく。実習科目であることから、全授業への出席、および授業中指定された全課題の提出を求めます。

授業科目	言語発達障害Ⅳ（評価法－各論）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	工藤芳幸・齋藤典昭・國吉京子		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

スクリーニング検査として「ことばのテスト絵本」，発達検査として「乳幼児精神発達検査」「新版 K 式発達検査2001」，言語検査として「国リハ式〈S-S 法〉言語発達遅滞検査」を学ぶ.
新版 K 式発達検査2001については言語発達障害Ⅲで学んだ内容を踏まえて検査実技から所見作成までを行う（２名の検査協力者を予定している）.

■ 目　　標

１．各検査の概要を述べることができる
２．新版 K 式発達検査を実施することができる
３．検査所見を作成することができる

■ 授業計画

第１回 「国リハ式〈S-S 法〉言語発達遅滞検査」 考え方と理論 （齋藤）
第２回 「国リハ式〈S-S 法〉言語発達遅滞検査」 考え方と理論，学生同士で演習 （齋藤）
第３回 「国リハ式〈S-S 法〉言語発達遅滞検査」 学生同士で演習 （齋藤）
第４回 「国リハ式〈S-S 法〉言語発達遅滞検査」 ロールプレイ （齋藤）
第５回 「国リハ式〈S-S 法〉言語発達遅滞検査」 記録方法，検査のまとめ，評価のまとめ （齋藤）
第６回 乳幼児精神発達検査・遠城寺式乳幼児分析的発達検査法（國吉）
第７回 ことばのテスト絵本 （國吉）
第８回 新版 K 式発達検査2001検査実技（工藤）
第９回 新版 K 式発達検査2001プロフィール作成演習（工藤）
第10回 検査所見作成演習（工藤）
第11回 発達検査報告書作成演習（工藤）
第12回 新版 K 式発達検査2001検査実技（工藤）
第13回 新版 K 式発達検査2001プロフィール作成演習（工藤）
第14回 検査所見作成演習（工藤）
第15回 発達検査報告書作成演習（工藤）

■ 評価方法

工藤担当分については新版 K 式発達検査の報告書提出40%， Ａ４一枚程度のレポート提出10%
齋藤担当部分については授業への参加10%，課題提出40% で評価します.

■ 教　科　書

書　名：言語発達遅滞の言語治療　改訂２版
著者名：小寺富子
出版社：診断と治療社

■ 参 考 書

書　名：発達相談と新版 K 式発達検査 —— 子ども・家族支援に役立つ知恵と工夫
著者名：大島剛，川畑隆，伏見真理子　ほか
出版社：明石書店

書　名：新版 K 式発達検査法2001年版　発達のアセスメントと支援
著者名：松下裕 , 郷間英世
出版社：ナカニシヤ出版

■ 留 意 事 項

新版K式発達検査2001の協力児は２名を予定しているが、対象児の状況によっては人数の変更があり得る.

授業科目	言語発達障害Ⅴ（援助法－各論）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	松下真一郎・中山清司・工藤芳幸		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

自閉症スペクトラム障害（ASD）を中心に学習障害（LD)、特異的言語発障害（SLI）の特性について理解を深め、臨床的アプローチについて学ぶ。第１回～第10回（松下）では、広汎性発達障害（PDD)、ASD の概念から介入事例までを中心に、ST に必要な臨床的な考え方について学ぶ。11回～ 14回（中山）では TEACHH プログラムをベースにした自閉症支援について学ぶ。15回では（工藤）全体のまとめと知識の整理を行なう。

■ 目　　標

発達障害特性についての理解を深め、評価・指導計画の立案・助言などの介入・支援技法について理解を深める。

■ 授業計画

第１回　広汎性発達障害の定義（松下）
第２回　広汎性発達障害の認知特性と行動（松下）
第３回　広汎性発達障害への臨床介入例（松下）
第４回　自閉症スペクトラムの概念（松下）
第５回　自閉症スペクトラムの諸理論（松下）
第６回　自閉症スペクトラムの認知特性と行動１　視覚・聴覚の情報処理（松下）
第７回　自閉症スペクトラムの認知特性と行動２　身体認識（松下）
第８回　自閉症スペクトラムへの臨床介入例（松下）
第９回　学習障害の諸理論と臨床介入（松下）
第10回　特異的言語発達障害の諸理論と臨床介入（松下）
第11回　発達障害の特性と支援の基本（１）（中山）
第12回　発達障害の特性と支援の基本（２）（中山）
第13回　発達障害の人のコミュニケーションの特徴（中山）
第14回　発達障害の人のコミュニケーション支援の実際（中山）
第15回　言語・コミュニケーション発達支援の復習とまとめ（工藤）

■ 評価方法

筆記試験（松下）：50％、筆記試験（工藤）：50％とする。

■ 教　科　書

書　名：標準言語聴覚障害学　言語発達障害学
著者名：玉井ふみ・深浦順一　編
出版社：医学書院

書　名：自閉症支援のスタンダード　Ver.2　～余暇支援の展開～
著者名：中山清司ほか
出版社：自閉症ｅサービス

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	言語発達障害Ⅵ（援助法ー応用）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	非公表		
学年	2年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

AAC の実際について学ぶ
脳性麻痺児の姿勢・運動・コミュニケーション・摂食について学びを深める

■ 目　　標

1．AAC の適用について判断できる
2．脳性麻痺の子どもに対して障害特性を理解した関わりができる

■ 授業計画

第1回　日本語版 PIC：シンボルの研究の概要、PIC シンボルの概要
第2回　日本語版 PIC：PIC シンボルの指導方法と教材
第3回　日本語版 PIC：事例：自閉症、知的障害
第4回　日本語版 PIC：事例：失語症、脳性まひ
第5回　マカトンサイン，サウンズ＆シンボルズ　AAC 概論
第6回　マカトンサイン，サウンズ＆シンボルズ　理論
第7回　マカトンサイン，サウンズ＆シンボルズ　演習
第8回　マカトンサイン，サウンズ＆シンボルズ　理論
第9回　マカトンサイン，サウンズ＆シンボルズ　演習
第10回　マカトンサイン，サウンズ＆シンボルズ　当事者に来ていただき演習
第11回　マカトンサイン，サウンズ＆シンボルズ　当事者に来ていただき演習
第12回　脳性麻痺　児の評価とアプローチ（姿勢・運動・コミュニケーション）
第13回　脳性麻痺　児の評価とアプローチ（姿勢・運動・コミュニケーション）
第14回　脳性麻痺　児の評価とアプローチ（コミュニケーション・摂食）
第15回　脳性麻痺　児の評価とアプローチ（コミュニケーション・摂食）

■ 評価方法

出席100% で評価する.

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：視覚シンボルでコミュニケーション　日本版 PIC 活用編
著者名：藤澤和子　編著
出版社：ブレーン出版

■ 留意事項

授業科目	言語発達障害Ⅶ（援助法－臨床）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	齋藤　典昭・工藤　芳幸		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

複数の子どもさんに協力していただき，一緒に遊び，その後で「子どもさんの課題」と関わる「学生の課題」について検討します

■ 目　　標

１．子どもの多様性気づくことができる
２．子どもに合わせて上手に遊ぶことができる
３．遊びを通じて子どもの能力を評価することができる

■ 授業計画

第１回　設定第１回　設定遊びと自由遊び　Ａ班
第２回　設定第１回　設定遊びと自由遊び　Ａ班
第３回　設定第１回　フィードバックとディスカッション
第４回　設定第２回　設定遊びと自由遊び　Ｂ班
第５回　設定第２回　設定遊びと自由遊び　Ｂ班
第６回　設定第２回　フィードバックとディスカッション
第７回　設定第３回　設定遊びと自由遊び　Ｃ班
第８回　設定第３回　設定遊びと自由遊び　Ｃ班
第９回　設定第３回　フィードバックとディスカッション
第10回　設定第４回　設定遊びと自由遊び　Ｄ班
第11回　設定第４回　設定遊びと自由遊び　Ｄ班
第12回　設定第４回　フィードバックとディスカッション
第13回　設定第５回　設定遊びと自由遊び　Ｅ班
第14回　設定第５回　設定遊びと自由遊び　Ｅ班
第15回　設定第５回　フィードバックとディスカッション
第16回　設定第６回　設定遊びと自由遊び　Ｆ班
第17回　設定第６回　設定遊びと自由遊び　Ｆ班
第18回　設定第６回　フィードバックとディスカッション

■ 評価方法

子どもとの関わり20%，ディスカッションへの参加10%，提出物70% で評価します．

■ 教　科　書

■ 参　考　書

書　名：感覚統合 Q&A　改訂第２版
著者名：土田玲子　監修
出版社：協同医書出版

書　名：子どもの能力から考える　発達障害領域の作業療法アプローチ
著者名：小西，小松，酒井　編
出版社：メジカルビュー社

■ 留意事項

授業科目	音声障害
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	城本　修・前田　留美子		
学　　年	２年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

1.正常な発声の仕組みを学ぶ．2.声の調節の仕方を学ぶ．3.病的な喉頭と音声障害のメカニズムを学ぶ．
4.音声障害の治療方法について学ぶ．（城本）
食道発声教室の見学を行う（前田）

■ 目　　標

正常な喉頭の解剖と生理が理解でき，音声障害が生じるメカニズムを説明できる．さらに，様々な音声障害に対する治療方法について理論的な原理を学ぶ．（城本）
喉頭摘出者の音声とその習得について理解を深める．（前田）

■ 授業計画

第１回　正常な呼吸器の解剖と生理（城本）
第２回　正常な喉頭の解剖と生理（城本）
第３回　正常な発声の仕組みと声の調節の仕方（城本）
第４回　声の評価方法　1.インテーク　2.聴覚心理的評価（城本）
第５回　声の評価方法　3.喉頭視診　　4.空気力学的評価　5.音響学的評価（城本）
第６回　音声障害の種類と特徴
　　1.喉頭の視診上の病変 2.喉頭運動障害　3.喉頭病変のない音声障害（城本）
第７回　音声障害の治療方法について　1．医学的治療　2．行動学的治療（城本）
第８回　音声治療の原則と適応（城本）
第９回　病態対処的音声治療技法（城本）
第10回　病態対処的音声治療技法（城本）
第11回　包括的音声治療技法（城本）
第12回　包括的音声治療技法（城本）
第13回　特殊な音声障害への対応（城本）
第14回　喉摘者の音声指導（城本）
第15回　食道発声教室の見学（前田）

■ 評価方法

レポート　60%，筆記試験 40%

■ 教　科　書

書　名：改訂　音声障害
著者名：苅安誠，城本修編
出版社：建帛社

■ 参　考　書

書　名：ST のための音声障害診療マニュアル
著者名：廣瀬肇監
出版社：インテルナ出版

書　名：実践音声治療マニュアル
著者名：城本修，生井友紀子訳
出版社：インテルナ出版

■ 留意事項

授業科目	構音障害Ⅰ（臨床の基礎）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	松本　治雄		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

話しことばの三要素である「音声」「構音」「パターン」のうち、構音の障害はもっとも中核をなす障害要素である。言語聴覚士の仕事の大半は構音指導であるとも言える。
講義は言語聴覚士が構音指導上基本として身につけるべき内容を演習的に修得することを目指している。

■ 目　　標

・コミュニケーションにおける話ことばの役割を知る。
・構音の概念を理解し、正常構音の産生の過程を知る。
・構音障害の概念を理解し障害像を知る。
・構音障害の種類について理解し、その検査、分類、治療方法を知る。

■ 授業計画

第１回　障害児音声の聞き取り
第２回　コミュニケーションに関わる要因と話すためのしくみと働き
第３回　日本語音声の成り立ち（母音）
第４回　日本語音声の成り立ち（子音①）
第５回　日本語音声の成り立ち（子音②）
第６回　日本語音声の成り立ち（子音③）
第７回　言語障害に関わる要因①
第８回　言語障害に関わる要因②
第９回　構音障害の検査と評価①
第10回　構音障害の検査と評価②
第11回　構音障害の検査と評価③
第12回　構音障害の検査と評価④
第13回　構音指導の方法①
第14回　構音指導の方法②
第15回　構音指導の方法③　と　まとめ

■ 評価方法

小テスト（10%）を期末テスト（90%）に加味して評価する予定

■ 教　科　書

書　名：改定機能性構音障害
著者名：本間慎治編著
出版社：建帛社

■ 参 考 書

書　名：発声発語障害学
著者名：熊倉勇美他編著
出版社：医学書院

書　名：日本語音声学入門
著者名：斉藤純男
出版社：三省堂

■ 留 意 事 項

受講に際しては知識として頭で覚えるので無く、聴覚、視覚、触覚、筋運動覚を駆使して身体で身につけてもらうことを目指している。

授業科目	構音障害Ⅱ（機能性）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	松本　治雄		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

話しことばの三要素である「音声」「構音」「パターン」のうち、構音の障害はもっとも中核をなす障害要素である。言語聴覚士の仕事の大半は構音指導であるとも言える。
講義は言語聴覚士が構音指導上基本として身につけるべき内容を機能性構音障害につて演習的に修得することを目指している。

■ 目　　標

・機能性構音障害の発生のメカニズムを理解する。
・構音発達の過程と障害との関連を知る
・障害音の種類について理解し、その記録法を知る。
・構音障害の検査、結果の分析、指導プログラムの立案をする。
・事例による演習

■ 授業計画

第１回　機能性構音障害とは（定義と関連要因について）
第２回　障害音の聞き取りと記録法　（各種検査法と記録法の実習）
第３回　異常構音の聞き取りと記録法　（異常構音の種類と聞き取り、記録法の実習）
第４回　検査と結果の分析、指導プログラムの立案、教材製作①　（実例に沿って方法を理解する）
第５回　検査と結果の分析、指導プログラムの立案、教材製作②（実例に沿って方法を理解する）
第６回　指導事例①－１　（機能性構音障害児①）
第７回　指導事例①－２
第８回　まとめ①
第９回　指導事例②－１（機能性構音障害児②）
第10回　指導事例②－２
第11回　まとめ②
第12回　指導事例③－１（インシデントプロセス法による事例研究）
第13回　指導事例③－２
第14回　まとめ③
第15回　機能性構音障害について　まとめ

■ 評価方法

演習レポート（20%）を期末テスト（80%）に加味して評価する予定

■ 教　科　書

書　名：構音障害のある子どもの理解と支援
著者名：加藤正子他編著
出版社：学苑社

■ 参 考 書

書　名：発声発語障害学
著者名：熊倉勇美他編著
出版社：医学書院

書　名：日本語音声学入門
著者名：斉藤純男
出版社：三省堂

■ 留 意 事 項

受講に際しては知識として頭で覚えるので無く、聴覚、視覚、触覚、筋運動覚を駆使して
身体で身につけてもらうことを目指している。

授業科目	構音障害Ⅲ（器質性）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	藤原　百合		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

口蓋裂など鼻咽腔閉鎖機能不全に伴う発話障害について、基礎的知識、評価方法、訓練方法、チーム医療について学ぶ

■ 目　　標

・口蓋裂に伴う様々な問題点を理解できる
・鼻咽腔閉鎖機能および構音の評価ができる
・評価に基づいて治療計画を立てることができる
・口蓋裂治療チームの中での言語聴覚士の役割を知る

■ 授業計画

第１回　・正常な発話のプロセス　・構音障害の定義と分類
第２回　口蓋裂言語の特徴：共鳴の異常、構音の異常
第３回　評価：口腔顔面の形態・機能
第４回　評価：鼻咽腔閉鎖機能
第５回　評価：構音の聴覚的印象
第６回　評価：エレクトロパラトグラフィ（EPG）を用いた構音動態
第７回　訓練：機能訓練
第８回　訓練：構音訓練
第９回　訓練：構音の視覚的フィードバック訓練
第10回　口蓋裂に伴う諸問題：発達、聴覚、心理社会的問題
第11回　口蓋裂治療におけるチームアプローチと言語聴覚士の役割
第12回　演習：構音の聴覚的評価
第13回　演習：症例
第14回　演習：症例
第15回　口蓋裂治療のまとめ

■ 評価方法

試験100％

■ 教　科　書

書　名：標準言語聴覚障害学　発声発語障害学
著者名：監修：熊倉勇美、小林範子、今井智子
出版社：医学書院

■ 参　考　書

書　名：DVD：目で見る日本語音の産生
著者名：EPG 研究会
出版社：エスコアール

書　名：口蓋裂言語検査（言語臨床用）
著者名：日本コミュニケーション障害学会

■ 留意事項

授業科目	構音障害Ⅳ（運動障害性）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	熊倉　勇美		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

わが国では構音障害は機能性構音障害、運動障害性構音障害、器質性構音障害の３つに分けて論じられる。本講義では、これらの中から運動障害性構音障害と器質性構音障害（口腔・中咽頭がんなどの治療後に発生する後天性のもの）を対象とする。これらの障害について画像や音声を提示しながら、ST が行う評価、訓練などの役割、またこれら構音障害の予後などについて具体的に講義する。

■ 目　　標

構音障害患者のコミュニケーションの問題がどのようにして発生するのか。発話の問題点を呼吸・発声・構音・共鳴・プロソディなどの視点で分析し、明瞭度、異常度というスケールで表現する方法を学ぶ。検査法の実習も行う。さらに具体的なタイプ別の訓練法を実習で経験し、患者への実際的な対応が出来ることを目標とする。

■ 授業計画

第１回　発話のしくみと、２つの構音障害（運動障害性・器質性）
第２回　運動障害性構音障害の仕組みと発話症状：　①痙性構音障害　②弛緩性構音障害
第３回　続き：　③失調性構音障害　④運動低下性構音障害
第４回　続き：　⑤運動亢進性構音障害　⑥混合性構音障害
第５回　意識障害、認知症、失語症などとの鑑別診断
第６回　評価の実際を学ぶ：　SLTA-ST、AMSD などの検査法
第７回　訓練の実際を学ぶ：機能訓練、発話訓練、AAC など
第８回　訓練の実際を学ぶ：続き
第９回　拡大・代替コミュニケーション
第10回　患者と家族の問題、さらに ST の役割
第11回　運動障害性構音障害と器質性構音障害の違い、癌とは、頭頸部の解剖学
第12回　がんの治療（放射線治療、化学療法、外科治療）
第13回　構音障害と患者の抱える問題
第14回　ST の果たす役割（評価、訓練）
第15回　補綴治療と ST の役割

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 教　科　書

書　名：改訂運動障害性構音障害
著者名：熊倉勇美編著
出版社：建帛社

書　名：口腔・中咽頭がんのリハビリテーション：構音障害、摂食・嚥下障害
著者名：溝尻源太郎・熊倉勇美編著
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参 考 書

書　名：開業医のための摂食・嚥下機能改善と装置の作り方超入門
著者名：監著：阪井丘芳　編著：小野高裕
出版社：クインテッセンス出版株式会社

書　名：がんのリハビリテーションマニュアル：周術期から緩和ケアまで
著者名：編集：辻　哲也
出版社：医学書院

■ 留 意 事 項

授業科目	嚥下障害Ⅰ（基礎と評価）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	前田　留美子		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

正常嚥下のメカニズムや嚥下障害の評価等基本的な事項について学ぶ

■ 目　　標

嚥下障害の基礎的な知識を理解する
検査を実施できる

■ 授業計画

第１回　嚥下障害総論（前田留美子）
第２回　事例紹介（前田留美子）
第３回　グループディスカッション（前田留美子）
第４回　摂食・嚥下のメカニズム①（前田留美子）
第５回　摂食・嚥下のメカニズム②（前田留美子）
第６回　摂食・嚥下のメカニズム③（前田留美子）
第７回　摂食・嚥下のメカニズム④（前田留美子）
第８回　情報収集・問診と観察①（前田留美子）
第９回　情報収集・問診と観察②（前田留美子）
第10回　各部位の評価①（前田留美子）
第11回　各部位の評価②（前田留美子）
第12回　嚥下障害のスクリーニングテスト①（前田留美子）
第13回　嚥下障害のスクリーニングテスト②（前田留美子）
第14回　嚥下障害のスクリーニングテスト③（前田留美子）
第15回　実技演習（前田留美子）

■ 評価方法

記述試験（再試は１回実施）と嚥下障害の評価に関する実技試験（再試は１回まで実施）の点数を合算し、百分率で表した点数で評価する。記述試験と実技試験の両方に合格しなければ単位認定の対象としない。

■ 教　科　書

書　名：「動画でわかる摂食・嚥下リハビリテーション」
著者名：藤島一郎、柴本勇監修
出版社：中山書店

■ 参　考　書

書　名：「脳卒中の摂食・嚥下障害　第２版」
著者名：藤島一郎
出版社：医歯薬出版

書　名：「目で見る嚥下障害－嚥下内視鏡・嚥下造影の所見を中心として」
著者名：藤島一郎
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

授業科目	嚥下障害Ⅱ（訓練と画像診断）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	田上　恵美子・戸倉　晶子		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

摂食・嚥下障害の基本的な訓練法について学び、訓練計画を考える
嚥下造影検査（VF）・嚥下内視鏡検査（VE）の目的、手順、解析方法について学習し、実際の画像を用いて症例検討を行う。

■ 目　　標

臨床上必要な知識を身につけ、手技を実践できるようになる
VF・VE の評価方法を習得し、嚥下障害の症状を理解できるようになる。

■ 授業計画

第１回　嚥下関連筋の解剖、呼吸・構音器官評価の復習（田上恵美子）
第２回　評価から訓練へ、間接訓練（呼吸・咳嗽など）演習（田上恵美子）
第３回　間接訓練（頸部・顎・シャキア・メンデルソンなど）演習（田上恵美子）
第４回　間接訓練（舌・口唇・軟口蓋・ガムラビングなど）演習（田上恵美子）
第５回　直接訓練（頸部聴診･意識嚥下･横向き嚥下･ひと口量･丸のみ･顎引き･頭頸部など）（田上恵美子）
第６回　直接訓練（複数回嚥下・交互嚥下・一側嚥下・姿勢など）演習（田上恵美子）
第７回　姿勢調整・介助法（田上恵美子）
第８回　経口移行の目安、段階的摂食訓練（田上恵美子）
第９回　嚥下造影検査の目的・手順について（戸倉晶子）
第10回　嚥下造影検査の解析①（戸倉晶子）
第11回　嚥下造影検査の解析②（戸倉晶子）
第12回　グループワーク：症例検討①（戸倉晶子）
第13回　グループワーク：症例検討②（戸倉晶子）
第14回　嚥下内視鏡検査による評価①（戸倉晶子）
第15回　嚥下内視鏡検査による評価②（戸倉晶子）

■ 評価方法

筆記試験100％。別途、実習前に訓練の実技試験を実施する（田上先生）
筆記試験100％と出席状況により総合的に判断する。(戸倉先生）

■ 教　科　書

書　名：言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学
著者名：倉智雅子
出版社：医歯薬出版

■ 参　考　書

書　名：「脳卒中の摂食・嚥下障害　第２版」
著者名：藤島一郎
出版社：医歯薬出版

書　名：「目で見る嚥下障害－嚥下内視鏡・嚥下造影の所見を中心として」
著者名：藤島一郎
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

授業科目	嚥下障害Ⅲ（事例と臨床）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	田上恵美子・糸田昌隆・前田留美子		
学年	2年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

摂食・嚥下リハビリテーションの取り組みの実際について学ぶ
成人・高齢者における摂食・嚥下障害の病態診断とリハビリテーションの具体的対応法周辺事項への対応法

■ 目　　標

個々のケースについて評価し、訓練プランを立案できるようになる
病態別嚥下障害に関する臨床現場における具体的対応法の立案が可能になる

■ 授業計画

第１回　変性疾患の嚥下障害学概論（田上恵美子）
第２回　ALS 事例による嚥下リハの進め方（田上恵美子）
第３回　ALS 事例に対する意思伝達演習（空書・読唇・50音表・透明板・読み上げ法）（田上恵美子）
第４回　パーキンソン病事例による嚥下リハの進め方（田上恵美子）
第５回　多系統萎縮症･筋ジストロフィー･重症筋無力症などの事例による嚥下リハの進め方 (田上恵美子）
第６回　ST 訪問訓練について、その実際と課題（田上恵美子）
第７回　事例による嚥下リハの進め方（脳血管障害・廃用症候群）（前田留美子）
第８回　事例による嚥下リハの進め方（脳血管障害・廃用症候群）（前田留美子）
第９回　成人・高齢者の正常嚥下の理解Ⅰ（医療環境と制度を含む）（糸田昌隆）
第10回　成人・高齢者の正常嚥下の理解Ⅱ（糸田昌隆）
第11回　咀嚼・嚥下機能の神経・生理（糸田昌隆）
第12回　摂食・嚥下障害への具体的対応法（糸田昌隆）
第13回　摂食・嚥下障害への具体的対応法Ⅱ（糸田昌隆）
第14回　摂食・嚥下障害の栄養法を中心とした全身管理（糸田昌隆）
第15回　グループワーク：医療倫理（糸田昌隆）

■ 評価方法

試験100％

■ 教科書

書　名：ケーススタディ摂食嚥下リハビリテーション　in　DVD ～ 50症例から学ぶ実践的アプローチ～
著者名：里宇明元，藤原俊之監修
出版社：医歯薬出版

■ 参考書

書　名：事例でわかる摂食・嚥下リハビリテーション　現場力を高めるヒント
著者名：出江紳一，近藤健男，瀬田拓編集
出版社：中央法規

■ 留意事項

授業科目	嚥下障害Ⅳ（チームアプローチ）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	金子みどり・森田婦美子 前田留美子　ほか		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

摂食・嚥下リハビリテーションに必要な知識と技術を演習を交えて学ぶ
気管切開後のリハビリテーションについて、気管切開の理由、気管切開後の症状、抜管にむけたリハビリテーションの具体的方法について学ぶ。また、気管切開後にみられる気道狭窄などの危険な症状についても理解する。

■ 目　　標

臨床上必要な知識を身につけ、手技を実践できるようになる
気管切開後のリハビリテーションを理解し、臨床場面で実施できるように習得をはかる

■ 授業計画

第１回　NST について（講師非公表）
第２回　院内での NST の取り組みについて（講師非公表）
第３回　嚥下食の紹介（講師非公表）
第４回　カニューレの構造・役割・種類と取り扱いについて（前田留美子）
第５回　摂食・嚥下障害と気管カニューレについて（講師非公表）
第６回　摂食・嚥下障害とカニューレ抜去の訓練について（講師非公表）
第７回　摂食・嚥下障害のリハビリテーションにおいて病棟ナースが ST に期待すること①（講師非公表）
第８回　摂食・嚥下障害のリハビリテーションにおいて病棟ナースが ST に期待すること②（講師非公表）
第９回　認知症を伴う方の食事介助①（金子みどり）
第10回　認知症を伴う方の食事介助②（金子みどり）
第11回　口腔ケアの実技演習（金子みどり）
第12回　吸引の技術と目的根拠の理解（森田婦美子）
第13回　吸引の手順の理解（森田婦美子）
第14回　吸引の演習①（森田婦美子）
第15回　吸引の演習②（森田婦美子）

■ 評価方法

出席50％、受講態度50％

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	吃音
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	土屋　美智子		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

言語聴覚士として吃音児・者およびその関係者に対する適切な援助ができるようになるために、吃音児・者のおかれている現状を知り、「吃音とは何か」を理解し、検査、評価および指導・訓練など臨床に必要な基本的知識・技術を身につける。

■ 目　　標

1）吃音の症状、発生率、有病率、自然治癒率、進展段階やタイプ分類、原因論など基本的事項について説明できる。
2）吃音児・者のおかれている現状や、吃音の問題の多様性に対して言語聴覚士としての適切な介入について概説できる。
3）吃音臨床における基本的な評価・診断を実施できる。
4）吃音臨床における基本的な指導・訓練について概説できる。

■ 授業計画

第1回　吃音の基本的知識
　　吃音者の体験談
第2回　吃音症状
第3回　進展段階
　　原因論
　　吃音児・者のおかれている現状
第4回　【吃音臨床①】
　　吃音臨床の流れ
　　吃音の臨床における情報聴取項目および問診
第5回　【吃音臨床②】
　　吃音検査法
第6回　【吃音臨床③】
　　吃音症例の評価
第7回　【吃音臨床④】
　　吃音の指導・訓練
第8回　【吃音臨床⑤】
　　再評価

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 教科書

書　名：改訂　吃音
著者名：都筑澄夫編著
出版社：建帛社

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	聴覚障害Ⅰ（概論）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	矢吹　裕栄・山口　忍		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

・聴覚障害学の基礎となる聴覚の器官の解剖と機能を確認し､難聴と聴覚検査との関係を学習する。（矢吹）
・成人聴覚障害の病態を知り、検査及び評価について学ぶ。（山口）

■ 目　　標

・聴こえの仕組みの基礎知識を習得する。国家試験の聴覚障害分野の基本事項を習得する。
　難聴の分類と聴覚検査法の基礎を習得し、検査結果から難聴のタイプを推定できるようになる。（矢吹）
・聴覚障害をきたす疾患を知り、必要な検査の選択と評価を理解する。（山口）

■ 授業計画

第１回　基礎用語の確認　（矢吹）
　　音とは何か､「きこえる」と言うこと。
第２回　聴覚器の解剖　（矢吹）
　　外耳・中耳の解剖と機能
第３回　聴覚器の解剖　（矢吹）
　　内耳の解剖・機能
第４回　前半のまとめと復習　（矢吹）
第５回　聴覚障害とは何か　（矢吹）
第６回　難聴の分類　（矢吹）
第７回　聴覚検査法１　（矢吹）
第８回　聴覚検査法２　（矢吹）
第９回　聴覚障害の実態（山口）
第10回　聴覚障害をきたす疾患（山口）
第11回　聴覚障害への対応（山口）
第12回　補聴器の仕組みと適応（山口）
第13回　人工内耳の仕組みと適応（山口）
第14回　聴力検査の復習と結果の見方（山口）
第15回　まとめ（山口）

■ 評価方法

■ 教　科　書

書　名：聴覚検査の実際（改訂３版）
著者名：日本聴覚医学会　編集
出版社：南山堂

書　名：標準言語聴覚障害学　聴覚障害学
著者名：中村　公枝　城間　将江　鈴木　恵子
出版社：医学書院

書　名：言語聴覚士のための基礎知識　耳鼻咽喉科学　第２版
著者名：鳥山　稔
出版社：医学書院

書　名：聴覚活用の実際
著者名：田中美郷　廣田栄子
出版社：聴覚障害者教育福祉協会

■ 参　考　書

■ 留 意 事 項

授業科目	聴覚障害Ⅱ（聴覚検査法）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	福田章一郎・矢吹裕栄・田村薫 野田祥子・長知子・山口忍		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

・聴覚障害が言語、心理および社会性の発達にどのような影響を与えるかを具体的な教材などを通して紹介し、聴覚障害児・者の発達および社会生活上の困難さの理解を促す。（福田）
・前期の学習内容を整理し、基礎知識の関連を確認する。また、人工内耳の原理とマスキングに関する基礎を学習する。（矢吹）
・聴覚の検査法とその評価、及び聴覚発達を中心とした援助について講義を行う。（田村、野田、長、山口）

■ 目　　標

・難聴発見から介入に必要な聴覚評価、digitalHA および人工内耳などの補聴、保護者のカウンセリングとそれらに必要な療育法およびコミュニケーション手段について具体的に解説する。（福田）
・聴覚器・疾患・検査結果の関連を整理する。人工内耳の仕組みを理解する。また、マスキングの考え方を習得する。（矢吹）
・聴覚障害を有する対象者に基本的な検査が実施でき、その結果を評価するとともに、発達を含めた援助を提案することができるようになる。（田村、野田、長、山口）

■ 授業計画

第１回　聴覚障害の理解に必要な基礎的に知識について解説する
第２回　スクリーニングから精密検査までに必要とされる諸検査とその評価法について解説する
第３回　難聴の原因について遺伝をふくめ解説する
第４回　聴覚の発達および幼児聴力検査法を映像を通し具体的に解説する
第５回　聴覚障害児の補聴に必要な知識と fitting 法および人工内耳の適応とそのメカニズムについて解説する
第６回　聴覚障害児のコミュニケーション法と療育法の目標と評価を解説する
第７回　聴覚障害の原因疾患（矢吹）
第８回　聴覚器・疾患・検査結果の関連（矢吹）
第９回　人工内耳の仕組み１（矢吹）
第10回　人工内耳の仕組み２（矢吹）
第11回　マスキングとは（矢吹）
第12回　マスキングの考え方（矢吹）
第13回　マスキングの考え方２（矢吹）
第14回　標準聴力検査について（野田または田村）
第15回　標準聴力検査の検査演習（野田または田村）
第16回　Bekesy 検査について（野田または田村）
第17回　Bekesy 検査の演習（野田または田村）
第18回　閾値上聴覚検査について（野田または田村）
第19回　閾値上聴覚検査の演習（野田または田村）
第20回　聴性脳幹反応の測定方法（野田または田村）
第21回　聴性脳幹反応の検査演習（野田または田村）
第22回　インピーダンスオ―ジオメータについて（野田または田村）
第23回　語音聴力検査について（野田または田村）
第24回　聴覚検査結果の解説　検査の目的とその意義について　症例提示①（長）
第25回　聴覚検査結果の解説　検査の目的とその意義について　症例提示②（長）
第26回　幼小児の聴力検査（山口）
第27回　幼小児の聴力検査（山口）
第28回　臨床の実際－発達遅滞の聴力評価－（山口）
第29回　臨床の実際－補聴器のフィッテイング－（山口）
第30回　まとめ（山口）

■ 評 価 方 法

試験100％

■ 教　科　書

書　名：聴覚検査の実際（改訂３版）
著者名：日本聴覚医学会　編集
出版社：南山堂

書　名：言語聴覚士のための基礎知識　耳鼻咽喉科学　第２版
著者名：鳥山　稔
出版社：医学書院

書　名：標準言語聴覚障害学　聴覚障害学
著者名：中村　公枝　城間　将江　鈴木　恵子
出版社：医学書院

書　名：聴覚活用の実際
著者名：田中美郷　廣田栄子
出版社：聴覚障害者教育福祉協会

■ 参　考　書

■ 留 意 事 項

授業科目	聴覚障害Ⅲ（各論）
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	田中　美郷・大森千代美 箕谷　健三・山口　忍		
学　　年	２年	総単位数	２単位
開講時期	前期	選択･必修	必須

■ 内　　容

聴覚障碍児を社会的歴史的視点で如何に理解して育てるか。それに必要な基礎知識（田中）
聴覚障害乳幼児の発見と療育の実際（大森）
聴覚学習、補聴支援機器の装用指導、聴覚障害者の教育課程など（箕谷）
聴覚障害の臨床の目的と実際について学ぶ。（山口）

■ 目　　標

聴覚障碍児の持つ問題を医学面、心理面、成育環境面にわたって全人的に診れるようになること。（田中）
聴覚障害乳幼児の発見と療育について必要な知識と技能を学ぶ（大森）
聴覚障害教育の実態を知り、聴覚障害（者）の理解を深める。（箕谷）
聴覚障害児･者の適切な援助について、検査結果をふまえ適切な援助について提案できるようになる。（山口）

■ 授業計画

第１回　聴覚障碍教育の歴史的回顧と現在の動向（田中美郷）
第２回　聴覚障碍児をどう診るか（田中美郷）
第３回　聴覚系の解剖生理と高次機能（田中美郷）
第４回　聴覚の発達と聴覚検査（田中美郷）
第５回　聴覚障碍児の聴覚発達・聴覚訓練（田中美郷）
第６回　人工内耳及び言語指導法（田中美郷）
第７回　コミュニケーション障碍児の鑑別診断（田中美郷）
第８回　言語教育法（手話も含めて）（田中美郷）
第９回　聴覚障碍児の医療と教育：ST の役割（田中美郷）
第10回　50年にわたる臨床研究から得られた結論と提言（田中美郷）
第11回　聴覚障害乳幼児の発見について（大森）
第12回　聴覚障害乳幼児のことばを育てる療育とは（大森）
第13回　聴覚障害乳幼児の療育の実際１（大森）
第14回　聴覚障害乳幼児の療育の実際２（大森）
第15回　聴覚障害教育について（聴覚障害教育の歴史、聴覚障害教育の教育課程と現状など）（箕谷）
第16回　聴覚障害児の補聴器装用指導について（聴覚学習､補聴器フィッティングの基本的な考え方）（箕谷）
第17回　聴覚管理と補聴器管理、保護者支援などについて（箕谷）
第18回　聴覚障害の心理的援助１（山口）
第19回　聴覚障害の心理的援助２（山口）
第20回　聴覚障害の遺伝子診断　（山口）
第21回　聴覚障害の検査と評価１（山口）
第22回　聴覚障害の検査と評価２（山口）
第23回　聴覚障害の検査と評価３（山口）
第24回　聴覚障害の検査と評価４（山口）
第25回　聴覚障害のケースワーク１（山口）
第26回　聴覚障害のケースワーク２（山口）
第27回　聴覚障害のケースワーク３（山口）
第28回　聴覚障害のケースワーク４（山口）
第29回　聴覚障害のケースワーク５（山口）
第30回　まとめ（山口）

■ 評価方法

試験100％

■ 教　科　書

書　名：聴覚検査の実際（改訂３版）
著者名：日本聴覚医学会　編集
出版社：南山堂

書　名：言語聴覚士のための基礎知識　耳鼻咽喉科学　第２版
著者名：鳥山　稔
出版社：医学書院

書　名：標準言語聴覚障害学　聴覚障害学
著者名：中村　公枝　城間　将江　鈴木　恵子
出版社：医学書院

書　名：聴覚活用の実際
著者名：田中美郷　廣田栄子
出版社：聴覚障害者教育福祉協会

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	補聴器・人工内耳
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	竹田　利一・北野　庸子 柴田　尚美　山口　忍		
学年	２年	総単位数	１単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

補聴器のフィッティングにおいての総合的な知識、補聴器適応の決定、補聴器の調整選択
イヤモールド採取実習、補聴器適合検査の指針（竹田）
人工内耳の仕組みや適応、マッピング、臨床の実際について学ぶ。（柴田　北野　山口）

■ 目　　標

補聴器のフィッティングにおいての総合的な知識、補聴器適応の決定、調整と選択の基礎、イヤモールド採形、補聴器適合検査結果の評価（竹田）人工内耳の原理を知り、適応や装着、リハビリテーションの手順について説明できる。
人工内耳装用者に対して適切な関わり方ができ、適切なリハビリテーション・調整を提案することができる。（柴田　北野　山口）

■ 授業計画

第１回　補聴器の種類と仕組み（竹田）
第２回　補聴器の性能（補聴器の最新デジタル機能）（竹田）
第３回　補聴器に関する測定、JIS、カプラの違い、実耳測定、補聴器特性検査装置を使った実習（竹田）
第４回　補聴器調整器の使い方、調整器の意味（竹田）
第５回　イヤモールドに関する講義（竹田）
第６回　イヤモールド採形実習（竹田）
第７回　補聴器のフィッティングの考え方（リニア、ノンリニア増幅）（竹田）
第８回　補聴器の適応と選択､補聴器装用効果の評価と補聴器適合検査の指針の解説､補聴器装用指導(竹田)
第９回　人工内耳の原理、仕組みや適応基準について（柴田）
第10回　音声処理方式とマッピング、人工内耳リハビリテーション（成人・小児）について（柴田）
第11回　難聴幼児の母親指導（北野）
第12回　難聴を有する大学生の支援（北野）
第13回　聴覚障害総復習（山口）
第14回　聴覚障害総復習（山口）
第15回　聴覚障害総復習（山口）

■ 評価方法

試験100％

■ 教　科　書

書　名：補聴器のフィッティングの考え方
著者名：小寺一興
出版社：診断と治療社

書　名：聴覚検査の実際（改訂３版）
著者名：日本聴覚医学会　編集
出版社：南山堂

書　名：言語聴覚士のための基礎知識　耳鼻咽喉科学　第２版
著者名：鳥山　稔
出版社：医学書院

書　名：標準言語聴覚障害学　聴覚障害学
著者名：中村　公枝　城間　将江　鈴木　恵子
出版社：医学書院

書　名：聴覚活用の実際
著者名：田中美郷　廣田栄子
出版社：聴覚障害者教育福祉協会

■ 参　考　書

■ 留 意 事 項

授業科目	視覚聴覚二重障害
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	森　尚彫・大城克彦・大西　環		
学　　年	２年	総単位数	１単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

視覚聴覚二重障害について概説する。(森)
文字盤やコミュニケーション機器（重度障害者用意思伝達装置）を用いたコミュニケーション支援、神経難病患者の訪問リハビリテーションにおけるその支援の現状と課題について述べる。(大城)
視覚障害者施設を見学し、その実際について学ぶ。(ST 教員)

■ 目　　標

視覚聴覚二重障害の概要、特徴等を知り理解を深める。(森)
コミュニケーション代替手段（文字盤・各種コミュニケーション機器等）について学び、患者の立場にたつ支援について意識を深めること。(大城)
視覚障害者をとりまく現状を知り理解を深める。(大西)

■ 授業計画

第１回　視覚障害、聴覚障害の概説とそれらによる視覚聴覚二重障害について（森）
第２回　視覚聴覚二重障害におけるコミュニケーションモード､実例の紹介､過去の国家試験の解説等（森）
第３回　ALS など神経難病に対するコミュニケーション支援の現状と課題について理解を深める。(大城)
　　文字盤（透明文字盤）を体験する。
　　各種コミュニケーション機器を紹介する。
第４回　日常生活用具（携帯用会話補助装置)、重度障害者用意思伝達装置などの制度を周知する。(大城)
　　コミュニケーション機器に使用する入力装置（スイッチ）を、キットを用いて作製する。
第５回　重度障害者用意思伝達装置を操作、体験する。(大城)
第６回　各種機器を使ってみた感想、改善点など、グループディスカッションをおこない意見を出し合う。(大城)
　　質疑応答
第７回　視覚障害者福祉の歴史と現状　―日本ライトハウス―　(大西)
第８回　視覚障害者福祉の歴史と現状　―日本ライトハウス―　(大西)

■ 評価方法

出席状況

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

授業科目	臨床実習Ⅰ
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	大西　環・齋藤典昭・大根茂夫 前田留美子・工藤芳幸		
学年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

Ⅰ期臨床実習（見学実習）
期間：1週間（40時間以上）

■ 目　　標

言語聴覚士の業務の流れを理解し、関連職種との連携を理解する。

■ 授業計画

実習協力施設、病院様にて、ご指導を頂くスーパーバイザー（SV）の言語聴覚療法を見学させて頂く。
毎日実習日誌を作成し、SV の添削を適宜頂く。
SV から与えられた課題のレポートなどを作成する。
実習のまとめを作成する。
詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

① 実習の進捗状況・実習への取り組み具合（提出物の内容・期限を含む）
② SV からの種々の情報
③ SV 記載の成績表・所見
④ 実習日誌
⑤ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表・質疑応答
①～⑤を総合し、専攻科主任が評価する。提出物の提出期限を厳守すること。これについても合否の要件とする。

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

出席日数が規定の4／5に満たないものは、科目履修の認定はされない。

授業科目	臨床実習Ⅱ
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	大西　環・齋藤典昭・大根茂夫 前田留美子・工藤芳幸		
学年	1年	総単位数	5単位
開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

Ⅱ期臨床実習（評価実習）
期間：５週間（200時間以上）

■ 目　　標

臨床実習Ⅰ及び学内で学んだ検査手順や評価に関する知識を基に、言語聴覚療法における検査、及び評価を実際に行い、指導援助プログラムの立案までが指導を受けながら可能となる。

■ 授業計画

授業計画:実習協力施設、病院様にて、ご指導いただくSVの指示、監督のもと、患者（児）様に検査を行い、その結果を分析して他の所見と併せて総合評価を行う。さらにその評価に基づき、指導援助プログラムを立案する。
実習日誌を毎日作成し、SVから与えられたレポート課題などを作成する。
実習のまとめとして、症例報告書を作成する。
詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

① 実習の進捗状況・実習への取り組み具合（提出物の内容・期限を含む）
② SVからの種々の情報
③ SV記載の成績表・所見
④ 症例報告書
⑤ 実習日誌
⑥ 出席状況
⑦ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表・質疑応答
⑧ 実習報告会までの教員指導時の取り組み
①～⑧を総合し、専攻科主任が評価する。提出物の提出期限を厳守すること。これについても合否の要件とする。

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

出席日数が規定の４/５に満たないものは、科目履修の認定はされない。

授業科目	臨床実習Ⅲ
学科名	言語聴覚専攻科

担当者	大西　環・齋藤典昭・大根茂夫 前田留美子・工藤芳幸		
学年	２年	総単位数	６単位
開講時期	通年	選択･必修	必修

■ 内　　容

Ⅲ期臨床実習
期間：８週間

■ 目　　標

検査および評価に基づき指導援助プログラムの立案を行い、言語聴覚療法を指導を受けながら実施できる。言語聴覚士としての役割を理解し、言語聴覚療法の臨床に於いて必要な知識と技術を習得する。また、職務に対する倫理や基本的な姿勢など、言語聴覚士としての適性を養う。

■ 授業計画

実習施設・病院で、臨床実習指導者（スーパーバイザー・SV）のご指導、監督のもと、患者（児）様の検査、評価、指導訓練プログラムの立案から、実際の言語聴覚療法を経験する。
実習日誌を毎日作成して SV のご指導を頂くと共に、SV から与えられるレポート課題などに取り組む。
実習のまとめとして、症例報告書を作成する。
詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

① 実習の進捗状況・実習への取り組み具合（提出物の内容・期限を含む）
② SV からの種々の情報
③ SV 記載の成績表・所見
④ 症例報告書
⑤ 実習日誌
⑥ 出席状況
⑦ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表・質疑応答
⑧ 実習報告会までの教員指導時の取り組み
①～⑧を総合し、専攻科主任が評価する。提出物の提出期限を厳守すること。これについても合否の要件とする。

■ 教　科　書

■ 参　考　書

■ 留意事項

出席日数が規定の４/ ５に満たないものは、科目履修の認定はされない。

授業科目	作業療法概論
学科名	作業療法学専攻

担当者	平尾　一幸		
学　　年	1年	総単位数	1単位
開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

リハビリテーションにおいて、作業療法は対象者･児の心身機能の回復を目指すだけでなく、活動性の回復･拡大を通して社会参加の機会を提供する働きかけである。作業療法の基礎となる理論と臨床の実際について学習し、自らの資質を高めることに役立たせる。

■ 目　　標

1）作業療法士の活動について知る
2）作業療法の歴史と理論的背景を理解する
3）身体障害、精神障害、老年期障害、発達障害の各領域における医療保健福祉の作業療法活動の実際を学ぶ

■ 授業計画

第1回　作業療法士の活動内容、職域の紹介
第2回　作業療法とは：（社）日本作業療法士協会の定義、関連法規
第3回　作業療法の歴史的変遷（道徳療法～作業療法の確立）
第4回　作業療法の歴史的変遷（移導療法～作業療法の法制化）
第5回　作業療法の現状
第6回　国際障害分類（ICF）、チームアプローチ、EBM の概念
第7回　作業療法の過程（評価～治療・訓練・支援プログラム立案）
第8回　作業療法の実際（身体障害領域の医療）
第9回　作業療法の実際（身体障害領域の福祉）
第10回　作業療法の実際（精神障害領域の医療）
第11回　作業療法の実際（精神障害領域の保健福祉）
第12回　作業療法の実際（発達障害領域）
第13回　作業療法の実際（老年期障害領域）
第14回　作業療法部門の管理運営
第15回　作業療法の研究活動

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
レポートおよび発表　40%，定期試験　60%
なお，欠席，遅刻早退は減点対象　（一回に付き，事前届出あり：－2点，　事前届出なし：－10点）

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学　作業療法概論
著者名：編集：岩崎テル子
出版社：医学書院

■ 参　考　書

■ 留意事項

作業療法士の活動内容を正しく理解し、専門職としての役割と責任を知ってほしい。